

fate/accelerator

川ノ上

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その杯を手にした者は、あらゆる願いがかなえられるとされる『聖杯』。

その願望機を求め、争われる聖杯戦争に一つのイレギュラーがこぼれ落ちた。

それは白いいい、魔術と対極を為す科学の申し子。

運命の因果が回り始める。これは貴方の知る物語ではない。

幾多の戦いを経て、彼はなにを『願う』のか。

さあ、賽は投げられた。

目次

序章

運命の始まり

第一章

邂逅と衝突

現状と惨状

考察と目処

喧騒と悲鳴

説教と常識

狂者と狂者

緊張と答え

一難去つて一悶着

舞踏会

1

5

16

37

51

81

100

112

132

178

帰宅

食卓

『ささくれ』と『答え』

スタートと道のり

宝箱のおとしもの

思惑と解釈

相互と勘違い

242

283

320

332

355

373

413

序章

運命の始まり

時計の鐘が十二の音を告げたとき。

一人の少女は、薄暗い地下室で静かに呼吸を整えていた。

ここは冬木市にあるとある城の地下室。

埃などという不純物は一切なく。つねに掃除が行き届いた完璧な一室だ。

天井は通常の住宅の三倍ほど高く。部屋の広さも部屋と言うにはあまりにも広い。

いっそ、ここで大人数で運動会をしても何ら問題ないくらいの広さだ。

いや。もともとこの部屋は『運動』を目的としていると言っても過言ではないのかもしれない。

しかし、それは今も静かに佇んでいる少女のためのものではない。

窓もなく、外界から隔離しているとやってもいいこの部屋で、少女は目を閉じて瞑想を続けている。

この部屋には彼女以外誰もいない。

普段ついてまわる従者もこの時ばかりは席を外してもらった。

これは少女の仕事であり、今までの全てが少女の行動に掛かっていると聞いてもいい。

だから彼女達には席を外してもらったのだ。
自分の生きる意味を証明するために。

壁に取り付けられた蠟燭達は、頼りのない光だが、それでも少女の周りを照らすには十分すぎる。

薄暗い部屋のなか。ふっと視線を落とすと、彼女の足元には、銀色に輝く複雑な図形が幾重にも重なって描かれている。一般人には落書きのように見える図でも、見るものが見れば、それは完璧なまでの陣を形成していた。

魔方陣。

一般人が決して学ぶ事も、触れる事も出来ない奇跡の公式。

白銀の髪を小さく揺らすと、『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』は右手を前方に掲げて大きく息を吸った。

「――Anfang」

刹那、イリヤは口を開き、静かにそして美しく言葉をつむぎ始める。言葉の一つ一つが「魔術」の形となり、呼応するように魔方陣が輝き出す。

空気は不自然に生き物のように脈動し、そして少女の願いに答えるように魔法陣の輝きが一層強くなる。

「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者——。」

魔方陣からまばゆい光が漏れ出し、絞り込まれるように光は陣のなかに収束される。魔力を帯びた光は薄暗い地下室を照らし、全てを白の世界へと染め上げる。

「——汝三大の言霊を纏う七天。抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——!!」

そして、次の瞬間、照明が落ちたかのように全ての光が消え失せた。

突然の静寂。全ての音が消えてしまったかのように思えるほどあつけない静寂。

それでも部屋の中心に立つイリヤにとっては心待ちにした瞬間だった。

これでようやく。

手をかざして視界を確保する。それと同時に、イリヤの胸は今にも張り裂けんばかりに鼓動していた。

魔方陣を中心とした全方位に不自然な『風』が吹き荒れ、やがて静かに収まっていく。

そして、そこには先程までいなかった人物が魔方陣の上に立っていた――

第一章

邂逅と衝突

その者は、白い髪と宝石のように真っ赤に輝く瞳が印象的だった。

顔付きは男か女かわからないほど中性的で、首には黒いチョーカーが。片手には現代的な杖が握られている。

「……バーサーカー?」

「——あん?」

控えめな声で尋ねると、召還されたサーヴァントは、首を傾げながらイリヤのほうを見た。

鋭い目つきだ。

まるで見ただけで人を殺してしまいそうな、そんな類の目つき。

イリヤは、サーヴァントの目に一歩後ろに下がりがかけたが、寸での所で身体を止めて、期待を込めてもう一度訊ねた。

「あなたは、バーサーカーなの?」

「あん? バーサーカー? ンだよソレ」

しかし、帰ってきた答えと、サーヴァントのステータスにイリヤは愕然と目を見開いた。

真名 ???
クラス バーサーカー

ステータス— 筋力 E

耐久 C

敏捷 D

魔力 D

幸運 B

宝具 不明

保有スキル— 狂化 A+

神性 E

（嘘ッ!? 狂化A+!? バーサーカーのクラスに自我があるなんて——）
驚くべきところはそこだけではない。

(しかも、自分のクラスを認識していない!?)

「あなた、どうして——」

「つーかよウ。どうして俺はこんなところにいるんですかねエ」

イリヤの言葉を無視して、バーサーカーのクラスにいるはずのサーヴァントは、現代的な杖を突きつつ、イリヤの方へ歩いてきた。

イリヤの混乱した思考が、現状を理解できない。

一歩一歩近づいてくるサーヴァントは辺りの様子を観察しながら右手をヌツと伸ばしてきた。

「なア、ちびガキ。俺ア黄泉川のマンションで寝ていたはずなんだがア。どうして俺がここににいるか知ってるかア？」

笑っている。それもただの笑顔ではない。狂気に満ちたどこかそんな顔だ。

目の前にいるサーヴァントは紛れも無いバーサーカーだ。イリヤは、ハツと我に返ると、両手を前に突き出した。

「ちよつと待って！ 寝ていた？ あなたは英霊じゃないの？」

「英霊？ おいおい。いつから俺は死んじまったんですかア？ それに俺は誰かに崇められるような事をした覚えもねエな」

「英霊じゃない!? それじゃあ何で聖杯戦争に参加できるの!」

イリヤの言葉に興味を示したのか、この白いサーヴァントは立ち止まり、真剣な顔付きでイリヤを見る。

「あん? 聖杯戦争だア? ……チツ! 学園都市はまたふざけた戦争でもおっぴじめる気なのか」

めんどくさそうに舌打ちをして髪を掻き上げる白いサーヴァント。

「つーかア。俺はどうやってここに来た。テレポートの能力者が俺をここまで運んだようには見えねエシ」

学園都市? テレポート能力者? 白いサーヴァントの言っている事は理解できないが、本題は。

「——あなた、どうしてここにいるか理解していない?」

「あア。テメエが何か知ってるなら教えてくれませんかねエ。まあ、知らねエって白切るのもかまわねーよ。それだけテメエが死に掛けるだけだしな」

そこで一度白いサーヴァントは言葉を区切って、

「まあ、とりあえず——」

首筋にある黒いチョーカーに手を当て、スイッチを入れた。

その瞬間。地下であるはずの天井が突然崩れ落ちた。

砂ホコリだけではない。まるで土砂崩れのようにイリヤから見て部屋の中央からすこし奥の方にかけて大きな穴が空いた。

ここは地下室だ。正確に言えば城の離れにある小屋の地下室。もともとサーヴァントを召喚するために作らせた儀式部屋であり。

誰にも邪魔されないように密室に。そして、サーヴァントの性能を確認するために広く作らせた部屋だ。

それほど深く地中に埋まっていけないにせよ少なくとも家一軒分の高さまで掘らせたはずなのだ。

だから、この部屋を外から『貫く』ことなど到底人間にできるはずもない。

瓦解していく天井から、土が落ちそして、収まったかと思うと月の光が漏れる。

イリヤはとっさに顔の前に手を置いて砂埃から視界を守る。

一瞬、目の前にいるサーヴァントが反乱を起こしたのかと思ったが、すぐに違うと思いき直した。

なにせ白いサーヴァントは、イリヤの前に立つと、傷一つ無い体で月を見上げるように崩れた天井を見ていた。

『おいおい、アインツベルンのサーヴァントってのはずいぶんとひよろいガキなんだな』
イリヤは、顔を上げると声のする穴の空いた天井を見つめた。

そこには全身青タイトの男が赤い槍を持って立っていた。

槍。

この武器を象徴するサーヴァントは――。

「ランサー！」

「おっ！ お前がああのヒョロイガキのマスターか。テメエもつくづく運のない奴だな。よりにもよってあんなモヤシ見たいなのを引き当てるなんて」

やれやれと言った感じで首を振るランサー。

とうの白いサーヴァントは無言でランサーを見つめていた。

状況が変わりすぎて理解が追いついていかない。と言ったほうが適切だろうか。

白いサーヴァントは眉を潜めながらも、いままでの情報を振り返っていた。

（マスター。サーヴァント。なんだか知らねエがここは――）

挑発の意味を込めて、白いサーヴァントは獐猛な笑みを浮かべる。

「おいおい。どこのどいつですか。俺は全身タイトなんていう変体男と知り合った覚えは無いんだがなア」

「ふっ、これから殺すって奴に真名なんぞ名乗ってもねえ」

「不意打ち吹っかけといて、もう勝利面か。あんなんでハシヤいであるようじゃ俺は殺せねエぞ？」

「ほう。じゃあこいうのはどうだ」

ランサーは自前の赤い槍を巧みに回すと、中段の構えで白いサーヴァントに矛先を向けた。

それに対して、白いサーヴァントは余裕の態度を崩さず、人差し指を軽く動かして挑発の構えを取る。

その意味は――

「はいよ三下。出し惜しみなンギアクスがすることだ」

「三下ねえ。――んじゃあ、お言葉通りこつちから行ってやるよ。まあくれぐれも一撃でやられてくれんなよ、っと」

低く小さく身をかがめてから、ランサーはコンクリートを蹴る。

その速度は明らかに高速を超えていた。

まっすぐ白いサーヴァントの元へ向かうランサー。

弾丸のようにはじき出された力に加え、ランサーは身を捻ると真紅の槍を上から下へ、叩きこむようにして振り回す。

「つらあ!!」

そしてその風を切る刃は白いサーヴァントの頭上にさしかかり――。

ヒュン　ガキン

ランサーの槍を白いサーヴァントは素手で掴み取った。

ランサーは小さく口笛を吹き、白いサーヴァントは槍を真横に投げ捨てた。

槍ごと飛ぶランサーだが、身体を一回転させて勢いを殺すと、すぐに体勢を立て直して赤い槍を構えなおす。

そこからは、見事な攻防だった。

ランサーが突いた槍を白いサーヴァントが寸での所で避け、拳を振るう。ランサーもその拳を受けることなく華麗に避ける。

まるで映画をリアルで見ているような感覚。

あきらかに人間の領域を超えている。

そして、最も賞賛すべきなのがあの白いサーヴァントだ。

槍に対して素手で応戦している。それどころか渡り合っている。

通常、戦闘というものはどちらか武器を手にしたものが圧倒的に有利となる。

それは相性にもよって変わってくるが、基本的に素手で武器に勝つというのはまず難しい。

(すごい。あのランサー相手に互角に戦ってる)

客観的視点から見れば、お互いの力が拮抗して見える。

しかし、実際に自分達の能力、技量を知っている彼等は戦いの最中、眉を潜めていた。

（反射がまともに働かぬエ。——この感覚は『魔術』ってやつを反射した時に似ていやがる。……つうことは、あの槍は魔術霊装の一種かなんかかア？）

（動きは素人のソレだ。だが腑に落ちぬえ。どういうわけか俺の槍が思った通りに刺さらぬえし、手に妙な痺れが走りやがる）

両者は、ある一定の距離を取ると、仕切りなおすようにランサーが槍を構え直す。

「おい、白いの。テメエ、キャスターのクラスかなにかか」

「あん？ ……ああ、そこで呆けてるチビが言うにはバーサーカーらしいな」

それを聞いて、ランサーは緊迫した場にそぐわない素っ頓狂な声を上げた。

「はああ!? 理性のあるバーサーカーだと。どこの英雄だよ」

「知らねーよ。……御託はいいから、さつきと掛かってこい。それとも、学園都市

第一位の力にビビって手がだせぬエのか」

「学園都市？ んなもん知らねーが。——なるほど、こいつは楽しめそうだ」

ランサーは聞き慣れない言葉に首をかしげるが、たいして気にも留めていないような獰猛な笑みを浮かべた。

槍を握るランサーの手に力が籠る。それにもなつて赤い槍が鳴動し始める。

イリヤにはわかる。次にランサーが何をしようとしているのかを。

赤い槍に魔力が収束されていく。

「コイツを受けてみなッ！
刺し穿つ——」ゲイ・ホル

その瞬間。何も無い空間からくぐもった男の声が響いた。

『もういいランサー。やりすぎだ。直ちに帰還せよ』

声の主に反応するように、ランサーの槍も寸での所で静止する。

「……チッ！」

「おい、飼い主様がお呼びだがどうすんだア」

忌々しそうに舌打ちするランサー。

先ほどの戦闘でも全く息を切らしていない白いサーヴァントは、愉快そうな笑みを浮かべてランサーを見ていた。どうやら、相手がどう出るか観察しているらしい。

ここまで数秒。緊迫した空気が流れ。

やがて、大きく髪を掻き上げるランサーは「仕方ない」とばかりに不満そうな顔で小さくため息を漏らした。

「——仕方ねえ！ マスターがお呼びとあっちゃー今回の勝負はここで仕舞いだ。次に合う時まで、他の奴にやられていない事を願うつきやねえな！」

「逃がすとも思ってたのか？ だとしたら、テメエの頭は相当お花畑のよオだな。いつそ取り替えたらどうだ」

「うるせー！ 俺に殺されるまでせいぜい死なねーように気をつけるんだな」

そう吐き捨てると、ランサーは踵を返して、目の前の空間から消え失せた。霊体化だ。

おそらくこの敷地内に入ってきた時も、あれで侵入して自慢の真紅の槍で大穴を開けたということだろう。

しばらく、静寂が続き、黙ってサーヴァントの戦闘を傍観していたイリヤは、ハッと我に変えると白いサーヴァントを見た。

白いサーヴァントは、ランサーが消えた虚空を眺め、首筋にあるチョーカーの電極を切ると、現代的な杖に体を預けるようにバランスを取った。

月明かりに照らされる名もわからぬサーヴァント。

その存在が神話のように美しいと思う反面。どこかいような雰囲気醸し出している。

真名も。出生も。その存在すべてが謎に包まれたサーヴァントの前に、イリヤは思わず心の中にある疑問を口にした。

「あなたは一体、なんなの？」

白いサーヴァントはそれに答えるようにイリヤのほうへ身体を向けると、

「一方通行。さっそくだがテメエの知ってる事全て、吐いてもらおうか」

学園都市で最強と呼ばれていた悪魔が口を開いた。

現状と惨状

壊れた地下室を出たイリヤと一方通行は、応接室の木材で作られた長テーブルを挟んで座っていた。

ここはアインツベルン城の応接室。

足の短いソファアーに、異様に大きいテーブル。それ以外何ひとつとしてないただの部屋。

シンプルだからこそ、小細工のしようもない部屋で、『白い』二人は対面していた。

普段使わないこの部屋だが、今日に限ってはいつも以上に重い空気が流れていた。

「デメエに聞きたいことがいくつもある。嘘偽りなく答えろ」

向き合ったような形で座っているサーヴァントは人でも殺せそうな目つきでイリヤを睨みつける。

「いいわ。その前に自己紹介だけさせて。私の名前はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。あなたのマスターよ」

紹介し終えたところで、

「……最初の質問だ。ここはどこだ」

一方通行と名乗るサーヴァントは真下を指して、低い声でイリヤに問いかけた。

「ここは冬木市。周囲を山と海に囲まれた自然豊かな地方都市で、このお城はわたしの家」

「と言うと、日本っつーことでいいんだな」

「ええ、その通りよ」

イリヤの答えに、一方通行は顎に手を当てると、短く黙りそして唐突に口を開く。

「……おい、一つ聞くがテーマは『学園都市』っつー科学が異様に発展した完全
独立教育研究機関の事を知ってるか？」

「『学園都市』？ そんな名前の場所なんて聞いたこと無いわ」

何やら聞き慣れぬ言葉に首を傾げるイリヤ。

確認とも取れる問いかけだったが、あいにくイリヤはそんな場所を聞いたことはない。
い。

イリヤの首をかしげる様子を見て一方通行は眉間にしわを寄せると、忌々しそうな様
子で舌打ちした。

「チッ！ ……もういい。ここからが本題だ」

ハアと小さくため息を付いて、赤い瞳をイリヤに向ける。

冷たく。そしてどこまでも人を信用していない目つき。

それはサーヴァントがマスターに向ける目ではない。明らかに敵を目の当たりにして見せる目だ。

「テメエの言う『マスター』つてのはなんだ。あの青タイツの話を聞く限りじゃ、お前が俺を呼び出したようにも聞こえるんだが」

「………答える前に一ついい？」

「うるせエ。いいから俺の質問に答えろ」

有無言わせぬ物言いに、イリヤは言葉が詰まるが、殺気を込められればもう答えるしか無い。

「——わかったわ。率直に言うとなあなたはわたしが呼び出した。魔術の儀式によってね」

「………」

一方通行は黙ってイリヤの話に耳を傾けている。これは「続ける」サインなのか、イリヤは構わず話を進めていく。

『『マスター』と言うのはここ冬木市における聖杯戦争に参加する権利を持つ者の事を指すわ」

「そして、聖杯戦争に勝ち抜くためには『サーヴァント』と呼ばれるあなたやランサーのような英霊を召還して、令呪で使役する必要があるの」

そう、それが聖杯戦争の大前提。

「なら、とりあえず俺は、テメエの駒として呼ばれたって解釈でいいんだな」

「うん。まあ基本的にはそんな感じ」

目の前のサーヴァントには伝わったようで、的確な例えにイリヤは安堵の息とともに大きく頷いた。

「なら二つ目の質問だ。その聖杯戦争ってのはなんだ」

「聖杯とはあらゆる願いを叶えるとされる「万能の願望機」であり、その所有をめぐる一定のルールを設けて争いを繰り広げる戦い」

「簡単にまとめちゃうと、『勝者は聖杯を使って何でも願いを叶えられる』。そのための争奪戦ってとこかな」

簡単にまとめめたがそれでもこの表現は正しい。

例え万能の願望機といえどなにも無制限に力を振るえる訳ではない。

そうなれば、この聖杯戦争の意味もなくなるだろうし、そもそも儀式の意味が無い。

聖杯は良くも悪くも人を選ぶ。

そのため七人のマスターであり。サーヴァントだ。

所有権は聖杯が持つ。

マスターが選ぶのではなく、聖杯が意思を持ってマスターを選ぶといったほうが正し

い。

だから、イリヤはこの聖杯戦争で勝たねばならないのだ。

自分の生まれた意味を成すために。

思案顔のサーヴァントはやがて顔を上げると、面倒くさそうに息を吐きだす。

「……なんとなく概要は理解した。——次の質問だ。あのタイツ野郎は『クラス』がなんだかほざいてやがったが、ありや一体なんだ」

「サーヴァントって言うのは『セイバー』『アーチャー』『ランサー』『ライダー』『キャスター』『バーサーカー』『アサシン』といった七つのクラスから成っているの。クラスによつて得意分野や特徴が違うし、この聖杯戦争で一概に同じようなクラスのサーヴァントは存在しない」

「つうことは、あのタイツ野郎みたいな奴があと六人いるってことか」

確認とも取れる問いかけに、イリヤは首を立てに動かした

「まあサーヴァントのクラスについては、まだ説明することがたくさんあるけど、大まかな事はこのくらいかな」

「それとも、全部話す？」とイリヤは首をかしげるが、

彼女の質問に一方通行は首を横に振った。

「……いいや、いい。だいたいのは仕組みは理解できた。だが、一つ確認だ」

「なにかしら」

「そのくだらねエ聖杯戦争つてのは、言っちゃまえば魔術師同士の戦争つてことだな」

「……そうよ。聖杯戦争における令呪はマスターたる魔術師にしか与えられない」

「だったら、このくだらねエ戦争はどうやったたら決着が着く」

「マスターが令呪を放棄。もしくはマスターが死んだらそれで終わり」

淡々と、あくまで聞かれたことを答える。

「サーヴァント自体を殺す事も出来るけど、——それだとマスターの聖杯戦争における参加権がまだ生きている事になるから、もしマスターを失ったサーヴァントとマスターが契約しなおして、聖杯戦争へ復帰することなんてのもありえるの。だから、マスターを殺しちゃった方が早いかな？」

コン。コン。

そこで話を区切るかのように扉を叩く音が聞こえた。イリヤは一度話を止めて、「いいよ。入ってきて」と声を上げる。

すると、ゆつくりと応接室の扉が開かれ、白い装束を纏った女二人が、手にティーカップと代えの紅茶を持ってやってきた。

「ありがとう。セラ、リズ。もう下がっていいよ」

イリヤの紅茶を変えたのがセラ。一方通行の紅茶を取り替えたのがリズと呼ばれる

女性のようなだ。

一方通行は自分の紅茶を取り替えた人物と目が合い、すぐに視線を逸らした。

リズもさして興味が無いように、自分の仕事を終わるとすぐに扉の外へと戻っている。

一方通行は、従者の二人が出て行ったことを確認すると、改めてイリヤの方へ向き直って口を開く。

「——話を戻すぞ。テメエの説明だとサーヴァントは殺せるんだったな。なら、死んだサーヴァントはどうなる」

「あなたのようなサーヴァントは英霊。つまり、サーヴァントは元々死んでる状態だから、霊が死ぬ事はない。でも、消滅したら元の『座』に戻るんじゃない？」

疑問形で答えるが、これはどうしようもない。

目の前のサーヴァントも、イリヤの物言いに眉をひそめるが深くは追求してこない所を見ると、そこは大して気にすることでもないらしい。

「元々、この召還ってのは奇跡みたいなものだから、あなたも好きな時に零体化で消えたり、出現したりできるはずよ」

そう言い終わると、イリヤは新しい紅茶に口をつける。

ふっと視線を移すと、一方通行は手のひらを閉じたり開いたりしながら、何かを考

え込んでいる。

やがて、右の手で白い髪を掻き出すと、

「——めんどクセエ。おい、聖杯戦争って奴の概要はこれで終わりでいいんだな」

「ええ。あなたが聞きたがっていた聖杯戦争の事は全て話したわ。これで——」

すると、イリヤが喋り終わる前に、一方通行はソファから突然立ち上がった。そして、

呆気を取られるイリヤに何も言うことなく、扉まで歩こうとした。

「ちよつと、どこ行くのよ?！」

「あアン?」

イリヤは慌ただしく立ち上がると、今にもどこか行きそうなサーヴァントを呼び止めた。

一方通行も苛立ち気な顔で振り返る。

「あなたはわたしのサーヴァントなんだよ! わたしから離れようとするなんて、一体

どういうつもり!」

「ハア? なんて俺がテメエなんかを守らなくちゃいけないんですかア?」

すると、目の前のサーヴァントは呆れたような声を上げた。まるで、イリヤの言っている意味が本当に理解できないと言いたげな表情で。

「俺は聖杯戦争なんていうクソみたいなゲームに興味ねエし、付き合うつもりもねエ。

ンなめんどクセエ事、誰がするか」

「はあ!?」　そ、それってどういうことよ!　あなただつて聖杯に願いがあからわたしの召還に応じたんでしょ!」

「そもそも、その時点で間違つてンだよ。俺はテメエなんかの召還に応じた覚えはねエ」
キツパリと。あまりにもキツパリと吐き捨てた。

信じたくないのに、目の前のサーヴァントの表情が嘘でないことを物語っている。

「それじゃあ、わたしの聖杯戦争はどうなるのよ!」

「ンなの知るか。テメエでナンとかしやがれ。お前だつて立派な魔術師なんだろうオ?」
他人を使って楽しよオナンという奴の言いなりに誰がなるか」

悲痛なイリヤの叫びを目の前のサーヴァントはあざ笑うかのように一蹴した。

嘲笑。

その言葉がしつくり来る。

彼はきつと冗談でなくそう思っているのだろう。

明らかな聖杯戦争参加への拒絶を。

その言動の端々から見取れる。

だからこそ。

だからこそ、その一言一言がイリヤという『幼い』少女の胸を抉っていく。

聖杯戦争の拒絶。それは詰まるところの、イリヤという少女の存在否定に繋がるからだ。

そんなことも知らない目の前のサーヴァントは、冷めた赤い瞳をこちらに向けている。

そう理解した瞬間。イリヤの中で何かが弾けた。

力が抜ける。

「そ、そんなの……あんまりだよ。じゃあ、わたしは一体なんのために——」

イリヤは崩れるように床に座り込むと、目頭に涙を浮かべ始めた。

いままでの努力も。我慢も。生きがいも。全て否定されたような気分だ。

「……………」

一方通行は涙目を浮かべるイリヤを見て、一瞬だけ黙り込み、やがて自分の首筋に巻かれてあるチョーカーに手をやった。

そして——

「……………なアんだ。あるじゃねエか。こんなクソみてーなゲームを終わらせる方法が」

「——えっ」

「デメエを殺しツちまえば簡単だったんだ。クハッ、学園都市の頭脳が聞いて呆れるわ

なア」

カチツ

彼は何の躊躇いも無くスイッチを入れた。一方通行の指がテーブルに触れると、テーブルは一瞬で二つに裂ける。

バキンと物の壊れる聞き慣れない音が部屋に響き、木材の切れ端が危うくイリヤを傷つけるか傷つけないかギリギリのところまで後ろに飛んで行く。

「キャッー」

イリヤは顔をかばうような形で体を強張らせると、次に驚いたような目つきで自分のサーヴァントを見た。

「……」

無言でイリヤのもとに向かってくるサーヴァント。

逃げ場がないにも関わらず、イリヤは震える声で後ずさりしながらも両手を胸の前で組む。

嫌な汗が顔に浮かんでいるのがわかる。

動悸も激しい。

なぜこんな思いをしなくちゃいけないのか思考が追いついていかない。

しかし、そんなイリヤでも理解していることがたつたひとつある。

それは。『恐怖』という感情。

いま、イリヤは目の前の白いサーヴァントに恐怖を感じているのだ。

対して、サーヴァントは自分を見下ろす形で、ただ静かに、そして愉快そうな笑みを浮かべていた。

「あ、あなた。自分が何をしようとしているのかわかっているの?」

「ああ、すっかり理解してるぜエ。そんなことより、身体中の皮膚を全部はがして死ぬのと、内側から破裂するの、どっちが好みだ?」

狂った問い掛けをするサーヴァント。

あと数歩で距離がゼロになる。

その瞬間、強引に扉が開け放たれたかと思うと、白いサーヴァントの前に二人の従者がイリヤの前に立ちはだかった。

サーヴァントの発言と主の悲鳴に何らかの危険を感じ取ったのか。扉の外で待機していたセラとリズがイリヤを守るようにして前に立ち、戦闘態勢をとる。

「おいおい。テメエら見てエな三下が俺に勝てると思ってるんですか?」

「どうなるうと、お嬢様には指一本触れさせません」

「あなたはイリヤの敵。排除する」

見たところ二人とも武器を持っていない。武器を取ってくる時間がなかったのだろ

う。

確かに、イリヤの従者は徒手空拳でロンドン塔の魔術師程度なら簡単に倒すことができる。

それも無傷で。

簡単に負けるなんて絶対はない。

でも、目の前のサーヴァントと戦ってはダメだ。イリヤの本能がそう警鐘を鳴らしている。

彼女らを信頼していないわけではない。

セラの魔術の技量は知っているし、リズの体術の凄さも理解している。

だからこそ。

あのランサーと互角に渡り合った目の前のサーヴァントの恐ろしさをしているからこそ。

イリヤは危険だと感じた。

だから。イリヤは今までで一番大きな声を上げて、セラとリズを呼び止める。

そもそも従者に守って『もらう』なんて考え自体がおかしな話なのだ。

これはマスターたるイリヤの役目。

なら、それを解決するのは従者の役目ではなく、イリヤでなくてはならない。

イリヤの代わりに、セラトリズが傷つく必要はない。

それに、何かを失うのは『もう』嫌だ。

「まっつて二人とも!! ねえ、バーサーカー。わかつてるの？ わたしは、あ

なたのマスターなんだよ」

ヨロヨロと立ち上がるイリヤ。

足に力は入らないし、もうなにがなんだかわからない。

それでも、自分の役目を果たさなくちゃならない。

キツと睨み返すイリヤと視線がぶつかりと、一方通行はしばらく黙った後、静かに口を開いた。

「.それがどうした。マスターだからってテメエを殺せないなソウルはねエンだろ？」

「うん、確かにその通りだよ。でも、そういうサーヴァントのために令呪があるの」

彼女はあくまで対等であることを示すために、震える右手を前にかざした。

「もう一度言うわ。わたしはあなたのマスターなの。だから、あなたに言う事を聞かせるなんか簡単なんだよ」

あくまで冷静に。そしてはつきり言い切った。

セラトリズに視界を阻まれながらもはつきりと一方通行の目を見て言い放つ少女に、

一方通行は哀れとばかりに肩を小さくすくめ。一瞬、顔を伏せてから正真正銘の『本気』の殺気を放つ。

「……………ハア、わかつてねエなア。俺はテメエがその令呪って奴を発動させる前に殺せるンだよ」

「そんなのやってみなくちゃ——」

「こんな近くに居るのにかア？」

そう言うと、一方通行はイリヤに反応させる事すら許さず、難なく接近した。その際に、イリヤを守るように立っていたセラとリズは、一方通行の手によって羽虫を払うように、左右の壁まで吹き飛ばされていた。

イリヤは突然の出来事に目を見張り、思い出したようにリズとセラの名前を叫んだ。

「リズ！ セラ！」

「おっと、チエックメイトだ」

「ひい!!」

口角を不気味に上げる一方通行は、右手を高々と上げる。

触れただけでテーブルを真っ二つにするほどの威力なのだ。

この右手を振り上げられたら、イリヤは文字通り『肉塊』へと変わる。

自分が一瞬、血しぶきを上げて倒れる錯覚を見て、サーヴァントの狂気の笑みを見た

のち、振り下ろされる右手を見て、イリヤはきつくまぶたを瞑った。

そして、その破壊の右手は無常にも勢い良く振り下ろされ、

一人の少女の皮膚へ触れ、

やがてイリヤの頭蓋を粉碎。

——させなかった。

ビシツというチョップの鋭い音が鳴り、イリヤの頭頂部に痛みが走る。

「いったー！」

頭を叩かれたイリヤは反射的に頭を擦る。

ジンジンと痛む頭頂部を抑えて、イリヤは思わず床にうずくま 踞った。

目頭にたくさん涙を浮かべて、プルプルと痛みをこらえる。

痛い。痛いけど——。

やがて痛みが治まると、イリヤは自分の身長よりも高い一方通行を恐る恐る見上げる。

目の前のサーヴァントは、何気ない動作で首筋にあるチョーカーの電極を切り替えると、腕から伸びる現代的な杖で身体を支えていた。

そしてー。

「………あん？　んだよ、そのバカみてエな面は」

「え!?!　あれ？　………殺さないの?」

「殺してほしかったんですかア?」

一方通行の言葉に、イリヤは素早く横に首を振る。

「——ハア、めんどクセエことに巻き込まれたのには変わりねエが、今は情報が少なすぎ
んだよ」

面倒くさそうに頬を掻く白いサーヴァント。

先ほどの殺気は鳴りを潜め、急な展開にイリヤの頭が追いついていかない。

そんなイリヤを他所に一方通行は至って普通な態度で語り続ける。

「俺単独で情報を集めんのもいいが、何より電極のバッテリーの残量が少ねエ」

そこで一方通行は言葉を区切ると、

「だから、仕方なく、テメエの所で厄介になることにした」

自分の首元を軽く叩き、心底だるそうに言い切った。そして一方通行は、扉の方に向
き直ってツカツカと杖を突いて歩いていく。

「待って！　それって聖杯戦争に参加——」

「勘違いすんじゃないぞ。俺は聖杯なんてモンに興味はねエ。俺はただ手がかりを探す

ためにテメエ等を利用するだけだ」ガチャ

そう言つて扉を開ける一方通行。それでもイリヤは嬉しそうに口元を上げた。勘違い。

彼は勘違いするなといった。

それはすなわち、少なくとも自分の身を守るために、『自衛』であつても『戦つて』くれるということだ。

それでも。それでもいい。

そんな思いがイリヤの中に渦巻いている。

例え、自分のサーヴァントがいうことを聞いてくれなくても、『とりあえず』留まってくれるのなら、まだ道はある。

これほど嬉しいことはない。

「詳しい事は明日話してやる。だから、ガキはさっさと寝ろ」

背中を向けて、そう言う。一方通行は扉を潜ろうと一歩踏み出しているところだ。

そこで、イリヤは彼を呼び止めると――

「待つて、わ、私の名前はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。．．．．．これからよろしくねバーサーカー！」

そう言つて、子供らしい無邪気な顔で笑つたのだ。

一方通行は振り返らない。

ただ、一步前に出した足をその場にとどめて、

「・・・・・・・・」バタン

一方通行は何も言わずに扉を閉めた。一方通行がいなくなつてから応接室は再び静寂を取り戻す。

イリヤは糸が切れた人形のように尻餅をつくと、大きく息を吐き出した。

安堵。そして——喜び。

今にも泣きそうな顔をグツと堪えて、小さな身体を抱えて、我慢していたはずの震えを抑えようとした。

すると、セラとリズが、イリヤの名前を呼び、素早くイリヤの元に駆け寄りると、イリヤの身体に怪我が無いか念入りに確認し始めた。

そして、どこも負傷していないことを確認すると、セラがイリヤの顔を覗き込むような形で心配とも取れる声色で冷静に語りかける。

「いいのですかお嬢様。あのようなサーヴァントを屋敷の中にうろつかせても。ましてや、サーヴァントとしての役割を果たさないと言うではありませんか」

「うん。わたしもセラに賛成。あいつは危険。近づかないほうがいい」

「……うん。なんだか良くわからないけど、もう一回、あの人と話してみる」
首を横に振って、イリヤは扉をゆくりと見上げた。

たった今、出て行ったサーヴァントの後を追うように。

その無謀とも言える答えを聞き、両脇に座る従者は珍しく声を荒げた。

「お嬢様!!」

「イリヤ、危険」

それでも、イリヤはもう一度首を横に振った。

それも先程より強く。まるで自分のやるべきことだと言いつけさせるように。

「わたしだって、マスターなんだ。もっとあの人の事を知らなくちゃ」

知らないことがたくさんある。

だから知りたい。

あんな怖いことをされて、どうして自分があの白いサーヴァントのことが知りたいかなど、イリヤ自身にもわからない。

マスターだからそうするのか。それとも、自分のサーヴァントだからそう思うのか。

わからない。

ただ、どうしても。どうしても知りたくなったのだ。

気に食わないと言いつつ、わたしが反抗したとき、一瞬だけ『嬉しそう』表情を浮

かべていたのかを。

(それに、なんだかバーサーカーから、ちよつとだけ。ほんのちよつとだけだど温かい感じがあった気がする)

イリヤは胸を抑えて、まぶたを閉じる。

まぶたの裏に浮かぶのはあの白いサーヴァント。

怪物の出て行った応接室は、部屋を訪れた時よりひどく荒れ果て、白いサーヴァントの爪痕をありありと見せつけた。

しかし、怪物のつけた『傷痕』は何も部屋だけではない。

冷たい床に座り込む一人の少女。

彼女にも大きな大きな『見えない』傷痕をつけていった。

しかし、不思議と笑みを浮かべてしまうイリヤ。

その感情がどこから湧いてくるものなのかわからない。

でもそれは、どこか生暖かくて。寒くて震えていたイリヤを暖かい場所に引つ張って行くような。

『何か』を変えてくれるような。そんな『思い』がイリヤの中で渦巻いていた。

考察と目処

応接室を出た一方通行は、杖を突きながら廊下を進んでいくと、とある大きな両開きの扉を見つけた。

城、というだけあつてその扉はいかにも中世のヨーロッパを模したような作りで見事な装飾がなされている。今まで通つてきた廊下にも幾つか豪華な扉は見受けられたが、これは今までの扉より、一層異彩を放ち、一方通行の興味を惹きつける。

一方通行は一度、大きな扉を観察し、ゆっくりとした動作で取っ手に触れた。冷たい感触が一方通行の手に伝わり、一方通行は静かに息を吐き出す。

そして、扉を開けなかを覗くと、そこには恐らく城の住人が必要でないと判断した家具や骨董品などが、丁寧に仕舞い込んであつた。

明かりはない。しかし、奥の方から溢れる月明かりと、一方通行が開けた扉から漏れる光で、部屋の概要は薄つすらと視認できる。

大きな壺から使い古されたタンスなどと様々なものがこの部屋には溢れかえっている。おそらく物置として使っているのだろう。

それにしても、広い部屋だ。

一方通行は無言で片手をチャーカーの方へやり、部屋に入る。そうして、辺りを見渡して人の気配が無いか警戒体勢をとった。

しかし、人が潜んでいる気配は無く、一方通行は静かに警戒を解いた。

(……ほこり一つ見あたらねエ。手入れまで行き届いてやがる)

指を家財に滑らせても、埃が全く付着しない。

定期的に掃除しているのだろうが、見事なまでの出来に一方通行は静かに感嘆の息を漏らした。

(ンなことより、どこか身体を休める場所でも探さねエと)

気を取り直して物置の探索を再開させる一方通行。

幸いにも全ての物が等間隔に整理整頓されているため、杖を突いた状態でも進みやすい。

そうして、一方通行はまっすぐ部屋の奥へ進んでいくと、月明かりが差し込む窓際に、なんの飾り気も無いシンプルな作りのソファアがぼつんと鎮座してあるのを見つけた。

どこか、豪華な装飾がついてあるのかと言われればそうではなく、至つてシンプルで設計者が使いやすいように、と余計なものを排除したような、そんな造形をしている。

ソファアに指をすべらせる一方通行は、ほこりなどの汚れがついていないことを確認

すると、

「作りも悪くねエし、寝るには丁度いいか」

誰もいない空間で独り言を呟き、一方通行はソファアの横幅を十分に使って、横になる。

案の定、一方通行の身体に合わせるようにソファアのクッションが沈み、普段使っていたソファアより寝心地が良い。

そして、小さく息をつくど、

「——ハア。………めんどクセエことに巻き込まれまわつちまった」

一方通行は、現状を整理するために思考の海に沈み始めた。

(………ひとまず、状況を整理しなきゃなんねエ)

そう、まずは状況の整理だ。

あまりにも、急な展開に頭がついていけない。

(さっきの、イリヤとか名乗ってたガキが言う事を照らし合わせると、どうやらここは俺のいた世界じゃあねエらしい)

乱暴に髪を掻き上げる一方通行は、とにかく思考する。

現状を理解するために。

(………俺の記憶が確かなら、俺があのがきに召還される前は黄泉川のマンション

で寝てたはずだ)

(ソレがどオいうわけか異世界に連れてこられた。過程はどうでもいいとして、あのガキの言っている事に嘘、偽りはねエ)

これだけは断言できる。

あの銀髪の少女の言っていることに嘘はなかった。

そもそも年端もいかなない少女が命の危機に貧した状態で嘘を吐くなどできるはずもないし、そもそもそういった状況に追い詰められた人間は大抵、自分の命おしさに洗いざらい真実を語る。

これは暗部に身をおいて、培ってきた技術であり経験則だ。

その一方通行の経験があの子は、全てにおいて真実のみを口にしていたと判断してしまった。

(だが気に入くわねエのは、俺が『生きています』という事実だ)

そうになると、少女の言っていた『英霊』という単語が気になる。

(俺がコッチに来る前は確実に生きていた。そもそも、この聖杯戦争つつーのは、英霊。言っちゃえば死んだ奴を現世に生き返らせて戦わせるゲームだ)

妄言でも何でも無い。

絶対能力進化実験に参加していた頃は鼻で笑ったことだろうが、今は違う。

魔術の存在について実際に知ってしまったし、なにより襲い掛かって来たタイツ男の存在が聖杯戦争の存在を示唆してしまっている。

(そのゲームに何故、俺なんかが呼び出された)

それがどうしてもわからない。

「チツ！ 考えるにして情報が足らねエ」

苛立ちげに呟くと、一方通行は頭を乱雑に掻きあげると、一方通行の脳裏にふつと銀髪の少女の顔が過った。

そこで髪を掻き上げる右手が静かに止まる。

そうして、僅かな情報を引き出すように一方通行は再び思考の海に沈み始めた。

(——そオいやー。あのガキ、俺がここに召還された時、そう。地下室にいた時だ)
(俺が何も知らないと言った時、あのガキ、相当驚いてやがったな)

タイツ野郎の乱入でそこまで気にしなかったが、これはあまりにもおかしいと一方通行の直感が告げる。

何を狙って呼びだそうとしたのかは定かではないが、サーヴァントを呼び出したのなら、少なくとも『驚く』などというアクションは起こさないとはずだ。

それがどういう訳かあの少女は信じられないといった表情を浮かべた。

つまるところ、それが意味するところは——。

(・・・つウことは、呼び出されるサーヴァントは、もれなく現世の情報と、聖杯戦争の概要を学習装置テスタメントみてーに頭に叩き込まれてやがンのか?)

一方通行は冷静に仮定する。

いや、そうでなければならぬはずだ。

なにせ、何百年・・・下手したら何千年も前に存在したであろう『英霊』などという不確定要素を呼び出すのだ。

そこにどんな原理が絡むのかは理解できないが、少なくとも呼び出した側は『英霊』に何らかの現代の『知識』を与えなければ、最悪、サーヴァントが目の前の人間を手当たりに次第殺すなどして、この聖杯戦争そのものが成立しない可能性が出てくる。

(だが、俺には何の情報も入ってねエし、コツチに何故呼ばれたかさえ理解できなかつた)

無意識に記憶に情報が刻まれたということもなければ、一方通行の記憶は黄泉川のマシオンで仮眠をとっていたところで止まっている。

聖杯からの補助的なものは何もない。

これらのことを簡潔にまとめるとするならば、つまり――。

(つまり、その願望機たる聖杯にとつても、俺の召還は予期しないものだったつーことになんのか)

何気ない答え。

しかし、打ち出してみればこれ以上に正解に近い答えは思い浮かばなかった。まるでパズルのピースが一つしっくりはまっていくような感覚だ。

おそらく、そう考えたほうがあとの問題にも説明がつく。

(なら、俺が生きている状態で連れて来られたのにも納得がいく)

『生きた状態』と言つてもおそらく元の世界からこつちの世界へ無理やり引つ張つてこられたという意味ではないと一方通行は考えている。

そうなれば、元の世界で混乱が起きているだろうし、一方通行という存在そのものが消えてしまうことになる。

聖杯戦争は詰まるところの魂をあの世界から呼び出して、現界させた形で競わせるゲームだ。

召喚されたということは、一方通行もその枠からはみ出てはいないことを意味している。

つまり、いまの自分の身体が霊体か何かの要素で構成されているとして、元の世界では一方通行の『身体』だけ残っているという状態だろう。

そうなると元の世界の一方通行の体が気になるところだが。

(いや。ンなこと考えるより、早く打ち止め達のいる世界に戻るための方法を――)

余計なことを考えず、再び思考の海へ潜ろうとした時、ある違和感が一方通行の思考を遮る。

「——あん？」

半歩遅れて、一方通行は眉をひそめた。

いま、自分は何を考えた。

何かが一方通行の思考に引つ掛かっている。

なにか重要な事を忘れているような気がするのだ。

一方通行は、額に片手を当てて、謎の違和感を解析するため、先ほど考えたことを脳内で復唱する。

（俺の目的は、元の世界に帰ること。打ち止めを——）

そこで、一方通行はハッと目を見開いて、突然身を起こすと、冥土返し特製のチョーカー型の電極に触れた。

（おいおい。今まで何を考えてやがんだ俺は。なんで気づけなかった！俺はどういった状態で召還された？）

興奮気味に、かつそれ以上に自分の愚かさを嘆いたことはない。

そもそも『これ』に気づいていれば頭を悩ます必要はなかったのかもしれない。

灯台下暗し。

今の状況はまさにその言葉が的を得ているだろう。

一方通行の思考が加速する。

まるでダムに溜めていた水がダムの決壊と同時にあふれだすように、止めどない思考の波が一方通行がある『仮説』へと導いていく。

(この電極は、ミサカネットワーク M N W の演算領域を借りて思考できるようになつてはらずだ)

一方通行は自分の首元に手をやる。

そこにあるのは黒いチョーカー型電極。

それは『一方通行』という存在全ての生命線であり、一方通行が一方通行たらしめる楔だ。

(何気なくあのタイツ野郎に能力を使っちゃまったが、それでも能力は発現した)

問題は能力が発現したことではない。『発現した』という真実だ。

能力の発現。つまり、それは――

(俺がこうして思考できンのも、なんらかの関係でアツチの世界とコツチの世界が繋がつてるとつーことになるじゃねエか!!)

喜び叫ぶような愚かな真似はしない。しかし、それでも、手がかりを掴んだ実感に一方通行は静かに打ち震えていた。

一方通行の欲しかった答えなど始めから自分の近くにあった。

それに気付けないだけで、気づいてしまえば後はどうでもなる。パズルのピースが繋がりは始める。

(繋がってるってエことは、まだアツチの世界に戻るためのパイプがまだ残されてるっつーことになる!!)

あくまでこれは仮説だ。

一方通行が打ち出した仮説にすぎない。

その『パイプ』もいつまで残されているのかは一方通行にもわからない。

それでも一方通行は顎に手を当てて、月明かりに照らされながらニヤリと笑みを作った。

皮肉にも、彼女らとの『繋がり』が一方通行の現状を救ったのだ。

「確証はねエが、それでも希望が見えてきつたってことか」

満足そうに、しかしどこか嬉しそうに安堵の息を漏らした。

活路は見出した。ならあとに残された選択肢は行動するのみ。

(打ち止めや黄泉川たちのことも気になるが、今はコッチを優先するつきやねエな)
どつちにしろ、帰れない状況は変わらない。

ならば、必然的にコッチの問題を優先する他に帰る道はない。

(バッテリーの残量は保ってあと一日って所か。．．．．．当面の問題はコイツだな)

電極のスイッチを入れてバッテリーの残量を確認する。

（なにをやるにしても、バッテリーが切れつちまつたら話になんねエ。それにしても――）

電極のスイッチを切ると同時に一度思考に区切りをつけると、一方通行は月を見上げながら、自分を呼び出した少女の事を思い出す。

（あのクソガキ、足が震えてるつつーのに令呪とかいうので俺に脅しを掛かって来やがった）

思わず、小さく。そして愉快そうに喉を鳴らして笑い声を漏らす一方通行。

不安な表情で顔を張り詰めさせながらも、自分の役目と言わんばかりに立ち上がったあの少女には、死を目の前にしても、揺るがない強い光を目に宿していた。

まるで、あの『最後の実験』を彷彿させるように。

（どんな『願い』があるかは知らねエが。性根が腐ってるって訳でもねエな）

あの目を宿す者に限って、くだらない願いを掲げるはずがない。

これは文字通り、一方通行の直感だ。

何の根拠もなければ、証明する証拠すら無い。

しかし、一方通行は知っている。

あの光を宿す者は決まって、何かを決意した者だと。

それが、どんなものであったとしても、あの光を宿し続ける限り、一方通行はくだらないと切り捨てない。

例え、それが悪党だとしても、一方通行は『強敵』として認める。譲れないものがあるからこそ、あの『ひかり』を宿すのだから。

(聖杯ってモンには興味がねエが、ガキの泣いた顔に弱いつつー、俺の甘エ性格もどうかしてンな)

自分の甘さにつくづく反吐が出る。

昔ならいざ知らず、くだらないと切り捨てていたことだ。

あの少女は打ち止めではない。

故に一方通行が手を貸す理由なんて無い。

しかし、絶対能力進化実験を経て、打ち止めと関わってから何かは確かに変わった。

昔の一方通行は打ち止めを庇った『あの時』に死んだのだ。

そう、一方通行はたしかに変わった。

それは子供から大人へと精神が成長していくように。

今まで歩んできた道のりが一方通行を変えていった。

それは一方通行自身も、認めたくはないが認知している。

『一方通行』という存在は確かに『変えられた』

夜空にきらめく満点の星明かりは、無数に点在し、今も夜空を染め上げる。

夜空は全く変わることがないにもかかわらず、星々の明かりによつてその存在を変えられていくのだ。

ただの『暗闇』から美しい『夜空』へと。

一方通行も同じだ。

自分のなかに広がる暗闇はいつも『周りの光』によつて照らされている。

自ら光ることはもう出来ない。

自分が『月』になることはもう出来ない。

それほどのことややってきたのは十分自覚している。

だからこそ、自らを『夜空』としてくれる『星々』を守らなくてはならない。

一方通行は昔にそう決意したのだ。

あの『光』を守るのが自分の役割だと。

窓からこぼれる月明かりは、一方通行を優しく包んでいく。

この月明かりは誰のものだろうかわからない。

だが、空を見上げる一方通行は静かに目を閉じた。

空には無駄な光など一切ない。

そこに存在することで意味をなしているのだ。

だから、一方通行はこの『星々』が消えるのを許さない。

それを消そうものならば、全力を持ってその存在を排除する。

『一方通行』という存在を為す『夜空』を守るために。

それがいままでやってきた自分のやり方だ。

ならば、彼女らのもとに帰るために、今自分がしなければならぬことはもう決まっています。

もう、無駄なものだと無闇に切り捨てられない一方通行。

そして、本気で殺そうとした相手に嬉しそうな声で名乗るイリヤという少女。

おかしいな関係だと、心のなかで呟き、一方通行は小さく笑みを浮かべた。

「俺もつくづく変な奴に召還されたもんだな」

現状を『受け入れ』、静かにため息を吐く。

そうして、一方通行は再び横になると、静かに。そしてゆつくりと意識を闇の中に落としていった。

喧騒と悲鳴

『ねえ、あなた。起きて、朝だよ』

いつも通りの朝。

陽の光が薄つすらと目蓋を上げる一方通行を目覚めさせ、頭上から打ち止めのよう
幼い声が届いてくる。

不思議と一方通行に安心感を与えてる声色に、一方通行は寝返りを打って再び目を閉
じる。

(・・・打ち止めの声が聞こえる。つたく、朝だつつの、耳元でぎやーぎやー
うるせエなア)

いままで、悪意以外には畏れや恐怖といった声しか聞いてこなかった一方通行には、
まだ聞き慣れない柔らかな声。

その声がどうも子守唄のように聞こえ、一方通行の意識を再び奪おうと襲い掛かつて
くる。

しかし、声の主はその選択を許してはくれないらしい。

呼び掛けとともに、身体を小さく揺らさされているため、頭はまだ完全に覚醒しきつて

いないが、その控えめな声は徐々に一方通行を覚醒させていった。

「……うっぜエから揺らすんじゃねエよ」

重い身体を起こして、一方通行は起床する。

目をこすり、自分の肩辺りを揺らしていた人物に目を向ける。

いつもなら、そこには無邪気に得意気に笑みを浮かべるアホ毛の少女がいるはずだ。

しかし、目の前にいた少女は、打ち止めではなかった。

「おはようバーサーカー！ ずいぶんとお寝坊さんなんだね。もう、お昼ご飯の時間だよ」

一方通行が目を開けると、そこには、白銀の髪を小さく揺らすイリヤの姿があった。

一方通行は覚醒し切っていない頭をボリボリと掻きながら小さくため息を吐いた。

「ハア。……夢じゃねエのかよ」

できれば愉快的な夢であってほしかった。

小さく呟く一方通行に対して、イリヤはキョトンとした表情で一方通行を見た。

「? 何のこと? そんなことよりバーサーカー。寝言で『打ち止め』って呟いてたけど

――」

「……お前には関係ねエことだ」

キツパリと関係ないと言い切った一方通行は、ソファアールから立ち上がると小さく首を

鳴らした。

よほど良いソファアーなのだろう、一晩寝ても疲れが全く感じられない。腕を軽くほぐして、身体に不調がないか確認していく。

幸いにも、『まだ』どこにも不調はないようだ。

小さく息を吐きだして、立ち上がろうとすると、

「ねえバーサーカー。昼食の準備が出来てるんだけどどうする？ セラが腕によりをかけて作ってくれたんだけど……」

その行動を遮るように、イリヤの控えめな声が一方通行の耳に届いた。

その瞬間、一方通行は立ち上がるとした腰をソファアーにおろし、目を細めて目の前の少女を睨みつけた。

「あん？ ……おい、クソガキ。俺が昨日テメエになんつつたか覚えてねエのか？」

「それは、どういう意味？」

本当に理解していないのか、それとも理解していてやっているのかはわからない。

だが、一方通行の正面にいる少女は、あどけない顔で首を斜めに傾けている。

「俺はお前に散々脅しをかけて、馴れ合いはしねエっていったはずだが」

「……. やっぱり、迷惑だった？」

殺気を込めた一方通行に対して、目の前の少女は、上目使いで一方通行を見る。身長差があるため、イリヤはどうしても見上げるような形で一方通行を見ることになるのだ。

「ああ迷惑だね。お前とは利害関係の一致で繋がってるにすぎねェんだ。余計なことしようとしてンじゃねェ」

「でも、いくらサーヴァントと言っても何か食べないと力がでないよー」

服の裾を目一杯まで強く握るイリヤ。

表情は恐怖の色で若干硬いが、吐き出した声はどこまで一方通行を心配する優しいものだった。

それでも、一方通行にとっては余計なお世話だ。

ここは自分の知らない世界だとしても、仕組みや一般常識くらいはほとんど『元』の世界と同じはずだ。

ならば、買い物など私生活に問題が出てくるなどといった心配はない。

(……. まあ、向こうの通貨がコッチと同じなのかは置いておいてだがな)

最悪、そこら辺の通行人にちよつと『お願い』してしまえばどうとでもなる。

「はン。それくらい自分で出来るっつーの」

「そっか。……いらないんだ」

そう冷たく言い放つと、イリヤは目にわかるように至極残念そうに俯き、先ほどとは打って変わって沈んだ表情を見せた。

よほど、なにか重要な話があるのだろうか、と考えていると、一方通行の耳にこんな小さな言葉が届いた。

「今日はせっかく、セラが牛肉のステーキを作ってくれたのに」

「……………」

一方通行の動きが不自然に止まる。

そう呼吸すら止まるほどに。

「わかった。セラにそう伝えて——」

一方通行の僅かな変化に気づかないイリヤは、残念と言った雰囲気立ち去ろうとするが、一方通行はそれを許さなかった。

「おいクソガキ。お前いまなソツツた」

「——えっ！ だから、お肉が——」

突然の呼び掛けにイリヤは顔を上げてとっさに答えると、

「よし、行くか」

即断即決で勢い良く立ち上がって、確かな足取りで杖をついていく一方通行。

それに対して、置いていかれたイリヤはというと、
「えっ！ でも、いらないんじゃないあ——」

あまりにも突然な出来事に素つ頓狂な声を上げて、後ろを振り返るイリヤ。
しかし、その抗議の声は一方通行に届くことはなかった。

「さつさとしろ！ テメエが案内しねエと食堂がどつちかわかんねエだろうが」
(ええー。なんか理不尽かも)

イリヤは若干不満があるものの、イキイキと歩いていく一方通行の後を追って、食堂まで案内した。

——

二人で食事するにはあまりにも大きな食堂。

白いテーブルクロスにはあまりにも多い料理の品々が並んでおり、一方通行とイリヤは豪華なテーブルを挟んで昼食を取り始めていた。

「.....」

「.....」

どちらも無言で料理を口に運ぶイリヤと一方通行。

そして、その一足挙動を見逃さないように見つめる従者二人。

明らかに給仕には関係ないハルバードまで持ち込んでいる所を見ると、どうやら昨夜の一件で相当警戒されているらしい、と一方通行は料理を口にしながら判断する。

(まあ、当然の判断だろオナ)

心のなかでそう呟いても、未だに敵意のある視線が刺さり、気になって仕方がない。

しかも、どうも片方から並々ならない怨嗟のような視線を感じる。たしか、セラと言った侍女の方からだ。

もう片方のリズと呼ばれた従者の方からは、悪意の代わりに、全身くまなく観察されているような視線を感じる。

「……………」ギロ

「……………」ジー

しかし、今更そんな視線を向けられて動揺する一方通行ではない。

まるでどこかの上流貴族のような振る舞いでナイフとフォークを動かすと、上品にステーキを頬張っていく。

(……………メイド共の殺気がウゼエが、料理は悪くねエな)

そんな悠長なことを考えながら、出された皿を肅々と片付けていくと、

「ねえバーサーカー!」

イリヤはナイフとフォークを動かしながら一方通行へと問い掛けてきた。「あ〜ん?」

一方通行はナイフを動かす手を止めて、皿ではなく真正面の方を見やる。するとイリヤが愉快的な声を上げて尋ねてきた。

「料理の方はどう? リズとセラの料理、おいしいでしょ!」

どうやら会話に困って、ついで出た言葉ではないらしい。

ただ単純に一方通行に料理の評価を聞いている雰囲気だ。

まるで同意を求めているように。

一方通行は、ここで適当にあしらうより、正直に答えたほうが無難だと瞬時に判断し、適当に答える。

「ああ、まあ。悪くはねエ」

「そうでしょ! なんとたつてわたしの召使だからね」

一方通行の言葉に座りながらも嬉しそうに胸を張るイリヤ。

その表情はどこか誇らしげで、照れくさそうな顔だ。

一方通行は反応を返すのが面倒くさいといった様子で小さくため息を吐くと、黙ってステーキを口へ運ぶ。

「だいたい、なんでお前が嬉しそうなんでよ」

「だって、身内の料理がおいしいなんていわれたら嬉しくないわけ無いよー」

「……………うまいなんて一言も言ってるねエ。悪くないってだけだ」

「それでも、おいしいってことでしょ？」

若干訂正を入れるが、余計な気遣いで強引に訂正される。

ここで違うと反論しても、おそらく目の前の少女は頑なに反論してくるだろう。

ならば、ここは適当に同意したほうが無駄な労力を使わずに済む。

そもそも、こういつた喧しいガキの対処法は、すでに熟知している。

「あアそうですね」

そんな風に適当に棒読みで答えて、再びステークを口に運ぶ一方通行。

そろそろ受け答えが受け答えが面倒になってきたところで、イリヤがまるで嬉しそうに頬をゆるめ出した。

「……………ふふっ」

小さく笑うイリヤに反応して、一方通行は眉をひそめる。

「あん？ なにかおかしい」

「だって、昨日まであんなに怖かったバーサーカーが、なんかこわくないなって」

あつけからんに言い切ったイリヤは照れくさそうに頬を搔くと、顔を合わせるのが気まずいのか、再び料理との格闘に取り掛かっていった。

そして、そんな姿を呆然と見ていた一方通行は眉間に寄せるシワをより一層深くして、大きくため息を吐き出した。

「はん！ 昨日あんなに震えていたチビが良く言えるなあ」

「ふ、震えてなんかないもん!!」

小馬鹿にするような笑みを浮かべる一方通行に、慌てたように椅子から立ち上がり、抗議の声を上げるイリヤ。

その声は若干、たよりなく震えていた。

「ああそうですねエ。怖くなんてなかったですよねエ」

「なんでそんな棒読みなの!」

「……うるせエよ。黙って食いやがれ」

皿の上にあるステーキを全て平らげると、一方通行は小さく息をついて、紅茶を一息に煽った。

ほのかな甘味が鼻を抜けて、口直しにはちょうどいい。

(このガキ。ほんど打ち止めみてエに騒ぎやがる)

脳裏に浮かぶあのアホ毛の少女と目の前の少女を見比べそんなことを考えつつ、一方通行は席を立つと、

「あれ? どこ行くの」

案の定、目の前の少女が小首をかしげてこちらを見ていた。

「お前には関係ねエ」

頬を搔いて、面倒くさそうに会話を言い切り、一方通行は一步踏み出そうと足を動かすと、

「ダ、ダメ!! いかないで!!」

鋭い制止の声が、広い静寂な空間にこだました。

一瞬の静寂ののち、イリヤは自分があまりにも大きな声をあげていたことに気づいたのか、一方通行の表情を見てから、ハツとなったような顔をしてその表情に影をつくりだした。

一方通行も、イリヤのあまりにも大きな声に一瞬だけ面を食らったが、すぐに目を細めた。

それはまるで、目の前の少女を射殺さんばかりの目つきで。

「ハア? ……また、昨晚みたいに令呪で脅すきか」

「ううん。そんなことしないよ。……あれは、わたしが悪かったかもしれない」
鬱陶しそうな一方通行の声に、イリヤは小さく首を振って、俯きがちに顔を伏せる。

まるで、悪事がバレた子供のような顔だ。

しかし、目の前の少女はそれでも、不安そうな声色で自分の思いを吐露し続けた。

「バーサーカーが、聖杯戦争に参加してくれないって言うからつい頭に血が上つて……」

「でも、わたし——」

自分の胸に手を当てて、顔を勢い良く上げるイリヤ。

その表情は、どこかなにを訴えているような、そんな雰囲気は何える。だが——

「……なア、聖杯戦争だかなんだかしらねエが、お前に一つ聞いておくことがある」

今の一方通行には届かない。

彼の声は先程の温かい会話からかけ離れた冷たいものとなる。

「お前はこの戦争で人間を、人を殺す覚悟はできてんのか？」

単純な疑問。

あまりにもシンプルすぎる質問に、イリヤは思わず一方通行から目をそらしてたじろいだ。

「——そ、それは」

そう。根本的な至って単純な問題だ。

聖杯戦争。

どう転んでも戦闘は避けられないこの戦いで、人を殺めるのはまず間違いない。

この質問に、目の前の少女は、迷ったのだ。

その意味するところはすなわち――。

「まさか自分で他人を殺す覚悟もなしで、こんなゲームに参加しようなんて甘い考えじゃねえよな」

一方通行は鋭い視線に殺気を織り交せて、目の前で震える少女を一瞥する。

両手を胸の前で組んで、必死にその場に耐えようとする少女。

それでも、一方通行は容赦しない。

正論といえる言葉のナイフを次々と投擲していく。

「テメエは昨夜言ってたよな。マスターを殺した方が手っ取り早いって」

「テメエにソイツを実行する覚悟があんのか？　・・・・・・・・もしくはこの戦いで殺される覚悟が」

そうして、彼は自分の首元にあるチョーカーに手を触れた。

しかし、イリヤは気づいていない。

もうすでに、一方通行が自身の名を関する能力を発動させていたということに。

「わ、わたしだって。人を殺す覚悟くらい――」

覚悟を持つて答えようとしたイリヤの声が途中で別の音によって遮られる。

バキーンツ!!

一方通行が触れただけで、食卓が昨夜のように真つ二つに裂ける。食卓に乗っていた物が全て、音を立てて床に落ちていった。

真つ二つに裂かれた食卓は、まるでイリヤを目的地とした道を示すように敷かれる。

「.....」

無言で食材が無残に散りばめられた道を歩く一方通行。

距離はそう遠くない。

怯えた2つの目が一方通行を捉えて離さない。

しかし、一方通行には関係のないことだ。

イリヤの一步手前で静止すると一方通行は小さくため息を吐いた。そして、手刀を高々と上に挙げ、

一度静止させると、

「ふざけんな」

「いったあああつ!!」

短く、そして至つてどうでもいい口調でイリヤの頭頂部に手刀を繰り出した。

「んな甘い覚悟で、戦おうなンギ百年早いんだよ。覚悟決めてから言いやがれ。それと——」

そこで言葉を区切って、一方通行は首元に添えるように構えられた銀色に鈍く光る刃

物を一瞥する。

「さつさとその物騒なモンを締まってもらえませんかエ。……テメエ等の腕がすつ飛ぶことになんぞ」

一方通行の忠告を聞いて、これ以上何も無いと判断したセラとリズは、静かにハルバードを一方通行の首筋から離れた。

無言であつさり引き下がる従者たちだが、その目は明らかに憎悪の色で染まっている。

おそらく、下手なことをすれば間違いなく全力でハルバードを振り切ってくるはずだ。

そんな考えに思考を巡らせていると、

頭をおさえていたイリヤが、涙を目尻に浮かべながら、

「セラ。リズ。大丈夫だから下がって」

従者たちに静かにそう命じた。

しかし、どうやら納得はしていないらしい従者が一人、思わずといった口調で口を挟む。

「ですがお嬢様」

「お願いセラ。あなた達を傷つけないから」

「……わかりました」

そこまで言われて、セラと呼ばれた従者はしぶしぶといった雰囲気引き下がった。本音はきつと違うところにあるはずだが、あんなことを言われては引き下がるしかない。

しかも、主人の手前、彼女の面子を守るため順者としてしぶしぶ折れるしかなかったといったところか。それを解かかっていてこの少女はああいったのだろう。

「セラ、リズ。ありがとう」

殺されるかもしれない、という状況でこの少女はいつも笑う。

よく笑えるものだ。

一方通行に殺されていく馬鹿どもは終始、恐怖で顔を強張らせているというのに。

この少女には一体、目の前にいる自分がどう見えているのか疑問に思えてくる。

「……おい、クソガキ」

「ふえ？」

小さくため息が漏れる一方通行。

それに対して、いきなりの呼びかけに驚いたイリヤは、変な声を上げて一方通行を見た。

その表情はキョトンという擬音が適切だろう。

しかし、一方通行はそんなことに構わずにまくし立てるようにしゃべり続けた。

「とりあえず銃器を集めろ。なるべく小型で弾数の多い奴を中心に。ああ、あと何らかの魔術でも付加されてんのがあればそれでもいい」

「それは、どういう——」

急なオーダーに戸惑うイリヤだが、一方通行は続けて言うようにしてイリヤを黙らせる。

「聞こえなかったか？ 俺はお前をいつしよに連れてつてやるつて言つてんだが。まあ

着いて来なくても構わねエけどな」

「つ、連れて行つてくれるの!!」

一方通行の物言いに、イリヤは興奮したような声を上げる。

予想はしていたが、あまりの音量に一方通行は耳を嚙んで、口調を荒げる。

「だからそう言つてンだろうが。俺の気がかわらねエうちにさつさと持つて来い！ 捜索はそれからだ」

「わ、わかった。わかったからちよつと待つててね」

明らかに顔色と表情が変わるイリヤ。

言うなれば、あれは打ち止めが見せる表情にどこか似ている。

そう、自分が向けられるには不釣り合いな表情だ。

踵を返すように扉近くまで走りだすイリヤは、扉を手に掛けたところで振り返り、突然の出来事で固まっている従者二人の名前を呼ぶ。

「セラ。リズ。ちよつと探すの手伝つて」

「お、お嬢様！ お待ちください」

「待つてイリヤ」

慌ててイリヤのあとを追うように去つていくメイド二人。

よほど早く行きたいのか、メイドを待たずしてイリヤは扉の外へ出て行つてしまつた。

そうして彼女等の姿を見送つた一方通行は、白い髪を何度か掻き揚げると。

「……ガキなソぞに人殺しをさせてたまるかつてんだよ。クソツタレ」

忌々しそうに自分を呪うと、一方通行は小さく呟いた。

片方のやかましくない従者に案内されたのは城にふさわしいほどの豪華な玄関だ。

天井には豪華なシャンデリアが飾られており、いたるところに凝つた装飾がなされて
いる。

床には真つ赤な絨毯が敷かれてあり、もちろんホコリひとつ落ちていない。

家庭用の玄関のゆうに十倍はある広さで、車が十台くらいなら簡単に入ってしまったらろう。

後ろには大理石の階段があり、真正面には大きすぎる扉がある。

そして、一方通行は集められた銃器の中から、ベレッタM92を手に取っていた。グツリプの具合や使いやすさなどを厳選した結果選び出したのがこの拳銃だ。

正式名称はピエトロ・ベレッタ92。複列弾倉（ダブルカラムマガジン）に15発の9x19mmパラベラム弾を装填する事ができる。

一方通行の手には少々大きいような気もするが、それでも、一方通行は試し打ちで使い慣れたような技術を見せた。

「……悪くねえな」

満足したような表情でベレッタM92を眺めていると、真横から不思議そうに自分を見つめる少女の姿があった。

「ねエバーサーカー」

「ンだよ、クソガキ」

「クソガキじゃない。イリヤ！……ねえ、英霊相手に銃を使うの？」

イリヤは、一方通行の物言いにムツとしながらも、当然のような疑問を口にした。

当然といえば当然の疑問だ。

なにせ、相手は英霊だ。

魔術サイドからしてみれば、現代の武器などただのガラクタに見えても仕方がない。

しかし、一方通行は科学サイドの人間だ。

武器の有用性については十分理解している。

「別に殺すためだけじゃねエ、護衛のためっつー意味もあるが、一番の理由はそこじゃねエな」

適当に言葉を返して、拳銃の点検を始める一方通行。

何度か、感触を確かめつつ、イリヤの方を見ずに淡々とわかりやすく口を紡いでいく。

「例えどのような英霊だろうと元は人間だ。鉛球一発さえぶち込めば死ぬし当然避けなきゃなんねエ」

「コイツはどんな相手にも通用する武器だ。モノによっちゃ俺みたいな化け物に傷をつけたもんもあるしな」

そう言つて一方通行は、ベレッタM92の点検を終えると専用に作られたホルスターに収める。

はつきり言つてしまえば、これは経験談だ。

人間は追いつめられた瞬間、土壇場で必ずと言っていいほど武器を手取る。

それはその武器の恐ろしさを十分に理解してあるからで、相手を傷つけるのに有効なものだと本能が理解しているからだ。その代表格と挙げられる凶器のなかにこの拳銃も例外なく入っている。

だからこそ、明確な凶器である拳銃を持っておく必要があるのだ。自分が危険であることをしらしめるために。あえて。

そして、相手が英霊で、マスターが人間であるならなおさら――。

「おい、クソメイド」

「……それはわたしに言っているのですか？」

反応する従者は除隊に青筋を立て、顔をひきつらせた。

確かセラと呼ばれていたメイドだ。

今にも射殺さんばかりの視線を送られても、今更気にするほどやわな一方通行ではない。
鼻で笑ってやると、これまた良い反応で殺気が帰ってくる。

じつに乗せやすい。

「はっ。わかつてンじやねえかクソメイド」

「すみませんお嬢様。このモヤシを駆除してもよろしいですか？」

「おいおい、ふざンじやねエぞクソメイド。よほど愉快的なオブジェになりたいらしい

なア」

目線がぶつかる先で、殺気という火花が舞い散る。

一触即発。

セラはハルバード。一方通行はチョーカーに手を添える。

お互い、自身の武器を構えて牽制しあうなか、

「わわ、ストップストーツプ！ セラ落ち着いて。バーサーカーもそんなこと言わないで！」

主人たるイリヤが慌てて仲裁に入った。

正直、挑発しておいてなんだが、目の前の従者の言動がどこぞの性悪に似ていて苛々する一方通行。

「チッ！」

小さく舌打ちすると、依然として鋭い視線で自分を睨むセラと視線がぶつかる。

完全に敵意むき出しの状態だ。

「……………それでなんでしようかモヤシ」

「それは固定なのかよ。このクソメイド」

「ご用件をどうぞ」

反論は聞き入れないらしい。

と言うより、これ以上話したくないという顔だ。

それでもつて、この敵意。

主人を危険に晒したのだから当然といえは当然だが、いまは甘んじて受け入れよう。

一方通行は大きいため息を吐き出すと、チョーカーから手を放す。

「金だ。とりあえずまとまった金を寄こせ」

「それは何故でしょうか。詳しい説明を求めます」

「このクソガキの子守りに使うんだよ。それに、外に出ンならいくらか持ち合わせがあつた方がいいだろオが」

考えやがれ、と小さく悪態をつく一方通行を見て、セラは短い間であらゆる状況をシミュレートすると、やがて小さく頷いた。

「……わかりました。金庫から取つて参ります。お嬢様少々お待ちください」

そう言つてセラはイリヤにお辞儀をすると、階段をメイドらしく絶妙な速さで登つていった。

本当にそつくりだ。

遠ざかるメイドの姿を見て、一方通行は胸の中でそんな感想を漏らした。

あえて一方通行の琴線に触れるような身体的特徴を的確についたようなあだ名を付けるところが特に似ている。

「あんのクソメイド。番外個体みたいなセンスのあだ名付けやがって」
去つていく背中を見送り、一方通行は小さく呟くと、自分の服の裾を引つ張られてい
る事に気づいた。

「あん?」

「ねえ、わたしは?」

振り返ると、無表情の従者が、一方通行を見上げて、そう呟く。

一瞬、何のことかわからずに黙つて、静観の構えをとつてみると、

「わたしは?」

次は首を傾げて、物欲しげにじつとコツチを見てくる。

なにに対して主張しているのかを数秒模索した後、セラのような呼び名を欲しがつて
いると気付いた一方通行は、

「.....アホ、メイド」

長考の末、彼らしからぬその場の雰囲気流されて、そう答えた。

対して、不名誉な名を呼ばれたもう一人の従者はというと、

「.....アホ、メイド。うん、なんかいいかも」

独特な雰囲気、そんなことを呟いた。

どうやら気に入ったらしい。雰囲気からして嬉しそうだ。

しかし、隣で一部始終を見ていたイリヤが当然のようにやかましく反論の意を声高に唱えた。

「ちよつとバーサーカー！ リズに変なあだなつけないでよ！ リズもそれでいいの！」

「うん、いい」

当然といえば当然の反論だが、目の前でポワポワと浮かれているリズと呼ばれたメイドは満足そうに大きく頷いた。

(……このメイドは、どこか馬面の女に似てんな)

そんな感想を胸の中でつぶやいていると、

後ろから階段を降りてくる音が聞こえた。どうやら帰ってきたらしい。

「お待たせしましたお嬢様。……リズ、どうしてあなたはそんなにご機嫌なのですか？」

「バーサーカーにあだ名を付けられて、ね」

リズが変わって、状況を説明するイリヤはさも残念そうに肩を落とした。

これは、おそらく女として怒るべきなのでは、と呆れているのだろう。

確かに、一方通行もつけておいてなんだが、あのアダ名で喜ぶとは、随分とおかしな感性をしていると、同意せざる負えない。

「・・・・・・・・まあ本人が気に入っているのであれば構いません」

セラも何か思うところがあるのだろうが、リスの様子を適当に流すと、メイド服から高級なブランド物である長財布を取り出し、

「それよりお嬢様、こちらが財布になります。・・・・・・・・本来ならば私共も御付しなればならないのですが、つてあ——」

イリヤに差し出された財布をセラの手から強引に奪う一方通行。

奪いとつた後に、睨まれもしたが、一方通行は気にせず中身の確認をする。

入ってある金額は十万程度。

これならば、何があつても問題はないだろう。

「・・・・・・・・まア、そこそこ入ってんな」

「よし、クソガキ。さっさと行くぞ」

中身を確認した後、一方通行は財布を後ろポケットに強引にねじり込み、杖について扉に向かって歩き始めた。

「あ、ちよつとまつてよバーサーカー！ あつそうだ、セラ。リス。いつてきまーす」

元気の良い声を上げて従者たちに手を降ってからイリヤは、慌てた様子で一方通行の背中を追いかけた。

なぜなら、一方通行にイリヤの歩幅に合わせて歩くなどという優しさなど無いから

だ。

「お嬢様お気をつけてー」

「いつてらっしゃーい」

後ろから、セラ達の声が聞こえてくる。

イリヤは嬉しそうな笑顔を浮かべて、片側の扉に手をかけ。

一方通行も、厳かに主人にお辞儀をするセラと豪快に手を振って見送るリズを尻目に見つめて、もう片方の重たい扉を開け放った。

――

「――ハア。ずいぶんときわがしい奴等だったな」

城からだいぶ離れたところで、一方通行は白い息を吐き出して素直な感想を漏らした。

まるであの家の住人のようだ。

特に、目の前を先導して歩く少女は打ち止めによく似ている。

やかましくて仕方がない。

一方通行は、そんなことを考えて、もう一度白い息を吐き出す。

いまが何月かは定かではないが、薄く霜を引く冷気と、空から照らさされる太陽の日

差しが交わり何かを羽織らなくても出歩けるくらいには温かい。

依然として、森は続いているが、学園都市にはない雰囲気で、どちらかと言えばロシアの雪原にいた頃を思い出す。アツチでも雪が降っていないければきつとこんな感じだったかもしれない。

そうして、前を向くと、ごきげんな様子で銀色の髪を揺らす少女が見える。しかも、鼻歌つきだ。

「ルン〜♪ルン〜♪」

「そして、お前はなんでそんなにご機嫌なんですかア？」

「だって、お外に出るのはひさしぶりなんだもん」

そう言って、嬉しそうに振り返るイリヤ。

白いスカートを揺らして、羽織っている紫色の上着がふわりと翻る。

その喜びを全身で表現しているイリヤを見て、一方通行はもう一度大きくため息を付いた。

「そうですかア」

「それよりバーサーカー。ここからどうするの？ まさか歩いていくの？」

一方通行の気苦労を知ってか知らずか、イリヤはそんな心配を口にする。

それに対して一方通行は、

「ンなめんどクセエことしねエよ。ようするにこうすんだよ、っと」

面倒くさそうに言い放つと、一方通行はチャージャーの電極をオンにする。能力使用モード。

そうして、杖を必要としなくなった一方通行は、杖の柄を収縮させると、イリヤの腰と足に手を回してイリヤの身体を軽々と持ち上げた。

俗に言うお姫様抱っこだ。

「きゃっ！ ば、バーサーカー！」

「しつかり掴まってるよクソガキ！」

突然の出来事に、イリヤは驚いて声を上げるが、一方通行は反論さえ聞き入れずに体勢を整えると。

有無言わずに、大地を蹴って空を飛翔した。

空はどこまでも青く。眼下には小さな城と広大な森が広がっている。

そして、

「いーやあああああああああああああああああああああああああああああああ——
——」

後に残ったのは、とある少女の悲痛な叫び。

甲高いその叫びは青い空に反響し、まるで誰かを呪っているようにも聞こえる。

そうして腕の中で愉快的な叫びを上げる少女を一瞥してから、一方通行は愉悦に笑みを浮かべると、更にスピードを上げるのであった。

説教と常識

冬木市の新都に到着後。

行き交う人々の中でより一層に目立つ白い二人組が辺りの視線を独占していた。

片や、意味深な表情で眉をひそめて杖をつく白い少年。

もう一方は、長い白銀の髪を左右に揺らし、頬を膨らまして隣の少年を睨みつける少女。

興味を持つなという方が難しいこの状況。

現に晴天の空模様のなか、雑居ビルから突如現れた二人の姿に、周囲の目は好奇心に満ちた視線を向けていた。

しかし、当の二人組は周りの視線など一向に意に返した様子もなく、少年と少女の二人だけの世界を形作っていた。

そう。主にお説教という形で。

「——だいたいさあ、マスターを乗せてあのスピードは無いと思うんだけど。わたしだって女の子なんだよ？ もっと丁寧に運ぶとかさ——」

コレでもかと正当性を持ったお説教が彼女の口からこぼれていく。

周りの目など気にしていない所を見ると、相当ご立腹の様子だ。

現在、空のお散歩を終えた二人は、適当な人目の付かないビルに到着して、イリヤに先導される形で市街を歩いていった。

そして、杖を突きつつイリヤの隣を歩く一方通行は、内心面倒くさそうなため息をついてイリヤを一瞥すると、飛んで来る罵声を耳に顔をしかめていた。

もちろん原因に心あたりがないわけではない。

しかしあくまで白を切り通す一方通行。

だいたいここまで運んでやったのだから文句など言われる筋合いはない。

しかし、イリヤからしてみれば生身で空を飛ぶ機会などあるはずもないので、訳も分からず空中に放り出された時は正直死ぬかと思った。

しかも速度がジェット機並みの速さなら尚の事怒らずにはいられない。

そして件の主犯に至っては反省の色が全く見えない。

ナイフのように目を鋭く細めるイリヤは、一向に自分と目を合わせようともしない一方通行を睨みつけた。

「聞いているバーサーカー！ いますごく大事な話をしてるんだけど」

「うっせエな。口より足を動かしやがれこのクソガキ」

「なんかすごく理不尽かも！ ちゃんとわたしの話を聞いてよ！」

「ああハイハイ。ちゃん聞いて聞いてますよオ」

「嘘だ！ 絶対に聞いてない！」

今にも頭から蒸気を発しそうなイリヤ。

ポカスカと小さな両手で必死に抗議の意を唱えるイリヤだが、肝心の一方通行は適当にあしらう形で全く聞いていない。

しかし、だからといって気にならないわけでもないのです、イリヤの拳が弱まる適当なタイミングで彼女の手を払うと、気を取り直して一方通行は周囲を観察するように辺りを見渡した。

イリヤを抱えて飛行している途中で、少し余裕を取り戻したイリヤが一方通行に指定した場所がこの新都だ。

特にこれと言って目立った様子もないただの市街地。

ビルやマンションが多く立ち並んでいる所を見ると、おそらくここは都市部と居住区の間のようなのだ。

これからここ周辺が大戦争になるかもしれないとも知れずに当たり前のように日常を謳歌する人々の顔は、まさに平凡そのもの。

何もかもが普通の街並みだ。

だからこそ、なぜイリヤはここに真っ先に降りるように指示したのかがわからない。

それにしても。

「平日だつてのに人がうぜエな」

「しょうがないでしょ。……それよりバーサーカー。行かないきやならないところがあるんだけど」

まだ根に持っているのか小さく頬を膨らませるイリヤだが、その口調はどこか真剣味が帯びている。

そんなイリヤの提案に、一方通行もピクリと眉を潜めて反応した。

懐かしい感じだ。

空気が一部切り取られて、一方通行とイリヤの周りだけ温度が下がっていく感覚。

暗部にいた頃と同じ緊張感。

なにより、彼女が行きたい場所というのが気になる。

「……言ってみろ」

適当に促すと、イリヤは表情をスツと静かに素に戻して、あくまで一方通行の顔を見ずに答えた。

「教会よ」

意外すぎる解答に一方通行は表情を曇らせた。

当然だ。

わざわざ外に出るリスクを負ってまで、訪れるようなところではない。むしろ、魔術に関わるのならそういった類の施設は警戒すべきはずだ。

「あん？　ンなどこ行つてどオするつもりだ。……まさか、聖杯獲得のお祈りでもしてもらうためつてわけじゃねエよなア？」

「ええ、違うわ。聖杯戦争の監督役に会いに行くの」

「監督役だア？」

初めて出る単語だ。

場にそぐわない声を上げる一方通行の言葉に、イリヤは小さく頷いた。

「うん。名前は言峰^{ことみね}綺礼^{きれい}。サーヴァント召還したあと、マスターは教会に報告する義務があるの」

「——義務、ねエ」

おそらくその義務すら建前だろう。

一方通行はイリヤの話を聞いてそう判断した。

これまでの監督役がどういった傾向の人間か知る由もないが、これは上層部の人間たちでありがちな無様なプライドでしかない。おおよそどちらが上の立場かはつきりさせることで愉悦感にひたり、この聖杯戦争を支配している、という建前がほしいのだ。

第一、サーヴァントの報告をするにしてももつと他の方法があるはずだ。わざわざ外

に出てまで自分の姿を見せるのはむしろデメリットでしかない。

そこまでの思考を一瞬のうちに済ませると、一方通行は眼下を鋭く尖らせてイリヤを見た。

「ここからどれくらいだア」

「そう遠くないよ。あと二十分も歩けば着くかな」

この坂道をあと二十分も歩くのか、と続く坂道を見てため息を吐く一方通行。

そもそも杖をついている人間に坂道は辛い。それなら予め、イリヤに目的地を聞いておけばよかったと後悔する一方通行だった。

「チツ。俺も行かなくちやダメか？」

「うん。絶対についてきて」

めんどくさそうに呟く一方通行の言葉に、イリヤは力強く頷いた。

その言葉がどれだけ真剣味を帯びているのかわからない一方通行ではない。

この先の面倒を考えると、嫌でも憂鬱になつてくる一方通行は首を横に振ると、鬱陶しそうに前髪を掻き上げた。

そして、小さくため息をついて、教会まで続くであろう坂道を眺めた。

「ハア、めんどクセエ」

「バーサーカーだってわたしのサーヴァントなんだから、わたしを守らなくちやダメな

の

「俺はテメエを守る義務なんてねエよ。第一、……………あん？」

「……………」

一方通行がしゃべりかけている途中で突然足を止めたイリヤ。先導されるように歩いてきた一方通行の足も当然止まり、一方通行は訝しげな表情でイリヤの後頭部を見つめた。

てつきり、またやかましい事を喋り出すのか、と思っていた一方通行は、あまりにも静かなイリヤの反応に首を捻った。

昨日までなら、確実に嘔み付いてきてもおかしくない程の過剰な反応を見せたイリヤだ。今回も同じようにサーヴァント云々と吐かしてくるだろうと予想していた一方通行は見事に出鼻をくじかれてしまった。

(……………なにを見てやがんだ)

あまりにも真剣な表情とある一点を凝視しているの、一方通行も彼女の視線を追って、隣の歩道に目を向けた。

そして、一方通行の目に写ったのは、

『タイヤキ屋。俺のたい焼きにその常識は通用しねえ』

ふっと脳裏に浮かんだのはあのムカつく第二位の顔。

たい焼きのくせに鳥類のような翼がついているというふざけた感性の看板だ。

それでなくともあの残念なネーミングセンスと手作り感満載の屋台では、客一人寄り付くはずがない。

そもそもこんなところであんな怪しげな店のたい焼きなど買う馬鹿はいないだろう。と、思っていたのだが、どうやらここにその間抜けがいたらしい。

一方通行は、一向に動こうとしないイリヤを見てから確信に迫る言葉を口にした。

「………食いてエのか？」

「ふえい！ べ、別にいらない」

試しに声をかけてみたが、その震えた声で動揺がまるわかりだ。

しかも、名残惜しそうに屋台を見ては、再び強がったような表情を見せる。

あくまで大人ぶるイリヤだが、その姿はどこかよく知るアホ毛の少女がたまに取る行動と似ている。

ともすれば、その心情も同じだろう。

おそらく少女の心の中では、好奇心と自尊心の両者の戦争が勃発しているはずだ。

一方通行はしばらくイリヤの様子を観察すると、やがて何かを諦めたように大きく息を吐きだした。

理由は簡単だ。

学園都市第一位の頭脳と経験がこいつを放置したらのちのち面倒くさいことになる
と告げているからだ。

「……ハア。ここで待つとけ」

「い、いらないつてばあー」

そういつたところで後で欲しがるは目に見えている。

それで、あとで迷子になれば世話ない。

念のため周囲に気を配ったが、あやしい動きをする者はいない。

そもそもこんな真つ昼間から戦闘をふっかけてくる馬鹿はいないはずだ。

もし何かあれば、あとはクソガキがなんとかするだろう、と勝手に判断した一方通行は、遠ざかるイリヤの声を背に、車が行き交う道路を横断してふざけた屋台の暖簾をくぐった。

香ばしい生地焼ける匂いが鼻を突き抜けるが、生憎朝食をとったばかりなの一方通行にとつてはやや不快な匂いでしかない。目の前に視線を向けると、なにやら頭に鉢巻を巻いたチャラついた男がタキシード姿でたい焼きの型に生地を流し込んでいた。

店主も一方通行に気がついたのか、たい焼きのほうから目を離して、柏手を一つ打つ。

「おっ！ いらつしやいネエちゃん」

出会って早々ふざけたことを抜かす男の眉間に思わず拳銃を構えそうになった。

が、なんとか残っていた理性がそれを阻止して、代わりにドスの利いた声と視線で男を睨みつけた。

「おい、舌を捻り切られてエのか？」

「あらら、兄ちゃんの方だったかい。そりや悪かったな」

対して、男はまったく怯えた様子もなく飄々とした調子でヘラヘラと笑っている。

一方通行は苛立ちげに小さく舌打ちをして、灰色のジーンズから財布を抜き取ると、それを見た男は上機嫌な様子で今か今かと両手を擦り合わせた。

正直、こんなたい焼きダーケマダーなど買う気も起きない。しかし、クソガキを黙らせる必要経費だと思えば安いものだ、と一方通行は諦めて財布の紐を解いた。

「いくらだ」

「二つ百円だよ。あんことカスタードどっちがいい？」

商品としては手頃な値段なのだろう。だが、この外見と店の雰囲気全てを破壊している。

一方通行の問いかけに、男は二本指を立てて自信ありげな笑みを浮かべると、通常の型とは異なるたい焼きの型にあんこやカスタードを投下していった。

「なら今できてるその二つを五つ．．．あーいや、十個ずつ頼む」

そう言って、嫌がらせの如く財布から万冊を一枚取り出して、カウンターに投げて渡

した。

「あいよ。それじゃあ一万円からつと、お釣りは八千円——」

「釣りはいらねエ。……さつさとソイツをよこせ」

レジから釣りを取り出そうとしたところで、一方通行が気だるそうにその動きを静止させる。

こんなところで無駄な時間を取られたくない。たかが小銭程度。このふざけた空間から早く出られるのなら安いものだ。

一刻も早くこのふざけた空間から遠ざかりたい一方通行は苛立ちげにそう言い放つと、キョトンと一方通行を見ていた男は、大きく柏手を打った。

「おっ！ 気前が良いねえくなにか良い事でもあつたか？」

上機嫌な様子で手際よく焼きたてのたい焼きを紙袋に詰めていく男は、意外な言葉に驚くもすぐに嬉しそうに言って、たい焼きを山盛りに袋詰していった。

「はいよ、毎度ありく。ふたつずつおまけしといたからな」

「別に嬉しくもなんともねエよ」

たかが4つ程度のおまけなどおまけのうちに入らない。

さつさとこのふざけた屋台から遠ざかりたい一心で、たい焼きを受け取ると一方通行は振り返って、早足に屋台から去っていった。

車道から車が来ないか確認してゆったりと横断し切る一方通行。

後ろからは「また来いよー」と男の声が聞こえてくるが、一方通行はコレを華麗にスルーする。

はつきり断言してしまえば、もう二度と来ることはないだろう。

そんなことを考えていると、辺りを不安げにキョロキョロと見つめるイリヤの元までたどり着いた。

彼女の心情もわからなくもないが、挙動不審すぎて逆に目立っている。

あれで、聖杯戦争とか言うふざけた戦争を勝ち抜こうと息巻くのだから呆れてくる。

無言でイリヤを見下ろしていた一方通行はやがて、ツケドンの調子でたい焼きをイリヤに投げ渡すと、イリヤは慌てた様子でたい焼きを受け取った。

「わつとつと。ちよつと急に投げないでよ!! それに……ちよつと多くない?」

中身を確認するイリヤの言葉に、一方通行は小さく舌打ちすると、ジツとたい焼きとイリヤを交互に見つめて、眼光を光らせた。

「いらねエのか」

その目と言葉が語るのはいらねエのなら捨てるぞ」という意思表示。

冗談ではなく本気の目だ。

一方通行のアイコンタクトの意味を本能で知ったイリヤは、慌ててたい焼きを庇うよ

うに抱きかかえると、

大きな声で否定の声を上げた。

「いる!! その、……ありがと」

後々になって照れくさくなってくるイリヤ。

自分のためにあの怖いサーヴァントが気を利かせて行動してくれたと思うとんだか余計に気恥ずかしくなってくる。

「いいからさっさと食いやがれ」

そんなイリヤの心情を知らずに、一方通行はバツサリと切り捨てると、イリヤのか細いお礼の言葉を無視してさっさと歩き出してしまった。

一方通行のあまりにも淡白な反応に頬を膨らませるイリヤだが、すぐに思い直したように手元にあるたい焼きを見る。

そこにあるのは見たこともない食べ物。

サーヴァントが気を利かせて買ってくれた物。

イリヤは嬉しそうに笑ってたい焼きを抱えなおすと、一方通行の後を追うようにして走りだした。

「待つてよバーサーカー」

「ンにはしゃいでんじゃねエよ。転ぶぞ」

やつとの思いで一方通行の横までたどり着いたイリヤは、ふーっと息をつくと早速、紙袋を漁って例のたい焼きを手にとった。

さすが出来立てなだけに、たい焼きは温かい湯気を立てている。

しげしげとたい焼きの不思議なフォルムを観察するようにして空へとかざすイリヤ。まるで初めて見る食べ物のように慎重にウラとオモテを確認している。

そうして満足気な様子でたい焼きを観察したところで、イリヤは大きな口を開けて、たい焼きに齧り付こうとたい焼きを口へ持つていくと、

そこでちょうど横にいる一方通行と目があつた。

一瞬の間、両者の動きが僅かに止まった。

一方通行にしてみれば、たまたま目が合つただけなのだが、イリヤからしてみれば状況を鑑みて別の考えに至つたらしい。イリヤはたい焼きと一方通行を交互に見てから、覗きこむように一方通行を見ると、手にとつたばかりのたい焼きを一方通行に差し出した。

「……バーサーカーは食べないの？」

「んな甘つたるいもんいらねエよ」

適当につつばねると、イリヤは頬を膨らませるが、ことのほかあつさり引き下がり、片手に持つていたたい焼きを自分の口に運んだ。

一つ食べては、また一つに手を伸ばす。

朝食を食べたばかりなのによく入るものだ、と一方通行は感心する。

どこぞの白いチビシスターと違って胃袋はブラックホールではないはずだろうから、きつとどこかでギブアップするだろう。

一方通行も自分らしくない、と思いつつ先ほどの自身の行動を振り返った。

食いきれない量を買えば、あのクソメイド達の土産にでもなつて、後腐れなく終わるだろうな、などと。

甘い考えにも程がある。

あの『家』の独特な雰囲気浸かりすぎておかしくなつたか、と呆れつつ一方通行はモソモソとふざけた羽根つきのたい焼きと格闘するイリヤを見て、呆れたようにため息を付いた。

(はア、まったく俺らしくねエなこれは)

そう自覚しつつも無意識に手が届くイリヤの頭に手を伸ばす。

もはや癖の領域だ。

つい、いつもの癖でやってしまった。

そうして乱雑にイリヤの頭をなで上げると、イリヤは驚いたような声を上げて、一方通行の手を振り払った。

「ふにや!? やめてよバーサーカー!!」

あまりにも突然すぎる行動に面を喰らうイリヤ。

振り払われた一方通行も、思わずイリヤの反応に驚いて手を引つ込めた。

ワナワナと口を動かしてこちらを見てくるイリヤの目は恨めしそうにこちらを見ている。

やがて、小さく鼻を鳴らして明後日の方を向くと、興奮気味な声でさっさと先に進んでしまった。

「早く行こう! バーサーカー」

「………めんどクセエ」

あそこまで過敏に反応されるとは思わなかった一方通行は、立ち止まって己の掌を見つめると、小さく首を傾げた。

クソガキに『コレ』をした時はあそこまで嫌がられなかったのだが。

髪に触れた程度であそこまで驚くものなのだろうか。

まったく、女心などわからない。

一方通行はそう心の底から眩くと、どんどんと先を歩いて行ってしまいうイリヤを見つめ、面倒くさそうに足を動かした。

対して、お怒りのイリヤはというと――。

(あぁービックリした。びっくりした)

予期せぬ己のサーヴァントの行動に、高鳴る鼓動を沈めつつ、たい焼きをまた一口に運んだ。

甘い口当たりがなんとも言えない。

生地はサクサクで香ばしい匂いが口から鼻へ突き抜けていく。

味が二種類あるのも嬉しい。

今朝、朝食を食べたばかりだというのにどんどんお腹に入っていく。

こんなに美味しいのに。こんなに嬉しいのに。それでも、胸の動悸は収まってくれない。

きつとこの感情はたい焼きという不思議なお菓子のせいだ。

顔が熱いのも。胸がドキドキするのも、きつとこのお菓子のせい。

このお菓子が美味しいからこんな気持ちになるんだ。

だから、この感情はあのサーヴァントに対してじゃない。

こんな感情をサーヴァントに抱くのは間違ってる。

サーヴァントは私達、魔術師の手足だ。道具だ。

そうしなければならぬと、お祖父様に教えられてきた。

だから、どんな命令だつてしていいのに。

そう教えられたのに。

嬉しい、などと思つてはいけない、のに。

あれはきつと彼の気まぐれ。きつと何かの間違いだ。

いまままでと関係や距離感は何も変わつてない。

でも、やつぱり――。

そうして、一方通行が触れた髪の毛を治すような仕草をしながら、イリヤは小さく微笑んだ。

(頭を撫でられたのつて、いつぶりだろう)

いままもバーサーカーに撫でられた温もりがかすかに残っている。

乱暴だけど優しい手つきだった。

ここ十数年。頭を撫でられたことなどない。

リズとセラは主従関係を気にして、私を褒めることはあつても、頭を撫でるようなことはしてくれない。

昔はよく頭をなでてくれた人達がいたけど、いまはもういない。

だからかな。こんなにも胸が満たされているのは。

一方通行の心情を知つてか知らずか、嬉しそうな素振り髪を揺らして坂道を登つていくイリヤ。

彼女は青く広がる空を見つめ、やがて振り返る。そこには、坂道を気だるそうに歩くバーサーカーが見える。

反抗的で。

まったくいうことを聞いてくれないわたしのサーヴァント。

それでも、自分に歩み寄ってくるバーサーカーの姿を見ると、ちよつと嬉しくなる。

うん。やっぱり、頭をなでられるのは気持ちがいい。

それが、自分のサーヴァントならなおさら。

狂者と狂者

「んで、こんな古クセエ建物まで来たわけだがア．．．．俺も行かなきやダメか？」
だだっ広い敷地とその奥に悠然と建てられた教会を一瞥し、一方通行から気のない声
が漏れた。

ここは新都にあるとある教会。

名を言峰協会というらしい。

そして、こんな面倒な手順を踏まずともよかったのでは、と思えるほどここまでの道
中は何事もなかった。

一応、念のために能力を使ってあたりを詮索してみたが違和感などは見られない。

強いてあげるとすれば、予想以上に坂道がきつかったくらいだ。

(バッテリー数秒無駄にしたな)

首元に手を当てる一方通行は小さくため息をついて、面倒くさそうにイリヤを見る。

正直に言うともう帰りたい気持ちで一杯な一方通行。

この後の長つたらしい話に付き合わされることを考えると頭痛の種でしかない。

もし、これで本当にただの報告で終わったのなら、一方通行はこの小さな苛立ちは

イリヤに向かうことになるだろう。

内心、無駄な時間の空費になるのだろうと予想している一方通行。

だが、なんと言おうと目の前の少女は了承しないだろう。

短い付き合いだが、この少女の性格は大まかだが理解している。

「ダメに決まってるでしょ」

案の定、キツパリと凜とした抗議の声が一方通行の下からあがった。そして、依然とたい焼きを咀嚼し続けるイリヤは、妙に真剣みのある顔つきで件の教会を見つめていた。

しかし、たい焼きを頬張って、シリアスを語ろうというのだから、呆れるを通り越して、むしろその精神力に感心する。

「んぐ。ぷっは。……行こっかバーサーカー」

「ああ、はいはい」

「じゃあ、今だけでいいから、はい。これ」

そう言っつて、たい焼きの詰まった紙袋を差し出してくるあたり、持てとのサインだろう。

魔術師の誇りからくるものなのか、他人の前ではせめマスターとサーヴァントの関係であると見栄を張りたらしい。

實際、そんなもの一方通行にしてみれば関係のないことなのだが、ここで問題を起こして、のちのち嫌みつたらしく説教されるのも面倒なので、一方通行は素直にたい焼きの袋を受け取った。

しかし、持ってきた時と重さを比べると紙袋の中身はずいぶん軽い。

おそらく半分近く食い尽くしたに違いない。

(この身長でよくもまアーンだけ入るもんだな)

どこぞの暴食シスターを思い出し、イリヤを観察していると、当の彼女は何かの気合を注入するように両手で頬を叩き、入り口である鉄格子に手をかけた。

そして、鉄格子をゆっくりと押し開けると、イリヤは静か瞳を閉じ、そして自然に表情を作った。

一瞬、感心するように一方通行も目を細めて目の前の少女の変化を観察するが、そこには立つのは先ほどまでのただのクソガキではない。

ただ壮麗に。

端麗に。

すべてを拒絶するような、近づけさせないような冷たい雰囲気全体から放つている。

鉄格子をくぐった先にあるのは、白いアスファルトの一本道と、両端に存在する緑色

をした植え込みの数々。

丁寧に管理されてあるのだろう。左右対称に完璧なシンメトリーを体現した植え込みは、どこか完璧に見えて不完全に歪んだように感じる。

そんな花壇の植え木にも目もくれず、イリヤはただ教会の扉を目指して歩みを進めていった。

一方通行も、黙って彼女の後ろを歩いていく。

一步一步、アスファルトを踏みしめるたびに教会に近づいていく。

その間、二人の間にただ一度の会話もない。

まるで、道中までの喧騒が嘘と思える感じさえする。

だが、一方通行はそれでいいと、心のうちでつぶやいた。

(まあ腐ってもマスター、ねエ。現状はわかっているみてエだな)

一方通行は小さく笑みを浮かべて、凜として歩くイリヤの後姿を凝視した。

ここは外界だ。

あの守られた城の中ではない。

そしていまは戦場でもある。

そんな、いつ敵に接触するかもしれない状況で遠足気分では足手まといだ。

イリヤがどんな目に遭おうと、一方通行は『本気』で助けようとはしない。

これはたつたいま下した一方通行の決定事項だ。

いくら喚こうが泣き叫ぼうがこの考えを変えるつもりは『今のところ』ない。

このクソガキが一人前の魔術師と豪語するのであれば、それに足りるだけの覚悟があるはず。

ならば、一方通行はただ自分の保身について冷静に対処するだけだ。

後はどうとでもなる。

そして、教会の敷地内に入ってからイリヤは、明らかに余分な感情を捨てて、状況に対処しようとしている姿だ。

どうやら目の前の状況を把握して、自分の置かれている立ち場とリスクを計算できるくらいの頭はあるらしい。

イリヤは無言で教会の扉までたどり着くと、やがて一度静止して一拍呼吸をおいたのち、意を決したように顔を上げて木製の取っ手に手を触れた。

そして、静かにそしてゆっくりと教会の扉を引いた。

ガチャツ

錆付いた扉を開ける甲高い音と、独特な香の香りがイリヤと一方通行を出迎えた。

イリヤに先導される形で、一方通行もサーヴァントらしく後ろからついていくと、一方通行は正面を見上げて思わず小さく目を見開いた。

そして、スツと目じりを細めてある一点を凝視する。

資料でいくらか目を通したことはあるが、実際に教会に入ったのはこれが初めてだ。前方にいくつも並ぶ横長の椅子も、奥のほうに鎮座する祭壇のような教卓も、そして脇に備え付けられたろうそくの数々も。

どこぞの絵本にでも描かれてあるような風景が広がっている。

まさに絵に描いたような理想的な教会の姿。

芸術を知るものなら、確かに美しいと思える造りではあろう。

だが、一方通行の視線を集めさせているのはそこではない。

一方通行が凝視するもの。

それはいまだに後姿を見せたまま、一向に振り向こうとしない神父の姿だった。

??? 「ようこそ、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンとそのサーヴァント」

構造のせいだろう。低く、くぐもった不快な声が室内全体に響き渡る。

そうして振り返る男の立ち振る舞いは、自分のよく知る人物とどこか似ていた。

白衣の変わりに夜のように深い青の礼服。胸元に下げられた十字架に、べつたりと張り付いた薄気味悪い笑み。

その存在すべてが神父にあるまじき背徳を表しているように見える。

(まア人殺しの俺が言えることじゃねエがな)

木原数多。

遠目からだだが、奥の講堂に立つ男はあの忌々しい糞野郎と同じ存在感を醸し出している。

一瞬、電極のスイッチを入れるべきか迷った一方通行。しかし、一度イリヤの方を見やつてから、瞳を閉じてすぐに必要ないと判断した。

目の前のクソガキがもし、油断しているようであれば、『保身』のために電極のほうに手を伸ばしていたかもしれない。

だが、目の前に立つ小さな魔術師の緊張感は後ろに立つ一方通行にわかるほど体を強張らせていた。

おそらく、恐怖からくる強張りではない。

この感情は明らかな敵意からくる反応だ。

ならば、自分が要らぬ気を回してバッテリーを無駄にする必要などない。この小さな背中が手を出すな、と語っているのであればこちらは何もせずただ静観していればいい。

そして、イリヤは若干警戒する姿勢で神父を睨みつけると、やがて男の名を忌々しうに小さくつぶやいた。

「言峰、綺礼」

両手を掲げて歓迎するように両手を掲げる男は、やがて不振な笑みを浮かべながらゆったりこちらに歩み寄ってくる。

依然として、警戒心を解こうとしないイリヤは、神父が近づくにつれて敵愾心をあらわにしていくな。

神父もそれを感じ取っているのだろう。まるで面白がるように含みのある声を漏らして、両手を挙げのち、ゆっくりと後ろ手に両手を組んだ。

「ふっふっふ。たいした嫌われ者だな、わたしは」

「あたりまえでしょ、代行者たる貴方を警戒しないほうがおかしいわ。……たとえ監督役のあなたでもね」

「ふっそれは昔の話でね。いまのわたしはしがない教会の神父でしかない。君が思うような存在ではないさ」

そうして暫し、両者の視線がぶつかった。

大方腹の探りあいの最中なのだろう。しかし埒が明かないのか適度に睨み合ったところで、話を切り替えるように神父は小さく息をついた。

そして、

「まあいい、では仕事を始めようか」

仕切りなおすようにそう言って、両者の距離が数メートルといったところで言峰と呼

ばれた男は立ち止まった。

そして、イリヤと一方通行を下から上まで値踏みするように見つめると、一方通行を見て小さく唇をゆがめた。

「君がイリヤスフィールのサーヴァントだね」

「ええ、彼のクラスはバーサーカーだわ」

それを聞いた瞬間、神父は驚いたように目を見開かせた。しかし、その反応はじつに興味深げな表情だ。

「——ほう、これは驚いた。バーサーカーのクラスで杖をつく理性があるのか。……：……アインツベルンはずいぶん興味深いサーヴァントを召還したな」

「そのくせ、なかなか命令を聞いてくれない困ったサーヴァントだけだね」

「そのための令呪だ。特に君のは特別製のようだし十分に活用したまえ」

心底うんざりつと言った様子で首を横に振るイリヤに、言峰は嘲笑の笑みを浮かべて、イリヤの方を横目で見やった。

イリヤもイリヤで言峰の視線に気づいているのか、睨み返すように静かに、そしてはつきりと言いつつ切った。

「言われなくたって、わかってるわ」

「……ふむ、まあわかった。確かに報告を受け取った。それと、一応報告してお

くことがあるのだが聞くかね？」

「ええ、聞いておくわ」

「まあ、調べればわかることだが、残りサーヴァントは二体。セイバーとアーチャーだ」

「セイバーとアーチャー……」

言峰の言葉を暗誦するように繰り返すイリヤに、言峰は小さく頷く。

「そうだ、聖杯戦争開始までせいぜいあと三日といったところだろうな」

「……ついにはじまるのね」

「ああ、ついにはじまるのだ。我々の聖杯戦争が」

改めて聖杯戦争の開幕が近いことに表情を強張らせるイリヤを見て、言峰はうれしそうに笑みを浮かべる。

その表情はまさに愉悦といったところか。

黙って二人の言動を観察していた一方通行は、言峰の不敵な笑みを見て、内心不可解な疑問に眉をひそめた。

(……この感覚は、)

なにかある。

不意にそんな感覚が一方通行を襲った。

いや、この突き刺さる感覚はどこか身に覚えがある。

しかし、辺りに注意を配っても何かしらの異変は見られない。

そんな一方通行の心情を知ってか知らずか、言峰はあくまで中立の立場をアピールした雰囲気、イリヤの方を見やると、両手を広げて相変わらず嘘くさい笑みを浮かべ続ける。

「まあ私からの報告はこれくらいだな」

「そう、忠告感謝するわ」

「なあに、これも私の仕事のうちでね。初めての訪問者に礼を尽くしただけでこちらが礼を言われることなどなにもしていないさ」

「……じゃあもう行くわ。行こうバーサーカー」

そう言つて、きびすを返すイリヤは、「行こう。バーサーカー」と言つて返事を待たずに扉のほうに足を向けた。

一方通行も、ここはおとなしく従つたほうが得策と判断し、神父の姿を一瞥してから、イリヤのあとを追つていく。

気になる違和感はいまだにぬぐえないが、今は余計な詮索をして面倒ごとを増やすのだけは御免だ。

そうして、開け放たれた扉に手をかけたところで、後ろから神父の声が響く。

「どのような願いを抱いているかは知らないが、君達の願いはこれで叶う」

まるで、何かを見透かしているような、そんな不気味な声だ。
だが、だからどうしたというのだ。

一方通行は扉にかけた手を一瞬、わずかに静止させそして、扉を閉めた。
まるで胸の内に沸いた不愉快な『疑問』に蓋をするように。

緊張と答え

ギー、バタン

軋む扉の音を耳に、神父の視界から消えた一方通行とイリヤは、遠ざかる教会を見向きもせず、まっすぐ門の前まで歩いていった。

しかしそこに会話はなく、来たとき同様。静寂だけが教会の庭を支配している。

ただ違う点を上げるとするなら、一方通行が妙に殺気立っているくらいだ。

たとえここが中立地点として置かれた教会であっても、所詮は敵地。危険であることには変わらない。

ならば、一刻も早く奴のテリトリーから出る必要がある。

そう判断した一方通行は、イリヤのこちらの様子を伺う視線を無視して、ただ無心に歩を進める。

しかし、無心であろうとすればするほど、あの信用できない笑みを浮かべる神父の顔がとある狂った科学者の顔とかぶり胸糞悪い。

(……奴の話に偽りはねエとして、なんだあの目は。あれが監督役として中立の立場にいる奴の目か)

一方通行だからこそわかる。

あれはトチ狂った研究者がよく見せる狂喜をはらんだ瞳だ。

イリヤと一方通行を値踏みするように向けられた瞳。特に、イリヤに向けられた視線だけ色濃くその色を見せていたのが強く印象に残っている。

（気づいてねエのか、それとも気づいた上で無視しているのか。どっちにしろガキはガキだな）

もう一度、イリヤに目配せをするが、そんな一方通行の心情を知ってか知らずか、イリヤは横で不思議そうな顔を浮かべていた。

どうやらその様子からして何もわかっていないようだ。

口を開こうとするイリヤを一方通行は、視線だけで彼女を黙らせる。

警戒しすぎかもしれないが、それでも用心に越したことはない。

その際、イリヤは怯えたように肩をすくめ立ち止まるが、構ってなどいられない。表情を曇らせて再び前を見つめて歩き出した。

このクソガキが不機嫌になろうと、現在こちらが後手に廻っている現実は変わらな
い。

いちい子守に気を使つてはいられないのだ。

そうして教会の門を潜った一方通行は、来た時道と同じ坂道を下り、距離が二十メー

トル離れた所でようやく口を開いた。

「……………ここまでくれば問題ねエだろ」

「はあああー、疲れた」

一方通行の許可がようやく下りたところで、イリヤは大きく息を吐き出すと、まるで緊張をすべて吐き出すように大きく脱力した。

神父の前で見せた凜とした雰囲気は一瞬で消えうせ、そこには城で見せるいつもの間抜け面があった。

一方通行は間抜け面のイリヤを一瞥してから、坂の上にある教会に視線を向け、じつと見つめた。

ここまでの最中、何かにつけられた気配はない。

だが、今回は魔術師の戦争だ。なら何らかの手段で『見られている』可能性も捨てきれない。

そうになると、現在の一方通行に防ぐ手段はない。

こういう時に同じ魔術師でもあるイリヤに判断を仰いだほうが得策なのだが、「うへえ。緊張したらおなかしちゃった」

この始末である。

先ほどまでのシリアスが妙に馬鹿らしくなるほどだ。

「はあ。——本当に使えねエなこのクソガキは」

「うん？ 何か言った？」

「何でもねエよ」

適当に言つて、一方通行は預かっていたたい焼きの袋を投げ渡す。すると、イリヤはあわてた様子で袋を抱え込み安堵の息をもらした。

それを横目で確認した一方通行は柄でないと自覚しつつ、一人静かに坂道をくだりはじめ、それを見たイリヤも後を追うような形で一方通行の横に追いついた。

そして、たい焼きから一方通行へ視線を移したイリヤは何気ない口調で口を開いた。
「で、これからどうする？」

「知らねエ。それはテメエが考えることだろうが」

「でも、報告も終わっちゃったし、正直、まだ聖杯戦争が始まっていないんだつたら今は行動のしようがないかも」

「だつたら俺は帰るぞ。こんなくだらねエことで時間を潰したくねエしな」

そう、今の一方通行には時間がない。

電極のバッテリーが有限である以上、必ず動けなくなるときがやってくるのだ。

こうして日常生活を送っているだけでもバッテリーは消費される。

能力使用モードの場合だとバッテリーの消費はその比ではない。

先のランサーとの戦闘、その他諸々の場面で細かく能力を使用したことを鑑みると、残り一日分あるかどうかすら怪しい。

それでこの短い時間の中、解決策を見つけなければならぬと考えたと、こんなところで無駄な時間をすごしてはられない。

むしろ一分一秒でも惜しいのだ。

しかし、バッテリーのことを知らないイリヤは、つれない一方通行を見上げて、ぶー文句をたれている。

横でうるさく喚きたてるクソガキを一睨みして黙らせると、イリヤはしぶしぶ口を尖らせて静かになった。

だが、教会のときは緊張感が違うのか、しばらくの静寂に耐え切れなくなったイリヤは青空の虚空を見上げて、愚痴でもこぼすかのように喋りだした。

「……それにしても、まだ二体もサーヴァントが残ってるなんて」

ついてないなあーと、呟くイリヤはまるで構ってもらいたそうにこちらに目配せを何度もしてくる。

一方通行はその視線を何度も無視するが、何を期待しているのか、イリヤは何度も執拗にこちらを見ってくる。

イリヤの銀髪が必要以上に左右に揺れ、今か今かと待ちわびているのひしひしと伝

わってくる。

どうして、こういうクソガキ共はこういった方法でコンタクトを取ってくるのか理解できない。

まるであの『クソガキ』を見ているようでイライラする。

こっちはそれどころではない。

——のだが、ついあまりに期待の籠った鬱陶しい視線に負け、一方通行は諦めたように大きなため息をついて、数十秒前の会話につなげる形で口を開いた。

「……大変だなア。おい」

「他人事みたいに言わないで！ バースーカーも戦うんだからね」

そうは言うが、反応してもらったことがうれしいのか、ずいぶんと楽天的な声が返ってくる。

一方通行はもう一度ため息を吐き、バッテリーの件を考えるのを完全に諦めた上で、呆れた声を放った。

「なんで俺がお前のために戦わなきゃなんねエンよ」

「もおー。またそういうこと言っつて。貴方はわたしのツ。ううん……それにしてもバースーカー。ずいぶんと静かだったじゃない」

イリヤ自身、先の会談で一方通行が静かだったことに不振に思うことがあったのだろ

う。

意外そうに眩かれ思わず眉をひそめる一方通行。

このクソガキは一体自分をどういう風に思っている。

そんな思いが胸のうちから沸いてくるが、今までの行動からしてみれば、そう思われなくても仕方がないのでぐつとこらえる一方通行。

それ以前に、途中で途切れた言葉に疑問を抱くも、これは知らせたほうがいい、と判断して一方通行は素直に答えた。

「ああ、あの野郎。なんかクセエ」

「へ？ 体臭が？」

「ちげーよ、……いや。おれと同じニオイっつーならその通りかもな」

「おなじにおい？」

言葉の意味を図りかねるイリヤは首をかしげると、そのまま一方通行を見上げて次の言葉を待つ。

ここで会話を途切れさせて騒がれるのも面倒だと思った一方通行は、素直に首肯し、イリヤの目を見ることなく坂道のほうをけだるげに見つめて下っていく。

アスファルトを打つ杖の音にあわせて、一方通行はゆっくりと口を開いた。

「ああ、血のニオイ。闇に関わってる、しかも泥みてーに濃い奴だ」

「……まあ執行者だしね。多少闇に関わっててもおかしくないかな」

「それにしても、だ。多少、暗部に関わってればそういった匂いは隠せねエ。だがあいつからはまるで隠す気もなく堂々としてやがった」

「それだとおかしいの？」

「あア。ああいう開き直ってる輩は特に怪しい」

まるで、自分のやっていることが正常といわんばかりに、あの神父の立ち振る舞いは堂に入った雰囲気だった。

一方通行も、暗部に所属していたころはそういったゲスどもを多く見てきた。

そして、その存在全てを駆逐してきた。

だからこそわかる。

罪悪感や、後ろめたさがあるほうが悪党としてまだ救いのある。

本当に救いようのない層は、自分の行い全てが正しいと確信している奴らだ。

あの神父は明らかに後者だろう。

延々と続くのならかな坂道を眺め、考え事にふけていると、間延びした声が横から発せられた。

「ふーん。でも、いまさらながら思うけど、変って言えばバーサーカーって変だよね」

「あ？ 俺のどこが変だって？」

「だってステータスが狂化A+つていうとんでもないものなのに、普通に自我と理性があるんだもん」

イリヤの言葉に一方通行は眉をひそめて彼女を見る。

初めて聞く言葉でこそないが、聞き慣れない言葉だ。

そういつた意味で、問いかけようとしたところ、急に視線を向けられて驚いているのか、イリヤは面を食らったように眼を見開かせてオロオロしだした。

「……前から気になってたんだがよオ。その狂化つてのは何だ？」

「あれ？ 説明してなかったけ？」

一方通行の言葉に、挙動不審だったイリヤの動きがピタリと止まる。

ようやく落ち着いたイリヤを尻目に、一方通行は顔を再び正面に戻して、アスファルトを打つ杖に意識を向けて、ゆったりと歩を進めていった。

「ああ、単語は聞いた覚えはあるがア、説明はまだ聞いてねエな」

「……じゃあ、簡単だけども説明する？」

「できれば手短にな」

「うん、じゃあ一度しか言わないからよく聞いててね」

大方、マスターらしいことができて嬉しいとか、そんなくだらない事を考えているの
だろう。

イリヤは人差し指を立てると、まるで得意げな表情で説明を始めた。

一方通行はそんなイリヤの顔を見ずに歩くことに集中すると、つらつらと横から流れってくるイリヤの言葉だけ頭の中で吟味し始めた。

「狂化っていうのは、バーサーカーのクラス特性「狂化」によって、基本能力を大幅に強化することなの」

「……狂化ねエ。それは文字通り、狂うことでもいいのか」

「そう、ほかのクラスにはない、貴方だけのスキルとでも言えばいいのかな。とりあえず特典だと思って」

特典がただ狂うこととは、まったくふざけている。

だが、このスキルがただのデメリットであるとは思えない。

おそらく、使用しようによっては絶大なアドバンテージを取れるスキルなのだろう。

先ほどもイリヤが言ったが、基本能力が上がったりなどデメリット分の恩恵があるらしい。

しかも――。

(実際、聖杯戦争つつうこのくだらない戦いに自我がないほうが都合のいい場合もある) なにせ、戦うのはあくまで代理だ。

さらに召喚されるのが英霊だとすれば、当然その動向は善行に基づいたものが多くな

るはずだ。

仮に、外道の魔術師が善良な英霊を使って町ごと敵を葬ろうと考えたとすれば、その英霊は魔術師の行動を制限するお荷物でしかない。

いくら強力な力を持っていても、そこに自我が存在すれば、マスターの意向にそぐわない動きをする場合だってある。

(要するに、この狂化ってのは、マスターに従順な傀儡を作るようなもんか)

そう理解すると、一方通行はつくづくふざけたものだ、胸のうちで呟いて、大きく息をついた。

「まったく、ふざけた特典だな」

「まあ、ね。でもやっぱこの狂化にもデメリットはあるの」

「大方想像はつくがな」

「うん。一部の技術や技量を必要とする宝具などが使用不可能になったり、理性を失ってしまおう——はず」

「……あん？ その口ぶりからするに、その狂化っていうのはレベルみたいなのが存在すんのか？」

「うん。狂化にもレベルが存在して、生前のエピソードによってそのランクは左右されているの」

「ということとは——」

「そう。生前の人格が狂気に染まっているほど狂化レベルは高く、基本戦闘力が大幅に上昇するけど、令呪を以てすら制御できない状態に陥る場合があるってこと」

逆に、と呟いたところで、その後が続くかのように一方通行が口を開いた。

「生前、狂気にそれ程染まっていないサーヴァントは狂化レベルは低く、一定の理性の獲得や意思疎通が可能となる代わりに、ステータスの上昇も低くなってしまう……か」

「うん、正解!!」

「なら改めて聞くが、俺の狂化レベルはどれくらいだ」

「………狂化A+」

顔を伏せ、イリヤは若干自信なさげに呟いた。

その口ぶりは先ほどまでの明るい声音と違い。濁ったような迷いが見え隠れしている。

「それはスゲエのか？」

「一番下のランクがEだとすると、最高ランクって言ってもいいかな」

「はア？　じゃあなんで俺はお前と話せてんだよ。お前の話じゃあ、俺は理性は失われてんだろオ？」

「——ッ！　私だって、わからないわよ」

完全に俯いてボソボソと呟くイリヤ。

どうやら本人にも予期せぬ出来事らしい。

伏せられた小さな顔には、困惑の色が浮かび上がっていた。

「バーサーカーには心当たりは無いの？」

ついには、こちらを見上げて答えでも求めるような顔で首をかしげる始末。

しかし、一方通行がそんなことを知るはずもない。

「ンなもん、俺が知るはずねエだろ」

面倒くさそうに言い放ち、一方通行はもう一度重いため息を吐き出した。

しかし、心当たりがないわけではない。

一方通行は空いた片手で乱暴に白い髪を掻き揚げると、思い立ったように自分の首に巻かれた黒いチョーカーに手を触れた。

そして、坂道を終え、なだらかな公道を眺めると、全てが納得したように大きく呟いた。

「まあ、これで一つだけハッキリした」

「え、何がわかったの？」

「俺があのだイツ野郎の槍を掴んだ事だよ。——あの槍は避けることができて、人間の反射速度で掴める速さを超えてやがった」

そう。あのランサーの槍は明らかに人間が視認で切るスピードを超えていた。たとえ、槍の描く軌跡は線として見えたとしても、それに反応するのは常人では不可能だ。

それほど鋭く研鑽の積まれた一撃。

それは一方通行も例外ではない。

いつもの一方通行であるならあの槍をただ『見て』、反応することはできない。

——『はず』だった。

「だが、俺はその槍を掴んだ。そこから導き出される答えはそのステータス上昇つての、俺の基本戦闘力が上昇してるっつーことになるんだろ？」

しかし、裏を返せば、ステータスが上昇していなければ、吹っ飛ばされていたのは自分であったかもしれないというのも真実だ。

自分の能力が常にデフォで反射に設定されているからとはいえ、相手が魔術であるなら関係ない。

反応できずに、ただリンチにされていた、という結果もあったかもしれない。

ただこれは、あくまで可能性の話だ。

いくら相手が魔術を扱う敵だったとしても、いくらでもやりようはある。

たとえ、反応できずとも触れる方法など両の手を使っても数え切れないほど思いつく。

だが、情報が足りない。

対策を講じようにも自分の状態を把握しきれていないのであれば、行動のしようがない。

今後、行うべきことを明確に定めた一方通行は鋭い目つきでイリヤを見ると、短く彼女を呼んだ。

「おい、クソガキ」

「だから、クソガキじゃない！ イ・リ・ヤ!!」

相変わらず、ガキ呼ばわりが気に入らないのか、頑なに名前を誇示するイリヤ。

使えないガキの癖に、権利ばかり一丁前に主張してくる。

一方通行はそんなイリヤに取り合わず、ただ簡潔に自分の用件だけを捲くし立てた。

「お前、俺というサーヴァントのステータスってのはわかってんのか？」

「………もういいわ。ええ、マスターなんだもの当然でしょ」

イリヤもイリヤで拗ねたように唇を尖らせるが、最後は諦めたように小さく息をついて頷いた。

帰ったら教えろ、と気だるげに言うと、イリヤは疲れたように肩を落として、帰った

らねと力なく呟いた。

そうして、程なくして会話が途切れ、気まずい沈黙が両者の溝を深めるように流れた。教会までの坂道を終えた辺りから、チラホラと人通りが増え、再び興味深そうな視線がイリヤと一方通行に向けられるが、

二人はどこ吹く風で歩道の真ん中を歩いていった。

カツカツとアスファルトを叩く音だけが規則的に流れ、一方通行はただ足を動かしていった。

横目でイリヤのほうに視線を投げると、イリヤはこちらに気づかずにおとなしく、一方通行の後を追うように若干後ろからついてくる。

一方通行とイリヤでは歩幅が明らかに違うため、若干小走り気味になるイリヤ。

時折、なにか声をかけようとしてタイミングを逃す姿が見られるが、一方通行にとつては関係ない。

悲しそうに顔を伏せるイリヤを無視して、一方通行は前に進んでいく。

両者の距離はちょうど一メートルあるかないかの微妙な距離。

しかし、二人にとっては遠い距離でもある。

そうして程なく進んだところで、

「あつ、ユニソロ」

何気なくあげたイリヤの声に、一方通行は立ち止まって彼女の向く反対車線に視線を投げた。

彼女の視線の先には、大手メーカーのロゴが入った店があった。

ただ、学園都市では見られないロゴのため、判断に迷うが大方、大衆向けの店舗だろう。

まだ平日の正午近くという時間にもかかわらず、多くの人間が店に出入りしているのが見られる。

そうして、再び横に視線を投げかけると、案の定、イリヤは興味深げ視線で、ユニソコの看板を眺めていた。

「……入りてエのか」

「えっ！ い、いや違うよ。別に入ってみたいとかじゃないから」

控えめに聞いてみると、思わぬ動揺が帰ってきた。

白かった顔に赤みが差し、若干声が上ずっている。

だが、こういう時は本当にわかりやすい。

「——ただ、はじめて見たから」

そう蚊の鳴くような声で呟き、イリヤは下を向いてしまった。

おそらくは恥ずかしいのだろう。

よくある見栄だ。

だが別段、おかしな話ではない。

現に一方通行も、ああいった大衆向けの店を見たことはあるが実際に行くことは稀だ。

コンビニやファミレスなどを除いて、服など通販や、それこそブランドのものしか着たことがない。

必然的に、そういった大衆向けの店を訪れることは少ない。ここ最近を除いて。

(実験が凍結してから、俺がああいった店に入るなンぎ、いままで考えたことがなかったからな)

過去の記憶に思いをふけていると、イリヤが一方通行の裾を控えめにをひっぱてきた。

一方通行は視線を右下に落とすと、やや困った表情でこちらを見上げてくる。

「ね、ねえバーサーカー。ファツションとかに興味ある?」

「……遠まわしに言つてねエで、用件を言つたらどうだ。まアお高く留まつたお嬢様が入るところじゃねエな」

「うっ。……うん。あそこに入つてみたい」

両者の間に短い沈黙が流れ、イリヤは直立不動の緊張した様子で一方通行の返事を待

つ。

そんな彼女を前に、一方通行は額に白く長い手を当てると、やや面倒そうに諦めの息をついた。

「——はあ、さっさと行くぞ」

「行つていいの!!」

興奮した声に顔しかめ、一方通行は信号が赤にもかかわらず、車道を横切っていく。

一方通行の後を追おうとするイリヤはイリヤで、律儀に信号が青になるまで忙しく待ち、

信号が変わった瞬間、まるで子犬のように一方通行の背中めがけて駆け出した。

雑多する人ごみをよけ一方通行はイリヤを待たずにさっさと店内に入り、一歩遅れるような形でイリヤも店の自動ドアを潜っていく。

距離にして、一メートルにも満たない両者の間隔。

その間隔が何を意味しているのか、一方通行でさえ知る由もない。

だが、少なくともユニソコの奥へと消えていった二人を見ていた大衆が妙に、鬱陶しい視線を向けていた事だけは印象に残っていた。

きつと、この視線の意味が『答え』なのだろう。

しかし、その『答え』を知る必要などない。

一方通行は、心の奥底でクソツタレと呟き、若干苛立ちながらもイリヤのほうに視線を向けた。

そこには、緊張の二文字もない子供らしい笑みを浮かべたイリヤの姿があった。

再び正面を向いて、もうひとつの自動ドアを潜ると、

「クソツタレが」

そう小さく呟いて、一方通行は小さな少女の代わりに真つ赤なプラスチック製の籠を取るのであった。

一難去つて一悶着

くそつたれ。

何度目かわからない眩きに、一方通行は苛立ちを露わにして深くため息をついた。

三時間。

これだけの時間を使えば一体何ができただろうか。考えるだけで頭痛がする。

ここで普通の感性を持つ人間であれば、読書なり、運動などといった有意義なものに時間を当てるのだろう。

しかし、あのクソガキは違った。

店内に入った途端、我を忘れ。あれも着たいこれも着たいと一方通行を半ば強引に連れまわし、結局買ったのはたった一着。

薄いピンクのカーディガンとセットなのか、白い生地の上に淡い紫のラインが一本入ったマキシ丈のワンピース。

アクセントとして董の花びらが端に小さくあしらわれてあるのが特徴らしい。

対して、一方通行は白と黒の無地の洋服をいくつか見繕うついでに白いフード付きのコートなど、ブランドには劣るがそれなりのものを購入した。

どれもシンプルなデザインで、飾り気などほとんど見られないが、それなりにいい生地を使っている。

その一着を決めるのに一方通行の倍以上の時間を要したのだから、苛立たないわけがない。

クソガキ達の御守りで、女が買い物に時間を使うのは経験済みだが、ここまでくると本気で泣かせたくなる。

しかし、自身の置かれている状況を思い出してチョーカーに手が伸びなかったのは、我ながらよく耐えたものだ。

そんな思いもつゆ知らず、先導するイリヤはひどくご機嫌だ。

ユニソロのロゴが入った白い袋を片手にぶら下げ鼻歌交じりに先行していく。

まるで遠足帰りの幼稚園児だ。

(つたく、女つてのはなんでこんなに買い物に時間がかかるのかねエ)

気を取り直して、疲れた息を吐き出す一方通行。

脳裏に小さなワンピース姿の少女が現れ、疲れてンなど、嘆息交じりもう一度大きく息をつくとき、一方通行は空を見上げた。

青かったはずの空は、西の方から茜色に染まり始めている。

ユニソコを後にした後、ファーストフード店からデパートまであれもこれもとクソガキの言う通り寄り道している間に、こんな夕暮れまで長居してしまった。

当初の目的もすっかり忘れていて、あろうイリヤを一瞥すると、一方通行は視線を外して雑多する人ごみを眺める。

付いたり消えたりを繰り返す街灯。その下を歩く人々は良くも悪くも『普通』だった。学園都市のように学生ばかりではないこの都市は、行き交う大人の数は一方通行にとっては新鮮であれど、別にたいして驚くことではない。

これまでも、研究者に囲まれて生きてきたのだ。この程度、一方通行にとっては数あるうちの一人でしかない。

むしろ、何でもない『ただの』真つ当な大人の方が珍しかったりする。

皆、仕事帰りの者だったり、これから忙しく働こうと腕時計を忙しく確認するものなど様々だ。

当たり前だが、今までの生活を鑑みてみれば仕方のない。

そう思い返して、先導するイリヤに視線を向けてから、視線だけを動かして周りを見る。

いつ何時も、うざったい視線で見られて生活してきた。

今もそういった視線に変わりはないが、向けられる視線が恐怖や畏怖からほど遠いも

のだと、妙に落ち着かない。

これがあの教師の言っていた当たり前の日常、という奴なのか。

そこまで、考えてまるでその考えを打ち消すように、首を小さく振った。

ここにいる人間も、自分がどういった存在なのかを認識すればすぐさま同じような視線を向けてくるに違いない。

むしろ、自分に親しく話しかけてくる『彼女ら』の方が稀なのだ。

(――俺の頭もずいぶんと都合のいい平和ボケするようになってンなア)

昼間より人ごみは一層多くなるが、一方通行が杖をついているからなのか、『二人』の前だけ裂けるように道ができていく。

周りの視線もそろそろ鬱陶しくなってきたところで、イリヤを呼び戻そうと正面を向くと、彼女がいない。

一瞬、迷子にでもなったか、と不安が一方通行の頭をよぎったが、すぐに思い直して足元に視線を投げる。

(あいつほどガキじゃねエか)

心の内でそう呟き、面倒ごとにならかったことに小さく安堵した。

いつの間にか先導していたはずのイリヤが一方通行の顔色を窺うように横についている。

そこまで確認して、イリヤの緋色の瞳と目が合う。

そして、イリヤが何でもなような口調で口を開いた。

「ねえバーサーカー？ これからどうするの？」

お前がそれを言うのか、と罵倒したくなつたが喉もとでぐつと堪える。

相手はガキだ。

そう自分に言い聞かせ、心を一度落ち着かせると毒気が抜かれたかのように大きく息をついた。

そして、何気ない様子で目下の目標を口にした。

「……まず電極の問題だな。コイツを解決しねエと話にならねエ」

「でんきよく？ そのでんきよくつてものはなんなの？ バーサーカーにとつては大切なものなの？」

首をかしげるイリヤを横目で見て、一方通行は予想通り、と言わんばかりに視線をそらした。

イリヤの疑問は当然だ。

むしろ、ここで疑問を抱かなければ、これから起ころうであろう戦いに生き残ることなど、夢のまた夢だと笑い飛ばしていたところだろう。

このクソガキがどうなろうと関係ない。

しかし、これは一方通行の能力の根幹となる問題でもある。

(・・・このクソガキには、言っといたほうがいいのかねエ)

はつきり言つて悩みどころであるのは確かだ。

基本的に一方通行にとつてチャージャーのバッテリーは生命線である。

一方通行を倒すにはこのバッテリーをどう消費させていくのかが大きな鍵といつてもいい。

この問題を話すということは、自身の弱点。つまり弱みを話すことにもつながる。

別にこの問題を話してもいいが、まだこのクソガキを信用しきつていない一方通行にとつては情報漏洩の可能性も考えると、むしろリスクでしかない。

さてどうするか。

そう悩んでいたところで、不意に横からか細くも、意思のある声が聞こえ、一方通行は目線だけそちらに向ける。

そちらを見ると俯いているイリヤと視線が合った。そして、言い淀むようにして唇を動かし、やがて控えめな声がイリヤの口から吐き出される。

「あのさ。バーサーカーつてさ、私に秘密にしてる事が、多いよね」

すぐに視線は外されたが、やや控えめな気味に、そして遠慮気味に顔を伏せる彼女の声は小さく頼りない。

先ほどまではしやぎようでは考えられないほどに。

いや、むしろ先ほどまでの姿が、否定されることを恐れての無理な演技だったのかも
しれない。

そう思えるほど、今のイリヤの姿は頼りなく弱々しく感じる。

「もしかして、私のこと信じられない？ それともやつぱり、……私なんかには教えられ
ない？」

再び顔を見上げ、胸のあたりで小さく拳を握るイリヤを見て、一方通行は逡巡したの
ち、内心でため息を吐き出した。

そして、甘くなったな、と自覚しつつも観念したように小さく呟いた。

「……あとで教える」

「ぜ、絶対だからね!!」

わかりやすくうれしそうな声を上げるイリヤ。

今にも聞き出したいのを必死に堪えているような、そんな笑顔を向けられ、一方通行
は思わず顔を逸らした。

(ガキつてのはどいつもこいつも、顔に出るよなア)

こういった負の感情以外を他人から受け慣れていない一方通行にとって、こういった
素直な反応は対処に困る。

打ち止めならばいざ知らず、出会ったばかりの子供にこういった感情を向けられるとどう返せばいいのかわからないのだ。

あの女教師なら、いい兆候じゃん、とでもほざきそうだが、未だにこういった『日常』に慣れない一方通行にとつては違和感でしかない。

いつまでも嬉しそうにはしゃぐイリヤを見て、そろそろ手刀でも入れてやろうかと考えていると、イリヤは照れくさそうに笑みを浮かべ一方通行の方を見ながら前へと走り出した。

そう。人ごみが雑多する歩道の真ん中を。

感情の浮き沈みが激しいと、どうやら注意力も散漫になるらしい。

「おい、前見て歩かねエと——」

めんどくさいことになるかと自覚しながらも、とりあえず声をかけてやると、案の定。

「きゃッ!!」

「のわッ!!」

「……言わんこつちやねエ」

なにか二つの物体が落ちる音が二度重なり、それを見ていた一方通行は、ため息交じりに首を横に振った。

面倒くせエ。

内心、そんなことを呟き、面倒くさがりながらもイリヤの方へと歩いていく。

幸い、倒れた場所が公道ではなく待ち合わせなどに使われるような広い噴水広場で助かった。

周りを見ると、ほかにも誰かを待っているのか立ち止まっている社会人や学生がチラホラと見える。

そんな中の一人とぶつかったのだ。相手もたまったものではないだろう。

ゆつくりと歩み寄ると、ブラウンに染めたような明るい短髪の女が腰あたりをさすっているのが見えた。

「あいたたた、——あっ!! ごめんね〜お譲ちゃん。痛くなかった?」

「うん、平気。それと、ごめんなさいおねえさん」

「あわわ、そんな気にしないでって、わたしもぼんやりしてたのが悪いんだし」

「おねえさんこそ大丈夫?」

「へーき、へーき。おねえさんはこれでも鍛えてますから」

まるで何事もなかったかのように立ち上がると、女性は緑のジャンパースカートの埃を静かに払った。

そして、加害者のイリヤを心配してか某体育教師のような気力の有り余ったような笑みを浮かべ、サムズアップして無事な様子をアピールしてくる。

小さく笑うイリヤを見て、どこかほっと胸を撫でおろす女性。

その動きを見る限り、どこも怪我をしているようには見えない。

そうして立ち上がった女性は、「立てる？」と言ってイリヤの手を取った。

イリヤも抵抗する気もなくすんなりと女性の手を取ると、女性の力を借りてゆつくりと立ち上がった。

ありがとう、というイリヤの言葉に、こつちこそごめんねー、とたいして気にしていないような反応が返ってくる。

そして、服についたほこりを払うようにしてイリヤの服を軽くはたき始める女性は、次に一方通行の存在に気付いたのか軽く会釈をして明るい笑みを浮かべた。

そんな彼女をよそに、一方通行は床に落ちた荷物に目を移す。

持っていた鞆の中身はアスファルトの上に散乱しているが、全て書類だったようで、幸いにも割れ物が入っていたようには見えない。

一方通行は、女性を一瞥してから書類をまとめて拾い上げると、鞆と共に立ち上がった女性に差し出した。

「すまねエなア。うちのクソガキが迷惑をかけて」

「おつ！ お譲ちゃんのお兄さんかな？ ずいぶんと真つ白だね」

「……よく言われる」

「それに、肌もきれいなわね! うらやまし〜!!」

どんなスキンケアしてるの? とか、少年、もつと肉を付けた方がいいぞ!! などよくもまあ見知らぬ他人にいらぬ世話を焼きに来るものだ。

初対面ではありえないほど親密に話しかけてくるので、一方通行は思わず一步後退し、面を食らってしまった。

しかし、すぐに持ち直して、体勢を立て直すと、女性の隣に立つイリヤを見る。

彼女も彼女で、あまりのことに思考が追いついていないのか、ポカンとした様子でこちらを静観するしかないらしい。

そこまで理解し、一方通行はあきらめるように嘆息し、空を仰ぎ見てから女性に視線を移した。

本当に社会人か、と疑いたくなるが、こういった人種は下手に話を遮ると逆に話が多くなる傾向があるのだ。

もちろんすでに経験済みなので話を遮るような真似はしない。
遠慮のない物言いと、ボディタッチ。

まるで、無理やり猫を撫でまわす無邪気な子供のようだ。

どつかれ、義弟の愚痴まで溢されてもそれらすべてを律儀に、ぶつきらばうに答える一方通行。

そんな一方通行に気をよくしたのか、さらに女性の口の回転数が上がっていく。

やがて受け答えが面倒臭くなると、女性には聞こえないように小さく舌打ちする。

「チツ。……………もう、いいか」

一方通行の姿を見て不気味がられることは何度かあったが、物珍しそうにそれも口に出してきたやつは何度目だろうか。

その口調にまったく嫌味を感じず、しかも善意百パーセントというあの女教師にも似た雰囲気を感じさせる。

いつもの一方通行なら、適当に嫌味でも吐いて立ち去るのだが、こうまで瞳を輝かせてこちらを見てくるのだ。

どう反応していいか、思わず言葉に詰まって、一方通行は立ち上がったイリヤの荷物を拾い上げると、ぶっきらぼうにイリヤに声をかけた。

「……………おい、さっさと行くぞ」

「えっ?! あ、うん。……………あ、それとおねえさん」

ようやく復帰したのか、一方通行の声に反応して、イリヤは肩をすくめるとついてこようとする傍らで、何かを思い出したかのように女性の方を振り返った。

女性の方も、満足したのか立ち去ろうとする傍らで、動きを止めて振り返る。

「ん? なにかなあお譲ちゃん」

「えっと。その、今更だけどおねえさんの手から落ちた紙が風で飛んでつてるけど——」
「へ？ ああホントだ」

女性も自分の手に紙がないことにいま気づいたのか、自分の右手を見てからイリヤの指し示す手の先を見る。

「いやー忘れるところだったよ。ありがとうお嬢ちゃん——つて、のわああああ!!」
お使いのメモ用紙がああああ!!」

イリヤが指し示す方向にカサカサと動く紙切れが。

そして、彼女が振り向いた瞬間、それは意志を持った鳥のようにアスファルトから離陸し、果てしない夕焼け空の彼方へと飛んで行った。

一方通行が見る限り、その女のポケットから逃げ出したであろう買い物リストは、狙っていたのかと思えるほどのビル風の強風で空の彼方へと飛んでいった。

彼女が出した右手は行き所を見失い、むなしくその場で固まるしかない。

「今日の、今日の晩御飯の材料が書いてあるのに」

両手で頭を抱えてから膝をアスファルトに落とし、ガックシとうなだれる女性。

まるでコントのような一瞬の出来事に、ポカンとするイリヤを他所に、一方通行は気まずそうに頬を掻いた。

見慣れた光景、というわけではないが、某ツンツンヒーローのような不幸スキル。こ

のまま見捨てるのも気が引ける。

迷惑をかけた手前、一方通行は気まずそうに女性を見ると、彼にしては珍しく、仕方がないとばかりに小さく息を吐きだした。

つまり。

「おい、女」

「ん？ なによ」

大の大人が半分涙交じりの目を向けてこちらを睨んでくる。そのテンションは先ほどとは打って変わって絶望のような様子だ。

感情の起伏が激しい奴だな。

そんなことを胸の中で吐露するがこうなつては仕方ない。

変に絡まれる前に済ますことはさっさと済ました方がいいだろう。

だいたいこういうのと関わると後々面倒になることは学習済みだ。

理解はしている。

それでも一方通行は彼女に渡した手提げ鞆に視線を向けた。

「その鞆に必要なエ紙とペンは入ってるか？」

「そりゃ、私は教師だから、それくらいは持つてるけど」

「だったら、何も言わずにそれを寄こせ」

「えつとー。はい、紙とペン」

鞆を開け、彼女は首をひねりながらも鞆から紙とボールペンを取り出す。

それを手渡された一方通行は若干皺の入った紙を四つ折りにすると、受け取ったペンを改めて観察し、思わず眉間にしわを浮かべた。

趣味をどうこう言うつもりはないが、トラ柄のボールペンは女としてどうなんだ。

そんな突っ込みをよそに一方通行は無言で渡された用紙にペンを走らせる。

そして、

「ほらよ」

無造作にへたり込む女性の方へと突き返した。

それを受け取った女性は、紙に書かれたあることに目を落とすと、一呼吸間を置いたのち、

「え、・・・・・・・・ああああ!! メモ用紙と同じことが書かれてるっばい!!」

「いちいち大声だすんじゃないよ。それと書かれてるっばいじゃない。同じことを書いたんだよ」

驚愕の大音声に、片耳を塞ぐ一方通行。

何度か、メモと一方通行の顔を見比べた女性は、やがて瞳に若干の涙を浮かべると、

「し、白いの〜〜〜〜!!」

感極まったような顔で、一方通行の方へ飛びついた。

当然、突然の出来事で反応できるはずのない一方通行は、彼女のタツクルに似たハグを無条件に受けることになる。

身体がくの字に折れ曲がり、衝撃がダイレクトに一方通行を襲う。

その結果。肺から酸素がごっそり奪われ、抵抗するも彼女の力強い抱擁を解くことはできず、ジタバタとその場でもがくことしかできないのであった。

あの性悪が横で見ている、おそろく大爆笑して便乗してきたに違いない。

しかし、横でそれを見ていた良識のあるクソガキは突然のことで、文字通り目が点になっていた。

「つく、おい。やめろ。急に抱きついてくンじゃねエ!!」

「ありがどう〜!! これで、これであの子のご飯が食べれる〜」

「いいから、離れろ! さりげなく鼻拭うンじゃねエ!? あとテメエ、コツチは杖つきだぞ!!」

「あの、お、おねえさん?」

状況を完全に理解していないのか、控えめに声をかけるイリヤの声がむなしく響く。周りの視線もそろそろ痛々しくなってきたところで、突如として女性の動きがびたり

と止まった。そして、

「——ハッ!! このままではタイムセールに遅れてしまう」

一方的に何かに気付いたのか、ニュータイプめいた何かを感じ取った女性は慌てて一方通行を引きはがすと、街灯の近くにある時計に目を向けて時刻を確認した。

時刻は四時三十分を過ぎたところ。こっちのスーパーでも同じならこの時間帯は言うならお買い得セールが貼られる時間だ。

そして、あわあわと両手を宙に彷徨わせる女性は、落とした鞆を拾い上げると、

「じゃあねーお譲ちゃん。あ、白いのも本当にありがとー」

名前も名乗らず去っていった女は大きく手を振り、己が目的を達成するために獣のようなスピード走り去っていった。

しかし、彼女は知らない。

一方通行に預けた紙が実は超重要な書類だったということに。気付いていて注意しなかった一方通行も一方通行だが、彼女が真実に気づいて絶望するのはまた別の話。

「………嵐のような人だったね、あの人」

「ああ、騒がしい奴だったぜ」

ようやく解放された一方通行は、肩で大きく息を整えて、イリヤの言葉に大きく同意した。

能力を使ってこつちから引きはがしてもよかったが、それではバッテリーの無駄だ。ことういった面倒ごとをいつもは能力を使って解決してきた一方通行にとって、やはりバッテリーを充電できないのは痛手ではない。

（ああいった面倒を回避するのに、充電はやはり不可欠か）
顎の汗を手の甲で拭い、呼吸を整え終えたところで、こちらの様子をうかがうイリヤの姿に気が付いた。

その目は、図りがたいようなよくわからない色をしている。

「ねえ、バーサーカーって実は頭がいいの？ 風に飛ばされたメモを一瞬見ただけで記憶するなんて」

「勝手に言ってる」

「だから、子ども扱いはやめてっつてばあ!!」

イリヤの髪を乱雑に撫で上げると、突然、一方通行の手のひらから頭にかけて奇妙な感覚が襲う。

それはどこか、痺れのように感じるがそれは一瞬のことで、すぐに元の感覚に戻っていった。

（……あん？ なんだ、この違和感）

突然のことに眉をひそめる一方通行に、我慢できないとばかりに髪を整えながら講義するイリヤ。

それを無視して、己の手のひらを見つめるが特別変化など見られない。

しかし、何かがあったのは真実だ。

そして、なにかに気付いたように顔を上げると、西の夜空に視線を向け、小さく、そして深くため息を吐き出した。

「バーサーカー聞いているの!」

「うるせエ、ガキはガキらしくおとなしくしてりやいいンだよ」

そう言つて、一方通行は歩き出すと、イリヤも頬を膨らませて一方通行の後を追う。

噴水場を抜け、また人通りの多い道に入るが、その道中。一方通行は振り返りもせずただまっすぐ歩きだした。

「バーサーカー? どこ行くの? 帰り道こっちじゃないよ?」

「……」

「バーサーカー?」

「……」

「ねえバーサーカー。ちよつと、聞いているの?」

「あん? 横でンなに叫ばなくなつて聞いているつつウの」

「じゃあ、ちよつと止まってよ!!」

よたよたと危なげに歩くイリヤの姿を横目で見て、一方通行は小さく舌打ちすると徐々に速度を緩やかに落とす。そして、元の歩幅に戻してイリヤに向けて小さくつぶやいた。

「つけられてる」

「っ!!」

それを聞いた瞬間。イリヤは身を大きく強張らせて、緊張した様子で一方通行を見上げた。

そして思わず振り向きそうになるイリヤを一方通行は小声で制す。

「振り向くな」

「でも——」

「いいからこのまま歩き続けろ」

焦りのような色があがえるが、一方通行は別段顔色を変えることなくイリヤに先を促す。

イリヤはわずかに頷くと、自然に歩き続けた。

人の多い道をあえて外れ、駅前から遠のく形で歩を進める一方通行。

あたりはゆつくりと暗がりになり近づいており、まさに襲撃にはおあつらえな時間だ。

しかも、人が少しずついなくなっているところを見ると、そろそろ痺れを切らして行くところだろう。

そう判断した一方通行は、もう一度横目で不安げな表情のイリヤを見る。

それでも一方通行は淡々とした口調で口を開いた。

「数は三。距離は一定だが、おそらく人通りが少ないところで襲うつもりだろオナ」

「どうするの？」

「むこうから出向いてくれるンなら好都合。探す手間が省けたつてとこだ」

「じゃあ——」

「次の裏路地、右に曲がれ」

最後まで言わずに短く指示を出すと、イリヤは一方通行の意図を理解して僅かながら頷いて前を見る。

路地裏まで残り三十メートルといったところか。

それまで無言というのも不自然なので、一方通行は適当に会話を切り出した。

それに合わせて、イリヤも自然な感じで会話に加わる。

「……なあ、このあと帰ったら何すンだ」

「うーん。きつとりズとセラが夕食を用意してるところから、それまでは特にやることはないかな」

「お子様は気楽でいいよなア」

「あー、また子ども扱いした。私はもう立派なレディなんだよ。子ども扱いは失礼かも!!」

「十年たつて出直せ」

「バーサーカーの意地悪っ!!」

二十メートル。

何気ない会話だが、相手に気付かれている様子はない。

一方通行はイリヤの物言いを軽く一蹴してやると、ポカポカと小さな拳の反撃が返ってくる。

そんなことで時間を稼ぎ、やがてイリヤの反撃がやむ頃、一方通行は若干、声のトーンを落としてイリヤに語り掛ける。

「……なア、マジで何もねエなら、一つ提案があるんだが」

「えっ!! なになに?」

興味深い様子でこちらの瞳をのぞき込んでくるイリヤ。

その瞳には笑顔とは裏腹に僅かばかりの緊張の色が見える。

残り十メートルといった所か。

残りの距離を確認すると、今も鬱陶しい視線を向けてくるイリヤに手刀を軽く入れ、

一方通行は面倒くさそうに髪をかき上げた。

「別段、そこまで期待させるようなことじゃねエぞ？」

「いいから!! もつたいぶらずに教えてよ」

一方通行の問いに、大声で一方通行の裾をつかむイリヤ。

その表情は、もう限界とばかりに強張っている。

そろそろ潮時か。

内心でそう呟くが、十分な時間稼ぎにはなつた。

ならばあとは――。

「ふっ、なアに。ほんとに大したことねエよ。なにせただの……大掃除だからな!!」

ゼロ。

右にぼつかり空いた裏路地を急に曲がり、距離を取る。

向こうも尾行に勤づかれたことに気付いたのか、慌ただしく走ってくる足音が聞こえる。

先手を打つたとはいえ、こちらは歩行障害者一人と子供一人だ。相手がどうあれ追いつかれるのは必然だろう。

能力を使えばその限りではないが、そんなことでバッテリーを使っている暇はない。

ならば、一方通行のやるべきことは一つ。

イリヤを先に走らせ、一方通行は後ろを窺うように様子を見ながら前へ進んでいく。その際、途中隅に置かれてあるゴミ箱や段ボールなどを倒し、手際よくバリケードを作っていく。

当然、こんなのは時間稼ぎでしかない。

路地裏は薄暗く、奥に行くほど埃っぽいがそれでも夕焼けの茜色に染まる空のおかげでギリギリ視界は確保できるレベルだ。

足音は三つ。どれも間隔が短く、早いことからおそらく走っているのだろう。

(……このあたりか。逃走は不可能、俺がとるべき行動は一つ)

そう判断した一方通行は、路地裏の中腹あたりで立ち止まると、イリヤを背に回して小さく笑みを浮かべた。

そして。

「……ようこそくそつたれども」

言うが早いのか、一方通行は懐からベレッタM92を取り出し、静かに三人の不審者に向けた。

やがて観念したのか、三つの足音がゆっくりとなり、日陰の中から三つの影が顔を出した。

高校生。

という割には、どこか幼げな顔だちをしているあたり、十六歳あたりなのだろう。

改造学ランを身に着け、ピアスをいじったりしては、がに股で肩で風を切ったような歩き方をしている。

そうして現れた三人の男たちは、ゆっくりと制止すると、敵前にもかかわらず薄気味悪い笑みを浮かべて何か小言で話し始めた。

大方、分け前の話でもしているのだろう。

どこから、一方通行達を見ていたかは定かではないが、油断しきった彼らの顔は、余裕という文字がありありと見えるほど緩み切っており、ヘラヘラとした視線は、まるでカモがネギをしょってきた、言わんばかりの表情だ。

そうして、何かしらの話し合いが終わったのか、金髪のリーダーらしき男がヘラヘラと親しみを込めて前に出てきた。

それに続くように、後ろの二人も勇んで前に出る。

「いやー、くそつたれか。もう、ひどいこと言うねー。なあ？」

「まったくだ。女の子が、……いやよく見ると男か？ どっちだっさいいや、お友達に向かってそんなことを言うのは感心しねーな」

「そうそう、俺たち君たちと仲良くしたいだけなのに」

「……誰がテメエ等みたいなクソ共とお友達だつて？」

改めて静かに銃の標準を金髪の男の眉間に向けると、リーダーらしき男はわざとおどけたような声を上げて両手を宙に掲げる。

しかし、両側に侍らしている男どもの表情は全く変わらず、むしろ今の状況を楽しんでいるようにも見える。

「いやいや、そんなに怒んないですよ。俺たち、君とちよつとお話があるだけなんだからさー」

「そう、俺たちさーちよつとお金に困つて、ね。言いたいことわかるよね？」

そう言つて、懐から取り出したナイフをチラつかせる。

要するに、金を出さねば痛い目に、とでも言いたいのだろう。

リーダーらしき金髪の男に続いて、残りの二人もメリケンサックやスタンガンなどいかに不良らしい獲物を持って余裕の笑みを浮かべている。

一歩一歩、一方通行との間合いを詰め、残り十メートルまで近づいたところで、

「……生まれ、これは警告だ」

ゆつたりと気だるげな声が一方通行の口から発せられた。

突然の言葉に思わず面を食らったような顔をする金髪の男は怪訝な表情で一方通行

を見る。

が、さして気にも留めた様子なく改めて一步踏み出そうとする所で、一方通行はもう一度、口を開いた。

「おいテメエ等、お前らにはこいつが見えねエのか？」

そう言つて、ベレッタM92を示すように軽く振つてやると、今度は三人とも一方通行から視線を外しお互い顔を見合わせると、一拍置いてから路地裏に不良たちの笑い声が響いた。

ある者は腹を抱えて。

またある者は、堪えようとした笑みを耐えきれず吹き出し。

またある者は、馬鹿だ馬鹿だよ、などと意味不明な言葉を連呼しながら。

しかし、彼らは気付かない。

いま目の前にいる存在が、どんな目で自分たちを見ているのか。

欲に眩んでいるからこそ気付けなかった。

そうして数秒たつぷりと笑い終えた一瞬の静寂の後。呼吸の整わない状態にもかかわらず、金髪の男がナイフを突き出した。

「ひひひ、そ、それで俺たちは、どうなるっていうんだ」

「さっさと消えれば痛い目に合わなくて済む、つつつてんだ」

まったく変わらぬ口調で、面倒くさそうに言い放つと、先頭に立っていた金髪の男がスツと目を細めた。

一方通行の物言いが気に入らなかつたのか、怒気のはらんだ声が小さく吐き出される。

「……なあ、お前。いまどういう状況かわかってんの?」

「お前からこそ理解してンのか? これでも随分サービスしてンだけエ俺は。テメエ等みてエなどうしよーもねエクズどもにわざわざ忠告なんてめんどくせエことしてンだからな」

「三対一だぞ? お前がいましなきやなんねえのは命乞いだ。妹の前でぼろ雑巾にされてえのか?」

「群れるしかできねエクズ共にか? それが脅しだとしたら落第点だないっそ胎児からやり直せ」

「殺すぞ?」

お決まりの常とう句を聞き、一方通行は軽く鼻で笑ってやると、

「来るならさっさと来いよクズが。テメエ等みてーな低能がいくら消えたところで誰も困りやしねエンだしよ」

ぶっ殺す!!

怒気のはらんだ金髪の声が路地裏に響いた瞬間、金髪の男は一方通行に向かって駆けだした。

決定的な一步を踏み出した。

残りの二人も獲物を手に、金髪の後が続いて各々の獲物を振りかざす。対して、それを静かに見つめていた一方通行の対応は迅速だった。

構えていたベレッタM92をゆっくりと移動させ、首筋に持つてくる。

その手の向かう先は、黒い電極。

そして。

カチッ

何かを切り替える音と共に、眼前に今にもナイフを突き出そうと構える金髪の男を見た。

「忠告はしたぞ」

短く言い放つと、一方通行の瞳に狂気の色が灯る。

能力名は『一方通行』。

その己が能力をデフォの反射ではなくベクトル操作へと変換する。

彼我の距離は二メートルもない。

そこまで、認識した一方通行の行動は単純だった。

重力の戒めを解いた右足を男の胸部に向けて軽く蹴りだす。

これだけだ。

これだけで、全ての常識が覆る。

メシリ

乾いた軋む音が裏路地に鳴る。そう感じた瞬間、金髪の男が不良二人の間を縫って飛んで行った。

認識する暇も与えない無慈悲の蹴り。

そうして、飛んで行った『もの』は一度アスファルトに叩きつけられたかと思うと、バウンドして転がるようにアスファルトの上を踊り、何の抵抗もなくゴミの山へと突っ込んでいく。

その間に音はない。

一拍の間。

何をされたか、認識すら追いつかない不良の二人は、獲物を振り上げた格好で制止していた。

彼らの視界からして見れば、一番初めに駆けだしたりリーダーが忽然と消えたのだ。

状況を理解するのに、脳の情報処理能力が限界を迎えていた。

そして、金髪の男の手から離れたナイフが地面に落ちた鋭い音が鳴った瞬間。

我に返ったように肩を震わせて、二人の男は後ろを振り向く。

奥にはピクリとも身動きしないリーダーの姿が。

そして、彼から視線を外し、この惨状を作ったであろう人物に目を向けると、彼らは揃って息を鳴らした。

視線の先。白く弱そうだと思えたはずの男が、笑っているのだ。

それも、禍々しく、それでいて懐かしむような笑みで。

「あつ、あ、あ」

声すら忘れたかのように後ろに一歩後退する不良の二人。

その精神を支配するのは恐怖のみ。

そして、彼らははつきりと自覚してしまった。

もう、後戻りはできないと。

今ここで、背を向けたら自分はどうなるのか。

その惨状の末、自分たちも『ああ』なってしまうことに。

想像が現実味を帯びてきた時ほど恐ろしいものはない。

そう。肉食動物に背を向けた人間がどうなるか。

逃げる草食動物を追う狩人が、次に何をしようとするのか。

殺される。

そんな言葉が脳裏に浮かんだ瞬間。

「う、うあああああああああああああつあつあああああああああ!!!」

カツアゲなど些細な目的を完全に忘れた男は、駆けだした。

もはや絶叫。

逃げられないと悟った男は、持っていたスタンガンを手にながむしやりに振り回して一方通行の元へ走る。

一方、状況をまだ完全に把握しきれないメリケンサックを持った男は、走っていく仲間をただ見送るだけしかできなかつた。

そうして、彼は見てしまった。

一方通行が左手に持つ、黒いものを。

メリケンサックを握った男がもう一方の男を呼び止めようとしたとき。

一方通行は電極のスイッチを切り替え、能力使用モードを切ると素早く男の方に拳銃を向けた。

そして、

「……テメエ等が選んだ幕引きだ。後悔しながら死ね」

標準を向かつてくる男に定め静かに引き金を引く。

タン

乾いた音が一つ路地裏に木霊する。

そうして、何が起きたか理解できずにいるスタンガンを持つ男は、足がもつれる様にして無様にアスファルトに転がった。

脛を的確に撃ち抜かれた。

しかし、どうして足からこんなに血が出ているのか、理解できる理性はもはや彼にはない。

腕や顔に擦り傷を作りながらも、取り落としたスタンガンを慌てて拾おうと手を伸ばす。ところで、見慣れない靴が見えた。

そして、それが誰のものをかを瞬時に理解すると、痛みも忘れて恐怖に歪んだ表情で見上げた。

「っひ」

短い悲鳴はそれ以上続かなかった。

一方通行は足元に転がった男を静かに見下ろすと、その鳩尾に向けて蹴りを入れる。がつ、という何かを吐き出した音と共に男は動かなくなる。

それを確認した一方通行は、ゆっくりと首を動かし最後の『標的』に目を向けた。

見る限りに、メリケンサックを最後まで握っていた男に戦意はもうない。

圧倒的な力に加え、本物の拳銃というのが決め手だったのか。

今まで保ってきた精神の支柱をポツキリと折られたように、力なくその場に尻もちをつくと過呼吸気味な様子で少しずつ後退していく。

しかし、一方通行はそんな彼にも容赦はない。

どんな相手であろうと油断すれば敗北を招く。

以前の苦い教訓を思い出し、わずかに眉を顰めて小さく舌打ちすると、一方通行は杖を突きながら一歩踏み出した。

路地裏に響く死神の足音。

軽快な杖の音が、まるで男の寿命のようで、呆けた顔で理解することをやめた男の顔は滑稽だ。

やがて、一方通行の影が男の体をすっぽりと覆いつくすと、一方通行は足を上げて勢いよく男の右肩を踏みつける。

それが一方通行の足だと理解するのに数秒かかったのか、驚いたように目を見開いた男は突然の衝撃で倒れ、頭を強く打つ音が聞こえた。

しかし、それでも一方通行は構わず、不良の肩を踏み砕く勢いでもう一度踏みつける。

アスファルトに押し付けられた男は苦悶の表情で顔をゆがめるが、一方通行は構わずに徐々に体重を片足に乗せていく。

小さなうめき声はやがて大きな悲鳴となり、やがて

ガゴン

と何かが外れた音を境に、男が声にならない悲鳴を上げた。

それはどこか助けを求めるような声色でもあり、今まで男が行った悪事を懺悔するようにも聞こえる。

己の肩を抑えて、必死に痛みから逃げようとするが逃げられない。

所詮、十数年の人生だ。

外的痛みに対してはある程度の耐性があるうと、ここまで精神的に追い詰められたのは初めてなのだろう。

いっそ、このまま気絶してしまおうかと、男の意識が落ちようとした瞬間。

一方通行はあえて、踏みつけている足をひねり、無理やり不良の意識を覚醒させる。

「がああああああああああああつあああああ!!」

痛みが全身を駆け抜け、気絶することすら許さない。

まるで化物物でも見るような目。

恐怖に彩られた瞳を見つめ、一方通行は忌々しそうに舌打ちすると、大きく息をつい

て拳銃を男の眉間に向ける。

そして、

「そのクズ共を連れてきつさと俺の前から消えるか、ここで死体に変わるか選べ」

低く呪うような声色で化け物を見るような目つきの男に言い放つと、一方通行は首筋に手を持っていき能力を発動する。

そして、男の肩を軽く小突く。

カコン。

何かがはまる軽快な音と共に痛みが肩を駆ける。

そして、男は大きくうめき声をあげて蹴られた己の肩を見て、絶句した。

いまだに痛みはあるが外れていた肩が治っている。

ありえない。

そのことを理解した瞬間、自分たちがどんな存在を相手していたのかをはつきり自覚した。そして、一方通行の忠告を思い出したように慌てふためき、一方通行に背を向けて駆けだした。

二人の仲間を置き去りにして。

「……クソが」

消えていく男の姿を見送り、電極のスイッチを切ると一方通行は振り返って、物陰に

隠れるイリヤの元まで歩く。

そして、その一步手前で伸びている男の懐に手をつ突っ込んだ。

そのわずかなふくらみのある胸ポケットから携帯を取り出すと、面倒くさそうにとある番号を押し、数コール後相手が出たかと思うと一方通行は簡潔に一方的な情報を伝えて、携帯を踏み碎いた。

そうして周囲の安全を確認すると、今までずっと隠れていたのか。すぐ手前の物陰から、幼い声が響く。

いつの間に隠れたのかは定かではないが、物陰から顔を出すイリヤを見て、一方通行は簡潔にまとめて答える。

「どこに電話かけたの？」

「119」

そう告げると、もう危険はないと判断したのか、イリヤは段ボールの積まれた場所から恐る恐る顔を出し、緊張を解くように大きく息を吐き出した。

隠れて耳でも塞いでいたのか。それともこちらを見ていたのか定かではないが、この惨状を見て臆さないと見ると。

(……この程度の惨状は『教育済み』ってことか)

殺せなくても、魔術師にとっては見慣れた惨状なのだろう。

『向こう』でもハワイの一件で見せたバードウェイの平然とした様子を思い出して、静かに納得する一方通行。

しかし、一方通行の元に歩み寄ってくるイリヤを観察していると、妙におびえた様子が返ってくる。

「へ、へえ、意外かも」

「……一応聞いてやるが、なにに対しての言葉だアそれ」

「いや、別に人間性をどうこう言う気はないよ!! バースーカーのことだから、向かってきた敵のことなんて、その。気にしないかと」

「別に放っておいてもいいんだがな。問題起こして『監視』が入るのもウザッてーだけだ」

人差し指の先を合わせながらもドンドンと声が尻すぼみしていく。

はじめは大きく否定しては見たが、いざ話してみると後でチョップが飛んでくるだろうな、とでも直感したのだろう。

あえて視線を合わせないのは気まずいからなのか。

鬱陶しく距離を詰めてくるイリヤをひらひらと手を横に振って追い払う。

しかし、それでもこの見上げてくる視線が妙に気になる。

それがどうしてなのか理解はできないが鬱陶しいことは確かだ。

キヨロキヨロとあたりを観察するイリヤ。そして地面に転がっている男を指でつつくと、一番初めに飛ばされた男の方を眺めてから、イリヤは一方通行の方を見た。

「でも、殺しちやつたんじゃ——」

「別に殺しちやねエよ」

「ふえ？」

予想していた言葉に被せるようにして否定すると意外そうな声が返ってきた。

一方通行は眉を顰めるが、いちいち気にする必要もない。

大方、向かってくる敵は全員皆殺し。とでも認識されているのだろう。

今までの行動から鑑みればその反応もあながち間違いではないが、さすがに皆殺しは後始末が面倒だ。

ましてや、あのような自ら悪事を働いて快感を得るような相手を殺していたら土地がいくらあっても足りない。

誤解を解くか、それとも放置するか、一瞬だけ考え面倒くさそうにため息を吐き出すと、一方通行は向こうで沈んでいるリーダーの方を指さした。

「あんなクズいちいち消してつたらキリがねエ適当に沈めただけだ。……まア肋骨全部にヒビ入れたから後で地獄見るだろオがな」

「よ、よく心臓が止まらなかつたね」

「生きてるのが不思議な状態だろオがな」

引き気味な声に、一方通行はくだらなそうに息を吐き出し、イリヤの頭部に軽い手刀を入れる。

手刀を甘んじるように大人しく受け、イリヤはホツと安堵の息を漏らした後、何かに気付いたように頬を膨らませた。

朱に染まつた頬。

目じりを若干つり上げ腰に手を当てたかと思うと、イリヤは突然、腕を組んで明後日の方を向いた。

その様子を見た一方通行は、怪訝そうに眉をひそめてイリヤを観察していると、次に人差し指をいじっていたイリヤが振り返り、不貞腐れたような、照れくさそうな声が飛んできた。

「でもさ、ただの不良だったなら言ってくれてもよかったかも。サーヴァントかと思っただじゃない!!」

「ああそうだったな。お嬢様にや少々刺激的すぎたか」

「子ども扱いたくないでってば! それにあれだったら私も少しくらいサポートできたのにつ!!」

「サポートもクソもあるかっての。……それに一つ収穫もあつたしな」

「収獲?」

なんのことだか分かりかねるように首をひねるイリヤを見て、一方通行は大きく首を横に振った。

まるでわかっていない。

いやむしろ、これが正常なのかもしれない。

自分が『異常』なだけなのだ。

そんな考えを一瞬巡らせ、一方通行は電極のスイッチを入れる。

そして、一方通行は答えを示し合わせるようにイリヤの元に一歩歩み寄ると、寄り添うような形で彼女の横に立ち、

「クズみてエなエサで本物の屑を釣ったんだからなア。——だろオ?」

「へ?」

間抜け面のイリヤを他所に、発砲音が二発連続して鳴り響いた。

それが一方通行の構えたベレッタM92からのものだど理解するのにワンテンポ遅れて気付いたらしい。

反射的に耳を塞いだイリヤと目が合って、それでも一方通行は静かに呟く。

「自分の身は自分で守れ」

「なんの——ッ!!」

しかし、イリヤの言葉は続くことはない。

彼女の言葉を遮るようにして、目の前から白い何か落ちてきたからだ。

それを認識した瞬間、イリヤは遅れて身を強張らせた。

白い骨。

しかし、明らかに人間のもの、いや。動物のものではない異形。

つまり。

——魔術。

慌てて、あたりを警戒するイリヤを尻目に、一方通行は至って平然とした雰囲気を崩さずあたりを観察した。

(左右からくる気配がねエ、つてことは必然的に——)

まるで分り切っていたような対応。

そこまで瞬時に答えをはじめ出すと、一方通行は空を見上げる。

そして、一度イリヤの方に視線を向けると、小さく舌打ちして

「舌噛むなよ」

「え、ちよ、ちよつと待つて——」

短く、そして的確に指示すると、一方通行は何でもないようにイリヤを小脇に抱え、飛んだ。

横でイリヤが何かを叫ぼうとしていたようだが関係ない。

足にかかるベクトルを操作して、左右のビル壁を伝っていく。

相手に飛行能力があるか定かではないが、的を絞らせないようにアーチを描くようにビルの間を左右に移動する。

その際、白い何かが壁に張り付いているのが見えたが関係ない。

あえて無視して、上を目指す。

そして、ビルより上へ『跳躍』したところで、『奴ら』が牙をむいてきた。

二体の何かが左右から同時に襲い掛かってくる。

姿かたちを表現するなら骨の獣といったところか。

生物学的にはあり得ないような骨格と、二足歩行のために発達したであろう体つき。

両手には骨を研いだようなものなのか、鋭いナイフが握られている。

今にも振り下ろされそうな二体の距離を観察し、魔術が関与している可能性を瞬時に判断すると一方通行はまず左から来る敵に銃を向ける。

そして、三発の発砲音。

空中で動いているにもかかわらず正確に頭部を射抜き、沈黙したのを確認すると、一方通行は腰を軸にコマのように左に回り、返す左手でもう一方を粉碎する。

パン

砂が崩れるような軽快な音と共にバラバラと砕け散ったそれらを確認すると、一方通行は重力に従ってビルの屋上に着地した。

そして、抱えていたイリヤを適当に投げ捨てる。「ふみや!」という悲鳴と同時に非難の視線が一方通行を射抜く。

が、一方通行はそれに目もくれず、たったいま砕け散った骨の欠片を拾い上げた。

(……こりゃカルシウム、じゃなくて炭素か? 一見骨のよオだが、明らかに脆すぎる) 拾い上げた物体を一瞬で解析し、静かに分析すると崩れたそれを一つ軽く潰す。

炭素といっても精製方法によってその密度、硬度は変わってくる。

ダイヤのような希少な原石からポロポロの炭に至るものまで様々だ。

ただ、言えるのはこの骨は明らかに従来の骨より脆く、あらかじめそうなるように作られているかのようにさえ思える。

(よオは探索、または偵察目的で作られてるつつウことか)

しかし、一方通行の能力に限っては硬いか柔らかいかなど関係ない。

その気になれば、指先一つで骨や鉄筋を断ち切れるのだ。今の一方通行には大した脅威になることはない。

「おい、クソガキ」

「ひゃ、ひゃい」

いきなり呼ばれて驚いたのか、後ろで先ほどからこちらの様子をうかがっていたイリヤが、肩を震わせて一方通行の横に回った。

そして、一方通行に骨の欠片を渡された瞬間。ハツとなつて目を細めると、その形状を静かに分析し始めた。

その表情は冬木の教会で見せたものと同じく、いつそのままの方が静かでありがたいと思つたりもするが、二人同時に無防備になるわけにもいけないので、一方通行は周囲を警戒してイリヤの言葉に耳を澄ました。

「……これは、たぶんゴーレムかも」

「ゴーレムねエ。つウことは当然作れる奴が限られてくるよなア？」

答え合わせのように確認を取ると、今もなお分析を続けるイリヤが大きく頷くのが見える。

「うん。これは普通の魔術師じゃまず無理。そもそもゴーレムの属性はよほどの例外がない限り『地』の属性。それなのにこれはいくつかの別の属性も付与してるみたい」

「なら、こいつらの大本はつまり——」

「「キャストター」」

「ご名答。——とでも言っておこうかしら」

舞踏会

夕暮れに染まるビルの頂上。

凹凸上のコンクリートを見下ろす世界の中、

突如、異質なベクトルを感じた一方通行は後ろを振り返った。

立ち入るものはごく僅かな世界に感じた小さな違和感。

そして、妖艶とも言える女の声。

明らかな敵性の前に、一方通行は反射的に声のする方へベレッタM92を向けた。

視線の先、それを目の当たりにした一方通行は小さく目を見開いた後、鋭く瞳を尖らせた。

そこには人ではなく白い怪物がいた。

改めて観察すると、それはまるで陶器かと思間違うほど艶のある芸術品のようだった。

白を基調とした磨き上げられた体躯。その身体には肉はなく、陽光を鈍く光らせて放射させる骨のみがカラカラと鳴く。

それがただの芸術品で収まるはずもなく、一種の兵器として成り立っていることを一

方通行は素早く理解した。

そう。先ほどもまで一方通行が簡単に蹴散らしたはずのゴーレムが二足歩行で佇んでいたのだ。

そして『それ』は気配もなく一方通行たちの後ろを取ったにも拘らず、その場に立ってこちらの様子をうかがっていた。

「……クソガキ」

振り返らずに小さく彼女の名前を呼ぶ。

イリヤもなぜ自分の名前が呼ばれたのか察したのか、困惑する状況にも拘わらず落ち着いて一方通行の言葉を待った。

「お前、あいつの接近に気付けたか？」

「一応感知はしていたけど、……正直あれは無理かも」

驚愕するような声でイリヤは一方通行の問いにはつきりと断言した。

相手が魔術を使用する以上、そこには何らかの痕跡が残るものだとバードウェイは言っていた。

それは、体内に残留する魔力であったり、術そのものが僅かに発する魔力の痕跡だったりなど様々だが、魔術を使ったという形跡は必ずどこかに残るものらしい。

現に一方通行も、人の流れを読み取って魔術の痕跡を発見したことがある。

その法則で行くと、たとえば横に立つクソガキが魔術師としてポンコツだとしても、何らかの反応はあるはずだと思っていた。

しかし、イリヤの表情はすぐれない。

それどころか、ここまでの接近を許してやっと気づいたような顔つきだ。

一瞬、一方通行の咎めるような視線に身体を縮ませるイリヤだが、それでも一応戦果らしいものは見つけたのか小さいながらも上目づかいで結果を呟く。

「魔力の反応が薄すぎる。あれ、本当にゴーレムなの!？」

あわよくば、と期待はしていたがイリヤの反応を見る限り、どうやら状況は最悪らしい。

魔術師であるイリヤですら感知できないほど小さな魔力反応。

決して、イリヤが未熟なわけではないだろう。

この聖杯戦争というふざけた戦いに参戦する権利を持つくらいだ。

バードウエイとはいかずともそこそこ使う魔術師には違いない。

しかし、その一介の魔術師でも感知不可能なゴーレム。

これを容易に作るということは、すなわち、敵の魔術師がどれほど優れているのかを示している。

(引つかかる点はいくつかあるが、背後を取った割には何の動きもねエってのが気にな

るな)

一応、ゴーレムの一つ一つの挙動に反応できるように対処していた一方通行だが、ここまで数十秒の間ゴーレムが身動き一つ取った形跡は見られなかった。

不気味な時間がさらに数秒流れ、まるで相手の出方を窺うような雰囲気緊張の糸をさらに張り巡らせる。

そのあまりにも不自然な様子に怪訝そうに眉を顰めるイリヤ。

彼女とは裏腹に一方通行は目を鋭く細めて、ゆっくりと息を吐き出した。

先ほどまでとは明らかに違う緊張感。

水の中に氷を入れるように空気が冷えていき、感覚が嫌でもとがっていく。

そして、目の前の存在に目を離せないはずの状況でも、一方通行は毅然とした表情を崩さずに周囲の状況を観察する。

現状、敵との距離は十五メートルといった所か。

遮蔽物が少なく、開けた空間である上に人の目を気にしなくてもよい。余計な気遣いをしなくていい分、全力で能力を使っても問題はないだろう。

しかし、その条件は相手も同じである以上、うかつな手を打つことはできない。

(だが、いつまで経っても何もしてこないところを見ると、俺たちの出方を待つてるってことか?)

スツと目を細め、小さく舌打ちする一方通行。
考えていても仕方がない。

そう判断した一方通行は、張り詰めた雰囲気の中、イリヤを背に回すようにして位置を調節するとゴーレムに向けて不気味に顔をゆがめた。

狂気的笑みが、張り詰めた時間を一層引き伸ばす。

一拍置いたのち小さく息を吐き出すと、血の通わぬ間延びした声が夜の屋上を静かに通つていった。

「ふっ、やっと出向いてくれる気になったア、ずいぶんとサービス旺盛だなアおい」

「……あら、随分なご挨拶じゃない。その口ぶり。私がつけていたのをはじめから知っていたように聞こえるけど」

「——えっ!？」

骨のゴーレムの艶美な声に、反応するようにイリヤがはじかれた様に見上げてくるが、構つてなどいられない。

適当に「黙つてろ」と鋭く目配せした後、再び目線を元に戻して骨の化け物を睨みつけた。

「夕日に染まったビルから飛ぶ影が三つ。大方そこに転がつてる骨どもだろオナア。日の明るいうちからストーカーとは随分と精が出るがアもつとマシな隠れ方はできねエ

のか?」

「あら。あの距離で気付いてたの? クラスの割にはずいぶんと勘がいいのね」

「正直鬱陶しくて仕方なかったがな。……ンで、ご名答つてことはお前がキャスターでいいンだな?」

「ええ、そうとつて貰っても構わないわ」

確認とも取れる作業に、わざわざ返事を返すゴーレム。

クスクスとまるで耳元で囁かれているようで、正直に言えば不快だがそのゆつたりとした口調からは、余裕が感じられ、嘘は言っていないようにも取れた。

カラカラと言葉に合わせて動くゴーレムの動きを観察しつつ一方通行はベレッタM92を改めて構えなおすと、目をナイフのように鋭く尖らせ、小さくせせら笑った。

「そんな臆病者の魔女さんは一体俺たちに何の用だア? まさか愉快で素敵なパーティーにご招待つてわけじゃねェんだろ?」

「ふつつ面白いこと言うわね。でも私がそれを貴方に教える義理があると思つて?」

「期待なンぎしてねエよ。ただ、愉快的ダンスを踊るにしても理由くらいは知っておきたいだろ?」

「……そうね。まあ言うなれば確認といった所かしら。それとご所望であればパーティーくらいご招待するわよ?」

骨の化け物が軽快な『女性』の声で何かを呟くと、周囲一帯から白い骨が次々と現れる。

一方通行には理解できない言語だが、キャスターの声に合わせて踊るように白い何かの蠢き形を作る。

まるで粘土をこねくり回すように、姿かたちが整えられ次第にはすべて瓜二つのゴレムが出来上がっていく。

その数はゆうに二十は超えている。

その一体一体が形状の違う武器を所持しており、輪を囲むようにして一方通行達を包囲していた。

一方通行はそのすべてを能力で知覚し、敵の数と配置をすべて認識した。

どれも不規則に見えて、一定の距離を保っているところを見ると形成がますますぐに襲い掛かってくる気配はない。

しかし、なんの知覚能力も持っていないイリヤからしてみれば堪ったものではないだろう。

突然現れたゴレムの群れに、イリヤは一方通行の衣服にしがみつくと、引き攀った声で一方通行を見上げてくる。

「バ、バーサーカー。もしかして私たち、結構まずかったりする？」

「やっと気づいたか。これで子ども扱いするなつてんだからほんと笑えるよな」
「バーサーカーが余計なことを言ったという自覚はないのかな!」

イリヤは身構えるようにして周囲を見渡し一方通行に寄り添うと、もう一度心配するような瞳で一方通行を見上げた。

しかし、一方通行の態度は変わらない。

邪魔なイリヤを適当に引つpegがすとあくまで余裕をもつて状況を分析する。

そして一言、まるで退屈そうな声色で、『キヤスター』に話しかける。

「で、臆病者は高見の見物つてどこか?」

「あら、それはどういう意味かしら?」

「こっちは無駄なことに時間を割くほど暇じゃねエンだよ」

「……? 言いたいことがあるならばつきり言つたらどう?」

分りかねるように女性の声で口動かすゴーレム。

その姿を見て、一方通行は面倒くさそうに自分の白髪を掻き揚げると、小さく舌打ちする。

そして――。

「とりあえず鬱陶しいから出てこいつつてんだよ。この臆病者が」

そう言つて何も無い虚空。正確には一方通行の後ろに振り向きざまに発砲した。

虚空に向かう弾丸はそのまま直線を描き、そして見えない壁に阻まれるようにして止まった。

それを目にしたイリヤは目を丸くして、一度一方通行の方を見上げてから、もう一度虚空を見る。

そして、イリヤは目を見開いた。

虚空だったはずの空間からゆつくりと、女性の手らしきものが生えていることに。

それは、継ぎ足されたデータが書き込まれるように徐々に姿を現していく。

始まりは手袋から、徐々に紫色のローブが現れ、最後に目元までフードで隠した女性が現れた。

「聖杯戦争に鉛玉なんて、ずいぶんとなめた真似をしてくれるのね」

表情は読み取れなくとも、その声色が想定外の事態であったことを物語っていた。

「あれが、キャスター」

息を呑むイリヤを尻目に一方通行は嘲笑の笑みを浮かべて、肩をすくめた。

「だから言つたろが。もつとマシな隠れ方はなかったのかつてな」

「そう。見つかるつもりはなかったんだけど、ばれてしまったのなら仕方ないわね」
あくまで残念そうにつぶやくキャスター。

その反応に一方通行は僅かばかり眉をひそめてキャスターを観察した。

動揺の色はない。

それ以前にキャスターの声色から余裕が感じられるほどだ。何かある。

そう警戒していると突如として空中に浮かんでいたキャスターの姿が霞のように足元から消えていった。

そしてなにか不可解なベクトルを感じ取った一方通行は、先ほどまで話していた骨のゴーレムに向き直ると僅かに身構えた。

ゴーレムの斜め横にふわりとキャスターが浮かんでいた。

「っ!! ……空間移動」

「ふっ。そう驚くことでもないでしょう? このくらい造作もないことだわ」

小さく驚愕するイリヤの反応を楽しむように笑うキャスター。

一方通行にはキャスターが行ったのが空間移動テレポルトであることしか理解できないが、横目でイリヤの反応を窺う限り、相当高位の魔術であることが推測できる。

しかし、一方通行は眉をひそめて、怪訝そうな目つきをキャスターに向けた。確かに、空間移動は強力な魔術ではあるだろう。

物体を重量問わず無制限に転送できるのなら確かに脅威であるのは間違いない。

だが単に移動すただけなら何も空間を弄ってまで使うほどの魔術ではない。

むしろ、敵に情報を曝すというデメリットしか生まないはずだ。にも拘わらず使った。

すなわち、少なからずそこには意味がある。

キャスターの挙動に注意しながら思案に暮れる一方通行は、やがて敵が魔術師であるということを思い出し、得心の言ったように小さく舌打ちした。

（ゴレムを使って慎重にことを進めようとする奴が使うような下策じゃねエ。つまりこれは——）

あえて、魔術師の優劣を知らしめるような行動。

自身との力量の差を教えて、行動権を握ろうとでもしているのだろう。

あからさまな挑発行為。

まるで愛玩動物をいじめて愉しんでいる飼主のような反応だ。

ちやうど、番外個体が黑夜をいじって弄んでいるときを見ているような感覚に近い。

これは自分に対した行動ではないと理解すると、その挑発の対象になつている少女に目を向けた。

イリヤもキャスターの行動の意味を理解したのか、表情は僅かに硬いがキャスターを見る目には少なからず敵意が籠っているのが感じられる。

（挑発に乗るほど馬鹿じゃねエか）

挑発は相手が乗らなければ、たいして意味のない行為。

それをわかつているからこそ、イリヤも見下されている怒りを抑えることができているのだろう。

だが、それも限界に近いのか、それともあまりの展開に参っているのか、その瞳に不安げな色が浮かんでいる。

一拍間が開き、互いの殺気が飛び交うなか、キャスターは小さく笑みを浮かべると高さを少し落としてゴーレムの横に並ぶと、口に当てていた右手を静かに下した。

一瞬、何らかの魔術を使うのかと、身構える一方通行だったが、すぐにキャスターの行動が戦闘ではないことを知った。

挨拶。

まるで偶然出くわした通行人に交わすような気軽さで敵前にも関わらず、キャスターは仰々しくローブの裾を持ち上げた。

ゆったりと。それも優雅に。それこそ舞踏会を舞う姫君のように。

戦場に似つかわしくない声が、歌うように魔女の口から発せられる。

「せっかくだから挨拶でもしましょうか。初めまして、アインツベルンのお嬢さん」

イリヤに向けられたたった一言。

その一言でイリヤは機能を停止したように表情が固まった。

おそらく、キャスターの挨拶の意味を素早く理解したからだろう。

顔を引き締めるイリヤの表情から幼さが消え、睨みつけるようにしてキャスターに向けて視線が鋭さを増す。

そして、小さく一言挑むように言い放った。

「……貴方に挨拶することなんて何も無いわ」

「あら、てつきり淑女であるならこれくらいの作法は叩き込まれてると思っただけだ。随分と余裕がないのね。アインツベルンの名が泣くわよ」

「っ!! あなたのような下賤な存在にいうことにはないにもないって意味なんだけど」

「ふふ、言ってくれるわね。ま、いいわ。私を見つけたそのサーヴァントに免じて許してあげる」

そう言つて、ゴーレムを撫でまわすキャスター。

そのしぐさには余裕があり、気品が感じられる。

しかし、横でその一連のやり取りを『観察』していた一方通行は内心、小さく舌打ちしていた。

(クソガキの方に余裕がねエ。明らかな非常事態で参つてるところでどこかア? 会話の主導権を完全に持つていかれた)

毅然として言い返しているものキャスターの言う通りイリヤには明らかに余裕がな

い。

それに対して、相手はそのことをわかっていてあえて煽っている節がある。頭に血が上っている者と冷静な者。

状況は、一変して向こうに流れてしまった。

キャスターのあいさつは、おそらくイリヤへの挑戦という意味が込められていたのだろう。

それを躲しきれなかったイリヤ。

余裕を保てなくなった時点で魔術師としての格付けは終わったも当然だった。

小さく唇を歯噛みするイリヤを横目に、一方通行は静かにため息を吐き出した。

(会話の主導権が向こうに渡った以上、有利に事を進めるには強引にでも先制攻撃を決めるしかないねエ)

だが、キャスターはまだ会話を望んでいるのは雰囲気からして明らかだ。

むやみに突っ込んでいって、状況を悪くするのは得策ではない。

しかし、こちらにもバッテリーの問題がある。

ここで電源を切るような愚かな真似はできない以上、このまま長丁場になるようであれば、圧倒的にこちらが不利。

銃撃戦もあの魔術障壁の前では意味をなさないとすると、できることは限られてく

る。

そこまで、確認して一方通行が動き出そうと重心を僅かばかり沈めたところで、フー
ドの奥のキャスターと目が合った。

紫色の瞳が一方通行を興味深げな視線でとらえた。

まるであの科学者達のように。

何かをのぞき込もうとしている目だ。

「それにしてもバーサーカー、ねえ」

「……あん？」

キャスターから吐き出される物憂げな吐息。

それはまるで『意外』とでも言いたげな抑揚を含んでいる。

それでも止まらずキャスターはコロコロと喉を鳴らすようにして不気味な笑みを浮かべていた。

横に立つイリヤの表情がキャスターの言葉と同時に強張ったのが気になるが、今はそんなことに気を割いていられる状況ではない。

思わず眉根をひそめると、キャスターの口から恍けたような声が漏れ出た。

「てつきりあの方が呼ばれると思っていたのだけれど、私の見当違いだったかしら。それとも貴方はフエイク？」

「なんのこことだ？」

堪らず問いかけると、キャスターはあえて一呼吸間を置いて唇の端を吊りあつげ、小さく笑みを浮かべた。

「昨日の夜」

「つ!!」

その瞬間。イリヤの様子が明らかに変わった。

伏せていた顔を上げると、まるで何かの仇でも見るような激しい目つきでキャスターを睨んでいる。

その表情は明らか怒り。

それでもキャスターの態度は変わらない。

クスクスと口元を隠してこちらの様子を楽しんでるだけだ。

「そんなに睨まないで頂戴。敵情視察なんて当然でしょ。それもこの聖杯戦争の御三家とも呼ばれる貴方達を監視しないなんて道理はないわ」

「……」

「そう、昨日の夜。あなた達アインツベルンが彼を呼ぶため、わざわざあの方の神殿の礎を持ってきたのでしょうか？ だから、わたしも慌ただしく頑張っただけだ」

一瞥。

明らかに確認を取るように、一方通行を見てから小さく笑みを浮かべ、そして残念そうにつぶやいた。

「取り越し苦労だった、ってことなのかしら」

「……どういう意味？」

イリヤの声に僅かばかり力が籠る。

苛立ち。

しかし、そんなことを気にする相手ではない。

すぐに話を逸らすと、改めて嫌味たらしい笑みを浮かべる。

「いずれ分かるわ。それにしても本当に興味深いわ貴方」

「……いい加減つまらねエ雑談は終いかア？　ならさっさと終わらせるぞ」

「ふふ、バーサーカーの割には随分と理性を残しているのね。おもしろいサーヴァント

だわ、お嬢ちゃん」

何らかの交渉。

あるいは品定め。

それは一方的なものだったが、その口調には明らかに会話の終了を意味していた。

ここからが本番。

まるでそう言いたげな口調でキャスターは短く命令する。

己が下僕たちに向かつて。

「……やってしまいなさい」

立っているだけだったゴーレムたちは、キャスターの声に反応し、その命令に従い動き出した。

はじめは様子見なのかキャスターに愛でられていたゴーレムが我先にと突進してくる。

小さく舌打ちする一方通行は、全体の距離を把握し、素早く向かってくる一体のゴーレムに引き金を引く。

火薬特有の破裂するが立て続けに三回。

しかし、突撃してくる骨のゴーレムの勢いは止まらない。

強度が上がっていることを素早く確認すると、追加でもう二発頭蓋に撃ちこんで、ようやく一体が崩れ落ちた。

「……個体ごとの強度が上がってる、か」

小さくつぶやいて、続いてゴーレムが倒れた隙を縫うようにして後ろから襲い掛かってきたゴーレムに拳を叩きこむ。

そうして、左手に持っているベレッタM92に視線を落として、次に腰にしがみ付くイリヤを見た。

(追加弾倉はない。しかも残り十発ときてる。このガキは使えない。——となると) 明らかな消耗戦。

加えて、残りバッテリーの短さ。

ここに来て充電の重要さが響いてきたが四の五の言っていられない。

敵は待つてはくれない。

むしろここぞとばかりに攻めてくるはずだ。

地をかけて突撃してくるもの。

あえて空中に跳び、ナイフを振り上げてくるもの。

武器を投擲して、行動を阻害するようなもの。

一体一体はおそらく大したことないであろうそれらが、数という有利を生かして攻めてくる。

だから、一方通行の取る行動は簡単だった。

投擲してきた武器をベレッタM92で撃ち落とし、加えて、一番早く到達したゴールムの足を弾丸二発と引き換えに打ち壊す。

そして、バランスを崩したゴールムを片手で掴み、それぞれの目標に向けて正確に振り回す。

ただこれだけだ。

これだけで、空中を飛んでいたものは、頭部から粉々に砕け、武器のないゴーレムは上半身を強引に粉碎される。

そして、用済みとばかりに一方通行は下半身のなくなったそれを乱雑にキヤスターに投げつけた。

ベクトルをいじり、威力を上げた『それ』は勢いよく回転し、キヤスターの顔面に向かって飛んでいく。

骨という材質からは信じられないほどの破壊音が鳴り響くが、キヤスターの顔色は変わらない。

再び、見えない壁によって止められた。

キヤスターの顔に焦りの表情はない。

むしろ、この程度想定済み、とでも言いたげな笑みを浮かべている。

「あらあら、ずいぶんと簡単に壊してくれるのね」

「はん。この程度で始末されるよオナ。第一位なンつウ肩書は背負えないンでなア」

「面白いことを言うのね。ならこれはどう？」

キヤスターが指を鳴らしたのと同時に、残りのゴーレムが一斉に一方通行の元へと駆け出した。

同時多面攻撃。

タイムラグもなく等間隔で距離を縮めてくるゴーレムの群れ。距離は五メートルもない。

各々の武器を振りかざし、アスファルトを駆けるゴーレムをじつと見つめ、一方通行は深く息を吐き出した。

先ほどの攻撃は、単に同じ強度のゴーレムたちをぶつけ合うことによつて、残弾の節約と自身の能力を隠すためにあえて『攻撃したに過ぎない』。

もちろん今の一方通行にとつてこんな攻撃は、『防ぐ』という動作すらいらぬ。

もともと完全に反射できることはすでに検証済みだ。

あとは、ただ突つ立ていれば向こうから勝手に壊れていくだろう。

しかし、こうもあからさまに同時に来られたのでは、対応が少しばかり限られてくる。

そう。一方通行が絶対の防御を持つていたとしても、こればかりはどうにもできないない。

何せ、今の一方通行には『荷物』が付いているのだから。

(どオあつても奴らの刃はこのクソガキにも向くだろうオな。さつきと同じことをやつても完全に防ぎきれぬ保証はねエ、か。なら——)

そこで、イリヤを守りながら戦うのは無理だと判断した一方通行は唐突にイリヤの首根っこをつかむ。

「ふえっ？」

素っ頓狂な声を上げてこちらを見上げてくるが関係ない。

無情にも腰にしがみついていた『荷物』を引きはがし、一方通行は向かつてくるゴームたちに方へとイリヤを乱雑に投げ入れた。

邪魔だから捨てる。

ただそれだけ。

それもあえてキヤスターの目の前へと行くように。緩やかにそれでいて適当に。

「……………えっ？」

呆気にとられるキヤスター。

それは銀髪の少女も同じで、呆けた顔でこちらを凝視している。

風になびき乱れ行く銀色の髪。そして、緋色の瞳が一方通行を見つめている。

まるでその瞳は、どこか見捨てられた、とでも言いたげな色を秘め、しかしそれと時に何か諦めのようなものが浮かんでいた。

(ンだよ。ンな鬱陶しい目で俺を見るんじやねエよ。クソガキが)

迫りゆくゴームたちで視界は徐々に白い何かへと変わっていき、完全にイリヤが隠れて見えなくなる。

だが、一方通行は見た。

彼女が見えなくなるほんの一瞬。

切り捨てられたはずの少女が儂げに笑っていたのを。

そして、その奥で紫の魔女が呆気にとられながらも片手を構えて何かを詠唱している姿を。

別に見捨てたつて構わないはずだった。

それなのに、一方通行の思考は自身の行動とは関係なく素早く答えをはじき出していた。

「クソが」

甘いとはわかっていたが、ここまですは想像していなかった。

悪態をついてもなお、すでに体は動いてしまった。

一度目を閉じ、全ての視界を閉ざす。

向かってくるであろう敵をすべて無視する形で。

そして、もう一度目を見開いたとき、一方通行は駆けだしていた。
刹那。

「なっ!?!」

うめき声をあげたのはキャスターの方だった。

まさに一瞬。一方通行から目を離し、マスターたるイリヤを始末しようとしたキャス

ターにはすべてを認識することはできない。

しかし、襲い掛かっていたはずのゴーレムが全てたやすく砂塵に還り、目の前に敵の姿がある。それだけでキャスターは詠唱を中断し両手を前に構えた。

一方。一方通行は脚力のベクトルをいじり爆発的な加速でキャスターの元へ飛び込むと、空中にいるイリヤを素早く抱きかかえ、身体を入れ替える様にして鋭い蹴りを入れる。

ガキンツ

金属音とも打撃音ともつかない甲高い音。

それと同時に、キャスターの前に展開された光の膜は碎け散り、塵ぢりとなって空中に霧散していった。

それでも衝撃を防ぎきれないのか、うめき声をあげるキャスターに向けて、一方通行は返す刀で腕を振るう。

が、この攻撃はキャスターに寸でのところで躲された。

追撃を加えようと右手を水平に動かす腕が、捕らえたはずの顔に当たった感触がない。

(空間移動か)

崩れていく魔女の姿を前に小さく舌打ちすると、一方通行は隣ビルに着地する形で減

速し、抱えていたイリヤを隣に下ろした。

お荷物に情けなどいらぬ。

まるで、帰宅時に荷物を雑多に置くように、適当に放り投げる

「へん！」

変なうめき声をあげて、地面と抱擁を交わすイリヤ。

臀部にのみをさすっているあたりどうやらケガはないらしい。

そのことに、やや安堵している自分がいて、一方通行は小さく舌打ちした。

昨日今日行動を共にした程度。

そこに信頼などあるはずもなく。助けてやるほどの情もない。

もともとそういう手筈でことを進めるはずだった。

にも拘らず早々に身体が動いてしまった。

不可解な誤作動に内心、首をひねり、戦闘中にもなぜという問いが一方通行の頭を占めていく。

そこまで考えて、一方通行はふっと昨晩のイリヤの姿を思い出した。

何故、今そのことを思い出したのかは定かではないが、思い出した。

(ああ、なるほど)

そこまで考えて納得したような、足りないピースががっちりとはまったような感覚が

胸の内を襲う。

今朝から続く、鬱陶しいほどのアプローチ。

昨晩とは打って変わって見せる表情の柔らかさ。

まだまだだぎこちない部分はあるが、

(こいつはこいつなりに俺に歩み寄ろうとしてきた、のか?)

無意識にそのことがわかっていたから、一方通行も身体が動いた。

馬鹿らしい。

しかし、一方通行が無意識に少女を優先した、という結果は覆らない。

自分の思わぬ思考回路に、小さく嘆息すると、僅かばかりの殺気にあてられ、思考を

切り替える。

兎にも角、多少の誤差はあるが、計画通りに事を運べたのは上々だ。

そうして、いつの間にか移動していた視線をイリヤからキャスターに視線を移す。今

度は一方通行が挑発するように笑みを浮かべた。

その視線の先。

頬からうつつすらと血を流すキャスターを見て、満足そうに口をゆがめた。

「ほオ、サーヴァントつつつても赤い血が流れてんだな」

「当然でしょう。所詮仮初の肉体とはいえ、私たちはこの世界に現界している身なんで

すもの。この程度の傷で調子に乗らないでちょうだい」

それにしても。と前置きし、キャスターは頬の傷ををぬぐうと、裂けていたはずの傷が姿を消す。

「マスターをおとりにするなんて、とんでもないサーヴァントね。でも、私に傷を負わせたのは褒めてあげる」

「はーん！ こんな役立たずでも、死なれちゃ処理が面倒なんぞなア」

あつけからんと言いつつと、キャスターは一度考えるような素振りを見せてから、ゆったりと右手を前に差し出した。

「……なら、その娘を捨てて私と組まないかしら？ 私が言うのもなんだけど、その子より貴方をうまく使つてあげられると思うのだけれど」

「あいにくだが、テメエみたいなクズと組む気はねエンでな。ここで消えておけ」

「あら残念ね。ならもう一つ私から提案があるのだけれど」

意外な申し出に片眉を吊り上げると、一方通行は身構えていた拳銃を下ろす。先ほどまでであった敵意が全く感じられない。

それどころか殺気すらない。

何が目的だ、と思索していると、キャスターは自分から見て右側の方を指さして、楽しそうに笑った。

「あん？」

「教会からの使者がこちらを見ている」

そう言つて、キャスターは明後日の方向に視線をやる。

一方通行も、キャスターと同じ方向に視線を配ると、それは確かにいた。

「……蝙蝠、に見せかけた使い魔つてどこか」

「ええ、正解」

どうやら、闇夜にまぎれて一匹の蝙蝠が周辺を旋回している。

が明らかに動きが不自然だ。

まず集団で群れる蝙蝠が一匹こんなところにいるのがおかしい。

しかも、獲物を捕らえている訳でもないのに、その場を旋回する姿はまるでこちらを見ているようにも見えなくもない。

そこまで確認して、一方通行は蝙蝠から視線を外してキャスターの方に向き直る。

「その根拠は」

「私が一度教会に帰る使い魔を一匹潰した、では足りないかしら？」

胡散臭いが、見られている状況ということには変わりない。

この場で確認が取れない以上、とりあえず信じざる負えない。

小さく舌打ちすると、一方通行はキャスターを静かに睨みつけた。

「で、テメエは何が言いたい」

「停戦を要求するわ」

「テメエが仕掛けた戦いにも拘らずにか？」

「そもそも、私は偵察に来ただけ。あなた達を殺そうなんて初めから思っていないの」
だつて、と一拍間を置き、キャスターは自身の口元をローブで隠すと

「聖杯戦争が始まる前に、貴方達を消してしまうのはあまりにも無粋、というものでしょう？」

笑みを隠すようにきつぱりと言い放つキャスター。

その声色に偽りは無い。

強者からくる余裕か。それとも慢心からくるのか。

どちらかは定かではないが明らかに舐められているのは確かだ。

一度、イリヤの方に目を向け、彼女の様子を観察する。

その小さな瞳から窺えるのは小さな不安のみ。

先ほどまでの勢いはどこへ行ったのか、若干怯えた感情が返ってきた。

それを確認し、一方通行は現状できることを百個ほど考え、すぐに放棄した。

そして、小さくため息を吐き出した一方通行の答えはあっさりしたものだつた。

「勝手にしろ」

「あら？ てつきり挑発に乗ってくれるとばかり」

その言葉に、意外といった調子の声が返ってくる。

一方通行は面倒くさそうにキャスターに視線を向けると、先ほどまでの鋭い殺気を解き、大きく息をついた。

「んな安い挑発にだれが乗るか。テメエが引くってんなら追う理由はねエな」

「意外と紳士なのかしら？ でもいいの？ ここで私を逃したら後々厄介なことになると思うのだけれど」

その言葉には誇張がない。

本気でそう言っているのが言葉の端々で現れている。

しかし、だからと言ってここで始末しなければならぬ、というわけではない。

むしろ馬鹿な話だ。

なにせ。

「逃げの一手しか出さねエような臆病者を相手したって時間の無駄だつてんだ。消えるならさっさと消えろ」

「あら。やっぱり気付かれていたの？」

頬に手を当て、クスクスと小さく笑みを浮かべるキャスターに対して、一方通行は答え合わせでもするような調子で口を開く。

「明らかに敵意がなさすぎる。テメエが俺に攻撃できる機会なンギアいくらでもあった。だがテメエ自身が攻撃に回ることはなく、向かってくるのは土くれどもときた」

「私がゴーレムに精通した魔術師だとしたら？」

「空間移動ができるほどの魔術師がか？　だとしたらあの場面で一度砕かれたゴーレムを量産するはずなンギねエ。もっと別個体を複数量産するはずだ」

「ふふ、やっぱり興味深いわ貴方」

正解なのは定かではないが、おそらくこの推測は的を得ていると、一方通行は確信している。

相手は魔術師だ。それも英雄などと呼ばれるような類の一級品。

そんなキャスターが、ただの木偶使いの訳はない。

もちろん、そういった特化型の魔術師もいるかもしれないが、魔術の利点は一つの概念にとらわれないという一点に尽きる。

つまり。魔力が続く限り際限なく、あらゆる魔術を行使できるということ。

こちらの魔術という概念がどのようなものかはまだ詳しくは知らないが、おそらく法則は似たようなものだろう。

手の内をバラしたがない慎重なキャスター。

それはここ数分の戦闘である程度予測はついている。

戦闘に限っては慎重にことを運びたいはずだ。よほどの非常事態が訪れない限り、本気を出すことはしないだろう。

そして、奥の手を隠し持っている敵に馬鹿正直に突っ込んでいくほど一方通行は愚かではない。

「さっさと失せろ」

「そうね。日も暮れてきたことだし、今宵の舞踏会はこの辺でお開きにしましょうか」

答えに満足したのか、クスクスと口元を隠すキャスターは一方通行を一瞥したのち、イリヤの方を見るのを最後に「また会いましょう」と言い残して、バラバラの蜃気楼になつて消え失せた。

まるで、ホログラムを消すように端から空中分解していき、最後には紫の蝶がキャスターを連れ去つたように、幻想的に西に輝く夕日に溶けていく。

その姿を最後まで確認した一方通行は、横にしがみつく少女を呼ぶ。

「おい、クソガキ」

言葉の意味を察したイリヤは、ハツとなつて慌てて目を閉じてあたりを探るように神経を尖らせる。そして数秒たったあと、小さく息をついて一方通行を見上げた。

「……うん。魔力の流れからして本当に帰つたみたい、でも——」

そう言つて、イリヤは不安げな視線で一方通行を見てから、今もなお不自然に旋回す

る蝙蝠の方を見た。

そのしぐさを見て、一方通行も小さく舌打ちして、蝙蝠の方に視線を向ける。

もし、あの魔女の忠告が正しければ、自分たちの情報はあの神父に届いている可能性がある。

そうでないにしろ、敵が偵察しているのは必然だ。

ならば自分がすべきことは。

情報の攪乱と、その排除。

幸いにも、一方通行はまだ己の能力をフルに使っていない。

もし、使い魔越しに映像を見られていても、一方通行がとてつもない速さでゴーレムを塵にしたとしか見えないはずだ。

そこまで思考し、一方通行は足裏で軽く地面を蹴る。

その瞬間、数舜のラグの後、宙を飛んでいたはずの蝙蝠が四散した。

イリヤは声を上げて、内臓と血液を空からまき散らす『それ』を見てから、恐る恐るといった風に一方通行を見上げた。

その視線はどうやったの？ とばかりに疑問に満ちたものだが、言っても理解できない、と判断した一方通行はあえてその視線を無視する。

そして、スイッチを切ると能力使用モードを解除し、現代的な杖に身をゆだねた。

若干、重心を捕らえ損ねてふらつくが、慌てて支えようとしたイリヤの手を制して、ゆっくりと空を見上げた。

茜色の夕焼けが徐々に暗くなり、北から吹く風が一方通行の頬を撫でる。

そうして、しばらく空を見上げた一方通行は次に、自分の手のひらに視線を移した。

正直に言えばかなり危ない橋を渡っていた。

キャストが去った今、改めてそう自覚した一方通行は口にせずとも、運がよかった、と内心呟いていた。

あのまま戦闘になっていたら、死んでいたのは間違いない。一方通行の方であった。

その事実を認識し、受け入れる一方通行。

今のままでは勝てない。

そう、はつきりと自覚してしまった。

そして、その理由を一方通行はしっかりと理解している。

(明らかに、バッテリーが足りねエ)

一方通行は首に巻かれたチョーカーにそとと触れ、小さく白い息を吐いた。

つけ入る隙はいくらか見つけた。が、あいにくそれを打破する前提となる時間があまりにも少なすぎるのだ。

油断を誘ったうえでのキャストに向けた一撃。

あの蹴りで仕留められなかった時点で一方通行の負けは決定していたも同然だった。おそらく能力をあと一分でも使えば、バッテリーが切れる。

そんな状況で、あのまま戦闘に入っていれば、己の手の内をさらしたからないキャスターは一方通行にとって最悪の相手といってもいい。

なにせ、一切の攻撃をゴーレムに任せて、自分は完全な防御に回っているのだ。

魔術的要素を省いたとしても、そういった相手と戦うにはまず敵の注意を逸らすなど、隙を作ることが前提になってくる。

ゆえに、はじめのイリヤを囿にした奇襲は最初で最後の絶好の機会だった。

しかし、それが失敗に終わったいま、どのような策を弄しても、時間があまりにも足りない。

バッテリーの残量は残り一分ほど。この意味を理解できないほど一方通行の頭脳は愚かではない。

おそらく能力を使わずともこうして思考できる時間はせいぜい一時間がいいところだ。

(最悪なのは、なにも対策が浮かばずバッテリーが切れた場合か)

キャスターとの勝敗などどうでもいい。

まず、第一に考えるべきは充電方法だ。

そのために一方通行は、今後の身の振り方に思考を費やしていた。

バッテリーの充電方法は昨夜一度、一通り試してみた。

しかし、一向に充電される気配はなく。即席で作ったコンセントを以てしても充電されることはなかった。

逆にバッテリーを消費する結果となり、今日までこの問題を持ち越してきたが本格的に危なくなってきた。

未だにバッテリーの充電方法を確保できないのは非常にまずい。

どうしたものか、と小さくため息をつき、ゆつくりとその場に座り込む一方通行。

夕日も完全に西の境界線へと消えていき、僅かばかりの頼りないオレンジ色が一方通行を照らす。

大きく息をついて、首を軽く鳴らす。

すると、見かねたイリヤが一方通行の顔色を窺うように下からのぞき込んできた。

「バーサーカー?」

「あん?」

気だるそうにそちらに顔を向けると、イリヤの心配そうな顔が一方通行の視界に映る。

紅い瞳は、不安げな色をまもって、一方通行を見つめる。

夕日の茜色が、イリヤの銀髪を淡く染め上げ、夜風に揺れる柳のように横に流れていった。

「その、大丈夫？」

おそらくこれは本心で言っているのだろう。

負傷したことを気遣っているのではない。

困にしたことを怒るのよりも先に、心の底から一方通行の精神状態を心配しているのだ。

自分のことより他人のこと。

どうやら、この少女にとつて裏切られたかもしれないという猜疑心よりもサーヴァントの精神状態の方が大事なことらしい。

そんな余計なことを考える彼女に、一方通行は無言で小さな眉間にデコピンをお見舞いする。

「きゃっ!!」

赤くなった額を抑えてイリヤは悲痛な声を上げた。

そして、若干薄い雫を浮かべてこちらを睨んでくるので、一方通行はそれに加えて額に手刀を加えてやると「みぎやつ!!」とうめき声が返ってきた。

非難の視線が一層強くなったところで、一方通行はあきれたように小さくため息を吐

き出した。

「二丁前に他人の心配なンギアしてンじゃねエよ」

「……だ、だって」

額を抑える彼女の声に先ほどまでの覇気がない。

ストンと座り込む少女はうつすらと目を伏せて、小さく息を吐き出す。

まるで懺悔の告白でもするように、その紅い瞳にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「わたし、全然ダメだった」

「……役立たずもいいところだったな」

「うん。バーサーカーにそう言われても仕方がないくらいの失態。キャスターの挑発に

は簡単に乗っっちゃやし、そのくせ何もできなかつた」

弱々しい声。

威勢がない、というより落ち込んでいるのだろう。

おそらく生まれて初めての戦闘だ。

それも生死を分ける本物の命のやり取りが行われていたのだ。キャスターや一方通行はまるでダンスを踊るような気軽さで始めたが、イリヤは違う。

殺気の感知や、周囲に気を配る方法すら身に着けていない一般人、くらいの基準が妥当だろう。

そんなガキが、さきほどまで異常の渦中にいたのだ。何もできないのは、仕方がない。

それでも、この少女は自分を許せないのだろう。

強く握る拳がうつすらと赤みを帯びていく。

「ごめんなさい。わたしの性でバーサーカーに、迷惑かけちゃったよね？」

「……」

「ははは、ホントなんでだろう？ バーサーカーと一緒になら何でもできると思ってた。なんでもできると思ってたんだ。でも、ダメだった」

絞り出すような声を境に、イリヤは力なく笑う。

自分の力のなさを呪うように。

深く深く吐き出される言葉は、一方通行の内側をチクチクと刺激していく。

夜の空気に溶けだすようなイリヤの告白を聞いて、一方通行は小さく嘆息すると、彼女の名前を呼んだ。

「おい、クソガキ」

「……なに？」

一方通行の声にゆっくりと顔を上げるイリヤ。

直後。

「黙ってる」

振り上げた手刀が容赦なくイリヤの額を捕らえた。

骨と骨が軽くぶつかる音が鳴り、呻くようにして額を抑えるイリヤを見て、彼女の考えすべてを否定するように小さく嘲笑した。

「くくくつ!! いったー!! バーサーカーつ!! 人が落ち込んでるのになんてことするのかな!」

「はッ、それだけ吠える気概がありやまだ平気だな」

「な、ん、で!! 人の頭を壊れたテレビを叩くみたいに雑に扱うのかな、って言ってるの!?!」

「ンなに、丁寧な扱ってねエよ」

「うー、私だつて女の子なんだよ!! レディにもっと優しくしてくれてもいいんじゃないやー」

「……テメエが気にすることじゃねエよ」
「えっ」

全身で怒りを表現するイリヤの動きが一方通行の言葉に突如停止する。

キョトンと静かになるイリヤを尻目に、一方通行はあえて彼女の顔を見ず、柄でもないと内心呟きつつも語り始めた。

「そもそも、あれは勝ち負けなんてモンを気にする必要なんざねえんだよ」
「どういうこと？」

分かりかねず首をかしげるイリヤに、一方通行は額に手を当てて小さく嘆息する。

いちいち言葉にしなければならぬ、という面倒くささに一瞬、説明を放棄しようかと考えたが、すぐに思い直して言葉を選んで口にした。

まるで幼稚な答え合わせをするようにつぶやいた。

「キャスターの言った言葉を思い出してしろ」

「キャスターの言葉？」

「かなり序盤であいつの言ってた言葉だ。いくらテメエの頭がザルでも、これくらいは覚えてンだろ」

繰り返すイリヤの言葉に頷いて、イリヤは一部始終を思い出すように虚空を眺め、やがて何かを思い出したように声を上げ、一方通行のほうへ顔を近づけた。

「確か、確認って言ってたような」

「ああ、間違ってはねえ。そのあとは？」

「えっ!?! そのあと? ……確かバーサーカーが余計なことを言つて、戦闘になったよ
うな」

「そう。それであつてる」

そう。奴は確認、と言つてこの場に現れた。

その言葉にどれだけ真実が込められているかは定かではないが、少なくとも偵察目的なのは確かだ。

戦闘での勝利は二の次。

まずすべきことは、情報を持ち帰ること。

そんな戦闘の中で勝ち負けを考えるのはそもそも間違っているし、馬鹿な話でしかない。

さらに。

「奴は、そもそも俺たちを殺しに来たんじゃねえ」

「それって、つまり偵察目的ってこと？」

「そういうことだ」

小さく頷いてから一方通行はもう一度軽く頭を抱えた。

もちろん、イリヤもそのことは理解していただろう。

いま、一方通行がしているのは励ましや慰めではなく情報の整理。

くだらないことで頭を悩ませているクソガキの調子を整える作業だ。

変に多くのことを同時に処理させるより、一つ一つの問題を確実に解決させていった方が精神的負担も少なくいまより余裕ができるはず。

そう考えて、実行してみたがこの段階である程度落ち着きを取り戻しているところを見ると、もう必要もないかと思えてくる。

が、イリヤの疑問は止まらず、一方通行も惰性ではあるがその質問に的確に答えなければならなくなった。

「じゃあ、そもそも、どうしてキャスターはあの場にいたの？ 魔力を感知させない高性能のゴーレムを作れるのなら、そもそも来る必要がないんじゃない？」

「……お前、あいつのこと気付けてたか？」

「ううん、ゴーレムに必死で気付けなかった。キャスターだから気配遮断はそこまで高くないと思うけど——もしかして奇襲が目的？」

素直に首を横に振るイリヤ。

どうやら完全に吹っ切れたらしく、いつものやかましい状態に戻っている。

一方通行も調子の戻ってきたイリヤの問いに対して、推測ながらも的確に答えを導き出す。

「それもあるだろうが、実際は違うんだろオナ」

「というത്？」

「戦闘パラメーターの取得とサーヴァント情報の確認」

「うん？」

「いまいちピンとこないイリヤに一方通行はもう一度大きく息をつくつと、今度はわかりやすく言葉をかみ砕いて説明を続けた。

「キャスターは確認といった後、明らかにそれ以上の追及を嫌っていた。こいつは推測だが、逃げ道を塞いで一刻も早く必要な情報を取得したかったんだろオナ」

「それはわかるけど、なんでそんなにも強引にバーサーカーの情報が欲しかったの？」

聖杯戦争が始まってからでも別に情報は集められるし、むしろキャスター自身がわざわざ戦場に赴く方が危険だと思うけど——」

「そこだ」

「へ？」

「思わずといった調子で気の抜けた声が夜の街に小さく響く。

確かに聖杯戦争というくだらない戦いが始まってからでも遅くはないはず。イリヤの考え自体は間違っていない。

危険を冒してまで自分の情報を得ようとする姿勢は明らかに異様だ。

あの魔女の性格を考えると、進んでそういった策は取ろうとはしないだろう。

しかし、実行に移した。

そこにキャスターの真意がある。

そして、今までのキャスターの言動から推測される答え。

すなわち本来、彼女にとって好ましくない存在が召喚されていたのかもしれない、と考えるとキャスターの無茶な行動も納得がいく。

つまり、一方通行の存在自体がイリヤにとつてもキャスターにとつても予想外だったということだろう。

そうすれば、キャスターのすべての言動に説明がつく。

しかし、そんな推測を打ち立てたのにも構わず、一方通行はあえてそのことを語らずに説明を続けた。

「……俺はこのくだらねエ戦争のことを詳しくは知らねエが、概要は理解してるつもりだ。要はマスターを殺せれば終いのシンプルなゲームだ」

本当はそんなに簡単なものじゃないけどね、とイリヤは苦笑しつつも訂正するが一方通行は構わず続ける。

「だが、シンプルすぎるがゆえに、敵の情報つてのは何よりの価値がある」
戦闘でまずすべき事は情報収集。

これは戦闘の基本であり、敵の情報をどれだけ持っているかで勝敗が傾くことなどざらだ。

情報社会のこの世界でも高度な情報は時に、人の命より重い場合がある。

不透明であるがゆえに、それを暴きたくなるのが人間の性。

ならば、キャスターとて不安の芽は摘んでおきたいと思うのも納得がいく。

一方通行もそれを重々理解しているからこそ、今回の相手は厄介でしかなかった。

何しろ、敵はゴーレムを使うこと以外、ほとんどの情報を公開せず、一方通行の情報のみを吸いつくそうとしてきたからだ。

一方通行も、そのことは序盤でゴーレムが単体で攻撃してきたことでキャスターの真意を素早く理解したが、現状で準備が十分でなかった一方通行は最後まで苦戦を強いるしかできなかった。

「ゴーレムを使つてわざわざパラメーターを盗み取るオとするほど慎重な奴だ。あいつが欲したのは当然曖昧な勝利でなく確実な勝利」

「確実な勝利?」

「少なくとも不確定要素は潰しておきたいって魂胆だろオが、あいつは何故か終始、俺に對してのみ興味を抱いていた。それがなぜだかは知らねエが、テメエに對してあからさまに重圧をかけていたのも必要な情報を引き出すためなんだろうオな」

「それで、私はまんまとキャスターの術中に嵌ったと」

落ち込むイリヤに、一方通行はあえて強調するようにして確認を取る。

「奴がなんの情報を欲していたのかは、散々マスターだのなんだの喚いていたテメエがよくわかつてるんじゃないかねえのか?」

「……うん。それについては心当たりがあるかも」

おそらく、昨晚の召喚云々、という話なのだろうが、そこに關しては一方通行は深く追求しない。

魔術を使うには少なからず触媒がいるのは知っている。

バードウエイは礼装と言っていたが、一方通行がこちらに召喚される際にもなんらかの礼装が使われたのは想像に難くない。

しかし、いまここでイリヤに追及しても時間の無駄だろうし、何より、イレギュラーな存在として召喚されたであろう自分が彼女に尋ねても「わからない」の一点張りだろう。

小さく頷くイリヤを盗み見ると、一方通行は短く息を吐き出して左手でイリヤの髪を乱雑に撫でまわした。

特に他意はない。

らしくないともわかっているが、それでも実行するあたり、気付かぬ間にずいぶんと長い間ぬるま湯に浸かっていたらしい。

嫌がるイリヤの声は一方通行の耳に届いておらず、適当に撫で終えた後はしばしの静寂が流れた。

夕日は完全に西の向こうへと消えていき、あたりを照らすのは夜空の星々と街から照

らし出される人工の光。

その一つ一つが、一方通行とイリヤの眼前に広がり、二人は黙って地上の夜景を眺めていた。

そして、

「ありがとうバーサーカー」

静かに穏やかにイリヤの声が一方通行の耳を打つ。

怪訝そうにそちらを向くと、妙にすつきりとしたような笑顔が眼前に広がり、一方通行は怪訝な瞳でイリヤを見つめた。

「あん？」

一歩出遅れた間抜けな声に、イリヤハそれでも静かに言葉を続ける。

「私のこと励ましてくれたんだよね」

「……よく自分を見殺しにしようとした奴に礼なんかな言えるな。勝手に善意の方向で解釈してンじゃねエぞ」

「でも!! 助けてくれた」

一方通行の言葉に被せるように言い放つイリヤに、一方通行は短く嘆息してイリヤを改めて見る。

芯の通った紅い瞳に映し出される自分を眺め、一方通行は髪を軽く掻き揚げてもう一

度ため息を吐き出すと、イリヤの眉間にデコピンをかました。

本来なら充電方法を考えなくてはならない時間を、割いてまでイリヤの心理状態を優先した。

結果的にはそう見えるかもしれないが、実際は違う。

イリヤに説明を続けながらも、一方通行自身は打開策を何度も考えていた。

しかし、いくら考えたところで即席のコンセントを以てしても充電されなかったとなれば、もう一方通行に解決を導くすべは残っていない。

どうすべきか、頭で考えても答えは出てこない。

ゆえに、イリヤに説明を続けながら情報を整理していたのだが、これといった具体策を見つけれないまま時間だけが過ぎてしまった。

さてどうするか。

何気なく、イリヤの拳が一方通行の体に柔らかく振れたとき。

痺れに近い感覚と共に、一方通行の体の中に何かが入ってくる感覚が一方通行の神経を駆け巡った。

(………あん？　なんだ、この違和感)

少し前にも似たような感覚を味わったことがあるが、

対して気にも留めずイリヤの鬱陶しい拳を払い、一方通行はゆっくりと立ち上がっ

た。

「バーサーカー聞いているの!？」

黙らせる意味合いで見上げるイリヤの額にもう一度手刀を入れるが、次は服の裾を引つ張つて子供のよう暴れる始末。

本人も若干おもしろ半分暴れているのだからなおさら質が悪い。

「いつそ、こいつを置き去りにでもしてしまおうかと本気で考えて、あきらめるように小さくため息をついた。

そして、最後に残った良心がギリギリのところ踏みとどまらせた一方通行は結局、乱暴に袖を振り払うだけにとどめた。

「チツ!! うるせエぞクソガキ。ガキはガキらしく黙って大人しくしてろ」

「それにしたつてうら若き乙女の額にチョップを落とすのはどうなのかな!？」

「ガキのスカスカの脳天に何を落としたいした損害にやならねエよ」

その言葉に対して、何かしら思うところがあったのか、イリヤも負けじと身を乗り出して反撃を開始する。

「むっ、バーサーカーはガキガキ言うけど私はこれでも十八歳なんだよ!!」

「はっ、どこぞのピノコちゃんですかア? 嘘ならもつとマシなモンつけ」

「ひっどーい。しんじてないのね!!」

売り言葉に買い言葉。

無人のビルの上にいるせいだろうか。周りに気を使わなくていいぶん、二人の音量は次第に大きさを増していく。

「その貧相な身体で信じろっつーほうが無理だな」

「ふん、バーサーカーなんて知らない！」

「いつてろ」

「あ、ちよつとやめてよバーサーカー。髪が乱れるー!!」

一方通行の手を払って慌てて髪を整えだすイリヤ。

頬を膨らませながらも、一方通行の方へとじつとりとした視線を送りつけ、明後日の方をむく。

その膨らんだ頬が妙に赤みを帯びていたのが印象に残ったが、たいして気にも留めず対策を考えるのにふけていた。

一応、ここまでの間でも、頭の中ではバッテリーの解決策を探り続けていたが、これといった決め手が見つからない。

ぶつぶつと文句を垂れるイリヤを横目に、一方通行はやがて大きく息をついた。

八方手を尽くしてみたが、いよいよ行き詰まりを感じ始めた一方通行は半ば、やけを起こすようにして適当に返事を返した。

「あーハイハイ、そりゃ悪かったなア」

「なんでそんな適当なの!? って、ちよつと。だからワシヤワシヤするのやめてつてば!!」

「いいから少し黙つてろ」

そう口には出すが、依然と続く違和感に一方通行は眉をひそめていた。

こちらの世界にくる前もこういった感覚は何度か経験したことはあるが、今回は明らかに異質だった。

海原やバードウェイなどの魔術師と遭遇した際に訪れる手先の痺れとは何か違う。

妙に身体の内側からはじかれる様な、静電気に似た感覚。

それが三度。

別に反応に慣れさえすれば、たいして気にするまでもない違和感ではある。

しかし、明らかに違和感を前に、一方通行は短く逡巡したのち一度イリヤの方を見やってから電極のスイッチに手を掛けた。

（ンだこの感覚、違和感みてエな。……やはり気のせいじゃねエな。少しばかり調べてみるか）

電極の充電方法がわからない今、むやみに能力を使うのは決して得策とは言えない

が、それを承知で一方通行は構わず能力を開放する。

一方通行にしてみれば己のバイタルチェックなど数秒あれば済むのだ。いまさら一秒や二秒消費したところで大した差にはならない。

一方通行は静かに目を閉じると神経を集中させバイタルチェックを開始する。

(重要器官異常なし。——脳波異常なし。——脈拍異常なし)

一つ一つ繊細な能力制御で自分の体を把握していく。

ほんの少しでも演算を見すれば体のどこかに異常をきたすかもしれないリスクを抱えているにもかかわらず、まるで息をするように自分の体の状態を把握していく。

順調に見えた矢先、とある項目で思考が止まる。

そしてその意味を理解した瞬間、思わず目を剥いて、己の手のひらを見つめた。

その表情には僅かな驚きと一筋の汗が浮かんでいた。

(っ!? どうなつてやがる!! バッテリー残量が増えてるだ、と)

ほんのわずかな変化であるが明らかにバッテリーの残量が増えている。

一瞬、困惑しかけた思考を静かに落ち着かせ、とりあえず電極のスイツチを切る。

そして、一度自分の首筋に視線を向けると顎に手をやり考え込む。

何か確信めいたものをつかみかけた。

その感覚はまさに勘に近いものだ。

そうはわかっているが、その考えが『手がかり』だと確信するのに、そう時間はかからなかった。

頭の中で静かに情報を整理しつつ、イリヤの名を呼ぶ。

「なあ、クソガキ」

「……うん、なあに？」

ジト目で怪しげにこちらを窺うイリヤ。

再び髪を弄られるのではないかと警戒しているのか、若干彼女との間に距離はあるが構わずに問いかける。

「この聖杯戦争つてのは魔術師による戦いだっただよなア」

「それはそうだけど、……どうしたの突然」

キョトンとした表情で首をかしげるイリヤから視線を外すと、一方通行はなんでもねエと呟き再び顎に手をやった。

（確かバードウエイの話だと、魔術を使うためには生命力を使って魔力を精製する必要があるんだよなア）

前提として考え方が間違っていたのではないのか。

そんな考えが頭をかすめた瞬間、一方通行は組み上げた情報源をばらしもう一度考え直す。

(コイツは本来、科学の力。電力を使って動いてるはずだ)

チヨーカーを指先でたたき、思考の海に神経を滑らせていく。

普段の行動。

変わらない習慣。

何度も何度も繰り返し返してきた行動を一から分解させていく。

その何百ある情報の中から必要なものだけを手に取り、改めてその役割を解析していく。

途方もない思考の波が脳をむしばみ、足りない栄養を補おうと血管が不規則に脈打つのがわかる。

それでも夜風が火照った脳を冷やし、不思議と爽快な感覚が一方通行を包んでいった。

(だが、俺は聖杯戦争で召還させられた身。本来の常識が通用しなくても無理はねエ。なら、この電極の充電方法も変わっていても不思議じゃねエはずだ)

発想の転換。

科学の知識、科学の法則で凝り固まった思考が瓦解していく。そして、その端から新しく付け加えられた情報同士が重なり合い、幾重もの形となり一方通行の中で新しい概念として形成されていくのを一方通行は感じた。

昔の自分では想像することすら一蹴していた。

しかし、ここまで多くの出来事と関わり、経験し、受け入れてきたからこそたどり着いた新しい考え方。

つまり。

(ちつとばかりこじ付けクセエが、この電極が『魔術を使うための装置』と仮定すると、コイツを動かすための燃料は必然的に『魔力』ってことになる)

あくまで冷静に。再び電極に視線を走らせる。

その先には、見慣れた黒いチョーカーの横につけられた電極がある。

もし、この中身を分解することで確証が得られるとしたら、

そう考えて、一方通行は小さく首を横に振った。

しかし、そうなると問題が発生するのも確かだ。

バッテリーが充電されたのは、おそらくイリヤとの接触到違和感を感じたあの三回。

接触は充電をするための条件なのは納得できる。

ただ。

(・・・腑に落ちねエのは俺がこのクソガキに触れた場面はいくらでもあった。なのに、なぜその時に充電されなかったってことだ)

この先、戦闘になるにせよ、ここでの死に向かうの世界で死ぬかもしれないという確

証が得られない以上、安易に死ぬことは許されない。

そして、この世界での死が向こうの世界での死につながるかわからない以上、偶然充てできませんでしたでは意味がないのだ。

いつでも、確実にバッテリーを確保するすべを見つけなくてはならない。

先ほど調べた残り少ない時間に歯噛みするも、一方通行はすべての思考能力をこの一点に集約させる。

脳の血管が脈打つのが嫌でも実感できる。

余計なことは考えるな、と意識するたびに、思考に贅肉が乗り、いつもの、それこそ日常で発揮できるような滑らかな演算ができなくなっていく。

いつもなら。

そんな余計なことを考えていると、そこで何かを思い出したように一方通行はふつと顔を上げて無意識に電極に手を置いた。

(・・・待てよ。俺がコイツに触れた時に一度でもバッテリーのことを考えた事があつたか?)

足りないピースがががちりとハマる感覚。

それはすべての事象が一瞬で一方通行の脳を駆け、集約されるように結論へと導かれる。

「つまり、充電の際に俺が電極に充電器をつなげないと電力が供給されないように、俺の意思が充電を意識し始めないと電極に充電されないってことかア？」

思わず小さく漏れた呟きに、一方通行は小さく頷いた。

自分の口から出た言葉だが、これ以上に自分自身を納得させるほどの最適解は見つからない。

何より、自分で口にして納得してしまったのだ。

おそらく今の自分ではこれ以上の解は思いつかない。

(……もしくはこのガキが俺に対して魔力供給を意識する、というのも考えたが電極の問題を知らない以上、それは考えにくい)

残り少ない案としては、イリヤが特定の感情を抱いた時、もしくはイリヤのとある部分に触れないと充電されない。

というものもあるが、検証ができない以上それを証明することはできない。

(とにかく、電極の充電をするには、ガキとの接触が不可欠なことになる)

そう結論を導き出し、小さく眉根を擡める一方通行。

もろもろの問題はあるにせよ、ひとまず筋の通った仮説は出来上がった。

あとは実証するだけ。

そこまで考えをまとめていたところで、突然横から突くような鋭い声が跳んだ。

「バーサーカー!」

「……つ。あん?」

意識が浮上するのと同時に、現実には引き戻されるように一方通行は顔を上げてイリヤを睨みつけた。

一瞬、たじろぐような表情を見せるが、それでも表情を引き締め、柔らかな声色で一方通行の顔色をのぞき込む。

「さつきから立ち止まってどうしたのバーサーカー? お腹でも痛いのか?」

「……いや、何でもねエよ」

突っぱねるように言い放つが、たいして気にしていないのかイリヤは唇を尖らせるのと、一歩前に歩み寄ってくる。

両手を口の前に持っていていき、白い息を吐き出すイリヤ。

そんな彼女を見て一方通行は、一瞬考え込んだのち、ゆつくりと右手を移動させてイリヤの頭に置いた。

髪と手が触れた瞬間、小さな痺れが一方通行を襲う。

(……)。充電されてやがる。やはり、接触は必須ってわけか)

首筋の電極に視線を向けると、充電時に点滅する緑色のランプが灯るのが見えた。

仮説が実証されたという事実には密かに安堵する一方通行。

だが、今後のことを考えると厄介なことこの上ないのもまた真実である。

なにせ充電するには一方通行が意識的にイリヤに接触しなければならぬのだ。

その行為自体がどういった意味を持つのかさすがの一方通行も理解している。

あれだけ距離を取っていた自分がいきなり、子犬のようにベタベタと近寄りだすのだ。

そんな無様な姿は想像もしたくない。

しかも、下手をすればあのメイド達にあらぬ疑いを掛けられ、異様な目で見られるのは明白だ。

一瞬、脳裏で番外個体が腹を抱えて爆笑している光景が浮かび、クソアマの腹に蹴りをきめ込んでやる一方通行。

そしてげんなりとした視線でイリヤに目を向けると、イリヤと目が合い、一方通行は意識的に明後日の方に目をやる。

もう、ある種の移動型充電器として考えるしかないのか、と密かに嘆息すると、改めて横に立つイリヤを観察する。

先ほどまでうるさかったイリヤが嘘のように静かに撫でられている。

子ども扱いの抗議はあきらめたのか大人しく撫でられるだけでこれと言った抵抗はない。

キョトンとした表情のイリヤともう一度視線がぶつかり、一方通行はもう一度重い溜息を吐き出した。

そうして、一方通行を見上げたままのイリヤは何のことかわからずに首をかしげると、彼から視線を外し冷え込む寒空の下で手を揉んで暖を取りはじめた。

「変なバーサーカー」

一方通行の方を見ずに呟くイリヤの言葉を無視して、一方通行はイリヤの頭から手を放して電極のスイッチを入れる。

そして、寒そうに身体を震わせるイリヤの頭を軽く叩いた

「ふえ?」

「……もう夜ふけだ。やることもうねエならさっさと帰るぞ」

「うん。あつ、バーサーカーお土産!! お土産忘れてる」

気だるげな声に、イリヤは慌てたように向こう側のビルを指さしこちらを見上げてくる。

取りに行くのは造作もないが、イリヤの瞳は一緒に連れて行って、という意味を含んでいるようにも感じる。

もう反論することすら面倒くさくなった一方通行は、イリヤを適当に抱え上げると、ビルとビルの間を縫うようにして跳躍した。

暴れるイリヤを小脇に抱え、到着するころには適当にその場に放り捨てる。

しかし、今回は一方通行の行動を予想していたのか臀部から着地するのではなく、きちんと両足で着地することに成功した。

そうして転がった荷物のところまで走っていくと、落ちた荷物を抱えるようにして一つ一つ大切に持ち上げた。

そして振り返り、笑顔で駆け寄ってくる。

「忘れ物はもうないし、もう大丈夫!!」

自信ありげに見上げてくるイリヤの表情を見つめ、小さく嘆息すると一方通行は下に屈むようにして膝を折り、イリヤの方に手を伸ばす。

そして荷物を抱えたイリヤを両腕で抱きかかえるようにして立ち上がった。

「セラたちにもお土産買ったし、今日は楽しかった!!」

「ああそうですか」

「うん! いろんなことがあった。もちろん、キャスターとの遭遇はちよつと怖かったけど、でも今日は来てよかった!!」

「……」

「ねえ、バーサーカー」

「あん?」

徐々に薄れていく少女の叫び声だけであつた。
今日もまた夜が始まる。

帰宅

「もう、バーサーカーなんか運んでもらわない!!」

冬木の森が小うるさい小言を木霊させるなか、

森のなかでは小言を響かせて先導する少女が、月明かりを背に目的に向けて歩みを進めながら、棘の含んだ声で叫んでいた。

新都を移動してから約二分。

月明かりに照らせれながら、空中散歩を終えたイリヤと一方通行。その彼女から飛び出た第一声は「バーサーカーの意地悪!!」だった。

あまりにも平手が飛んできそうな剣幕に、一方通行は黙ってイリヤの様子を見守るが、結局のところ平手は飛んでこず、代わりに瞳に涙を浮かべイリヤはそっぽを向いて城の方へ直進していつてしまったのがつい先ほどのことである。

太陽は完全に沈み、丸い月が夜空を静かに照らす冬木の夜。

月光を遮る雲の代わりに、日傘のように高く伸びた木々の隙間から微かにあたりを照らす淡いが漏れるためか、

学園都市でも見られるような欠けた月が、まるで違った意味合いを持つように感じら

れる。

月を見て情緒的な感情に浸るほど、感情豊かではないと自覚しているが、それでも一方通行の瞳に写る月は異様な違和感があった。

(異世界つつても、常識的なところは全く変わらねエ、か)

これは空中散歩の際に観測してわかったことだが、重力も、風力も、可視光線の波でさえ、全て一ミクロの誤差もなく一方通行の能力は正常に『機能』していた。

つまり、こここの物理法則はそのほとんどがあつちの世界と変わらないということを示している。

ただ、一つ。

魔術という一点だけが向こうの世界とこつちの世界とでは『質』が違うものではないか、と一方通行は考えていた。

しかし、一方通行は魔術師ではない。

多少、ほかの能力者より知識はあるが、それも熟練者からすれば取るに足らないものであるということも一方通行は理解している。

これはただの勘だ。

だがこういった直感を無視するべきではないのも知っている。

しかし、このまま考えていてもらちが明かないのも真実だ。

(一番手つ取り早いのは、本職の人間に助言を仰ぐことなんだがア)

そうして、視線を正面に向けると、銀色の髪を左右に揺れらすイリヤの確かな足取りが見える。

さすがに所有地で迷うようなことはないか、イリヤは暗闇の満ちた森の中を迷うことなく目的の場所まで歩いていく。

昼間の間抜けっぷりを考慮してわずかに心配していたのだが、杞憂に終わったようだ。

静かに胸を撫でおろし、一方通行は先導するイリヤに続くようにして注意深く進んでいく。

踏み均された道があるとはいえ、けもの道であることには変わらない。

敵や何らかの尾行を警戒して、城の一步手前で着地したがそれもいらぬ心配だったらしい。

木の根や雑木林に足を取られぬように慎重に歩きながら、一方通行は何かをあきらめたように小さくため息を吐き出した。

結局、あれから一向に口を聞いてくれないどころか、こちらを見向きもしようとしな

い。
まるで蒸気でも発しそうな後ろ姿を見るかぎりまだ怒り心頭のようなようだ。

クソガキであれば甘い口約束一つで機嫌を直すのだろうが、あいにくこちらはレディを気取ったお嬢様ときた。扱ひ方など心得てなどいない。

一瞬、あのクソ生意気なバードウエイの顔がちらつき、あいつは違うなと思ひ直して、もう一度小さくため息を吐き出した。

そして面倒だとばかりに髪をかき上げると小さく息をついて、無駄とわかつていながらもイリヤに声をかける。

「おいクソガキ」

「……」

「おいー」

一向に返事が返ってくる気配はない。

もう一度、強めの声色で語り掛けるが、返事が返ってくることはなかった。

「チツ。いい加減に聞け」

それでも返事が返ってくる気配がないのを見て、さすがの一方通行も苛立ちが積もる。

そもそも、なぜこのクソガキのご機嫌を自分がとらなくてはいけないのか。

考えれば考えるたびに胸によくわからない不快感が積もっていく。

ぶつけようのない苛立ちに、小さく舌打ちするとため息交じりの声にうんざりしたよ

うな声色が混じっていった。

「ンでそんなに怒ってんだよ。そこまで怖くねエだろ、アレ」

そこまで言うといリヤは突然足を止めたかと思うと、勢いよく振り返って一方通行を睨み返した。

その瞳には怒りの色が混じっており、どこか説教じみた声色が含んだ飛んでくる。

「もつと遅くしてって言った」

「……」

「もつとゆつくりって言った!!」

今度は一方通行が黙る番だ。

確かに、空中散歩の途中にいリヤがそんなことを叫んでいたような気がするが、わざわざスピードを遅くする必要を感じず、無視してきた。

若干、大人げなかったか、と考えるが思考するだけで謝罪するという選択肢は一方通行にはない。

いリヤも一方通行の様子を見て、謝罪する気がないと分かると、ジツとこちらを睨みつけて恨み言を吐き続けた。

「バーサーカーは慣れてるから良いと思うけど、初めての私からしたら怖いんだからね！」

「……ンなもんかねエ」

「バーサーカーにはわからないだろうけど、高く飛びあがるたびに内臓がひゅつとなるんだよ!? ひゅつと!!」

「まア意識のある人間を運んだのはこれがはじめてだったかもなア」

過去の記憶を思い返しても、あれだけのスピードで他人を運んだ覚えはない。

そこまで呟いた一方通行の言葉に、イリヤは目を剥くようにして瞳を見開かせ、やがてわなわなと口を動かしてから大きく身を乗り出した。

「初めて!? あ、あんな危ない事を初めて私にやったの!? 信じられない!!」

「無事だったんだから文句ねエだろオ?」

「そういう問題じゃない!!」

「うるせエ。……おら、着いたぞ」

両腕を振り上げて身体全体でめいっばい怒りを表現するイリヤ。

ガキつぼく腕を振り上げるのはいいが、持っていた両手の荷物がガサゴソと音を立ててやかましいことこの上ない。

そんな彼女のわきを無視するように通り過ぎて、森を抜けたさき。一方通行は何事もなかったように「城」の前に立った。

遠目から見ても分かるほど、はつきりとした西洋風の城。

白と灰色のレンガが規則正しく敷き詰められており、窓の格子は五階まで美しく嵌まっている。そのすべてに明かりがともっており、さながら不夜城と言つても差し支えない。

それが森の奥に一つ寂しく建っているのだ。

廃墟に見えなくもないが、明りの灯る城の中はおそらくメイドたちの手で美しく整えられているのだろう。

あの倉庫でさえ埃一つなく掃除されているのだ。であれば、普段使うような生活圏内にはほこりなど存在するはずない。

この角度では見えないが、空中散歩のときに見えたぶんには建造物は凹字型になっており中央のへこみ部分が中庭になっているようだった。

そして、改めて正面から見上げる城は圧巻の一言に尽きた。

絵本の中から飛び出してきた、と言えばいいのだろうか、一方通行自身こういった建造物は資料でしか見たことがなく実際目にするのは初めてだったりする。

(魔術師つてのは何事もかたちから入るもんなのかねエ)

学園都市出身の一方通行からしてみれば、ただ装飾に彩られた建造物より利便性に富んだビルのような建築物の方がまだ理解できる。

古風を矜持とする魔術師のことだ。

利便性などより伝統を重んじるようなイメージはあながち間違いではないだろう。

そうして、横目でイリヤを盗み見ると、未だに怒りの色が薄れていないイリヤと視線があつて一方通行は小さく嘆息した。

(俺の主人がこんなガキだつていうんだから世も末だな)

その様子が気に入らなかつたのか。イリヤは再び両腕を掲げて一方通行に向けて拳を突き出した。

ガサガサと両手に持つ荷物が擦られる音と小さな衝撃が断続的になるなか、一方通行はしかめつ面で今度こそはつきりと聞こえるようにため息を吐き出した。

「うぜエ。ソんでさっさと開けろ」

「バーサーカーはレディファーストとか女性に対する概念はないのかな!？」

「もちつと成長してから言いやがれクソガキ」

鬱陶しい小さな打撃を腰に受けながら、一方通行は面倒くさそうにその手を払って、イリヤを一瞥する。

その視線の意味を察したのか、さらに不機嫌になるイリヤは頬を大きく膨らませて、一方通行を睨んだ。そして、

「もおーバーサーカーのいじわる!!」

そう叫んだ後に、何かをあきらめたようにため息交じりの吐息を漏らして淑女にある

まじき勢いで扉に手を掛ける。

そうして、勢いに任せて豪勢な扉をあけ放つと、そこにはアホメイドとクソメイドが気品よく立っていた。

「御帰りなさいませお嬢様」

「お帰りイリヤ。それとバーサーカー」

「うん！ ただいまセラ。それとリズ!!」

先ほどまでの怒りはどこへやら、子供らしく元気よく返事を返すイリヤにその言葉に恭しく礼をするメイド二人。

甘ったるい会話などどうでもいいが、一方通行はメイドたちのある動作に気が付いて、小さく不敵な笑みを浮かべた。

一見、甲斐甲斐しくイリヤの世話を焼いているように見えるが、片時も一方通行への警戒を怠っていないようだ。

初めて対面した時ほど殺気は感じられないが、それでもこちらに注がれる視線が鬱陶しい。

一人がイリヤの会話に対応してもう一人が一方通行を監視する。

それを無言で交互に行い、なおかつ自然体でふるまっているのだ。

まるで、一方通行の一足挙動にいつでも反応できるような体勢で。

加えて言えば、セラの右手がひそかに白いエプロンの方に移動しているところから、大方、武器の類でも仕込んでいるのだろう。

(まあ、当然か)

妥当ともとれる彼女たちの警戒態勢に、一方通行は小さく納得するとあえて気づいていないように視線をそらした。

そんな二人の様子もつゆ知らず、自分の持っていた荷物を二人のメイドに預けるイリヤは、ごく暢気なものだった。

一瞬、このメイドたちの方がまだ使えるのではないか、と脳裏によぎったがそれを口にするような愚行は侵す一方通行ではない。

二人の視線を無視するかたちでただ黙って案山子とかしていた。

さつさと座って情報を整理したい、という欲求にかられるが、どうもメイドとクソガキの話が思いのほか盛り上がっており、さすがの一方通行もそれを無視していくわけにいかない。

一応、先ほどのキャスターの戦闘は他言無用にするようくぎを刺してはいるがこのクソガキのことだ。

変なテンションでポロツと情報を漏らしかねない。

めんどくせエと内心呟き、遠くを眺めていると幼い声がこちらに飛んできて、一方通

行は視線だけをそちらに向けた。

「あん？」

「だから、今日は結構冷え込んだね、つてそもそも聞いてたバーサーカー？」

「いちいちくだらねエ話題を俺に振るンじやねエよ」

「えーでも寒かったでしょ？ 新都あたりは晴れてたから暖かかったけど、夕方はすつ

ごく冷え込んでたし。ほら、しもやけ」

「だからいちいち見せんな」

緊張が解けたのか、大きく伸びをしてから両手を掲げて見せてくるが、確かに指先は少し赤みがさしているがたいした問題ではない。

一方通行は付き合いきれず適当に吐き捨てメイド二人の間をわざと抜けて一足早く城内に入った。

多少、不機嫌そうなイリヤの面を視界の端で捉えたが、さして反応する必要もないだろうと、判断して一方通行は大きくあくびを一つ打つ。

そんな一方通行を汚物でも見るような目で一瞥するセラが器用に表情を変えイリヤに微笑みかける姿もすっかり視認したのち。丁寧に玄関口の扉を閉める音が聞こえた。

「では、お嬢様。お食事の準備ができていますので、参りましょうか」

「イリヤれっつー」

「うん。バーサーカーもいこっか」

セラを先頭にして進むイリヤ一行。

はしやいぐイリヤの声を耳に、ようやく一息つけると小さく安堵の息をつく一方通行はセラとイリヤの後に続くように視線だけ動かして彼女達の後を追う。

その一方通行とセラがちようどすれ違う一瞬。

予期せぬ衝撃を肩付近に受けて一方通行はわずかによろめいた。

理由は単純明快。

セラの肩が一方通行の肩にぶつかったためだ。

途中、不思議そうにこちらを見てくるイリヤとリズの顔が見えたが、一方通行は顔をひきつらせてクソメイドの後ろ姿を睨みつけた。

その一連の出来事に対して気も留めずイリヤを食堂に促すようにして笑顔を浮かせるセラ。

あえて、一方通行に肩をぶつけてそのまま食堂の方へと進んでいったと認識するのにそう時間はかからなかった。

あきらかな嫌がらせ。

その行為に対して一方通行は、

「あんのクソメイド」

誰にも聞こえない声で小さくつぶやくが、

「バーサーカー!! はあーやあーくう」

「鬼さんこちら手のなるほうへ」

イリヤの後ろを押すリズのメイドにあるまじき間拔けな声と、まるで幼児のようなテンションで手招きするイリヤを見て、一方通行はぶつけ所のない怒りを無理やり胸のうちに収めた。

まったく、慣れない。

普段の生活ならば、小さなガキと大きなガキの二人に振り回される程度で済んだのだが、こうもやかましいところの調子が崩されて仕方がない。

思考を振り払うように大きく首を左右に振り、一方通行はゆったりとした歩調でイリヤの後を追う。

そこまで観察していた途中、セラがこちらを射殺さんばかりの勢いで睨みつけていることに気付いて、一方通行はそれを無視してイリヤの後に続いた。

城。

というだけあって長い階段を上った先にあるのは、無駄に長い廊下だった。

壁際に飾られた装飾も宝石のように磨かれており、大理石の床を照らす淡い光がまぶしく光る。

しかし。

健康なイリヤやメイドたちはいいとして、杖付きの一方通行にしてみればかなりつらい。

途中、一方通行が遅れているのに気づいて、階段を上っている最中に立ち止まっては、こちらを待つてくれるのだが、

嫌味な表情を顔面に張り付かせ小さく鼻を鳴らすセラの姿はまさに愉悅に富んだものだった。

まるで番外個体のような態度に、思い出すだけで苛立つてくる一方通行は一瞬、どうしてやろうかなどと頭をめぐらせた。

しかし前方から聞こえてくる声。特にイリヤと楽しそうに会話する彼女を見て、考えるのが馬鹿らしくなり小さくため息を漏らした。

とりあえず、いい趣味してるな、と口には出さずに胸の奥底で呟くだけにとどめておいた。

そうこうして、イリヤとメイドの二人の後に続く一方通行は先頭を歩くイリヤについていくように距離を取る。

何も気まずいわけではない。

単に巻き込まれたくないだけだ。

一方通行からしてみれば、まだまだ信用できない部分もあるし、なにより情報が足らなすぎる。

出会って一日で仲良しこよしができるのであれば、世界はもつと単純だろう。

そうでないからこそ、どこかしこに汚い人間が出てくる。

ちようど自分のような。

そこまで考えた一方通行は、ふと顔を上げて窓の外を凝視したのち、廊下を一瞥した。外は暗がりではつきりと見えないが今朝見えた景色によく似た光景だ。

周りが森ばかりの景色に『よく似た』という表現はおかしいが、窓の外に見える特徴的な木々の並び方が今朝みた木々に酷似している。

そして一方通行の記憶が正しければ、あとはここを直進したのち、左手にある大きな両開きの扉をくぐれば今朝の食堂についたはずだ。

もう案内は不要だろう。

そう判断すると、一方通行は午後の出来事に花を咲かせる女どもの横を素通りしようとする。

その途中。

あえて機会を計っていたようなタイミングでセラがとんでもない方向へ会話を切り替えた。

「それより、お嬢様お怪我などはありませんか？　主にこの白モヤシなどに変なことをされませんでしたか？」

「……おいクソメイド。よつぼどミンチになってエミみたいだなア」

「あら、いたのですか。失礼しましたモヤシ様」

このクソメイドは本当に人の神経を逆なでするのがうまいらしい。

こちらに視線を飛ばしながらひようひようと語るところを見ると、行為らしい。

思わず伸びた電極の手を理性でとどめるのに苦勞した。

しかし、セラの心配とは裏腹に、何のことかわかりかねるイリヤは、頭の上に疑問符を浮かべて首を傾げた。

「？　ううん。すつごく楽しかったよ」

「そうですね。それは本当によかったです。では、夕食の準備が来ていますので」

「うん。部屋に戻ったらすぐ行くね」

そう言つて、クソメイドは冗談でなく本気の様子で胸を撫でおろすと、リズと一緒に規則正しく食堂の扉の前で立ち止まった。

そして恭しくイリヤに目礼すると、至つていつも通りといった様子でイリヤも頷き返した。

どうやら、二人のメイドが付き添うのはここまでのようだ。

本来のメイドであるなら、主人の着替えから世話までが彼女らの仕事であったような気がするが、どうやらこの辺りは独自のルールらしい。

従者が必ず一人主人の傍につく。

護衛を兼ねた巡回体制なのだろう。

セラとリズはどちらがイリヤについていくのか話し合っている最中だ。

その様子を観察していた一方通行は、関係ないと切り捨てさつさと食堂に入ろうとしたとき、イリヤの呼び止める声が廊下に響いた。

正確には一方通行ではなく、セラの方に。

「——あつ、待ってセラ」

「なんででしょうかお嬢様？」

呼び止められた本人も驚いた様子で、食堂に入ろうと取っ手に手をかけた格好で止まっている。

そんなイリヤは駆け寄りするようにしてセラの方へ近づき、彼女の腕から茶色い紙袋を取り上げた。

その紙袋を見てなにをしたいのか見当がついたが、口に出せばあとで何を言われるか分かったものではない。

一方通行は静かに口をつぐみイリヤの行動をただただ眺めていた。

もったいつけるように時間は流れ、セラとリズは何事かと疑問符を浮かべながらお互い顔を見合わせていた。

が、やがて意を決したのか顔を赤らめるイリヤは改めて、セラたちに紙袋を差し出した。

照れ隠しの言葉と共に。

「へへ〜ジャーン！ はい、セラとリズにおみやげ」

「お、おみやげ……ですか？」

戸惑いの声を上げるセラの声に、イリヤは大きくうなずいて気恥ずかしそうに頬を掻きだした。

「うん。久しぶりの外出だったし、私だけ楽しんじゃうのもあれかなって思ってた」

ほんのりと上気した顔をごまかすように笑みを浮かべるイリヤ。

あれだけ悩んでおいてよく言うとは思いますが、本人にてみればかなり心配だったようだ。

買い直しは面倒だったので身近な店で選んだ品だが、何度もこのお土産でいいかな、などと一方通行に確認を取ってくるのだ。

本来、そういった心配事とは無縁だった一方通行は何とも言えず、適当にアドバイスしたのを覚えている。

その途中、柄でもないことを言ったような気もするが、忘れてしまった。

そんなイリヤの心配とは裏腹に、リズは待ちきれないような反応でセラの方へ近づくと、紙袋の中身をのぞき込むような格好で彼女に密着した。

「セラ。何が入ってるの。早く開けて」

「あ、はい。えっとこれは——」

せかされるようにリズの声に反応して丁寧に紙袋を開けるセラ。

そして中身を取り出す白く細い右手には、

「タイヤキ、ですか？」

「おおく。なんかおいしそう」

冷めきつてはいるが型崩れはしていないようだった。

リズの歓喜の声に、イリヤはしてやったりというような嬉しそうな表情で笑いかける。

「へへへ。気に入った？ 一方通行が買ってくれたんだよ」

「俺を勝手に巻き込むな。テメエが勝手にせがんできたんだろオが」

「えー、でも。お前が送られてよろこぶものだったらなんでもいいじゃないか、つて言ったのバーサーカーじゃない」

そう言って、自分の両の目尻を両手で上へと引き上げ、こちらを見上げるイリヤ。

それは一方通行の真似なのだろうか。それともおちよくつているのだろうか。

どちらにせよ腐っても似ていないし、なにか苛立つものはあつたので、取り合えず有言無言わさずイリヤの元に近づくと、その頭部に問答無用の手刀を加える。

「いったー!! ちよつとバーサーカー。照れ隠しにレディの頭を叩くのはどういうつもり!!」

その手刀に、大げさに声を上げて頭頂部を押さえて痛がるイリヤ。

その目じりには僅かにな涙が浮かぶが、一方通行はそれを無視して、小さく舌打ちする。

「テメエが下らねエこと言うからだろオが」

「えー絶対言ってたんだけどなー」

ブーと唇を尖らせるイリヤは、なかなか反応の帰ってこないセラの静かな挙動に気が付いて、おそろおそろ彼女の元に駆け寄る。

一方通行も、殺意がなかったとはいえイリヤに危害を加える行為をしたにもかかわらず、反応を返してこないセラに眉をひそめて彼女を見た。

心配そうに眉根を下げ、下からのぞき込むようにセラの反応を待つイリヤの声が僅かに頼りない。

「やつぱり、もつとちゃんとしたお菓子の方がよかつた?」

「いえ。すみません。．．．．．そうですね。私どものために。ありがとうございますお嬢様。それと白モヤシ」

僅かな独白の後にタイ焼きを大層、後生大事に抱え込み、札を述べるセラ。

あれだけのことをやって、嫌われていると思つたが、まさか彼女の口から自分に対して札の言葉が来ると思つていなかった一方通行は少なからず目を見張つて彼女を見た。

そして、そんな彼女の様子に少なからず違和感を感じた。

(ンだ。この違和感)

しかし、思考の端によぎつた違和感はリズムの陽気な声にかき消されてしまう。

「ねえセラ。早く食べようよ」

「ダメですリズム。これは夕食の後に頂くとしましょう」

「リズムのケチ」

「ケチではありません。夕食が入らなかつたらどうするつもりですか」

ブルーとヤジを飛ばすリズムを無視して、屈託のない笑みを浮かべるセラの様子を見て、イリヤはホツと胸を撫でおろして大きくうなずいた。

「うん。じゃあバーサーカー。私は先に部屋に戻つてから食堂に行くから」

ああでは私が、とリズムの代わりについてこようとするとセラにイリヤは「私一人でできるから」とやんわりと断つてから、一方通行の方を見た。

その表情はどこか誇らしげで自信に満ちた喜びを絵にかいたような笑みだ。

どうやら、子供じゃないとでもアピールしたいのだろうか。

その行為自体が子供なのだと言いつつやりたいが、面倒くさくなつて一方通行は小さく返事を返すだけにとどめた。

一方通行が扉をくぐるとそこには今朝、イリヤと食事を共にした食堂が姿を現した。

まず初めに目に飛び込んで来たのは中央にある食卓だった。

料理一つ運ばれていないにもかかわらず、今朝見た時とは違う雰囲気があるそこにはあつた。

柔らかなシャンデリアの明かりが部屋全体を厳かにそして、優しく照らしだし、その真下。

清潔に保たれた白いテーブルクロスの上に四つの燭台が灯り、砕いたはずのダイニングテーブルが息を吹き返したように中央に変わらず鎮座している。

装飾品一つでここまで変わるのかと逆に感心したくなる。

そしてそれを整えたであろう従者にも。

学園都市にいます、どうしても機能性を重視してしまい周りの雰囲気や感傷といった

ものを気にしない節がある。

だからこそ、初めて触れるであろう高貴な雰囲気にも一方通行はいたく感心しているのであつた。

朝も昼も夜もすべて炊飯器で調理してしまうあの体育教師にも見習わせてやりたいものだ。

「ねえバーサーカー。イリヤとお出かけどうだつた？」

「——あん？」

年季の入った扉を静かに閉めた音を耳にした後、後ろにいたリズムが唐突に口を開いた。

五月蠅いクソガキが消えたことでやっと静かに休めると思った矢先のことだったので、不機嫌ながらも一方通行はリズムの方へと気だるげに視線をやつた。

若干棘のある口調でリズムの方へと振り返るも、たいして怯みもせずジツとこちらの言葉をつリズムを見て一方通行は眉を顰め、どう対応するか頭を悩ませていた。

主人に敵意を見せた相手にも拘わらず、セラというクソメイドに比べて、このアホメイドは自分自身に対しての警戒心というものがあまり感じられないのだ。

基本、そういった悪意から来るコミュニケーションのほうはまだ幾分か慣れている一方通行にとって、曖昧な警戒心というのは逆にやりにくかつたりする。

(主人も主人なら従者も従者だな)

先ほど城に帰宅した際も、イリヤの様子を見て小さく安堵したような雰囲気を見せた以外、これといった感情の発露は感じられなかった。

その道中も、一方通行を常に警戒しているはセラだけで、時折こちらに向けるリズの視線はよくわからない色をしていた。

しかし、いま彼女から向けられている視線の意味だけははっきりと分かる。

純粋な興味。

そして、クソガキと同じように最後まで話さないと付き纏うと言っている目でもある。

正直に言えば面倒だ。

「……事後報告だったらあのクソガキから聞きやいだろ」

「イリヤからは楽しかったと聞いている。でも、私はバーサーカーから見たイリヤの様子を私は聞きたい」

つけどんに言い放つが案の定、それでは納得しないのか食い下がってくるリス。

一步一步、近づいて距離を詰めてくるそれはもはや脅迫だ。

無機質にこちらを見つめる瞳に一方通行も目をそらさずならみ返すが、あと一步で体が接触する距離まで詰め寄られる。

互いに視線だけがぶつかり合い、そうしてしばらくならみ合いが続いた後、先に折れたのは一方通行だった。

小さく、そして面倒くさそうにため息を吐き出すと、その仕草に納得したように鼻を鳴らすリズは、誇らしげに口元をゆがめて一歩だけ後ろに下がる動作をした。

しかし、それでも身体からにじみ出る催促だけは隠す気はないらしい。

あまりにも突然の質問と、彼女の興味津々といった様子に呆氣にとられた一方通行は一瞬言葉に詰まるが、今日一日の出来事を思い出して、何気ない風に口を開いた。

「喧しいったらありやしねエなアレは」

「やかましい?」

首をかしげるリズの顔に一方通行は静かに首肯すると、リズに背を向けてダイニングテーブル方へ歩いていく。

リズもそれに倣って一方通行についていくが、一方通行がテーブルの上に腰を預けたのを見届けて静かに立ち止まった。

「それはイリヤが悪い子だったってこと?」

「……そオだな。下見に関係ない店に入ったかと思えば、あれが欲しいだの、これは似合うか。うざいと思ったらありやしねエ」

「それで?」

「買ってやれば、うるさくはしやぎまわるは何も言わなければブーブー文句を垂れるは手が付けらんねエ」

そこまではつきり断言してやると、リズは意外といった風な口調で声を漏らした。

おそらく、あのクソガキはメイドたちの前ではいい子でいようと努めていたのだろう。

想像できない、とでも言いたげな口調でこちらを見つめるリズの瞳を眺め、一方通行は小さく息をついた。

まあ、このメイドの反応はある程度想像できていた。

なにせ、イリヤはあまりにも外に対しての知識が無知すぎるのだ。

それは関心がないからではなく触れる機会がなかったからだろう、と一方通行は考えている。

先ほどもイリヤ自身が言っていたが外に出ることはほとんど稀なのだ。一般的な菓子の名前すら知らず、有名店のロゴすら知らない。

良い言い方をすればお嬢様、と言えなくもないが、あれがお嬢様で収まるほど大人しい器でないことはこの半日で十分理解している。

では、外に出ていない間は何をやっているか。

それこそ、一方通行にとって容易に想像のつく簡単な答えだ。

つまるところ『お勉強』だろう。

なにせ、ひと昔の自分もそうだったのだ。

幼少期を実験と学習に費やし、目的のためにその他一切を切り捨てる。

そうなれば、『いい子』に自分を置き換えて、『お勉強』に励むしか自分を確立する手段がないのだ。

自分はそこまで『いい子』になる必要性はなかったからこそ、いまこうして『杖』を付く羽目になっているが、あのクソガキは違ったのだろう。

周りに迷惑をかけまいと周りには『いい子』である自分を見せていたのだ。

目の前のメイドの言葉が何よりの証拠だ。

しかし、リズムの驚きはすれど、否定や拒絶の感情が見られないところを見ると、あのクソガキが自分を押し殺してまで『いい子』でいようとしていることは知っているようだ。

自分の幼少期を曖昧にしか思い出せない一方通行は、小さく息をついてテーブルの上で足を組みなおした。

思い返せば、あれだけ振り回されたのは久しぶりだったような気がする。

学園都市にいたときは小さいガキと大きなガキに振り回されていたが、あれでも姉妹だ。その趣味嗜好は似通っており、まだ御しやすいかった。

そう考えると、脳裏に浮かぶ銀髪の少女はまた違ったベクトルで御しにくかったな、
と思ひ直す。

すると、その思考を割くかのように、リズが自分を呼ぶ声が聞こえ、一方通行は視線
だけをそちらに向けてリズを見た。

表情の読めない能面だが、その顔には意地の悪い色が浮かんでいるように思えた。

「ねえ、バーサーカー」

「……あん？」

「楽しかった？」

「ンなわけねエだろ」

そこだけ即答してやると、今度は口元を隠してリズはクスッと小さく笑い声を漏らし
た。

それを聞き逃す一方通行ではなかったが、さっさと会話を切り上げたのでとりあえ
ずスルーする。

「そつか。バーサーカーだとそうなんだ」

意味ありげな言葉を呟くりズは、どこか嬉しそうに身体を左右に揺らすとこちらに一
度目配せをしてきた。

どこかむずかゆくなる視線。

一度、どこかで向けられたことのある視線に一方通行は堪らず視線を逸らすと、リスの方からもう一度笑い声を押し殺したような声が聞こえてきた。

そして、しばらく独白の時間が流れた後、リスが堪らずといったようにポツリと小さく息を漏らした。

「いいなあイリヤとお出かけ。私も行ってみたい」

イリヤと買い物でもしている様子でも思い描いているのか。何気なく口にした言葉はどこかかなわぬ夢のようにも聞こえる。

独り言にはあまりにも大きな独り言だ。

そしてあまりにも抑揚のない、押し殺したような声だ。

再び、視線をリスの方へ戻してやると、少し俯き加減で表情に陰のあるリスの顔が見える。

足元に視線を落とし、静かにそして小さく笑みを浮かべているように見えるその表情は、どこか何かを押さえつけているようにも見えなくない。

しかし、そんな彼女に救いの手を差し伸べるほど自分は善人ではない。

そのことを自覚している一方通行は、黙ってその様子を眺めているだけだった。

だが、このまま時間を空費するのも得策ではないのもまた一理ある。

バッテリーの充電方法を確立したにせよ、問題はその充電方法だ。そう何度も頻繁に

接触してはメイド二人に怪しまれる。

いまは現状を整理するためにも一つでも些細な情報が欲しい。

返してやるべきか悩んだ末、このまま時間を浪費するのも無駄だと判断した一方通行は、自分の状況を呪うようにして小さくため息を吐き出し、何気ない口調でリズに語り掛けた。

「……テメエも行きやいいじゃねエか。クソガキは嬉しそうだったぞ」

はじかれた様にこちらに顔を向けるリズ。

その表情は呆気にとられた間抜け顔だったが、すぐに元の無機質な表情に戻り、ゆっくりと首を二回横に振った。

「ダメ。私たちは仕事があるから。それにあんまり動くと死んじゃう」

「あん？」

唐突に飛び出た単語に一方通行は怪訝そうに眉を顰め、一瞬だけ間をおいて考えついた可能性をたいして気にもせず聞き返す。

「病気持ちか？」

「ううん、違う」

今度ははつきりと首を左右に振るリズの方から

「私達の身体は普通の人間と違うから」

淀みのない言葉がはつきりと告げられた。

これでも学園都市『元』第一位だ。

頭の出来には自信がある。

もうすでに壊れてしまった頭脳ではあるが、それでもいまの一言を脳が処理するには時間がかかった。

「私、たち？ ……おい、それはなんのことだ」

「あれ？ イリヤから聞いてない？」

それこそ意外、とでもいうような口調が静かに室内に溶け、リズは一方通行に顔を向け自分自身を指さした。

「私たちはホムンクルス。アインツベルンの目的のために作られた人形」

「——っ！ 冗談にしちやあ笑えねエな」

「本当だよ。私とセラはイリヤの代わり。詳しくはイリヤの口からじゃないと言えない」

あまりにもあつさりと吐露する真実に一瞬だけ言葉を詰まらせるが、何でもないうようにリズはさらつと頷いた。

まるで事務報告でも聞いているような、それでいてどこか聞き覚えのある声色に、一方通行の脳裏に『とある記憶』がよぎった。

「そいつが真実だつー証拠はあんののか」

「証拠なんて無い。私たちが存在する。あるとすればそれが証拠かも」
「らちが明かない。」

そう判断した一方通行は、考え方を変えて核心をつくような『話題』を切り出す。

「お前の言うことが真実だとして、お前自身はどう思ってるんだ」

「私は与えられたことをするだけ、そこに感情は存在しない」

そのありのままの姿に一方通行は齒噛みする。

こいつは本気で言っている。

一方通行の直感がそう告げた。

そして、やっとわかった。

いままでリズやセラを見ていて引つかかっていた原因が。

そう。あまりにも似ているのだ。

実験のためなら命すら投げ出そうとするあの『実験動物』に。

向かう先が死だとしても一切を投げ出そうとするその瞳。

そうなるのが当然とばかりに行動する。

言いきれてしまう思考回路が。

似ている。

なにもかもがあの忌まわしき実験に。

「……………ッ」

そして、そこにいるのが命令をただただ実行するだけのたんぱく質の塊だと思つてい
るクソ野郎がいるという真実に。

胃の奥が。

胸の奥が。

一方通行のうちに宿る細胞のすべてが、うねるようにねじり切るようにとあるが支配
していく。

(ふざけんじゃねエぞ!! こんなところでも妹達(シスターズ)みてエに、くだらねエ目的
のために使い潰される命があんのかよ!)

力任せに振るう右手がダイニングテーブルを揺さぶる。

その叩きつきた右手が熱を持ったように熱く痛み、その痛みがまるで罰のように一方
通行を責め立てる。

「どうしたのバーサーカー? テーブルなんて叩いて」

「いいや……………なんでもねエ」

食いしばる歯が軋む。

暴れ狂う怒りを抑え込むので精一杯で、心配そうにこちらを見つめるリズムのことなど

に構ってられない。

今にも解き放ちたくなるこのどす黒い感情を目の前の『少女』にぶつけないために。ここに居るのは妹達ではない。

ホムンクルス。

人形と名乗る赤の他人だ。

同情するほどの情もなければ

まして知り合って一日もたっていない。

こうして一分一秒と時間が経過するたびに人が十人単位で人が死ぬ世界で。

それこそ自分自身が殺した贖罪の対象でもなければ、放っておいたとしても問題のな

い『いのち』。

よくある事だと切り捨てることなど容易だ。

ゆえに、一方通行が怒り狂う理由はない。

切り捨ててしまえばいい。

それでも。

一方通行は痛む右手をゆっくりと開いて手のひらを見つめる。

忘れてはならない記憶が確かに、鮮明に映し出される。

そしてその掌が、自分のものではない白く細い両手で包まれていくのが見えて、一方

通行は振りほどくように添えられた手のひらを払う。

「私とセラは人形。でも、イリヤはちよつと違う」

「それは、どういうことだ」

いつの間にか接近を許していたのだろう。僅かに視線を上げ、リズを睨みつける。

変わらず動かない能面は、それでも一方通行に視線を送り、まるで何かを訴えかけているように口を開き続ける。

「イリヤは私たちとは違う生まれ方をしてる」

魔術にそれほど詳しくない一方通行に、生まれの違いなど分かるはずない。

そのことはリズも分かっているのだろう。

あえて詳しい説明をすることなく、実直な答えを口にした。

「そう。イリヤはホムンクルスの練成という過程ではなく、ホムンクルスの『出産』という形で生を受けてる」

一度言葉を区切るリズ。

俯き、それでも口にする言葉には力があつた。

「だから、イリヤは人形に近いけど、絶対に違う」

はつきりと。

それこそ自分が伝えたいことだと言わんばかりに断言する。

それはある種の否定。

自分たちの存在を肯定し、イリヤという『物』の在り方を否定する言葉。

そして、その言葉に込められた意味は――。

圧倒的なまでの自己犠牲。

そこまで聞いて、一方通行は彼女が何を伝えたいのか、ようやく理解した。

支離滅裂。それどころかなぜ今になってこんな話題を振ったのかすら理解できない。

それでも彼女の奥底にある、『彼女たち』には無い『思い』だけは、理解した。

「私たちは人形でいい。でもイリヤは、あの子は――」

「もう、いい。喋るな」

無理やり言葉を紡ぐ小さな唇を右手で覆う。

突然のことで驚いたのか、身体を少しのけぞらせるリズだったが、柔らかく暖かい両

手が一方通行の右手をやさしく外す。

「ふっは。ねえバーサーカー?」

「あん? なんだよアホメイド」

無機質な双眸がまるで一方通行のすべてを飲み込んでしまいそうで、

それでいてその色はどこかあやふやに見える。

顔を近づけてくるリズは、まるで不思議そうに首をかしげながら疑問に思っているこ

とを口にしたり。

「どうしてそんなに悲しそうな顔してるの？」

「悲しいだア？　．．．．人形に感情なんてもんがわかんのかよ」

皮肉気に口元をゆがめると、リズは小さく小首をかしげて、首を横に振った。

「私にはよくわからない。けど、バーサーカーの顔は悲しそう。そんな気がする」

「ハッ！　それだけわかってりゃあ、テムエは人形なんてもんじゃねえよ」

『人形』らしからぬ物言いに、一方通行は鼻で笑う。

それでも、一方通行の言いたいことが理解できないのか、リズは不思議そうな瞳でもう一度首を傾げた。

「？　私はアインツベルンの人形。それは変わらない」

そこまで言われて一方通行は抑えようもない殺気を解き放った。

それは、もはや敵に向ける『それ』と何ら遜色もないものを。

今までの空気が、音が一瞬で色を失くす。

リズもそれを直感したのか、わずかに身を固めて驚いたような目つきで一方通行を見た。

低く、冷たい声が滑るようにリズの喉元にあてられる。

「おい、アホメイド。これ以上俺の前で自分の事を人形と言ってみろ。次はキレイに、殺

してやる」

「……わかった。言わない」

自身の首に一方通行の片手がかかっていることを見届け、リズはゆつくりとそして誓うように頷いた。

その言葉を聞き届けた一方通行も、リズの瞳を一瞥したのち、小さく舌打ちし伸ばした右手をゆつくりと引かせた。

そして、らしくないとばかりにリズから顔を背けた。

「……なア最後に一つ聞かせろ」

「いいよ」

短く返事を返すリズの声を聴いて。一方通行はひどく不機嫌そうに眉根をひそめて、とある仮定を躊躇なく口にした。

「クソガキが死んだらテメエ等はどうなる」

「私たちはイリヤのバックアップ。だから、イリヤが死ぬと私たちも死ぬ」

そうなるのが当然とばかりに淡々と言い切る。

その口調は数分前に、イリヤと戯れていた彼女から比べれば恐ろしく硬く冷たい響きを伴っていた。

しかし、すぐに表情を柔らかくすると、

「でも、そんなことはさせない。だって、私はイリヤが大好きだから」
そう言って、胸の前で小さく拳を握ってやる気をアピールする。

そして、能面の表情を僅かばかり崩して、それにと続けて、扉近くにチラリと視線をやった。

「それにセラもきつと私とおんなじ気持ちだと思う」

そこにはいまだにクソガキから受け取った土産を大事そうに抱えて呆けているクソメイドの姿があつた。

その姿を一瞥すると、一方通行は仕方ないとばかりに肩をすくめて小さく息を吐き出した。

「そうか。………。テメエは、あそこで突つ立てるクソメイドより優秀なんだな」

「そう。わたしはセラより優秀」

ふふん、と胸を張り皮肉気に言つた言葉を真に受けるリス。

こういつた所も似ている、と口には出さないが胸の内では、突然リスが一步こちらに歩み寄つて顔を近づけてきた。

「………んだよ。まだなにかあんのか」

「ねえバーサーカー。バーサーカーはイリヤのために戦つてくれる？」

顔が触れるか触れないか、

そんな距離まで顔を寄せ、唐突にかけてくる言葉に、一方通行はもう一度彼女の言葉をあざ笑うかのように鼻を鳴らした。

「はッ。この俺がクソガキのために働くだア？ 誰があんなクソガキの目的のために戦うかよ」

右手をひらひらと動かして、強引に話を切り上げようと体を預けていたダイニングテーブルから動き出そうとするが、突然一方通行の右手が柔らかいものに包まれた。

それはリズムの両手だと理解するのに時間はかからなかったが、一方通行の鋭い視線を受けても離そうとしない。

「待って。さっきの話、無理矢理イリヤに聞こうとしないで。イリヤに傷ついて欲しくない」

「……いいから手を離せ」

「お願い。約束」

ジツとこちらの返答を待つリズムの視線に、一方通行は鬱陶しそうに見返し、やがて。

「……あ——ああ」

小さく根負けするようにつぶやいた。

「うん約束。じゃあバーサーカーはそこに座ってて。私はセラを起こしてく」

「……ああ、さっさとしろ」

そうして一方通行の手を放し、パタパタと放心状態のクソメイドを押しして食堂のキッチン奥へと消えていくリズ。

その姿を見送り、一方通行は乱暴に用意された椅子を引いて、勢い良く腰を下ろした。どこか満足げな雰囲気を手を勝手に醸し出して消えていったメイドのことを一瞬だけ考え、

ギシりと軋ませる椅子の音を耳にして、一方通行は体のすべてを椅子に預けて小さく息を吐き出した。

そして、薄く瞳を閉じると足を組んでから忌々しそうに小さく舌打ちした。

(……クソツタレが。ここでも、こんなくだらね工事のために使い潰される命があんのかよ)

暗転する視界の中、一方通行は忌々しそうに胸中で呟き、とある実験に思いをはせる。脳裏に、あの幼き少女たちの笑顔がちらつき、一方通行はもう一度小さく舌打ちした。

食卓

イリヤが部屋に戻ってから二十分といった所か。

そして鬱陶しく付き纏っていたメイドが消えてから約十分。

様々なことがありすぎた波乱の一日が過ぎ、そのつかの間の休息に大きく息を吐いて堪能する一方通行は思案に暮れていた。

教会という名の監視役の存在。

この世界での日常風景。

そして、自分とは異なるサーヴァントとの戦闘。

昨日今日で、街を散策し、実際の生活に触れ、多くの情報を得た。

そこから必要な情報だけを吟味し、咀嚼して感じたことは、『まだ足りない』だった。白いテーブルクロスの上に置かれた燭台。その数々の蝋燭に灯される火を眺めていた一方通行は小さく舌打ちをして大きく天井を見上げる。

今日一日を通して得た経験は決して無駄ではない。

むしろ、ここに召喚された初日に続けて二体のサーヴァントと対峙できたのは一方通行にとって僥倖だった。

おかげで既存の常識にとらわれることなく非常識を受け入れることができた。

そこから聖杯戦争というくだらない戦いがどういったものなのかある程度予想できるようにはなった。

戦場となるのはおそらく市街地だ。

時間帯問わずに戦闘になることを考えると、おそらく期間無制限のバトルロワイヤルになる。

そして、キャスターが人目につかないところで奇襲を仕掛けてきたところを考えると、この戦いは一般の人間には見られてはならない。

つまりこの戦争自体が人間には知られていない秘匿の存在なのだ。

そうなると、監視者たる言峰といった教会側の人間と都市の平穏とした平和な空気にも納得がいく。

だが、情報が足りないというのは依然として死活問題だ。

バッテリーの充電手段を確立した以上もう焦る必要はなくなつたが、それでも敵は待つてくれない。

この世界での死がⅡ向こうの世界での死に繋がると確証が得られない限り、死ぬことは許されない。

であれば、いまは状況を整理するための『情報』。つまり、いま何ができて、何をしな

くてはならないのかを理解しなくてはならないのだ。

でなければ先に進むことなどできないし、この戦争が自分の意志の外で勝手に行われる以上、火の粉が降りかかるのは必至だ。

(クソガキがどうなるかはさておいて、俺のやるべきことは限られてくるか)

そこまで考えて、一方通行は一度制止して自分の右手を天井にかざした。

この手に、伝わるあのぬくもり。

そしてあの能面のような表情。

先ほどのリズの言葉がささくれのように一方通行の心をざわつかせ落ち着かずにいる。

ホームクルスとクローン。

作られ方は違えど、この世にまた利用されるためだけに生まれた命があると知った瞬間、一方通行の血は明らかに沸騰していた。

危害を加えるものだけを排除する、そういう静観の姿勢をとっていたはずだったが、あの時ばかりは天秤が一気に傾いた。

何かが変わろうとしている。

ひと昔の自分だったらこの変化を、苛立ちと捉え多くのを巻き込み、排除しようとしただろう。

だが、いまは違う。

変化を受け入れる。それこそ同居人の体育教師にはいい兆候じゃん、などと暢気なことを言われそうだが、それも悪くない。

少なくとも、あの地獄から必要なものだけを取り戻してきた一方通行はもう覚悟を決めているのだ。

たとえばそれがどんなに似合わない日常だとしても、彼女らを守り通すため、彼女らの日常を支えるためなのならどんなことでもすると。

だから、いま自分の中に芽生えているこの違和感の正体。これは簡単に切り捨てていい問題ではない。

そのことだけ頭の隅に入れておけばいい。そう考え、右手を固く握りしめる。すると、廊下から何やらけたたましい足音が聞こえ、一方通行は小さく息を吐き出した。

瞳を閉じ、聴覚を尖らせて集中する。

足音を立てないようにひっそりと歩いているようだが、床や靴底が擦れる音を消しきれない。

暗殺者ならこれ以上の失態はないだろうし、第一、この暗殺者はバレていないとも思っているのだろうか。

一歩一歩、間抜けな暗殺者の足取りが聞こえ、一方通行は小さく嘆息するとあきらめたように思考を中断して、気の抜けたように椅子に寄り掛かった。

そして静かに開け放たれる扉の音が聞こえたあと、

「お待たせバーサーカー！」

疲れを知らない陽気な声が後ろから突き刺さった。

時計の刻む音がかき消され、まるで喧噪のはじまりを告げるように問題の台風はやってきた。

(やつときた、か)

静かに目を開け、一方通行は気だるげに視線だけをイリヤの方に向けると、そこには何とも間抜けな姿があった。

正確には首だけを扉から覗かせ、首から下はまだ廊下の向こうという何とも格好のつかない少女の姿。

おおかたガキ特有の悪戯心というものだろう。

何が楽しくてあんな醜態をさらしているのか一方通行には理解できないが、本人は至つてご機嫌の様子だ。

適当に深いため息をついてやると、扉の向こうでクスクスと笑い声が聞こえてくる始末。

「ご満悦なことは結構なのだが、ここまで待たされた一方通行の苛立ちはどこへ向けられたいのだろうか。」

(どいつもこいつも何が楽しくてあんな醜態をさらしてるのかねエ)

脳裏に浮かぶワンピース姿の少女や、アオザイの姿の少女の顔が思い浮かび、一方通行は忌々しく前髪を掻き上げると、小さく舌打ちする。

当たるものがない以上、ここで悪態をついても仕方ないのは理解しているが、ここでクソガキに当たるのはどこか筋違いのような気もする。

しかも、こんなクソガキでも、彼女が席につかなければ料理が運ばれてこないのだ。

この『先』。この少女を中心に物事が進んでいくと考えると嫌でも頭が痛くなる。

そんなことで頭を悩ませつつも一方通行は重たい溜息をもう一度吐いて、さつさと席に着くようイリヤに向けて顎をしゃくった。

「遅せエ。ソんでさつさと席に着け、飯が来ねエだろ」

「もおーレディの身支度は遅いんだよ。もう少し配慮つてものを持って欲しいかも」
「お子様がいくらめかし込んだところで、お子様なのは変わらねエだろオが」

「だ、か、ら!! 子ども扱いしないでっば!! 私は立派なレディなの」

けたたましく床を叩くブーツの音が大きくなり、遂に膨れっ面のイリヤが横から顔を
出してきた。

ほんのり上気した頬を膨らませ、椅子をゆすつて抗議の声を上げるがそれに取り合うほど情緒豊かではない。

何度言つたらわかるの、などとあまりにもやかましく耳元で騒ぎ立てるので堪らず手を額にいれて黙らせてやると、さらにやかましくブータレと文句を口にしてきた。

そんな彼女を尻目に、鬱陶しそうにイリヤを遠ざけるとため息交じりの嘲笑を浮かべた。

「……レディ、ねエ」

紫を基調にした鮮やかな上着に絹でこしらえたような光沢のある白いロングスカート。小さい体軀に合わせて作られたそれらは確かにイリヤの肌と銀糸の髪をより一層際立たせている。

おそらくお気に入りの一着なのだろう。

昨夜も見たような格好だが、所々装飾が違うところを見ると少しだけ大人っぽく仕上がっているようにも見えなくもない。

しかし、それでもあくまで服装がそれらしいのであって、一方通行の目にはよくて背伸びしたがりの中のガキにしか見えないのも真実だ。

一方通行の視線に何かを感じ取ったのか、イリヤは頬を膨らませつつも自分の服装にもう一度目を落とし、なぜか納得したように手を打った。

「あ、わかった。こんなきれいなお嬢さんがいるからバーサーカー照れてるんでしょ」
「おとといきやがれ」

「なっ!!? もうバーサーカーのいじわる!!」

口元に手をやりニヤニヤと不気味な擬音でも聞こえてきそうな笑みを浮かべるイリヤを眺め、哀れな戯言に一刀両断をくれてやる。

すると、不気味なにやけ顔は一瞬で消し飛び、その小さな顔に怒気の色が浮かんでくる。

終いには、頭から蒸気を吹き出す勢いで憤慨すると、牛のようにうなり声をあげてみずんと向かいのテーブルに向かっていく始末。

そして、お嬢様にあるまじき振る舞いで荒々しく椅子に腰を下ろすと、一方通行を睨みつけた。

正確には、一方通行の浮かべている哀れな嘲笑を見てさらに不細工に頬を膨らませた。

「あー! バカにしてるでしょう。私だってもっと大きくなるんだからね」

「はッ、まあ無理だろうが、せいぜい努力することだなア」

身を乗り出して抗議の声を上げるイリヤに、適当に返して鼻で笑ってやると、席に着いたイリヤがキョトンとした表情でまじまじとこちらを凝視して、一度首をかしげた。

そのあまりの間抜け面に、今度は一方通行が眉根をひそめて顔をしかめた。

「どうした、ブサイクな顔して」

「だからレディに向かつてその言葉は無いと思うんだけど!!」

憤慨した様子でもう一度身を乗り出すが、すぐに尖らせた唇を引つ込めて言いにくそうに言い淀む。

「いや。その。なんかバーサーカーの顔が悲しそうに見えて……気のせいかな？」

そこまで言われ、一方通行は胸の奥で小さく舌打ちすると、悟られないように小さく息をついた。

（このクソガキまでメイドと同じことを言いやがる。俺って奴はそんな顔に出やすいんですかねエ）

これでも、暗部で活動してきた一方通行だ。

考えが表に出るような間抜けな真似はしてきた覚えはないし、そこまで表情に出やすいということはない。

なまじ察しのいい馬鹿どももいたが、それはあくまで経験則に基づく勘など不確定要素の中から導きだされた答えがほとんどで、実際に一方通行の心情を探り当てているわけではない。

でなければあれほどまでに過酷な糞溜めの中を生きていくなどできるはずがないの

だから。

彼女の言葉もあながちその域を出てはいないが、なまじ間違いだと否定できないので困ったものだ。

「ハツこの俺が悲しいって面する奴かよ。目でも腐ってンじゃねエのか？」

「どうしてバーサーカーはそんな酷いことばかり言うのかな!? もう、せつかく心配してるのに」

「俺に心配なンギアいらねエンだよ。……お前は自分の心配でもしてろ」

キョトンと、それこそ不思議な生き物でも見たような顔を一瞬浮かべるイリヤだが、それでもすぐに底抜けな笑みを浮かべ頷いた。

「ふーん、まあそうだよ。私の召還したバーサーカーが負けるなんてことありえないんだから」

負けるつもりは毛頭ないが何を根拠にそう言っているのか理解できない。

仮にも自分を殺そうとした奴が目の前にいるのか理解できない。

楽観的なイリヤの脳の出来に呆れつつも、一方通行は小さく息をついて深く椅子に座りなおした。

料理が運ばれてくる気配は一向にない。

何かを話しかける気がない一方通行と、会話のきつかけをつかめないでいるイリヤ。

そうこうしてお互い黙り込むという気まずい空気が流れ、時計の針の音だけが無情に時を進めていく。

そして堪らずといった風にイリヤが独り言でも喋るようになるように会話を切り出した。

「そんなことよりセラとリズおそいなー。もう準備できてるのに」

目の前に並べられた食器を見て、首をかしげるイリヤ。

その疑問は当然のものだし、彼女からしてみれば、いつもはすでに料理が並んでいてもおかしくない時間なのだろう。

「どうせクソメイドを正気に戻すのに苦労してんだろ」

ポツリとつぶやく一方通行の言葉に、イリヤは不思議そうにもう一度首をかしげた。

なんのことだか理解できていないといった感じだが、向こうの扉でどんな復興作業をしているのか一方通行も知らないのです、そこからは黙って口を噤む。

すると、

「あつ！ 出来たみたい」

イリヤの声に続くように、厨房の扉がゆっくりと開け放たれ、銀色のカートの上に料理を乗せたメイドが二人、扉の向こうから顔を出した。

「お待たせしましたお嬢様」

「イリヤ待った〜?」

「うん、もうお腹ペコペコだよ。早く食べよう」

「大変申し訳ございませんでした。直ちに用意いたします。リズはバーサーカーにお願いします」

忙しくかつ失礼にならないように食膳に色とりどりの料理を並べていくセラ。

そんな彼女を一瞥してから、一方通行は自分の横にカートを押してやってくるリズに目を向けると、彼にしては珍しく小さくねぎらいの言葉を掛けた。

「おい、ずいぶん掛かったな」

「うん。結構疲れた」

「ご苦労オなこった」

「それより——」

皿の上に料理を盛りつけながらも、こちらに視線をやるリズの瞳には鋭い色が宿る。

その意味を理解した一方通行は、大きな口を開けてあくびをするもはつきりとした口調で返した。

「まだ何も聞いちゃいねエよ」

「それならいい」

そう言つて準備を終えると、リズはメイドらしく一礼したのちに後ろに下がり、厨房の扉近くまで歩いて行った。

「準備かんりよー」

「——では、私どもは扉の前で待機しておりますので、何かありましたらお呼びください」

セラの方もイリヤに恭しく礼をしたのち、こちらに鋭い視線を送ってから扉の方に下がっていった。

おおかた、これ以上好き勝手はさせない、という意思表示なのだろう。

もはや隠す気はないのだろう。セラの動きに若干、緊張が走っているのはそのためだ。

その視線をあえて受けたうえで一方通行は無視を決め込んだ。当然、そんなセラの警戒心を理解していないイリヤは下がりゆくセラに礼を言つてこちらに視線を向ける。

そして、

「じゃあ——。いただきまーす」

イリヤのやかましい声が食堂に響き、それぞれが勝手に食事をとり始めた。

無言、と呼べるほど静かな夕食を終え、満足げに出た言葉がむなしく部屋の中に溶けていく。

夕食と呼ぶには随分と遅くなってしまったが、それでもリスとセラの料理は一食も欠かすことができないくらいおいしい。

そのことをバーサーカーも知っているのか、彼にしては珍しく食事のときはいつもより雰囲気静かなのだ。

今朝から思ったのだが、この目の前にいる白いサーヴァントはクラスのわりには上品に食事をとる。

本来、魔力を供給されているサーヴァントは食事も睡眠も不要な使い魔、という部類に入る。

しかし、それは十分に魔力を供給されているサーヴァントにのみ当てはまるもので、自身の魔力より上回る存在をサーヴァントとする場合、こういった食事や休息を与えることで魔力消費を抑えるという手法がある。

もちろん、アインツベルンたるわたしはそんな失態はしない。バーサーカーに回す魔力だつてきつちり用意できる。

しかし、わたしの体を気遣つてかセラとリスが負担をかけないよう、サーヴァントにも食事を出すことを前々から提案してきたのだ。

だからこそ、こうして食卓を囲んでいるのだが、

(すっごくきれいに食べるんだよね。バーサーカー)

理性が飛んでいることこそがこのサーヴァントの強み。にもかかわらず、下手したらわたしより綺麗な作法でバランスよく食事を勧めているのだ。

ナイフを食器に擦ることもなく、無作法にメインの子羊のソテーを頬張るでもなく、適度な量に切り分け口に運ぶ。

まるで食事のお手本だ。

自分もここまでできるようになるまで相当セラに教え込まれたが、今のバーサーカーは限りなく自然体で食事を楽しんでいる。

ふつと彼の右手を見ると、無表情でリズの淹れた紅茶をすすり、眉間にしわを寄せる白いサーヴァント。

飲み慣れていないのか、それとも単に好みではなかったのか。

どっちかはわからないけど、それでも全て残さず飲もうとするのがどこかバーサーカーらしい。

そんなバーサーカーが来てから二日経った。

たった二日であるが、何となく彼のことがわかってきたような気がする。

殺気に交じる生温かい血の通った視線。

言葉では厳しいことを言うが、言葉の端から見られるやさしさ。

曖昧な輪郭は見えてきているのに、その全容をとらえきれていない。そんな感覚がわ

たしの背を這っていきわたしを苛立たせるのだ。

寄り添おうととしても、その分だけ距離を開けられるような感覚。

それがどこかもどかしくて、そしてそれと同時に彼にとつては触れてほしくないものに見えて、どうしていいのかわからなくなってしまう自分が恨めしく思う。

一度、セラを呼びつけてティーカップに紅茶を淹れてもらう。

静かに注がれた赤い液体は、白い壁に阻まれるように小さな器の中で波打ち、静かに茶葉の香りと共にわたしの心を落ち着かせる。

それをゆっくり口元に運び、気持ちいを落ち着けるようにもう一度息をついた。

夕食前のやり取りもそうだけど、バーサーカーはどこか私との接触を避けたがっているように思えてしまう。

自分から積極的に何かを知ろうとしない。

別に殺されたいという訳じゃないのはわかっている。でも、バーサーカーがわたしに對して会話をしてくれるのは、足りない情報を補う時だけだ。

つまり、自分の身に何か危険が迫った時だけで、ちっとも私のことに対して興味を持ってくれないのだ。

別に、それが悔しいとは思わないが、どうしても、なんか寂しいと感じてしまうのだ。

「うん。おなか一杯。セラ、リズ。今日もとってもおいしかったよ。……ね、バーサー

カー？」

「……………」

味気なく紅茶を啜り、わたしの言葉を無視するバーサーカー。

やっぱり。何も返してくれない。

彼は、本当にうつとおしいと思つた時しか私に言葉を返してくれない。

こうして、そのことを目の当たりにすると、うん。やっぱり寂しくなる。

「もう、何か言つてよバーサーカー」

もう一度、声のトーンを落として語り掛けるが結果は同じ。

無言でもう一度紅茶をすするバーサーカーの姿はどこか他人事で、興味のない、そんな色を浮かべていた。

そんなバーサーカーの態度を見かねてか、食膳に並べられた食器をかたづけ、特別とばかりに特製のプリンを目の前に置くセラが、

「構いませんお嬢様。私達はお嬢様に満足していただければそれでいいのです。このようなモヤシに褒められても嬉しくありませんので」

いつものセラらしからぬ乱暴な物言いではつきりと言いつつ切った。

声色がどこか硬く、わざと尖らせているようにも聞こえる。本当ならここで嗜めるのが主たるわたしの役割だけど、この時ばかりは少しありがたかった。

セラの言葉に、眉を動かして静かに反応するバーサーカー。

そこでようやく一方通行は淡く白いティーカップをテーブルの上に置き、初めてセラの方を見据えて小さく笑みを浮かべた。

「言ってくれるじゃねエか。仮にも俺はこのクソガキのサーヴァント。つまり客みたくないもんだぜエそんな対応で良いのかよ」

どこか調律を間違えたような間延びした声が、一瞬静寂をもたらした食堂に響く。

あれは明らかにセラを挑発している。それがわかるくらいにあからさまな物言い、喉を鳴らすバーサーカー。

そんなことでいちいち角を立てるセラではないが、その表情はどこか悔しそうに映り、そして何他言いたげに唇をかんでいた。

不思議に眉根をあげていると、バーサーカーはそれだけでなく愉快そうに口元を歪める。

「それに、このメイドは空になったカップに紅茶を注ぐことすらできねエ低能なのか？　まるで従者失格だな」

それをバーサーカーが言う!?　と思わず声を掛けそうになったが、また下手なことを言つて本気で彼を怒らせかねない。

食事時に関してはあまりいい思い出はないので黙つて口をつぐんでいると、いつの間

にか横に控えていたセラが私の心を代弁してくれた。

「あなたはお嬢様に何をしたのか覚えていないんですか？」

「あ、それは私も許せなかったかも」

「え、ちよつりズ!？」

わたしの後ろでリズの同意の声が上がる。

確かバーサーカーの後ろで給仕をしていたように見えたがいつの間。

そうして慌てて見上げたら、黒い二つの柔らかいボールが私の顔に当たって再び驚く。

何事かとわたたと手を動かして重たい物体を押し上げるとリズと視線が合う。

そして、

「イリヤのエッチ」

「なあ!？」

失礼極まりない言葉が耳元で聞こえてきて、身体をひねって慌ててリズの方を振り返る。

すると、珍しく真剣な表情をしていたリズが唇に人差し指を当て、静かに空いた片手でバーサーカーの方を指さした。

セラがここまでできつい言い方をするのは珍しいが、ここまで真剣な「表情」をするリ

ズも稀だ。

わたしは首をかしげて、バーサーカーの方へ目を向けると、どこか気まずそうな表情が見えた。

確かに、セラにそれを言われたらバーサーカーも大人しくならざる負えない。

わたしを守る守らないはともかく、この城の庇護にあうということは必然的にセラカリズの世話になるということだ。

この城の主はわたしということになっているが実質、この城のカースト制度のてっぺんはわたしではなく衣食住を支えるセラなのだ。

さらに、今日の夕食を作ったのは他ならぬセラとリズでありそのすべて食べたということは、彼女らの世話になっているということだ。

そんな彼女らの非難の視線は並々ならないほど逃れ難くきついものなのだろう。

バーサーカーは逃れられない三つの視線をその細い身に浴び、小さく舌打ちしたのち、何かにあらがうように鼻を鳴らして悪態をつき始めた。

「はッ！ ああの程度でびびってるようじゃあ、この先、生き残るなんざア無理な話なんだよ」

「び、びびってないもん!!」

思わず身を乗り出して抗議の声を上げる。

食事のマナーとしては減点だけれども、こればかりは看破できない。

何より許せないのは自分の行動をちゃっかり棚上げしてわたしのことを蹴落として
いるその態度だ。

しかも、すっかり無能の烙印みたいな評価を下しているのが許せない。

しかし、当のバーサーカーは面倒くさそうに、それでどこか予想通りといったしたり
顔でもう一度は鼻を鳴らすと、小さく馬鹿にするような笑みを浮かべ手を仰いだ。

「おいクソガキ。強がりもそのくらいにしておけ、あとで自分が惨めになるぞ」

「ぐぬぬぬっ！ サーヴァントにバカにされてる!!」

思い当たる節があるのが余計に悔しい。

ギリギリと歯噛みしてバーサーカーを睨んでいると、ふと横に立つセラと視線が合っ
て、首を傾げた。

どこか悲しそうな表情を浮かべるセラ。

そんな彼女が突然膝を折って、わたしと同じ目線まで屈んでくるのだ。驚かないわけ
がない。

思わず固まってセラの動きを目で追っていると、セラは私の両手を自分の両手で包み
込むようにして胸元にまでもっていった。

「お嬢様!! 厚かましい意見ですがお嬢様のために言わせて頂きます。私はこのサー

ヴァントと共に食事するべきでは無いと思います」

「えっ？ どういうこと？」

思わずキョトンとした顔でセラを見つめてしまったが、非難されているバーサーカーはなんの言葉も出さずこちらを見ている。

まるで、わたしやセラの言葉を見極めるかのような目つき。

そんな彼を横目で眺め、もう一度セラの方へ視線を戻すと、いまにも泣き出しそうな強い視線がわたしを見つめる。

今まで、わたしに多くのことを教えてくれたのはセラだ。

いつも厳しくそして色々なことを教えてくれる。そりや怖い時もあつたけどその教えてくれたことは全部が正しく、すべてわたしのことを思ってくれているからこそその態度だとちゃんと理解している。

だからこそどんなに厳しくてもわたしはセラを信じる事ができた。

そんなセラが、こんなにも表情を出して、真剣に意見してきたのは初めてだったりする。

わたしはどう返していいのか、思わずリズの方を見るが、リズは首を静かに横に振るばかりで助け舟を出してくれる気配はない。

主として、こんなに情けないことはないけど、それでも、どう返せばいいのかわから

ない。

どうしようか迷っていると、それを察してくれたのかセラは少し唇をかんだあと静かに唇を動かした。

「このサーヴァントはお嬢様の力で現界しているにも関わらず、無礼な態度。そして二度にわたる恐喝。このまま一緒に食事などではお嬢さまの身が危険です!!」

「でも、セラとリズは魔力供給のためにバーサーカーにも食事を準備した方がいいて
——」

「確かに。確かに私たちはお嬢様の体を気遣い厚かましくも、そう提案させていただき
ました。ですが今は状況が違います!!」

まるで、自分の発言全てが間違っていた。

自分の浅はかな判断のせいであたしが危険にあっている。

そんな風に、自分自身のすべてを否定するように首を横に振りセラ。握った両手の力が僅かにこもる。

早口ながらも、セラの訴えは止まらない。

自身を糾弾する声が、留まることなくセラの口から吐き出された。

「あれはバーサーカーがお嬢様に従順だった場合です。いまの奴はその基準にすら値しません。お嬢様、どうか、どうかわたしに、奴を遠ざけるよう、そう、お申し付けくだ

さい」

セラの訴えは萎んだ風船のように弱々しく消えていき、うなだれるセラの表情は見えない。

そんな彼女の言葉を引き継ぐようにリズがセラの肩に手を置くと、一呼吸おいて彼女らしくゆつくりと口を開いた。

「まあ確かにあの時は危なかったかな。でも、どうしてイリヤはバーサーカーと一緒に食事しようなんて思ったの？ イリヤは怖くないの？」

リズの優しい問いかけてくる声を聴いて、わたしは不謹慎にもうれしくなった。やっぱりセラはセラだ。

わたしのために。私が危ない目に合わないようにこんなにも心配してくれる。リズだつて表情にはあまり出さないけど心配してくれているのだつてわかる。

だから。ここはこの二人の主としてちゃんと答えなくちゃならないと。そう思った。「最初は——うん。確かに怖かったよ。私、マスターなのに全然言う事聞いてくれなくて、チョップもするしとつても痛かった」

朗々と、まではいかずとも自分の中から言葉を探し出してゆつくりと、それでもつて心を込めて口にする。

「今日の昼間だつてわたしの言うことなんてろくに聞いてくれなかったし、怖かったこ

ともたくさんあつた」

思い返せば、今日一日がこんなにも長くも短く感じたことなどない。

怖いことも本当にたくさんあつた。

初めての出来事もそれ以上にたくさんあつた。

でも、それらはすべてバーサーカーがいたから。

彼がいたからこんなにも楽しい出来事があつたのだ。

セラとリズには悪いけど、これだけは言わなきゃいけない。

でない、わたしは本当の意味でバーサーカーの『マスター』になることなどできない。

だから、わたしはゆっくりと顔を上げるセラの目を見て、優しく微笑んで見せた。

「それでも私が召還したサーヴァントなんだから。一緒にご飯食べるのは当然でしょ？」

「……ですがお嬢様」

「セラ、もういいでしょ。イリヤもああ言ってるんだし」

「っ!! リズはいいのですか!?! あんな凶暴なモヤシがお嬢さまの傍に近づいているのを許して!!」

信じられない、といった口調で顔をリズの方に向け、立ち上がるセラ。

その表情はどこか裏切られたようにも見えるが、当のリズはキョトンとした顔をして、何の疑いもなく間髪入れずに首肯した。

それこそ、当たり前のように。

「うん。いいよ。それにバーサーカーは悪い人じゃない」

「どうしてあなたがそんなことを言い切れるのですか!!」

「だってバーサーカーは、なんだかんだ酷いことを言ってるけど結局は何もしない」

そう口にした途端。セラの顔から表情が消える。

それでも、リズは構わず飄々と何でもないように言葉を紡いでいく。

「私たちがイリヤを助けようとした時も何も言わなければ勝てたのに、わざわざ忠告してまで私達に怪我をさせないように手加減してくれた」

きつと初日に私を守ろうとかばってくれた時のことを言っているのだろう。

あのあと念入りに確認したことだが、派手な音を立てたわりにはリズもセラも傷らしい傷はなかった。その時は彼女たちに怪我がなくてホッとしてたけど、キャスター戦のバーサーカーを見ればあれが本気だなんて思えない。

リズの言葉に思い当たる節があのか、僅かばかりに唇を噛むセラ。

セラが唇を噛むときは、少なくとも不安で苛立っている時だけではない。核心を突かれたときも彼女は唇を噛む。

長い間、たまにリズに言い負かされるときなんかはしよっちゅうこの癖を出すのを、わたしはちやんと知っている。

だからこそ、聞きたくないような認めたくない。

そんな色を灯し、鋭い目つきでリズを睨みつける彼女の瞳は、リズの言葉を理解しているのだろう。

「それって少なからず私たちを傷つけたくないってことでしょう？」

「リズ——」

確認。そんな風に小首をかしげるリズの言葉に、セラは何も口を出せない。

セラとリズ。

この二人の間にある絆は、きつと私と同じかそれ以上の深く、そして絡み合っている。それこそ、わたしが立ち入る隙すらなくなった一つの理念を胸に抱いて。

わたしにはそれがどのようなものかはわからないけど、それでもメイドという間柄である彼女らには私には想像できないほど深く信じあっている。

だからこそ、何も言わなくてもセラがリズの言葉に納得していないことに気付けたのだろう。

リズは、小さく咳ばらいを一つ打って、セラから離れていく。それも一步後ろに下がるのではない。

まるでどこかの林を散歩するかのような気軽さで。

「うん。確かにバーサーカーはイリヤを殺そうとした。それは私も許せない」

一歩一歩ゆつくりと歩みを進めていくリズ。

彼女の歩みを私とセラはゆつくりと追い、それを知ってか知らずかりズは口を動かしながらも何でもないように歩み続ける。

「それでも。バーサーカーはイリヤと向き合おうとした。最後に甘いことを言うのも殺す気なんてない証拠」

誰かの言葉を代弁するかのよう。

本人にはその気はなくとも。その一歩一歩は確かに近づいていく。

静かに語られる彼女の言葉を遮る者は誰もいない。

そのことを知っているのか、リズは自信ありげな表情を浮かべ、やがて立ち止まる。

「そう。それはまるでチェックリストに一つ一つ埋めていってイリヤを助けようとするみたい」

「それは、あくまで推論です。お嬢様が危険に晒される事には変わりありません」

「そうだねセラ。だからバーサーカー」

「………あ」

初めて、リズとバーサーカーの視線がぶつかる。

一切そらされることのない視線がぶつかり、リズがゆつくりと腰をかがめると、
「もうあんな乱暴なことしないって約束して」

リズは優しく彼の細く白い手をやさしく包み込んだ。

ただただ傍観していたバーサーカーは怪訝そうにその両手を見るばかりで振り払おうとはしない。

わたしですら容易に触らせてもらえなかった彼の手を、リズはあんなにも簡単に手を取った。

誰にも触れさせなかった手を。

「リズ！ お嬢様の言う事も聞かないようなサーヴァントにお願いしたところで——」

「セラは黙ってて。バーサーカー？」

間髪飛ばずセラの声を珍しく厳しい声色で閉じさせる。

そして再びゆつくりとバーサーカーと視線を混じり合わせる。

ゆつくりと。

ゆつくりと額を合わせるように近づけていく。

そして、

「バーサーカー。約束して」

「……………」

「バーサーカー」

「.....わかったよ」

「えっ!!」

たった一言。

短くも弱々しいそんな一言。

それでもわたしが引き出したかった一言をリズが引き出した。

あのバーサーカーが、リズの言うことを聞いた。

それだけで、わたしとセラは顔を見合わせて、もう一度バーサーカーの方を向いた。

リズは満足げな表情で胸を張ると、荒々しく鼻を鳴らして立ち上がり、バーサーカーは忌々しそうにリズの両手を振り払い小さく舌を打つ。

「絶対、約束だからね」

「だから、わかったつってんだろ。しつけエぞ」

「素直じゃないね。——セラ。これでいいでしょ」

「しかし、そんな口約束では——」

「おいクソメイド」

「——っ!」

まるで夢みたいな出来事に戸惑うセラに、バーサーカーは立ち上がりセラの名を呼

ぶ。

先ほどまでのように荒々しかった彼女の姿はなく、どこか怯えたように身構えるセラ。

そんな彼女を見つめるバーサーカーは、どこか当然だなどとも言いたげな寂しい表情を浮かべ、忠告でもするように乱暴な言葉を吐き出した。

「テメエが俺に対して抱いてる警戒心は至つて正常だ。むしろ、このアホが異常なだけだ」

そう言つて横に立つリズを親指で指す。当の本人はいまいちよくわかっていないらしくポーつとバーサーカーを眺めている。

「……お前はそのまま俺に対して警戒心を持ち続けろ。決して俺に気を許すな」
そう言つて、バーサーカーはおもむろに扉の方まで歩き出した。

その後ろ姿が、あまりにも遠く感じてわたしは思わず椅子から飛び降りてバーサーカーの名前を叫ぶ。

「待つてバーサーカー！ どこに行くつもりなの？」

「便所だ。つまんねエこと聞くんじゃねエ」

制止させるわたしの声に、気だるげな声でくだらなそうに返すバーサーカー

そう言つて扉に手を掛けたところで、誤作動を起こしたように突然立ち止まり、まる

でなんでもなかったかのようになわたしの方に振り返った。

「——ああそうだった。おいクソガキ、後で二人だけで話がある。適当に時間が経ったら俺がいた倉庫まで来い。俺とお前にとつて大事な話だ」

そこまで言つて、なにか言葉を詰まらせたように黙ると、一方通行はあえてこちらを向かないように、扉の方を向き直り、

「それと、………メシは悪くなかつた」

そう小さく言い残して、扉をくぐつていった。

残り香のように扉を閉める音がやけに大きく聞こえ、一瞬呆けたような静寂が再び食堂を支配した。

あとに残るのはうるさく時間を刻む時計の音と、三人分の浅い呼吸の音。

あのにぎやかな食堂がいまはこんなにも静かに感じられる。

「いっちゃったね」

緩慢な動きでのらりくらりと消えていった白いサーヴァントの行方を見つめ、ぽつりと眩くりズの言葉にわたしは小さく頷いた。

「うん。でもバーサーカーも少し心を開いてくれたような気がする。——ありがとね、

セラ。それにリズ」

「うん。わたし頑張った」

まるで一つの大仕事を終えたみたいに大きく頷くリズに、わたしは大きく頷いて、ゆつくりと椅子に腰かけた。

そして大きく息をついて、天井を仰いだ。

気が抜けたとでもいえばいいのか。

緊張しすぎて立っていられなかった。

今日は本当にいろいろなことがありすぎた。でもそのすべてがどこか心地よく、ちよつとずつでも進んでいるんだと感じられてうれしくなる。

ニマニマと緩む頬が抑えきれなくて、堪らずリズの名前を呼ぶと、元の鞆に戻るように駆け足で走ってくるリズを抱き留める。

勢いがつきすぎたせいか、座ったままではバランスが悪く危うく後ろに倒れそうになったが、さすがリズ。絶妙な力加減で倒れないように椅子ごとわたしを支えて見せた。

「ふわあ！ リズ重いよ」

「ムツ。女性に重いと言うのは失礼。イリヤにはこうしてやる」

「わっ！ ちよつとリズやめて。くすぐりたい!!」

わき腹を巧みな指使いで触られてはたまらない。

手足をばたつかせ抵抗を試みるも何せ身長差がすごい。わたしの抵抗もむなしく、数十秒の間わたしはリズのされるがままになっていた。

そうして、満足げにくすぐり終えたのか、疲れ切った私から目を離すと、リズはおもむろに床に座り込んでいるセラに問いかけた。

「ん？ どうしたのセラ。暗い顔してるよ」

「……私は、なにも」

か細く聞き逃しそうになる声。

それでも私にはちゃんと聞こえた。

乱れた呼吸を整えて、一息に椅子から飛び降りると、ゆっくりとセラの前に膝をついて彼女を抱きしめた。

「——セラ？ 本当にありがとね」

「いえ、私はただお嬢様のことを——」

「セラは私のことを考えてああ言ってくれたんだよね」

主の前で泣くまいとしているのか、こういう時のセラはすごく強情だ。

抱きしめているわたしにはセラが小さく震えているのがよくわかるのに、それでも何でもないように振る舞うんだから。

背中をさすって、優しく叩いて、ゆっくり落ち着かせる。

セラらしいと言えばセラらしい、けど。

「バーサーカーもバーサーカーだよ。いつくら言っても女の子に優しくしないなんて——あんな言い方はずるいよね」

「私は、私は」

何でもないようにあの白いサーヴァントのことを語りだすと、耐えきれなくなつたようにセラの両目からポロポロと透明な液体が流れだした。

それを見てわずかに微笑むと、セラの胸に顔をうずめるように抱きしめてから、そつと息を吐き出した。

「大丈夫だよ。セラの気持ちは私がかんとかわかつてる。それにバーサーカーも」
顔を離して、柔らかなセラの頬に右手を添える。

整えられた滑らかな頬に指を這わせて、彼女の涙をぬぐってやると、その両目から再びとめどなく涙があふれてくる。

「バーサーカーはね、きつと人との付き合い方がわかんないのかもしれない。．．．．．だから、どうしてもあんなひどい言い方になっちゃうのかも」

だから、とそう口にしたあと、わたしはとも照れくさい気持ちになつたが、とても言わずにはいられない気持ちになつて、思わず両手を広げてセラを迎え入れた。

「我慢しなくていいよ。いつも甘えさせてもらってるんだから今日くらい、わたしに甘えて、ね？」

「お、おじようさま〜」

「よっよっ」

感極まったように、瞳をさらに潤ませ飛びつくようにしてセラの抱擁を受け入れる。

その頭を小さく撫でてやると、うしろからリズがすり寄りわたしと同じようにセラの頭を優しく撫でた。

「——落ち着いた？」

「はい、見苦しい所をお見せしてしまい申し訳ございませんでした」

スンと鼻を鳴らすセラはどこか気恥ずかしそうだ。

でもわたしのほうがずっと年上なんだから、もっと甘えてくれたっていいと思う。

口には出せないけど、今日くらいは。

「そっか。じゃあ一緒にタイヤキでも食べよっか」

「はい・うん」

このあとバーサーカーが待つてるんだけど、レディを泣かせたんだからそれくらいは大目に見てくれてもいいよね。

そんなことを、胸の内で呟いてわたしはセラとリズの手を引いて厨房に駆け出した。

『ささくれ』と『答え』

「……………遅エ」

食事を終えてからかれこれ一時間は待ち続けただろうか。

時計がないというのはいやほいや不便だが、それでも待ち人が来る気配は一向に無い。

アインツベルン城のとある倉庫の一室。

月の明かりが、大きな窓を通して暗い倉庫に明かりを入れるなか、窓際を背にソファに深く腰掛ける一方通行は月夜の静けさに耳を傾けながらも思案に更けていた。

(……………ホムンクルスねエ)

伝承、いや。空想の物語でしか触れたことのない存在。

魔術という存在に浅からぬ因縁がある一方通行にとつては、そういった現代では考えられないような空想に満ちた生物がいてもおかしくはないと思っていた。

『天使』に『ドラゴン』。

あれらが魔術によってつくられた存在であるのか、それとも元々存在していたのかは一方通行にもわからない。

が、よりによって目の前に現れた存在がホムンクルスとは冗談が過ぎる。

ホムンクルス。

ヨーロッパの錬金術師が作り出したとされる人工生命体の総称。科学的にみればクローンにも近い存在。

ただ体躯は人間のそれとはずっと小さく、フラスコの中で生成され、その中でしか活動できなかつたとはずだと記憶している。

所詮、学園都市にいた頃の知識によればこの程度。

眉唾物の知識としてかじっているくらいに些細な情報でしかないのだが、実際に目にしてみると、あそこにいたホムンクルスと自称する少女たちはただの人間にしか見えなかつた。

(作られた存在。使われ、利用されるだけの『もの』、か)

反復するようにして胸の内で眩き、一方通行はソファの背もたれに腕を投げ出して大きく息をついた。

そもそも科学の知識であれば、そこらの研究者より多くの知識を持っている一方通行だ。

万有引力の法則であつたりニュートン力学など簡単にそらんじることまでできる。

能力を使えば文字通り、常識の理を覆すことだって可能だ。

そこまで理解できても、魔術や伝承といったもう一つのベクトルに関してはまだまだ

門外漢であるのは否めない。

いや、普通に生活しているような一般人では知りえない情報を認知している時点で、一方通行自身も『普通ではない』のだ。

しかし、あのツンツン頭のヒーローのように、自分自身がそこまで魔術の存在について明るくない事も自覚している。

だから奴と自分とでは三周回差すら生ぬるいほど、知識にしても経験にしても、圧倒的な差があることも分かり切っている。

それが今はとてももどかしい。

重く深い呼吸が、のつてりと倉庫の空気に絡みつくように溶け、一方通行は耐えきれなくなったようにもう一度深い溜息を吐き出す。

(ここで待つても仕方ねエか)

いつまでも扉を睨んでいるわけにはいかない。

時間は有限だ。

一秒の差が勝敗を分けることなど、『あの世界』でもざらにある。そしてその一瞬が命取りになるであろうことも。

そのことを身を以て知っている一方通行は、気だるげに宙に右手を彷徨わせ、立ち上がるための杖を探る。

しかし、想定 の位置より若干、距離があつたか手頃な木箱の横に立てかけていたはずの杖を指先ではじめてしまい、一方通行はそれを気だるげに見つめて小さく舌打ちした。

昨日の時点で物の位置を完ぺきに把握した一方通行だが、さすがに暗がりとなると細かいところまでは心もとない。

ここを活動拠点にしても、いい加減ランプでも探したほうがいいのか、などと思案に暮れるもいまいち探す気が起きず、大きく伸びをして白い髪を乱雑に掻き揚げた。

そしてもう一度、扉の方に視線をやるも扉を叩く気配はない。

ここから一方通行が迎えに行くとしても、運悪く行き違いになつた場合、さらに時間をロスする羽目になる。

そうなると、待つていた方が面倒はないのだが、あいにくといつまでもこの暗い部屋で待ち続けるほど気長な方でもない。

面倒くさそうにため息を吐く一方通行は、次に幅の広いソファアに横になると右手を天井の方に挙げて、開いた己の手を見つめる。

その手のなかに何が映っているのか、それは一方通行自身にしかわからない。だが、一方通行は静かに手を握ると、力なくその手を自分の額に乗せた。

「あのガキどもの顔。——ハッ！ アレが人形の顔かよクソツタレ」

脳裏に浮かび続ける幻影を振り払うように悪態をついて、一方通行は顔を覆っていた手を乱暴に投げ出した。

リズから聞いた話は恐らく真実だろう。これはリズの話を書いて食堂で出した一方通行の結論だ。

あのメイドは良くも悪くも嘘はつかない。ほんの短い間であつたがその一点だけは一方通行も信じる事ができた。

なにせ、一方通行も今まで一万近くの同じ顔をした女と関わってきたのだ。それがどんな事情であれ彼女等の行動は死んでいった妹達と酷似しすぎている。

これはあくまで経験則だ。

しかし、一方通行は無意識にも認めてしまった。

どんな形であれ、彼女は嘘をついていないと感じてしまったのだ。

一方通行は、己の甘くなった思考に嫌気がさして小さく舌打ちする。

——いい兆候じゃん。

と、いまの一方通行を見ればあの体育教師は本気で言つてのけるだろう。

確かに、昔に比べればだいたい丸くもなつたと自覚しているし、甘くなつたのも認める。

一方通行自身、『あの生活』はどこか面倒であつても悪い気はしなかつた。

打ち止めがいて、黄泉川と芳川がその遠巻きで鬱陶しい笑みを浮かべ、番外個体が愉快そうに自分にちよっかいをかけてくる。

その生活が何よりも心地よくて、安らかでどこかで気を抜いていた。

いや思考の隅にでも追いやって思い出さないようにしていたのかもしれない。

そう。自分にはまだまだ『彼女ら』に対して負債があることを。

決して忘れていたわけではない。

それでも、どこか彼女らの温かさに甘えている自分がいた。

ミサカネットワークの総体に『楽な方へ流されるな』と一刀両断されたあの夜。

どこか、このまま今の生ぬるい日常に浸っていてもよいのかと疑問を抱いた一方通行に向けられた言葉に、一方通行は少なからず安堵してしまっただ。

自分の幼稚な考えを否定され、晒され、諭されてもなお、ただこの場所を去らなくてもいいと言われているようで一瞬ホツとしてしまった。

だからこそあの時、あの食堂でリズが放った一言。

ホムンクルスという真実は一方通行が必死に保とうとしていた天秤をひっくり返すには十分すぎるほどの出来事だった。

それこそ、我を忘れかけるほどには。

「あのアホメイド。狙って言ってるんだとしたら相当タチが悪いな」

脳裏に一瞬、あの表情の乏しい少女の顔と言葉がよぎり、一方通行は大きく息をついてその身を起こした。

ソファから勢い良く起き上がる一方通行は、月明かりを背に己の汚れた両手に目を落とす。

白く細長い指先に、小さくも骨ばった手。

一見、ほかの男性から見れば小さく細い両手だが、月明かりにさらされるこの手は、一万と三十一人の命をすすつてきた。

だからこそ時々、夢に見るのだ。

殺されたはずの妹達が自分を取り囲んで口々に何か恨み言を漏らす夢を。

『苦しいですとミサカ1号は腹部を抑えて貴方に訴えかけます』

ある者は腹部にしがみつきます。

『痛いですとミサカ8068号は、はみ出た内臓を必死にとどめて低く呻きます』

ある者は腸や内臓をはみ出しながら迫り。

『どうしてミサカは死ななければならぬのですか？ とミサカ10031号は貴方に

向かつて素朴な疑問を問いかけます』

またある者は自分の片足を携えて、ただただこちらを見下ろす。

あの頃の妹達がそんなことを考えていたのかなどわからない。

死の間際に何を思い、なにを考えていたかなどひとつの例外を除けば、知りえることなど一方通行にはできない。

この自分を非難する夢すら、ただ一方通行が少しでも楽になるために見せた幻影だともいうのも理解している。

ただ言えることは、実験をしていた時の妹達の瞳にはそんな人間味などなかった。

だから自分はあの少女たちを人形と偽って殺したのだ。

そうすることで自分は正しいことをしているという思い込むことができるから。

そして、我に返り、今までの甘い思考に若干顔を歪ませて皮肉気に鼻を鳴らすと、吠えるように、叫ぶように自分自身の胸に突つかかった言葉を吐露する。

絹を裂くように。

己の傷口を開くように。

激情に任せて、狂気に頬を歪め、己が両手を見つめる。

血に汚れた、どす黒い両手を。

「ハッ!!」
そもそも、なんで俺がこんな事で悩む必要がある!!
俺が絶対に守らなきや
なんねエのは妹達だ。あのガキとメイドは関係ねエ」

吐き出された言葉は暗い一室に反響するように空気を震わせ、やがて吸い込まれるように消えていった。

肩で喘ぐように呼吸を繰り返す一方通行だったが、やがて落ち着いたのか大きく呼吸を整えると天井を見上げ、静かに視線を床に落とした。

「……そのはずなんだがな——」

力なく呟くと、一方通行は両手をきつく握りしめ両の目を静かに閉じた。

『絶対能力進化（レベル6シフト）実験』

彼の罪はここから始まった。

「最強」でなく「絶対」。一方通行がこれを望んだ結果、研究者たちがはじき出したのは、二万体のとある少女の姿をしたクローンの殺害だった。

道徳とは程遠い方法で行われた実験の数々。

千切り、潰し、弾き飛ばす。

細く瑞々しい肌から生気が抜けていく瞬間を、ただただ事務的に眺めていく退屈で、何かをすり減らしていく日々。

そのすべてを経て、結局、実験は失敗に終わった。それも自分より遥かに弱い無能力者の手によって。

それから、一方通行は妹達を守ることに決めた。それがどんなに都合よく、無様でどうしようもない言い訳だとしても、一方通行は彼女等を守ると決めたのだ。

その決意が、いま彼自身を苦しめている。

ホムンクルス。

それがどんなに妹達と違う存在であっても人に作られた命には変わりない。無知は罪。というが、知っている者にとってはこれ以上の苦悩は無い。

一方通行は今、過去の自分を見ているのだ。

だからこんなにも苛つく。だからこんなにも悩む。

彼女等を本当に見捨てても良いのかと、昔のように『作られた命』を欠陥品だと切り捨てるべきなのかと。

だが、切り捨てられない。切り捨てられるはずがない。

一方通行は知っている。自分に光をくれた打ち止めの笑顔が、あのクソガキと似ているのを。

一方通行に接してくるリズの態度が、自分を殴ったあの女教師に似ていたことも。

使命感を超えて、家族愛にまで昇華させたセラの姿を。

短い間だったが、この城にはあの『家』と同じものがある。一方通行が守りたいと願ったものがそこにある。

ならばそれを守るのが――。

「……………結論はでたな」

誰もいない部屋で静かに呟くと、瞳をゆっくり開けて皮肉気に小さく顔をゆがめた。

「——はッ！　そもその話。俺があいつ等をホムンクルスだと信じた時から守るって決めてんののに、俺もつくづくバカだな」

額を抱え、自分の愚かしさにクツクツと喉を鳴らす一方通行。

「言葉にしなきゃ守れねエなんてのは俺らしくねエな。ここに来て少しナーバスにでもなっちまったのかア？」

クローンとホムンクルス。

互いの意味は違えど、彼はいま認めた。

クソツタレな理由で作られた命はぜんぶ自分が守ると。

たとえ、自分にとって何のメリットがなくても、見放すことはすなわち今までの自分の否定。妹達の否定に繋がる。

これが今の自分にとって、妹達の贖罪に含まれるのなら、この哀れなホムンクルス達が無駄な命ではないことを証明しなければならぬ。

これが彼の答えだ。

「なら、俺は哀れなクソツタレどもの目論見を全て壊す。あいつ等を使い潰しにはさせねエ」

一方通行はソファを支えにしてゆっくり立ち上がると、目を細めて夜空を見上げる。

空は黒く染まり、空に散りばめられた星々が自らの命を燃やすように輝いている。

その星々を見つめ、一方通行は月の傍で弱々しく輝く小さな星を眺めた。

(俺の動機は作れた。もう迷ったり無様な姿を見せることは出来ねえな)

一方通行は空を見ながら、寧猛に笑い。そして、扉の方に視線を向けゆっくり腰を下ろした。

すると、独特な靴の音が廊下に響き、一度止まったかと思うと緩やかに扉を叩く音が聞こえてくる。

そのノックに耳を澄ませ一方通行は、やっと来たか、と小さく呟くと、これから話すべき事を順々に確認していった。

もう二度と、『彼女ら』を裏切らないために。

スタートと道のり

遅れた。だいぶ遅れてしまった。

リズとセラの二人と別れほどなく、口元についたタイ焼きの残りかすを軽くふき取り、それを口元に運ぶわたしは小さく短い息を規則的に吐きながら廊下を走っていた。永遠と続くのではないかと思われるほど、この城の廊下は長く複雑だ。侵入者など入れるはずもないのだが、わざわざこうして入り組んだ道を作るあたり、おじいさまの趣味が覗える。

それにしても、なんであのたい焼きはあんなにおいしいのだ。

夢中になってセラたちとおしゃべりしていたら、いつのまにかこんな時間がたってしまった。

あの白いサーヴァントはどうしているだろうか。

そんな入り組んだ道を走りつつ、脳裏に思い浮かぶ彼の姿を考えながらわたしは見慣れた廊下を小走りに左へ曲がり、その突き当りに現れたであろう扉の前で立ち止まる。

建物の構造はすべて理解しているので、さすがに迷子になるなんて失態はしたことはないが、夜の廊下となると森の静けさがどこか不気味な色を醸し出してくる。

リズの心配そうな顔に見送られて、ひとり勇み足でここまで来たのはいいが。さて、どうしよう。

まず大前提として、この先にわたしを待っているサーヴァントがいるのは確かだ。それは彼自身が待っていると云っていたので間違いない。

だが、問題は彼がわたしに『待っている』と告げてから一時間も時間が経過してしまっているという真実だ。

(ほんとはもつと早く来るつもりだったんだけど——なんて言い訳通じない、よね)
彼に対する弁明を考えてはみるが、ありきたりすぎてこの不安を解決する気休めにもならない。

そんなことを考え、自分の身長は何倍もあろう扉を眺めると、わたしは小さく息を呑み込んだ。

別に怖いわけではない。ただ、あのサーヴァントが苛立っていないか心配なだけだ。いや、あのサーヴァントならきつと——。

そこまで考えて、次に彼がとるであろう行動に、おもわず自身の頭のでっぺんをさすってわたしは小さくうなった。

(うう、怒ってないといいんだけど)

一瞬ためらうようにして、扉の前に構えた右手を右往左往させるが、こんなことをし

ていてもらちが明かない。

ままよ、と胸中で呟き、わたしは彼が待っているであろう倉庫の扉を小さく叩いた。

「バーサーカー？」

我ながら情けない声ではあるが返事は無い。

聞こえてない？ いや、あのサーヴァントのことだから待ちくたびれて寝ていたりしないだろうか。

そうすると、また寝起きの悪い彼と直面するわけであつて、またチョップされる？

しばらく考え込んでもいい案など浮かぶはずもなく、どうしたものかと思案に暮れるが、覚悟は決めた。

ここはわたしの城だ。何も気後れする必要ないんでない、はず。

「バーサーカー、入るからね」

そう言つて返事が返つてこないのを確認すると重たい扉をゆっくり開ける。

普段は付き人のセラカリズと一緒にいてくれるから、こんな重い扉を一人で開けることなんて滅多にない。

想像以上に扉は重く、足に力を入れてようやく扉が動く。

そうして、全開まで扉を引き開けると冷たい風がわたしの頬を撫で、思わず瞳を閉じ小さく悲鳴を上げる。なにも襲つてくる気配がないのを確認すると、もう一度ゆっくり

と瞼を開ける。そこには暗い一室がそこだけのつぺりと訪れる者を飲み込むようにして口を開けているように見えた。

「……ちよつと、暗くない？」

明かりが全くないというわけではないが想像以上の衝撃に、一瞬躊躇いはしたが、負けてなんかいられない。

迷いを振り払うように首を横に振り、前方を見据える。

彼は間違いなくここにいるので進む以外の選択肢などないのだ。わたしは小さく生唾を飲み込み、一步踏み出そうと左足を出そうとするが思うように足が動いてくれなく、左足を踏み出すのに時間がかかった。

(ランタンでも持つてくればよかったなあ)

予想外の暗さに若干後悔するが、決して口には出さない。

怖い気持ちを一気に胸の内に抑え込み、わたしは次の右足を一步前に踏み出した。

「ひゃっ!？」

コツンと床を蹴る音が反響して、驚いてあたりを見渡す。しかし、それが自分の靴の音だと分かると、安堵する気持ちと同時に悪いものなど何もいないはずの空間がやけに気になってしまう。

自分から伸びる影に小さく飛び上がったつもりもしたが、まずは少し気持ちを落ち着けて

一歩一歩、転ばぬように前へ進んでいく。

時折、消えては灯る窓から洩れているであろう月明かりを頼りに、自分の進むべき方向を確認すると、器用に小さな体を生かして物と物の間をすり抜けていく。

やたら豪華な壺に、あまり趣味ではない束に巻かれた絨毯の数々、もう少し奥には使わなくなった槍や斧なんかまである。

そうした倒れたら危険なものや進路を封鎖するように傾いた何かの羊皮紙なんかを慎重にかけて歩き、前に進んでいく。

なかには懐かしいものもあったりするのだが、今は一刻も早く彼のもとに行かねばという使命感の元わき目を振らずに進むつもりだった。

しかし、やはり気になってしまったものは仕方がない。だんだん闇に目が慣れてくると、細かい文字なんかも見えるようになり、すぐ視線の先に見知ったものを見つけてわたしは思わず足を止めた。

「あれって——」

駆け寄らずにはいられなかった。わたしは思わず整理された棚から一冊の書物を取り出し、しげしげとそれを見つめ、そしてポツリと小さく声を漏らした。

「これって——。やっぱり、懐かしいな」

うつすらと埃のかぶったタイトルをぬぐい確信する。

魔術の入門書。セラと初めて勉強した時に使った本だ。

はじめて机に向かって勉強した時、セラがやさしく魔術の基礎を教えてくれたのをよく覚えている。魔導書を開くと懐かしい走り書きとセラの筆跡が色濃く残っていて、思わず顔をほころばせた。

そうして、顔を上げてよく見ていくと、見知ったものがあつちこつちに見えて、マヒしていた恐怖心がゆっくりと和らいでいくのが自分でもわかる。

第一、仮にもわたしはこの城の主なのだ。そんなわたしが危険にさらされるようなものをリズやセラが説明もなく置くだろうか。

答えは否だ。

なら、もう恐れる必要などない。そもそも、こんな情けない姿バーサーカーに見られたくない。

せつかく大人っぽい雰囲気でわたしのイメージを印象付けていたのに、こんなことでまたガキだのなんだのと言われたくない。

彼の苦笑一割、適当九割といった表情をする姿を思い描き、手に取った本の埃を払い、元にあつた場所に戻してからもう一度当たりを見渡す。

普段は物置として使っている倉庫。ここには城の骨董品がたくさん収納されていて、たまに掘り出し物なんかが見つかるとある事もある。

たまにリズとちよつとした遊び時間ができたとき。かくれんぼをするには絶好の隠れ場所だから知っていることだが、こうしてまじまじと見たのは初めてかもしれない。

普段はこんなにも物に対して興味関心を抱いたことなんてない。

必要がなくなったら、もう用済み。

だつてそれはもういらぬものだから。

基本的にここはセラが管理しているからわたしのあずかり知らぬものも多いけど、ここに収納されたら最後、もう日の目を見ることはないだろう。

ほかの魔術師からしたら喉から手が出るほど欲しい素材が見つかるかもしれないが。

それでも、わたしにとつてはどれもガラクタ。全部いらぬもの。

(いらぬものは全部すてる。今までもそうしてきたし、おじいさまもそう言っていた。でも——)

わたしは前に進むために一歩足を踏み出し、目的地に向かって歩き始める。

そんないらぬもの達に囲まれている、わたしのたった一つの希望。

バーサーカー。

初めて見たときは天使かと思った。

真つ赤な瞳に、わたしよりも白く綺麗な髪。これで翼さえ生えていれば、それは童話

なんかに出てくる天使とやら変わらぬ、そんな姿だった。

わたしのサーヴァント。彼を見たとき、わたしは嬉しかった。本当に嬉しかったのだ。

強いとかそんなんじゃない、ただ単純にわたしが生まれた意味を果たす事が出来る。ただそれだけの思いが胸の奥から込み上げてうれしかった。

でも、そんな思いはすぐにもろく崩れた。

信じられない事に、彼は聖杯戦争を拒否したのだ。わたしの存在意義でもあるこの戦いに、彼は首を縦に振ってはくれなかった。

奇妙な真名を持つサーヴァント。そんな彼を従わせる手段をわたしは持っている。

そうして苦笑してイリヤは歩きながらにも拘らず視線を右手の方に移し、自分の腕から手のひらに掛けて伸びる大きな魔術刻印を浮かび上がらせた。

その腕に走る真つ赤な紋様。

令呪。

これを発動すれば、わたしは彼を屈服させる事が出来る。無理矢理にでも聖杯戦争に参加させることが出来る。

そもそも、制御不可能なバーサーカーを呼ぶことに決まった時点で、わたしは令呪を使うことをためらうつもりはなかった。

でも。でも出来なかった。わたしは令呪を使う事が出来なかった。

『コレ』を使ったら、確かに彼は聖杯戦争に参加してくれる。

でも、その後は？

もし、一日でもてるすべての令呪を使い切ってしまったら？

そんな疑問が昨夜から頭をもたげさせ、その結論は案外簡単な結果ではじき出された。

彼はきつとわたしの言う事を聞いてはくれない。絶対に断言できる。わたしは殺されるって。

きつとその気になれば彼はわたしを呼吸するみたいに簡単に殺すだろう。

それがとても恐ろしかった。

何も出来ずに、わたしの生まれた存在意義も果たせずただ殺される。それがたまたまなく怖かった。

彼はわたしに心を開いてくれない。

数々の反抗がそれを示している。

でも、わたしには彼がどうしても悪い人には見えないのだ。

そこまで考えて、改めてこれから進むであろう道と、窓辺から洩れる月明かりの方向を確認してイリヤは前に歩き出す。

それでも思考をするのはやめることはできず、それがどこか一種の通過儀礼のように

思えて、我ながら自分の臆病深さに苦笑せざるおえなかった。

そう。リズムも気づいていたけど、彼の行動は全て未遂だった。

結局はわたしを殺さない。

矛盾なのだ。

言葉では殺すみたいな事を言っても、行動では別のことをしている。

自分で対処しろと言っておきながら、いざわたしが危なくなるとためらう素振りなく助けてくれたあの時も。

タイ焼きを買ってくれた時だって、無視すればいいのにわざわざわたしの気持ちを汲んで買ってきてくれたりもした。

そうした一つ一つの行動が、どこか彼の印象を少しずつ削いでいく。

彼を見たときから感じていた違和感が、どんどん溶けて、消えて、露わになる感覚。

だから、わたしはあの夜、彼にひどいことをされても、もつと彼のことを知りたいと思つた。

怖くたってなんだって、彼と関わらなくちゃいけないと、もつと知らなくちゃいけないと。

そうして彼のことをほんの少しずつでも知れば知るほど、彼の手から伝わる言葉にできない何かが温かいと感じるようになっていったんだ。

英霊なのか反英霊なのかも定かではないけど、彼はわたしのサーヴァント。わたしの大切な希望。

なら、わたしは彼と一緒に戦いたいと思った。

危険でも何でも彼と行動を共にしたいと思った。

彼に殺されるとわかっていても、わたしは彼を『人』として扱いたいと思った。

こんなことを言ったら、彼はきつとわたしを嘲笑うだろう。

『ガキがなに一人前なことをほざいてんだ』

面として彼に伝えるのはなんだか気恥ずかしいが、彼はきつとそんなことを口にして、わたしにチョップしてくるのだ。

そう思うとちよつと笑えてくる。

でも、これがわたしが彼に接することの出来る唯一の方法。

わたしが決めたひとつのけじめ。

倉庫の入り組んだ道を抜け、彼が歩んだであろう通り道を見つけ、ガラクタを避けていく。

昼間も同じように彼を迎えに来たが、やはり夜になると勝手が違うのか暗くて進みにくい。

それでも、がらくたの山を手で押しつけ、何かにぶつかりながらも前に進んでいく。

そしてその奥、月明かりを背にして『彼』はソファに座っていた。

「よオクソガキ。ずいぶんと遅エじゃねエか」

使い古されたであろうシンブルなソファに浅く腰掛け、特徴的な白い髪とルビーのような真つ赤な瞳がわたしを射抜く。

怒っているように吐き出された言葉にまつすぐ彼を見ることはできないがそれでも彼の表情は至つて冷静だ。

しかし、彼の怒つたような口調も無理はない。なにせ彼と別れてから一時間も待たせてしまったのだ。

普段というには過ごした時間は短い、それでも彼の気がそこまで長くないことをわたしはしっかりと理解している。

「ごめんなさいバーサーカー。セラ達とタイヤキを食べていたらあまりにもおいしくつて——」

「そいつは俺との話し合いよりもか？」

「うう。ごめんなさい」

「……ハア。そんなこつたらろうと思つたが——まあいい、そこら辺のイスでも持つてきてさつさと座れ」

意外にも、嘆息だけで済んでしまった。ここからいくかの暴言でも飛んでくるんじゃない

ないかと、覚悟していたイリヤは気が抜けたようにほっと胸を撫でおろして、促されるままに近くにあつたイスを持つてくると、着いた埃を払つて座る。

冷たい材木の感触がおしりから体全体に伝つて、まるで凍らせんとばかりにわたしの身体を冷やしてくる。

あたりはもう夜更けだ、いつもなら自室に思つて『勉強』している時間。暖炉もないところでこのお気に入りの服を着てくるはやつぱり薄着だったかもしれない。

思わず身震いして、小さく身体を縮こませて無理やり暖を取る。

一瞬、彼の方に視線を向けるが、どうやら寒くないらしい。しかし、サーヴァントとわたしとは体のつくりが違いすぎる。

どうにか毛布かなにか体に掛けるものはないかと倉庫を軽く見渡すが残念なことに見つからず、あきらめて正面を見据え改めて、真剣な表情を作つてバーサーカーを見た。

「それでバーサーカー。大事な話つてなに？」

「焦んな。いいから黙つてろ」

彼もそう言つて、わたしの顔を真正面から見据える。

身長の問題で彼がわたしの顔をこんなに見つめてくるのはこれが初めてだったりするが、いまはどうでもいいことなのかもしれない。

なんだかむず痒いような視線を前に、何度か目を逸らしたり、合わせたりを繰り返し

ていると、

数秒の沈黙の後、彼の口が唐突に開いた。

「一方通行」

「へ？」

「俺の名前は一方通行だ。本名でないのは——まア許せ」

突拍子もない言葉に、思わず変なところから声が出てしまった。

それでも彼は気にせず、何度か髪を掻き揚げ、慣れていないような仕草で視線を逸らしたりしている。

一方通行。

それは初めて出会った時に教えてもらった名前だ。

昨日のことがもう何日も経ったように思えるけど、まだたったの一日。長いようで短い時間の中、わたしはずっと彼のことをなんと呼ぼうとしていたのだろう。

突然沸いた疑問に、ふたをするようにイリヤは慌てて背筋を伸ばして、恐る恐る彼を見つめる。

「えっと。それは、知ってるけど。どうして今それを——」

「黙って聞け」

「あ、——う、うん」

堪らず漏れた戸惑いがちな言葉に、彼は鋭い一瞥をくれてわたしを黙らせると、気を取り直すように一度小さく嘆息を漏らして、再び言葉を紡ぎ始めた。

「……はア。俺はここの世界ではない学園都市つつう場所からやってきた」

「(ハハ)じゃ、ない?」

「あア、まず——」

それから、わたしは色々なことを聞いた。

彼も初めに言っていた学園都市の存在。

学園都市という場所がこの世界でも考えられないような科学が発達したという場所であること。

彼はその学園都市で一番の序列にいたこと。

彼自身が『この世界』とは違う世界から来た存在であること。

『おそらく』や『だろう』なんかの推測を混ぜているあたり彼からしてもまだ確証を得ていない答えを話しているように聞こえる。

もちろんそこまで科学の発展した都市はこの日本。いやそれどころかこの世界には存在しない。

能力者などと呼ばれる超能力集団も。

外を悠々とかつぽして周るドラム缶型の自動掃除機なんかもあるわけがない。

彼が言っている事は何の確証もない。もしかしたらバースカー特有の狂化からくる妄言かもしれない。

それでも、彼の吐き出される言葉からは一切の矛盾もなく、そしてどこか彼が語る雰囲気は妄想とは違う現実味を帯びている。

そして、それが作り話でもないということを理解させるだけの真剣味があった。

でもどうして。どうしていまさらそんなことを――

「なんでそんなことをわたしに教えてくれるの？」

一方通行side

目の前にいる少女の声は至極当然のものだ。

そう、いまさら。そんな言葉が当てはまる。

一度はこの聖杯戦争を拒否した身だ。

そもそも、こんな腐った戦争に参加する意味など一方通行にはなかった。

魔術師どもが勝手に争い、勝手に目的を達成させる。

誰が理由もなくこんな戦争に手を貸したがる。

その過程でどれだけ野垂れ死に、醜い最期を迎えようと一方通行には何の関係もない。

そう考えていたはずが。あのアホメイド。余計なことを言いやがって。理由が出来てしまった。たつたいま、はじき出した自分自身の決意だ。

(ほんとに、たいした奴だよ。くそつたれのアホメイド)

脳裏で力強く拳を誇らしげに握るメイドの姿を思い浮かび、一方通行は嘲笑に頬を僅かにゆがめて短く息を吐き出した。

そう。それなら、いま行っているこの行為はまさに自分なりのケジメだ。

どんな理由で生まれてきたにせよ。『光を歩む者』を『闇』に引きずり込むケジメ。それを一方通行は実行しようとしていた。

覚悟はすでに決めている。あとはそれをこのクソガキに伝えるだけだ。

「おいクソガキ。一度しか言わねエから良く聞いてろ」

そう言うと、目の前にいる少女は律儀にも背筋を伸ばして一方通行を見る。

その目がなんとも真剣で逆に笑えてくるが、一方通行はこれをぐつと堪えて、自分の覚悟をイリヤに伝える。

「………。俺が昨日言った『手がかりを探すためにテメエ等を利用する』つつう言葉は誤りだ。……あれは忘れる」

「——えっ!?!」

思わずといった感じで、イリヤは腰を浮かせて一方通行を凝視する。

顔を窺うかぎり、どうせ聖杯戦争云々といった感じのことを心配しているのだらう。

「そんな悲惨な声を上げんな。いいから黙って聞いてろ」

一方通行が面倒くさそうに頭を搔くと、イリヤは一方通行に言われた通りに静かに座りなおした。

イリヤが大人しくなったところで、一方通行はゆつくりと酸素を肺に満たし、二酸化炭素と共に現在、自分に最もにあわない言葉を口にする。

イリヤside

彼が今なんて言ったのかわからない。

もしかしたら、わたしの聞き間違いかもしれない。

とにかく、目の前にいるサーヴァントは絶対に言いそうにない言葉を口にした気がする。

ここは一度確認しよう。

「ねえ、バーサーカー」

「あん？」

怪訝そうな声が聞こえる。その顔はどこか不機嫌のようにも見える。

「そ、その。もう一度言ってくれない？ 良く聞き取れなかったんだけど」

声は震えていたけど、もう一度聞きたい。もし幻聴でないならもう一度彼の口から。

「…だから。お前の言う聖杯戦争に参加してやるって言ってんだよ」

静かに、けれどはっきりと吐き出される言葉。

今度こそ聞こえた。

はつきり聞こえた。間違いない。彼はいま、わたしが最も欲していた言葉を言ってくれた。

聖杯戦争の参加。

彼が絶対にしたくないと言っていた戦いに自ら参加の意志を示してくれた。

でも、どうして。

そのことが頭を過ぎると、わたしの興奮していた心が一気に冷めていく。

「——どうして」

頭でそのことを反芻していくうちに、どうやら声に出してしまったようだ。

彼の赤い瞳が鋭くわたしを捉える。

「聞きてエか」

まっすぐにわたしの瞳を覗く一方通行と目が合って、わたしは一瞬戸惑いながらも小さく首を縦に動かした。

聞きたい。

どんな理由であれ、目の前にいるサーヴァントは聖杯戦争の参加を決意したのだ。マスターであるわたしは、そのことを知らなくちゃいけない。

それを目にした彼は、一度静かに考え込むよう目を閉じ、数秒もしないうちにその瞳を再びわたしに向けて、告げるようにゆっくりと口を開いた。

「……お前にはまだ話せねエが、俺の決めたルールに引つ掛るモンがこの世界にあった。理由なңызそれだけだ」

「ルール？」

彼の言葉を反芻するように口の中で唱え、その意味を理解するように必死に努める。

それでも、わたしには彼がなにを言っているのかわからない。

そこにはきつと彼なりの理由があつて、わたしなんかには到底理解できない領域の話をしているんだろう

でも、彼はちゃんと答えてくれた。

わたしの言葉に応えてくれた。

今まで、わたしの言葉がちゃんと彼に届いた事などない。ずっと彼から言われて動いてきた。

わたしが出来る事はせいぜい、ちよつとした提案だけ。そこには『対等』なんて言葉

は存在しない。

でも今は違う。

このサーヴァントは少なくともわたしを何らかの対象として見てくれている。

その当たり前が、たまらなく嬉しい。

一方通行side

クソガキがやたら嬉しそうな顔をして自分を見てくる。

そんな視線は一方通行の知った事じゃない。だが、先程の発言はやはり自分らしくない、と一方通行は自覚していた。

これも今まで他人とコミュニケーションをとってこなかったツケだと言われればそれまでだが、それでも面として自分の決意を他人に伝えたことはあまりない。

せいぜい、黄泉川や打ち止めなどに『知られている』程度だ。

あとは、勝手に広まって『一方通行』という勝手な妄想が広まっていくだけ。そこに本当の『彼』を知っている者はごく少数だ。

兎にも角にも、一方通行が伝えたい事は伝わったようだ。

そう考えるとこの反応も当然といえば当然と思えるが、それでも何故かむず痒いものがある。

「ねえバーサーカー!!」

目の前の少女は、立ち上がって身を乗り出すと、ズイツと顔を近づけてくる。

瞳を爛々と輝かせ見つめてくる少女に、気圧され僅かばかりに身を引く一方通行。

そんな自分にしては珍しい僅かばかりの動揺に目もくれず、イリヤは気恥ずかしそうに小さく笑みを浮かべると子供らしい提案を一つ投げかけてきた。

「名前を呼ばれるなら一方通行とバーサーカー、どっちがいい？」

「呼び名だア？」

何を言いつ出すかと思えばくだらない。

もともと一方通行に名前などない。すでに忘れてしまった名前だ。バカメイドのようなふざけた名前は御免だが、それ以外ならどうと呼ばれたって気にしない。

そのことをクソガキに伝えたら、目の前にいる少女は首を捻って長考したのち。

「じゃあバーサーカーにする!!」

太陽を反射させたように底抜けに明るい声で報告してくるのだ。

一応、なんでそっちの名を呼ぶことにしたのか聞いてみると。

「わたしが初めて召還したサーヴァントのクラスだもん。本当の意味でこの名前を呼んでいいのはわたしだけだし……」

若干照れくさそうに頬を掻くと、控えめな笑顔で一方通行を見る。

このクソガキの笑顔はどこか打ち止めに似ている。これは昨夜から感じていた一方

通行の素直な感想だ。

危険だとわかっていながら、自ら近づいて俺がどういったものなのかを知ろうとする。こんなバカはあの『お人よし共』だけだと思っていた。

「どこにでもいるモンだな。底抜けのバカってやつは」

一方通行は小さく鼻で笑うと、自分の右手を見る。

あの『無能力者』のように振るう事の出来ない右手。

血と罪で汚れきっているこの右手を、一方通行は見つめ、目の前で立っている少女にゆっくり差し出す。

強すぎる力を持つ己の能力は壊すことは出来ても、自分以外を守るためには出来ていない。

それでも。もし、目の前にいる銀髪の少女がこの右手を握ったら、俺はこのガキを守る、そう決める。

そして、彼しか知らない契約は、温かく小さな手によって結ばれる。

「よろしくね。バーサーカー！」

少女の優しい声を聞き、一方通行は少女に悟られぬように小さく頷いた。

宝箱のおとしもの

「……………なにか俺に対して聞きてエゴとはあるか」

握手を交わした後、一方通行はイリヤが大人しく椅子に座つたのを見届け、静かに口を開いた。

一瞬、キョトンとした表情でこちらを見つめるイリヤと目が合い、彼女は虚空を数秒見つめるような仕草をしたのち、再び一方通行の方を見た。

「えっと、確認だけどバーサーカーはここから違う世界から来た人っていう解釈で良いんだよね？」

「ああ、ここが俺にとつて異世界つー確証はねエけどなア」

日付を見る限り、まるつきり時間軸が同じというわけではないようだった。

ここが学園都市そのものがつくられる前の時間軸である、という可能性も否定できないが少なくとも一方通行がいた世界からしてみれば異世界なのは違いない。

「その、あまり信じられないんだけど。バーサーカーの話じゃあ、貴方はアツチの世界でまだ生きていた事になるんだよね」

「そういうことだな。コツチに呼ばれる前までは俺は確かに生きていた。それは間違い

ねエ」

「じゃあ、霊体には——」

おそるおそるといった風に上目遣いで訊ねてくるイリヤに、一方通行ははつきりと結論を口にする。

「……ああ。一応試してはみたが、俺自身の身体が消えるつつう奇怪現象は起きなかった」

「うう、やっぱり」

一方通行が頷くと、言いにくそうにこちらを見ていたイリヤは分かりやすく肩を落とした。

彼女がうな垂れるのも無理はない。

普段からサーヴァントを実体化させるという行為は、すなわち敵に己のサーヴァントの情報を曝すということにつながる。

霊体化。

これはおそらく、文字通り物理法則の干渉から解き放たれる、一種の反則にも似た能力のことだろうと一方通行は推測している。

そもそも死後の英霊とかいう存在を現世に呼び出し、己の代わりに戦わせる聖杯戦争だ。

その兵器ともなりうる英霊は、言ってみれば『魂そのもの』と言っても過言ではない。形のないものを戦わせるには物理法則に干渉することのできる『入れ物』が必要になる。

この少女の口ぶりからすると、聖杯戦争はなんらかの方法で肉付けされた体を持った英霊が、マスターの代理で戦う、ということだ。

つまり、その英霊を具象化する肉体は魔力が何かできているのだろう。

(なんだったら、姿を見えなくするだけじゃねエ。もしかすると、純粋な物理攻撃は意味をなさねエのかもしれないことだ)

脳裏に浮かべた可能性は否定できない。

夕方、キャスターとの戦闘時。奴は一方通行が放った弾丸を避けたり、防いだりとして見せた。

本来、霊体化が使えるなら文字通り消えてしまえば、あんな無駄なことをせずに済んだはずだ。

にも拘らず、キャスターは一方通行の弾丸を防ぎ、あまつさえこう口走った。

『聖杯戦争にもかかわらず、ただの銃で向かってくるなんて』

物理干渉を完全に受けないのであれば、あのような言葉は口にしない。

もしかしたら、霊体化というのは一種のスイッチの切り替えのようなもので、自分の

チョーカーのようにオンオフが存在し、普段は実体化して戦闘するなり、ものに触れるなりできるが、いざ霊体化する際にはいくつかの工程を経て発動するのもかもしれない。

その一瞬の間。それはこの戦いにとって生死を分ける行動といっても過言ではない。

もしそうなのだとしたら、魔術戦争であるこの聖杯戦争を想定したキャストの行動も領けるし、裏を返せばいま自分が腰にさしている拳銃は無用の長物となる可能性が高い。

(……もしそうだとすると本格的に装備を改める必要があるな)

簡単に思考をまとめ、今後の対策に練ろうと思いをソフト仕掛けたとき、ジツと何かを呟いていたイリヤが一方通行の方を見て、躊躇うような表情を見せてから口を開いた。

「それと!!」

「……まだ何かあんのか」

「初めに聞こうと思っただけど、バーサーカーって冬木に召還される際に、聖杯から聖杯戦争についての情報なんか与えられてるの?」

「そんなもん知ってたらワザワザ聞いたりしねエよ」

「うっ。そう、だよね」

重苦しい嘆息が室内に溶け、しばらく気まずい空気が倉庫に流れる。

イリヤからしてみれば確認の問いなのだろうか、実際に肯定されるとへこむらしい。しかし、一方通行にはすでに分かっていたことなので、何のショックもなくこの事実を受け入れることができた。

そもそも。

「……まア、俺の考察だと、俺の召還は聖杯側からしたらイレギュラーなモンだと思ってる」

「それは、そうかもしれないけど——」

「あくまで考察だ。だが、こう考えると他の『諸々の仮説』がしつくりくる」

尻すぼみしていくイリヤの姿を見かね、一方通行は大きいため息を吐き出してあえて強調するように前置きする。

イリヤにも念押しするように言ったが、これはあくまで一方通行がはじき出した仮説でしかない。

確定的な証拠がまだ存在しない以上、むやみに正しいと決めつけ勘違いしたまま行動する時ほど危ういものはない。

まず、与えられた情報を吟味し、慎重に理解していく。

暗部で培った経験則であり、裏家業に身を置くものなら当然の常識だ。

その言葉にひとまず納得したのかイリヤは答えるように小さく頷くが、何か思いつい

たようにすぐに表情を曇らせ、指先を絡めたりほどいたりを繰り返し気まずそうにこちらの様子をうかがってきた。

不審な仕草に一方通行は思わず眉根をひそめてイリヤを観察すると、うつむいていた彼女が不意に顔を上げて一方通行を見る。

こういった行動をよく打ち止めで目にする一方通行にとつてはたいして驚きもしない行動だったが、彼女が何かに対して悩んでいるのだけは伝わってきた。

口を開きかけて言葉を伝えようとするも、イリヤはためらうようにして視線を彷徨わせ、もどかしそうに口を動かし続ける。そして、今度こそ一方通行の瞳を正面から見つめると、喉からつかえた言葉が吐き出された。

「……ねえバーサーカー。バーサーカーってわたしに隠していることがたくさんあるよね」

それは今にも消え入りそうな、先ほどまで喜んでいた彼女とは違う声色。

興奮が冷めたように静かな声に、一方通行も言葉を選ぶようにして黙りこくり、先日イリヤが言い出しそうなことを考え、一つの可能性に行き当たった。

「あん？ まさか隠し事は無しだなんて言わねえよな」

「ううん、そうじゃない。ただ、ちよつとした確認」

「確認だア？」

怪訝そうに眉をひそめた一方通行に、イリヤは軽く頷いて椅子から飛び降りた。

勢いついた椅子はガタゴトと音を立ててむなしく回るが、当の本人は至って真剣な表情で、一方通行を見つめている。

月明かりに照らされる白い肌が一層、輝きを増し、ルビーより赤く光る双眸が一方通行を静かに射抜いた。

「ねえ、バーサーカー。わたし達って『対等』の立場だよな」

「ああ、その認識は間違ってるねえ。いまの俺たちには『上』も『下』も存在しねえ」

「——そう、だったら大丈夫かな」

そう言つて、頬を緩ませると幾分か明るい声でイリヤは笑つた。

その笑みを理解しきれなかった一方通行は、さらにいつそう眉をひそめて彼女の方を見る。

「何が大丈夫なんだよ。もしかしたら俺は、裏でお前を殺そうと考えてるかもしれないねえンだぞ」

「わたしを、殺すの?」

「殺さねえよ」

はつきりと語調を強めて否定すると、イリヤは目を丸くしたようにして驚き、すぐに柔らかく頬を緩ませて小さく笑つた。

「ふふ。ならやっぱり大丈夫」

あんまりにもはつきり言うものだから思わず笑ってしまった。

それと同時に、彼は本当に聖杯戦争に参加してくれるのだと実感がわいてきて、胸のあたりがジンと熱くなってくるのがわかる。

それでも、バーサーカーは納得していないのか、まだ眉間にしわを寄せてわたしをジツと見てくる。

そんな彼の表情がたまらなくおかしくて、うれしくて、口元に手を当てて恥ずかしそうに笑うと、わたしははつきりと自分の胸にあつた心境を吐露した。

「わたしは、ただ対等の立場つてわかればそれで満足。それ以上は今望まない」
それでも満足しないのか、バーサーカーは黙って私の話に耳を傾ける。

ここまでいってしまったら、いいかな。

バーサーカーだつてちゃんと決心して、自分で決めてわたしの望みに答えてくれたんだ。ここでわたしが自分の気持ちを隠すのは卑怯だ。

小さく息を吐き出し、ゆっくりと胸の内をそつと吐露する。

「バーサーカーがいま考えてることって、少なくとも今のわたしには話せないことなんでしょ?」

「ああそうだ」

短いけど答えが返ってくる。

やっぱりそうだ。

彼には彼なりの考えがあつて、それはきつとわたしのため、は言い過ぎかもしれないけどきつと『わたしたち』のためになることなのだ。

ならわたしは――。

「だったら、わたしが無理に聞き出す権利なんてない」

自分の意志で、はつきりとバーサーカーに伝える。

驚いたのか、瞳を若干見開かせたバーサーカーは少しの間、黙つて私を見つめてくる。

ちよつと珍しい顔だけどそれでも、驚いたのはほんの一瞬だったようですぐにいつもの鋭い瞳に戻ると

「いいのか? お前は俺の『マスター』なんだから。なんだったら全てを聞く権利だつてあるとは思わねエのか?」

「初めは、そう考えてた。貴方のマスターであるわたしはバーサーカーを従わせる権利があるって。でも、バーサーカーの態度を見て考えが変つたの」

『わたしはあなたのマスターなの。だから、あなたに言う事を聞かせるなんか簡単なんだよ』

いま考えてみれば、あれほど傲慢で、恥ずかしい言葉などない。

召喚されたから、わたしに仕えるのは当たり前。自己中心で、わがままで、なんて無様なんだろう。

令呪を笠にバーサーカーを縛ろうとして、無理に自分のわがままに我を通そうとしていた。

バーサーカーに見限られたっておかしくない。

サーヴァントは物言わなぬ存在じゃない。ちゃんと考え、仮初の身体だとしても、生きていく。

なら、わたしはちゃんと彼を見なくちゃいけない。

サーヴァントとしてではなく、一個人の『いのち』として。

それが少なくとも、自分の願いに無理やり巻き込んだ者の最低限の礼儀だから。

「マスターなんてただの飾り、バーサーカーには関係ない。わたしはきつとバーサーカーの前では、簡単に殺されておしまい」の存在」

「………続ける」

「だったら、マスターなんて飾りを捨てて、バーサーカーと同じ立場で戦いたいと思ったの。……うん。ただ、それだけ」

そこで言葉を区切り、イリヤは照れくさそうに頬を掻くと一度地面と顔を合わせ、伏せた顔を上げてバーサーカーを見つめる。

そして――。

「でも、いつかバーサーカーが何を考えていたのかわたしに教えてくれたら、うれしいな」

そう言つて口元が自然に微笑みの形を作った。

意識しようとしたわけでもなく、なんだか胸の内のすべてを吐き出したら勝手に笑つてしまった。

それと同時に、イリヤは胸の内にわだかまっていた今までの『魔術師』として『作り上げられた』自分自身が溶けていき、別なものになろうとしていくのを感じた。

しかし、そこに不安や戸惑いはない。むしろその『かたち』こそが自分を自分たらしめていた最も大切なものだったと気付かされるほど、簡単に胸の内に収まっていく。

(ああ、きつとこれが、生きることなんだ)

胸の内に落ちた答えが後を追うように実感として強く胸の内に灯っていく。

わたしはきつと魔術師として失格なのかもしれない。

道具に愛着を持つことも、生贄をかわいそうだと思う心も全て不要な感情だった。

そうおじいさまに教わってきた。

全ては根源に至るために。

そうあれと命令され、正しく生きようと、期待に応えるようにと『生かされてきた』

でもそうじゃない。

これは、きつとこの聖杯戦争は『わたし』と『バーサーカー』の問題。

アインツベルンの『イリヤスフィール』としてではなく、一人じゃないもできないただの『イリヤ』個人が『バーサーカー』とどのような関係になりたいかという問題なのだ。

少なくとも、目の前のサーヴァントはアインツベルンなんて家柄は初めから見えていなかった。

初めから『わたし自身』を見てくれていた。そして、その上でどうなりたいかを問うてきたのだ。

なら、やっぱりこの思いも、選択も間違いないじゃない。誇りを持ってそう言える。

わたしは、バーサーカーと一緒に戦いたいと。

例え足手まといになろうとも、貴方の横に立ちたいと。

そうして何かを振り切ったように嬉しそうに笑うイリヤを見て、バーサーカーは少しの間、黙ってわたしを見つめるとやがて重々しく口を開いた。

「お前は、それでいいんだな」

「うん。今のわたしにはこの考えしか思い浮かばないもん」

「——っ。ふ、そうか」

一方通行は上から物を言うような形であるが、少なからずイリヤの発言に驚いていた。

学園都市での一方通行には、彼に対して対等に振舞うモノなんて存在しない。

皆、彼の能力と地位を知っており、近づくことの出来ない圧倒的な壁が存在するからだ。

例外があるとすれば、一方通行を殴り飛ばした『無能力者』と打ち止め程度だろう。

何かが大きく変わった少女を見つめ、一方通行は彼女の頭を乱暴に撫でる。

賞賛。

周りを拒絶するしかなかった彼が取った行動はそんなものだった。

自分の考えを改めるのはなかなか出来ない。それは一方通行にも言えることであり、

彼はそれを実行した目の前の少女に素直な評価を下した。

彼が抱く少女の印象は、サーヴァントは自分に仕える物としか見ていない。そんな感じだった。

そして、それと同時に何かの強迫観念に駆られ、意思のない言葉を吐き出している人形にも見えた。

しかし、今は対等の存在であることに安心している。それはつまり、自分の考えが誤まりだと認めたのだ。

伸びた手のひらが滑らかなイリヤの髪に触れ、一方通行は慣れない手つきで左右に手を動かす。

しつとりと上質な毛皮でも触っているかのように指と指の間を流れていく白い髪質が心地よい。

「ちよつと、あんまり撫でないですよ！」

しかし、撫でられている当の本人は納得しなかったのか、頬を膨らますとイリヤは非難の声を上げて、一方通行の手を乱暴に払った。

払われた手のひらをじつと見つめ、一方通行は改めてイリヤの方に視線を向けると、話題を切り替えるようにイリヤに問いかける。

「おいクソガキ。まだ知りたいことがあるだろ」

「えっ！ あとはもう——」

「俺の能力」

そう言いかけたところで、一方通行の言葉にイリヤの動きが不自然に停止した。

そして息を呑み、思わずといった様子で一方通行を見上げる。

その真つ赤な瞳を見据え、改めて一方通行は宣言した。

「今から俺の能力について教えてやる」

「本当に教えてくれるの」

言い切るが早いか、頬を紅潮させて身を乗り出す彼女の額を軽く小突き、一方通行は小さく息を吐き出す。

「ああ、お前が俺の横に立つつつウウなら、ある程度の認識でもこの位のことを俺もお前に教える義務がある。これで『対等』だ」

そう言うのと、額を摩るイリヤの顔が明らかに、不満から喜びへと変わる。

どうやら、目の前にいる少女は対等という存在がすごく嬉しいようだ。まああれだけの事をしてわからなくもないが。

「じゃ、じゃあ。ちよつと待って。今から心の準備をするから」

何を準備する必要があるのか、一方通行は疑問に思うが、敢えて口にしな一方通行。

そして、思い出したように重要なことを口にする。

「ああそうだ。それと俺のステータス情報。説明し終えたらでいいから教える。今後の参考にする」

「うん、わかった。じゃあさっそくバーサーカーの秘密を——クシユン」

背筋を伸ばして姿勢を正したイリヤは、可愛らしいクシヤミをして、小さく震えた。辺りはもうすっかり夜中だ。室内といつてもさすがに倉庫の中は冷える。

「……さ、さあバーサーカー。わたしにバーサーカーの力を話して」
「無理すんな。——なんだったらさっきの食堂でも俺はかまわねエぞ？」

震える彼女を見かねて、そんな提案を口にするが、その言葉を聞きイリヤの動きが不自然に揺れ、わずかに彼女の視線がそれた。

「それじゃ、リズやセラにバーサーカーの力が——」

「だから、別にかまわねエよ。アイツ等に知られたところで戦闘には支障はねエしな」
「で、でも」

「デモもヘチマもねエ。俺はここ以外ならどこでもいいつつてんだよ」

そこまで言うのと、イリヤは遂に視線を完全に一方通行の方から外し、あらぬ方向を向きたした。

別に何もやましいことなどないはずだが、どういいうわけか煮え切らない空気が一方通行とイリヤの間に流れる。

一方通行からしてみれば悩む理由などないはずなのだが、悠長に待つていられるほど気も短くはない。

トンと、テーブルを指先で叩くと、その音に飛び去るように肩を上下させ、顔を上げるイリヤと目が合う。

すると、取つてつけたような声がイリヤの口から発せられる。

「じゃ、じゃあ。わたしの部屋で話そつか。あの部屋なら暖かいし」
「別にそこでもかまわねエが、何そんなに慌ててんだ」

その言葉に、イリヤ再び両肩を上下させて、ぎこちない笑みを浮かべて回れ右をした。このとき、女心など理解している一方通行が知るはずもないことなのだが、イリヤの心の中は恥ずかしさと焦りでいっぱいだった。

なにせ、なんだかんだあったこの二日間。

まるで懐かなかったペットがようやく懐いた矢先に他人に取られてしまった。そんなどこか嫉妬にも独占欲にも似た感情がイリヤのなかで芽生えていたのだ。

こんなこと恥ずかしくて知られたくない。

(い、言えない。自分だけが知っておきたいなんて言うわがままを!!)

胸に秘めた思いに無理やり蓋をし、一方通行が杖を取り立ち上がったのを見計らつて、イリヤは急かすように声をかける。

「じゃあ行こつか。あ、言っておくけどレディの部屋で暴れるのは厳禁だからね」

「ハッ！ 何がレディだ。前も言ったがもちつとでかくなってから出直してこい」

「あー！ 言ったー!! いまもつともわたしが全力で目を逸らしていることを包み隠さず言ったーっ!!」

振り返り、まるで蒸気でも発しそうな形相で痛くもない拳を腰あたりにお見舞いするイリヤ。

それを面倒くさそうにあしらいつつも、一方通行は暗がりにも拘らず安全なルートを正確に思い出し、杖を突いてイリヤを置いて一人歩き出した。

「一応、自覚はあったんだな」

「もう、バーサーカーなんて知らない」

そんな声が倉庫一室に響くがその声色に怒りはなく、どこか喜びに満ちているなんとも明るい声だった。

そうして一方通行はイリヤに先導される形で、多くの『ガラクタ』が入った倉庫から出る。

その後ろ姿は、まるで捨てられた宝物を改めてゴミ箱の中から見つけ、大事に胸にしまい込む子供のようになり、大きくそして不規則に白い髪先が揺れていた。

思惑と解釈

イリヤに連れられてから約十五分経つただろうか。終始ご機嫌な少女の後姿を眺め、一方通行は暗澹あんたんとした心象が頭から離れずにいた。

原因を言えばもちろん目の前の少女なのだが、今回ばかりは少女の指示に従わざるを得ない。快調といった様子を見せるイリヤは今も廊下を歩きつつ、城の間取りや歴史を簡素ながらも説明していく。

その表情は、まさに花が咲いたように明るく、血色がいい。

聞いてもないことを饒舌に語り出し、胸を張って説明する姿はまさに水を得た魚だ。

そして、その後ろを気だるげな顔で追う一方通行は、内心深いため息をつきながらも、仕方なくそのご高説に耳を傾けていた。

当初の目的は目の前で高説ぶっているクソガキの部屋に向かうという手筈だったのだが、どういう訳か道中に思い立つた様子で「ちよつとだけ回り道をする？」などと一言わけては従うほかない。

はつきり言ってしまうえば一方通行はこの城に召喚されてから、食堂と外に続く玄関、それと倉庫までの道のりの三通りしか知らない。

迷子になるなど子供じみた情けない真似をするつもりはないが、なにせこのバカでかい城の敷地だ。さぞ多くの用途にわかれた部屋や保管庫が存在するのだろう。

その何百メートルかもわからない城の中を一つ一つ確認しながら、無暗にうろつきまわるほど一方通行もバカではないし、そんな時間もない。

要は、間取りなんかもついでに説明したいから、というイリヤの配慮というわけだ。

一分一秒でも時間が惜しい一方通行にとつては間取りなどはともかく、それに付随する細かい歴史の説明などどうでもいいのだ。

さつさと通り過ぎるなりして、間取りを頭に叩き込めばいいだけの話だが、ここまで上機嫌な様子を見せられるとそうはいかない。

こういうのは経験上、余計なことを言つて機嫌を損ねさせると後々面倒なることを一方通行は知っている。

これも主に二人の『ガキ』のせいなのだが、あえて口にはするまい。

表情を険しくしつつも仕方なく了承し、さらにいつそう笑みを深める彼女の顔を見てしまつてはもう嫌とは言いにくい。

そうして、本当に簡単ではあるが二階から三階までの簡単な間取りを頭に入れ、五分は経過しただろうか。

どこも同じような長い廊下をさんざん歩かされ、到着した先は一つの部屋だった。

扉の壁面は檜の木だろうか、ほかの部屋の扉とは明らかに違う花と妖精の戯れる豪華な装飾が施されている。

取っ手には象牙や宝石など色とりどりにあしらわれた宝物が組み込まれており、扉の用途にしては装飾品の数が多すぎる。

明らかに特別とわかる部屋の前に立たされ、一方通行は今も扉の前で大きく深呼吸を繰り返しているイリヤのほうを横目で見る。

若干、身体に強張りが見えるのは、寒さからなのか、それとももつと別の意識からなのか。

それを確かめる術を一方通行は持ち合わせてはいないが、いい加減こんな小さなことで覚悟を決めるような仕草は見えていて悲しくなる。

そんなことを考えていると、唐突にイリヤの方から上ずった声で忠告が飛んできた。

「いい、バーサーカー。お、女の子の部屋なんだから乱暴なことはNGなんだからね」
「なに心配してやがんだこの花畑」

後ろを振り返らずに声を震わせるイリヤの頭頂部に的確な手刀を入れてやる。

小さなうめき声と共にその衝撃に慌てて振り返り若干、涙目でこちらを睨むイリヤと目が合うが、一方通行は構わず顎をしゃくって扉を指し示す。

二割増しで頬を膨らませるイリヤだったが、何かあきらめたのかそれとも吹っ切れた

のか、小さく笑みを浮かべるとその豪華な取っ手に手を付けた。

「よ、い、い、い」

そうして扉を開け、薄暗い部屋に照明をつけると、そこは少女らしい部屋が広がっていた。

いや、正確には平均家庭よりやや豪華な『少女らしい部屋』というべきか。

月明かりで僅かに輪郭だけが蠢いていた部屋を、天井にぶら下がる四つのシャンデリアが黄色と白色の柔らかな明かりを部屋に下ろし、寂しく冷たい部屋に色を灯していく。

扉を開けた先にまず一方通行の目に飛び込んできたのは、白と薄橙色に分けられた暖色の壁と大理石でできた床だった。

城内というだけあって床も大理石なのだが、冬場に備えてなのか暖炉までの続く道に橙色の正方形のカーペットが敷かれている。

次に床から正面に視線を移すと、少女の部屋には不釣り合いなほど大きなガラス窓と深紅のカーテンが映り、

右奥隅の壁を正面にするようにしてそのベランダの窓際、そのすぐ隣には少女が今も学んでいたであろう机と椅子らしきものと、そして数冊の教材が並んであった。

本棚らしきものは見当たらないが、机と扉を挟むようにして壁には、埋め込まれる形

で使い込まれ丁寧に掃除が行き届いているであろう石造りの暖炉が見られる。

ふとイリヤの後を追うような形で部屋に足を踏み入れると、その見えない死角には椅子の上に人形やぬいぐるみの数々が置かれてあった。

ただ、これは扉越しから見た部屋の全容はほんの一面でしかなく、実際に左側に顔を向けると、一方通行は小さく目を細めて大きく深い溜息を吐き出した。

(これが子供部屋、ねエ)

その奥には少女一人が使うにはまだ有り余るほど広いスペースが広がっていた。

部屋というより、この空間そのものが一軒家、といった方が適切ではないかと思えるほどのスペースだ。

実際、当人もこの広い空間を持って余しているのだろう。

実生活で使うものは扉の近くに固め、左奥に行くほど申し訳程度に丸い机や花瓶などが置かれ、さらにその奥には別の部屋に続く扉まである始末。

しかし、自身の記憶を思い返してみるに、この少女が部屋の扉を前にした時、左側の通路には扉らしき扉が見られなかったことから、どうやらあの扉の向こうは物置か衣装ダンスにでもなっているのだろう。

最後に視線を奥から手前に動かすとそこには、天蓋付きの大きなベットや細かな花の装飾がなされているダンスなど諸々の生活必需品が並んであった。

ベットメイキングはあのメイド共がやったのであろう。皺一つない行き届いた清掃が見られる。

(これが一人部屋だつてんだから、黄泉川が見たら卒倒するだろオナ)

ただでさえ薄給の教師が4LDKに住んで四苦八苦しているのに、このお嬢様はそれと同じくらいの敷地を一人部屋として利用しているのだ。

それを想像し、一方通行はあの体育教師があまりにも哀れになってきて、考えるのをやめた。

しかし、改めて総じて観察してみると部屋の広さはともかく、豪華すぎる細工の成された部屋の割には、年相応のまさしく『少女らしい』部屋だ。

「……広い部屋の装飾の割にはそれほど豪華でもない家具の数々、まあ趣味は悪くはねエな」

長々と部屋を観察しすぎて、部屋のあちこちに視線を飛ばし、部屋の様子を確認していたイリヤだったが、一方通行の眩きになぜかホツと胸を撫でおろすと、気を良くした様子でイリヤは誇らしげに息をつき、一方通行を見上げた。

「ふふん。そうでしょ。なんたつてわたしの部屋なんだからセンスがいいのは当然でしょう。——あつ！ ちょっと待っててね。すぐに暖炉に火をつけるから」

確かにあの倉庫に比べればマシなくらい温かい部屋だが、それでも冬の夜には暖房な

しは寒すぎる。

一方通行はまだしも目の前で暖炉に向かつて走っていく少女の体は、まだ幼いのだ。駆けていく彼女を目で見送り、一方通行は無造作に開け放たれた扉を閉めると緩慢な動きでイリヤの後を追っていく。

「……手伝うか？」

「大丈夫。これくらいならわたしでも出来るし、それに子ども扱いしないでよね」

そう言つて人差し指を一方通行に突きつけ鼻を鳴らすと、イリヤは慣れた手つきで暖炉に木材を五、六本ほど無造作に投入するとマッチを擦つて火を起す。

小さな火種が爪楊枝くらいの棒きれに小さく灯り、その小さな種火をマッチごとゆつくり暖炉へと放る。バケツト状の鉄柵の上で爆ぜる火の粉はあらかじめ入れておいた紙に燃え移り、下から空いた隙間から酸素を得て、他の薪に燃え移る。

そうして小さな火は、木材に燃え移るとやがて大きな炎へと変わり、パチパチと火の粉を散らしながら人工的ではない自然そのものの明かりが辺りを照らしていく。

炎の勢いをのぞき込むようにして見ていたイリヤは灯が薪に燃え移つた際に出た煤にやられたのか、何度か咳払いをした後、無事に暖炉に火がともつたことを確認すると満足げに頷いて、再びこちらに視線をやつてきた。

その表情とイリヤの様子に、一方通行も素直な感想を口にする。

「手馴れたもんだなア」

「これくらい、覚えちゃえば誰にだって出来るよ」

何でもないように、しかし若干照れくさそうに言い張るイリヤは腰を上げると、服に着いた木片をほろつて、近くにあつた熊のぬいぐるみが乗っているイスを暖炉の近くに持ってくる。

どうやらこれに座れということなのだろう。

一方通行でも座れるように背もたれのある長椅子を前に、一方通行は杖を壁際に立てかけ、椅子を支えにして先客の頭を驚掴みにする。

イリヤの厚意は素直に受け入れるが、こんな熊のぬいぐるみを抱きかかえる趣味など一方通行にはない。

おおかた、あの性悪が爆笑しそうな絵面にはなるが、そんなふざけた黒歴史をわざわざ作る必要もないだろう。

「おい、このデディベア。さっさとほかのお仲間さんと合流させろ」

「? それ抱き心地いいからクツションの代わりにしたらと思っただけど」

純粹な厚意で言っているのだろうが、一方通行はイリヤの言葉を軽く一蹴してやる。

「ふざけんな。てめえと違って俺にそんなファンシーなもん抱えて喜ぶ趣味はねえよ」

「ふんだ。バーサーカーもセラみたいに子供っぽいっていうんでしょ」

「……いや、センスに関してはあのガキもこのくらいの少女趣味だったらまだ楽しかったんだがな」

「うん？ まあいいや。じゃあいらないなら熊のぬいぐるみは預かるね」

ファンシーな熊の表情に眉をしかめたのち、アホ毛の少女の趣味を思い浮かべた一方通行は、「頭を鷲づかみしているぬいぐるみをイリヤに預けると、促されるように用意されたイスに座った。

ギシリと木材というより古い椅子独特の木材同士が軋む音を耳にし、歩き通しだったこともあつてか一方通行は蓄積させた疲労を全身から放出するようにゆつくりと肺の奥から全身に張り詰めた空気を静かに吐き出した。

天井に向けて放った二酸化炭素は空中で霧散し、全身の緊張が僅かに和らいだ一方通行は、身体のすべてをレトロ口な細工の成された背もたれに緩やかに預ける。

そうして暖炉に視線を移すと、火の粉を鳴らす音がリズムカルになり、遠赤外線特有の皮膚を刺す特有の感覚を前に、一方通行は初めての感覚に若干、心地の良い雰囲気に捕らわれていた。

科学の発達した学園都市で言えば、部屋の温度調節などエアコン一つで事足りる。

だからなのか、こういつたレトロ口な方法で暖を取るのはエリザリーナ独立国同盟以来だったりする。あの時は純粋な石油ストーブなど外向けに作られた暖房器具でこんな

風にゆったりと落ち着く暇もなかったが、

こうして周囲の状況を気にせず実際に火にあたってみると一方通行自身には少々遠赤外線の影響が強いかもしいれないと気付かされる。

それでも体に異常が出るわけでもないのです、肌を焼くようなチリチリとした熱に身を任せ、一方通行は穏やかな表情で、暖炉の灯を見つめた

久しく味わえなかった『新たな感覚』。

まさに能力を失った時期に初めて感じた風呂上がりの快感に近い。

昔は、能力の性質上身体が汚れるということとはなかった。それゆえ身体を清潔に保つという行為自体することもなかったが、能力を失ってからはその爽快感を知り、毎日湯船につかるようになった。

体感するというのもあながち馬鹿にできない。

もう一度大きく息をつき、思わず瞳を閉じようとしたとき、ぬいぐるみをもベツトかどこかに置いてきたイリヤが勉強机の椅子を暖炉の近くに持つてきて、一方通行の近くでもなく遠くでもない位置に置いて飛び乗るように勢いよく座った。

椅子が不自然に前後するが、たいして気にしていないのかイリヤと一方通行は丁度お互いが暖炉の方を斜め向かいにして対面するような格好で向かい合う。

その少女はあえて一方通行を見ないようになっているのか、暖炉の炎に目を向けてお

り、一向に語りだそうとしない。

やかましかった先ほどもまでの彼女とは違う姿に若干、違和感を覚えるも対して気に留めずにいると、一方通行はあることに気が付いた。

室内がやけに暗いことに。

おおかたイリヤが部屋の明かりを調節したのだろう。先ほどもまで明るかった部屋は僅かに薄暗く照明は落とされており、暖炉から洩れる橙色の光と枯れた木々の爆ぜる音だけが、部屋の中に光と音を入れる。

イリヤの気遣いなのか、秘め事を明かすにはちようどいい明るさだ。

別にどのような場所、シチュエーションであろうと喋る内容は変わらないのだが、明るすぎるよりはましかと思ひ直して、一方通行もイリヤから視線を外して、暖炉の灯に目を向ける。

お互いがどう話を切り出そうか、悩む時間が数秒だけ訪れ、話の切り出しにくい空気の中、大きく爆ぜた薪の音を合図にイリヤが視線を動かさずにそつと口を開いた。

「ねえバーサーカー。いいでしょ、この特等席。冬場は特にあつたかくて、わたしここが一番好きかも」

イリヤの言葉に、一方通行は悟られないように薄く笑みを浮かべると、鼻を鳴らしてイリヤと同じように視線を動かさずに口を開く。

「真昼からお子様が暖炉に、ねエ。……まア、どこぞのクソガキに比べたら悪くねエな趣味だな」

「ふふ。一番はね、朝日がサツと差して目が覚めるときなんだけど、それと同じくらいわたしはこの明かりも好きなんだ。なんかホツとするつていうか」

「そオいうもんかねエ。——いや、そオなんだろオな」

イリヤの言葉に、脳裏に浮かぶ少女の表情を思い出し、一方通行も素直な感想で応じる。

自分でもそうだったのだから、この少女がそう感じてもおかしくはない。

まるで、その他愛もない会話を呼び水とするように何気ない自然な会話が設けられ、お互いがお互いに心を決める小さな時間が流れる。

そして、一方通行が静かに口を閉ざしたころ。

「で、さつそくで申し訳ないんだけど話を戻すけど、いい?」
「あア好きにしろ」

話を切り替えるように、イリヤはそんな風に視線を一方通行の方に向け、問いかけてきた。

一方通行もこうなるだろうと予見できていたので、先を促すように同意の言葉を口にする。

そこまで聞いて、遠慮がちだった硬い表情がふつと緩み、イリヤは小さく頷いて、本題を口にした。

「うん、ありがとう。それでバーサーカーの能力って一体どんなものなの」

あくまで冷静を装っている様子だが、身体から出る落ち着きまでは隠せないらしい。おそらく冷めぬ興奮を今まで抑えていたが、どうやら我慢できなくなったようだ。

急かすように息まく様子はどこか興奮しているのか、妙に荒い息使いがどこぞのクソガキによく似ている。

とりあえず、目の前の少女を落ち着かせる意味でも、一方通行は深く腰かけた上体を前に起こすと、簡単な質問をイリヤに投げかけた。

「……その前にいいか？ お前の視点で俺の力はどう見えた」

「えっ？ わたしの？ ……うーん、初めに襲われたときは怖くてよくわからなかったけど、あれはたぶんセラとリズを弾いていたような……」

突然の問い掛けに目を丸くするイリヤだったが、視線を宙に浮かべ、こめかみを指先で押しながらそんな感想を口にする。

その答えに一方通行は小さく頷くと、両手を身体の前方で組み合わせて、視線を手からイリヤの方に向けた。

「ああ、今はその認識でいい。俺はあの時、あのメイド共を弾いたんだよ」

「それがバーサーカーの能力？」

「まあ厳密には『反射』だがな」

「反射？」

「いまいちイメージできないのだろう。」

首をかしげて、宙に疑問符を浮かべるイリヤを見て、一方通行は小さく息をつくとかかりやすい行動に出た。

百聞は一見にしかず。

説明するより見せた方が早い。

そう判断した一方通行は首元にある電極のスイッチに指を持っていき、能力使用モードをオンにする。

「そうだな。例えば……、おい、そこに落ちてる紙を丸めて俺に投げてこい」
「えっと、このクズ紙のこと？ でもどこを狙えば」

正確には羊皮紙の切れ端なのだが、ゴミには変わらない。

イリヤは薪を燃やす際に使った羊皮紙を足元から拾い上げると、丹念に丸め、首をかしげる。

どこに投げつければいいのか考えあぐねているようだ。

そんなイリヤの困惑した表情を眺め、一方通行は至ってぞんざいな口調で急かす。

「どこでもいいからさっさと投げろ」

「えっと、それじゃあ、うん。遠慮なく、——とりゃ!!」

所詮は紙屑だ。

当たっても別段痛くもないと思ひ直したのか、イリヤは丸めた羊皮紙を座った状態で一方通行に投げつけた。

勢いはそれほどでもないが、イリヤの投げつけた丸い紙くずは、小さな弧を描く形で一方通行に向かう。

しかし、その紙屑は一方通行に当たることなく、一方通行の肌に触れるか触れないかのギリギリの所で人の視界では認識できない一瞬だけ制止し、映像を巻き戻すように元の軌道を辿って、今度はイリヤの顔に直撃する。

その一秒にも満たない時間の中で、突然の衝撃にイリヤは思わず目を閉じて体をこわばらせ、短い悲鳴を上げた。

「きゃっ!!」

「……わかったか、これが俺の能力だ」

言い終わるころには紙屑はイリヤの膝に落ち、その一連の出来事に反応しきれなかったイリヤが、己の顔に当たった紙屑と首元の電極を弄る一方通行を交互に見やって、驚愕の声を上げた。

「え? ええく!?」

予想はしていたがあまりにも大声で驚くので、一方通行は片方の耳を塞いでしかめた面でイリヤを見やった。

「. そんなに驚くこともねエだろ」

「だって、えっ?! 時間操作? それとも魔術による因果関係の——」

「んな大層なもんじゃねエよ。コイツは純粹に科学の力だ。この能力自体に魔術なんて大層なもんは関わってねエよ」

思考の泥沼にはまりかけるようにしてドンドンと話が飛躍していくイリヤ。それを見て、一方通行は予想通りの反応に面倒くさそうに額を掻く。

「これが、か、科学?」

一方通行の発言を一拍遅れて反芻するイリヤは、やがて落ち着きを取り戻して、まるで『魔法』でも見たような顔で首を斜めに傾げた。

「でも。これじゃああんまりにも——」

「さつき倉庫で説明しただろオが。俺はこことは違う所から来たつて、そこにこういつた技術が開発できんだよ」

「それは大体聞いたけど、. それじゃあ、パーサーカーは最強じゃない!!」

イリヤは瞳を輝かせて一方通行を見る。その目に映るのは期待か羨望か。

真つ赤な双眸を潤ませて、身を乗り出すイリヤの表情はまさしく喜びに満ちていた。しかし、一方通行はその目を見ることなく視線を逸らすと、あまりにも予想通り『すぎる』反応に重くため息をついた。

はつきり言えば、一方通行はイリヤに誤った情報を教えた。

いや、全てが嘘というわけではない。彼の能力に『反射』という役割が含まれていることは真実だ。

しかし、彼の能力はその程度では留まらない。

ベクトル操作。

運動量・熱量・電気量といったもののベクトルを触れただけで感知・変換する能力。

この能力は、広い応用力を持っており、低周波や放射線など五感で認識できないものも知覚・変換できる。

周囲の風を手繰れば、ハリケーンクラスの竜巻を起すことも。

煮えたぎるマグマの上を平時と変わりなく歩き回ることも。

その気になれば、一つの都市すべてを機能停止にまで追い込むこともできるのだ。

それも気まぐれ一つの、生きた災害として君臨するほどに。

まさに無敵。

しかし、こんな能力を持っていても一方通行は初めからイリヤには自分の能力を全て

明かさないと決めていた。

（理由は二つ。一つは、例えば俺がコイツに全てを教えたとしても理解できない可能性があること。もう一つは——）

これが最も、一方通行がこの聖杯戦争で他人に知られたくない理由、それは——
（情報が漏れた場合、能力に対する策を立てられるリスクが高い）

そう、無敵に見えて一方通行の能力は極めてデリケートなのだ。

些細な情報の洩れ、あるいは演算ミスで反射の壁は意味をなさない無用の長物となる。

しかし、反射の壁さえ機能していれば、それは何物にも破られない無敵の盾を装備しているということにもつながる。

そんな彼の能力を前に、大抵の能力者は地に伏すことになるが、それでも自分の力でこの能力を魔術以外で破った者が三人いる。

（一人は、上条当麻。ありや例外としても、俺を三度も沈めたつてのは紛れもない奴の実力だ）

絶対能力進化実験。

第三次世界大戦。

そして、つい最近起きたロシアでの一連の騒動。

最後の一戦は敗北を前提とした作戦だとしてもあの時、一方通行は本気で上条当麻を沈めるつもりでぶつかった。

その結果、第一位の敗北という形で学園都市から送られる刺客を止めるといふ働きをしたのだ、今はどうでもいいだろう。

奴の能力の概要をある程度理解した今、他にやりようはあるが正面切つて勝てる確証は正直ない。

(二人目は俺の能力の裏をかいて、俺にダメージを与えた垣根帝督)

一方通行の次席でありながら、能力のフィルターの裏をかき、純粋な物質に自身の未元物質を混ぜて反射の壁を破つてきた唯一の能力者。

格下らしい姑息な絡め手だが、その能力の自由度の高さは正直、一方通行以上であり、その『自由度』故に今はもう『別人』となり果てたが、未元物質で己の体を己の能力で補い続けるにまで至った。

未元物質そのものと化した今の奴を葬り去るには、なかなか骨の折れる仕事になるだろう。

(そして、最後にクソ忌々しいが、純粋な体術で俺をのした木原数多)

頭の中で忌々しい顔を思い浮かべて小さく舌打ちする一方通行。

このうち、とても他人には真似できない事をやってのけたのが木原数多という男だ。

彼は、一方通行の能力を発現させた人物であり、一方通行の思考パターンを解析し、放った拳が保護膜に触れた後、反射される直前に引き戻すことで『遠ざかる拳』を内側に反射させるという神業をやつてのけた。

しかし、これはあくまでも木原が一方通行の思考パターンを熟知しているからできる芸当であり、常人には決して真似できない技術だ。

杉谷という統括理事長の側近も木原と同じような技術を実践したことがあるが、中途半端に反射の壁を撫でただけで、手首を犠牲に一方通行の頬を軽く打つ程度だった。

正直、木原数多ほど完璧に反射の壁を利用して一方通行を打ちのめす者はそういないだろう。

一方通行は、もう一度重いため息を吐くと、イリヤが心配そうに一方通行の顔を見ていることに気がついた。

「ねえバーサーカー。大丈夫?」

「あん? それはどういった類の心配だア?」

「いや、なんか深刻そうな顔してたから……」

「別に問題ねエよ。それに、俺の能力は最強つてわけでもねエ」

勘違いさせておくままにするわけにもいかず、面倒ながらもイリヤの誤解を一つずつといていく。

「それって、どういうこと?」

堪らず聞き返すイリヤを一瞥して、一方通行は凝った肩をほぐすように首を何度か左右に傾けると、静かに説明を再開させた。

「最強つてのはあくまで学園都市の中だけだ。そこに『未知の法則』が混じると話が変わってくる」

「未知の法則?」

聞きなれない言葉にイリヤが首を傾げると、一方通行は静かに頷いて見せる。

「ああ、俺の能力名は『一方通行』」

「えっ!? それってバーサーカーの名前じゃあ——」

「だから言っただろ、本名じゃねエって」

「じゃあ、……バーサーカーには名前がないの?」

「そういうことだ、まアそんな些細なこと今はどうでもいい」

いちいち妙なところで話が途切れなかなか会話が進まない。

不安そうに表情を暗くするイリヤに、一方通行はたいして気にも留めず早々に軽く流すと、気を取り直したように説明を続ける。

「俺が反射できるものは、俺自身が認識してるものだけだ」

「それってどういうこと?」

「要は科学的なものは『反射』出来るが、それ以外、例えば『未知の法則』の代表で言えば、魔術なんかは完全に反射しきれねエ」

「それって、バーサーカーの世界にも魔術が存在するってこと!？」

驚いて目を丸くするイリヤの声に、一方通行はゆっくりと首肯して、暖炉のなかで音を鳴らす炎に目を向けた。

「そオだ。コッチではどういいう法則で発動してんのか知らねエが、それでも完全に反射できねエ」

実際、ランサーと戦った際は危なかった。

彼の槍は間違いなく霊装だと、一方通行は踏んでいる。

『未知の法則』を突きつけられて、何とか反射が機能したのは奇跡に近い。その点では一方通行は運がよかった。

さらに言えば、あのまま戦闘を継続していれば、どう戦っても死んでいたのは間違いなく自分だと、一方通行自身も自覚している。

「まあ、元の世界で魔術の知識を初歩程度に教わったことが功を奏したんだろオな。最初の戦闘で俺が死んでもおかしくなかった」

「それじゃあ、魔術師の戦いである聖杯戦争では——」

「間違いなく不利になる」

「そんなぁ……」

はつきりと断言してやると、しよほんと尻尾でも垂れた犬のように暗くなるイリヤ。

こんな話をされれば落ち込むのも無理はないが、この反応も一方通行にとつては確定事項の出来事のため、至つて冷静な口調で自身の胸中を告げる。

「だが、別にそこまで気にするほどの問題でもないがな」

「なんでバーサーカーはそんなに平気でいられるのっ!!」

思わずといった雰囲気椅子から立ち上がるイリヤに、一方通行は眉根をひそめて彼女を見た。

「あん？ まさか、簡単にやられるからマズイなんて思つてねエだろうな」

「うっ、だ、だつて——」

凶星なのか一方通行の言葉に身を小さくして座りなおすイリヤを見て、一方通行は呆れたような声を上げると、何度か首を横に振つてため息をつく。

「そもそも、俺の『反射』がうまく働かない事だけで、それそのものが不利つてわけじゃねエ」

「じゃあ、バーサーカーはどう考えてるの？」

「……俺が出来る事は、『反射』程度だ。だが、魔術以外のモンには反射は正常に働く。これなら、身の回りのものを使つて戦う事も可能だし、戦闘においては支障は

ねエよ」

「それでも、魔術を喰らったら終わりじゃない」

「いや、意外とそうでもねエよ。実際、あの全身タイツ野郎の攻撃は防げた。なら、他の魔術も『喰らわない』程度に調節できる」

一方通行の言葉はあくまで予測だが、それでもキャスター戦で骸骨どもの攻撃を『反射』できた。

どういう理屈かは理解できないが、反射できるにせよある程度の『度合』は存在するらしい。

それを今後、解明そして理解していかなければならないのだが、それでも攻撃⇒即死でないというのは正直ありがたい。

「あとはまあ、コイツのバッテリーつつウ問題が残ってるがな」

そう言つて己のチョーカーを指で何度か叩くと、自分の首筋に視線を集中させていたイリヤと目が合った。

イリヤの真つ赤な双眸が一方通行の心でも覗くかのようにじつと見つめられる。

「……前から気になってたけど、バーサーカーつて能力を使う時、良くそのスイツチみたいなのを押すよね？ それってどんな意味があるの？」

「……………」

当然、話を振ったのは一方通行自身だ。その疑問も当然と言えば当然なのだろう。

一方通行はイリヤの問いに答えてもよいか少し考え、やがて静かに口を開いた。

「コイツは俺が生活または能力を使うために必要な機械つてところだな」

「機械？　バーサーカーの宝具みたいなもの？」

新たなワードに僅かに眉を顰める一方通行だが、言葉からして重要なキーアイテムだ
というのには理解できた。

一方通行は脳内で軽くワードを記憶させると、小さく頷いて説明を続ける。

「宝具つてのはよく知らねエが、まあそんなとこだ。コイツのスイッチを押す事で俺は
初めて能力が使える」

「それって、魔力で動いてるの？」

「ああ。普段は電気で動いてたんだが今はコイツを充電するためには魔力が必要らしい
」

「ふーん。……って、あれ？　じゃあそのバッテリーが切れるとどうなるの？」

半ば納得したように鼻を鳴らすイリヤだったが、途中で思い返すようにして瞳をしば
たかせ、そんな疑問を口にした。

「普段の俺ならぶつ倒れて何も考えられなくなる。ここだとなのかわかんねエけど
な」

「倒れちゃうの?」

「ああ、無様にな」

首をかしげるイリヤの言葉に、一方通行は素直に首肯する。

これは正直に答えるしかない。

実際、ここで電極のスイッチを完全に停止させたことなどないので、あくまで経験則での結果を口にするしかないが、電極のスイッチを切ろうという考えは、いまのところない。

少なくとも、完全な安全が確保された場所でなければ電極を切ることはないだろう。

(バッテリーが切れた際の状態は正直確認してエが、まずはほかに確認しなきゃな
ねエ事が山済みで後回しにするほかねエってのが現状だな)

一応、確認すべきこととして脳内にリストアップさせるがいつになるかわからない予定など予定のうちに入らない。

必要最低限の情報さえ、いまは引き出せばそれでいい。

明後日の方に視線をやり、うすぼんやりと思考を巡らせている。

すると、イリヤは一度考え込むように黙り込み、暖炉に薪を足してから静かに一方通行の目に視線を移した。

そして堪え切れなくなったように口を開く。

「ねえ、一つだけ質問いい?」

「答えられる程度ならな」

陽光とは違う、不規則に揺らめくイリヤの瞳がまっすぐ一方通行に向けられ、一方通行もその視線を受けてめてゆつくりと口を開く。

そうして、両者が見つめあう時間が一拍だけ空き、改めて二酸化炭素を吐き出し、新鮮な酸素を取り込むイリヤは表情を引き締めると

「じゃあ、不躰な質問かもしれないけど聞くね。『どうしてバーサーカーはそんなものが必要になったの?』」

そつとその小さな唇から核心の言葉が飛び出した。

イリヤ side

「バーサーカーって学園都市では最強だったんでしょ? だったら、そんな機械必要ないんじゃない?」

黙ってわたしの言葉を待つバーサーカーに向けて続けるようにわたしは口を動かす。

正直聞きにくいことこの上ないが、きつと今は彼のことを知る数少ない機会かもしれない。

そう思ったら、もう言葉に出さずにいられなかった。

わたしの言葉を受け、バーサーカーは苦々しく表情を眉をゆがめる。

ついさつき気が付いたことだが、バーサーカーは面倒なことになると意外と顔に出るタイプだ。

警戒しているときなんかはポーカーフェイスを貫く癖に、面倒くさいという感情だけは隠すつもりはないらしい。

そして、こういった表情になるときは基本的に、触れてほしくない『地雷』があるときが多いような気がする。

「はア、面倒くせエ所に気がつくな、お前は……」

緩慢な動きで白い髪を何度か掻くと、大きく息を吐き出し、一方通行は寄り掛かっていた椅子から上体を起こして両肘を膝の上に置いた。

白い髪がブーケのように彼の表情を隠し、いまバーサーカーがどのような感情を出しているのかわからない。

ただ、火の光の加減のせいか、その顔はどこか辛そうに見える。

そうして、バーサーカーが焚火の炎を眺めて一分が経過した頃だろうか、

今までピクリとも動かなかったバーサーカーの表情が、小さな呟きと共に僅かに動き出した。

「慣れねエ事をしてハマしたンだよ」

唐突に紡ぎだされた言葉に驚き、目を丸くしているとわたしは思わず彼の言葉を追うようにして首を傾げた。

「慣れない、ハハ？」

「あア。……つまんねエ話だが、それでも聞くか？」

声の調子がいつもより低いのはきつと気のせいではないだろう。

きつと『それ』は他人に気軽に話せないことなのだ。

彼の過去を。

一番触れて貰いたくない事であろう話を。

わざわざ、わたしなんかのために話してくれる。

別に隠し事をしてほしいわけじゃない。

話せない事なら別に無理をして聞き出すつもりなんかないし、それを責め立てるつもりもない。

ただ、ほんの少し気になっただけの、ただの好奇心のつもりだった。

それでも、こんな何気ない好奇心に答えてくれようとする彼の行動にただただ嬉しく、少しだけ申し訳なかった。

だから、わたしのわがままに答えてくれる彼のためにできることは、一つだけ。

それは――。

「バーサーカーが教えてくれるなら、わたしは聞きたい」

どんな過去であれバーサーカーを受け入れること。

彼が教えてくれるのなら、彼のことを知りたいし。

もし、彼がわたしのことを知りたいと言ってくれるのなら、知ってもらいたい。

まっすぐ目を見て言うわたしの声に自然と覚悟の色が乗る。

それを見て取ったのか、バーサーカーは小さく息を吐き出すと、わたしの方から視線を外して焚火の方に向き直り、ゆっくりと語り出した。

「話は至って簡単だ。身の程を知らない悪党の俺は、とあるガキを救い出すために慣れないことをして、その途中でヘマをした。——ただ、それだけだ」

それがどんな子供で、どんな状況かもわからないあまりにもぶつきらぼうで、聞き手を無視したように堰を切ったような話し方だ。

きつと理解してもらいたいわけではないのだろう。ただ、聞いてもらいたいだけ、そんな話し方だ。

それでもバーサーカーの言葉は続く。

「俺はその時、奴の攻撃を防ぐための反射に演算を裂く能力なんか残っちゃいなかった。ただ目の前のクソガキの対処で精一杯で、なにもない」

その瞳はどこまでも燃え続ける炎に注がれ、その揺らめく炎がバーサーカーの瞳をゆ

らゆらと揺らしていく。

パチパチと爆ぜる空気の音だけが、むなしくバーサーカーを讃えるように鳴り響いている。

それはまるで見えない何かに言い訳しているような口ぶり。

髪の間からわずかに覗くことのできるきつく寄った眉間も、吊り上がった目じりも、握りあつた両手も。

当時は鮮明に思い返せるからこそ、駆ける感情なのだろう。

きつと彼の心象はいま荒れ狂っている。でも、その言葉一つ一つに後悔の色はなかった。

「結局は自業自得だ。俺はガキを助けるために頭に弾丸を受けて、演算能力どころか言語能力までのすべてを失った」

「——っ。すべてを」

「ああ、碌に立つことも、一人で話すこともできないお似合いの姿にな」

一度、自嘲気味に笑うバーサーカーはそれだけ言うのと、これが事の顛末とでも言いたげな雰囲気、再び黙り込んでしまった。

焚火の爆ぜる音だけが寝室を支配し、動かなくなったバーサーカーを静かに見つめ、わたしはゆつくりと息を吐き出した。

「——でも」

「あん？」

わたしの言葉に反応するように、顔を上げて視線だけがわたしの方に向く。

一瞬だけ、ためらってしまうその鋭い眼光に、思わず喉を鳴らしてしまうが、震える声で一言一言確認を取る。

「それでも、その子供は助かったんだよね」

「当たり前だ。この俺の能力を引き換えにしたんだ。助かりませんでしたじゃ、話になんねえよ」

そこまで聞いてわたしは胸を撫で下ろした。

ここままでして、助からなかったらバーサーカーは報われない。

きつと、本当の意味で地獄を味わうことになったのだろう。

だからこそ、地獄でないと分かったからこそ、その続きを気軽に聞くことができた。「それで、そのあとは？」

「そこからはトントンと話が進んでいって、俺は冥土返しからコイツを受け取って事無きを得てるつつウ状況だ」

「冥土返し？」

聞きなれない単語に、今度はわたしが首をかしげると、険のとれたバーサーカーが補

足するように説明を加える。

「患者は絶対に死なせねエなんて無茶な思想を持ったカエルみてエな顔した医者だ。正直胡散クセエ顔だが腕は信頼できる」

「へ、へえ。そんな顔した人がいるんだ」
カエルの医者。

それは人体の構造として成立しているのだろうか？

いまいち想像できないが、バーサーカーがここまで言うのも珍しい気がする。

そこまで考えて、わたしはふつとある疑問を抱いた。

そう、きつとバーサーカーはこれまできつとすさまじい道の手を経て、ひよんな偶然からか、わたしの前に立っている。

その旅路はきつとすさまじく、色々なことがあつたはずだ。

でも、その道のりの中で少なくとも彼は確かに誰かの手を取って生きてきた。なら、バーサーカーが本当に心を許す『他人』などいるのだろうか。

そんなことを考え、胸に変なわだかまりを抱える自分がいるのに気が付いた。

「話は終わりだ。大体こんな所でいいだろオ」

「あ、待つて!!」

考えを巡らせているうちに話を締めくくろうとするバーサーカーに、思わず声を荒げ

てわたしは身を乗り出した。

不機嫌そうに表情を歪めるバーサーカーの前に、喉の奥で言葉が塞き止められたように声が出ない。

それでもこれだけは知っておきたい。

そう思ったら、いくら不謹慎だと分かっていても、もう止められなかった。

「……ねえ、バーサーカー。バーサーカーは能力を失ったことを今でも後悔してる？」

感情より先に言葉が出て、徐々に自信なく尻すぼみしていく。

最後の方はバーサーカーの目すら直視できず、情けない気持ちでいっぱいになったがそれでも白い髪を掻き上げるバーサーカーは、ハッキリとした口調で断言した。

「後悔なんてねエよ」

まるで自分の存在一つをすべてなげうっても構わない、と言われたようで、わたしは思わず肩をすくめた。

暖炉の炎に照らされる横顔は、どこか穏やかだがその瞳だけは異様にキラキラと光っている。

『『アレ』は俺がやるべきことだった。後悔ややり直したいなんて感情は微塵もねエ』

芯の籠った力強い言葉が、寝室を静かに打つ。

その言葉を耳にして、わたしは小さくうつむくと、知らず知らずのうちに自分でも驚くほど柔らかな笑みを浮かべていた。

（『やるべきこと』——か）

イリヤはそつと胸の中で呟く。

目の前のサーヴァントは、自分の事を悪党だと断言した。それでも、彼は子供を助けたという。そこには小さいながら矛盾が生じる。

悪は救済なんかしない。

しかし、彼は『やるべきこと』として、実際に行動し、決して直らない傷を負った。

自分の事を悪と主張する目の前のサーヴァントは、怖くない。それどころか、どこか温かい。そんな彼の話にイリヤはどこか憧れを抱く。

（先にリズが気づいたのはちよつと悔しいけど、バーサーカーがわたしのサーヴァントで本当によかった）

胸に温かい思いが広がり、気付いた時には胸を張って笑っていた。

「うん。それならいいの。もし、後悔してるなんて言ったら、説教しようと思ってた」

「ハッ！ ガキが俺に説教か百年はええな」

「もおう、わたしはこれでもレディなの!! 何度言ったらわかるの?」

わたしの体軀を見て鼻で笑うバーサーカーに、ムキになって椅子から立ち上がるわた

し。

何度言っても直らない不毛なやり取り。

だけど、こんな生産性もない他愛もない会話ができること自体が幸せなのだ、わたしは初めて知った。

『マスター』であれば得られなかったであろう感情に、私はひそかにその感情を胸の内に収めて、気付かれないように静かに微笑んだ。

一方通行 side

一方通行は彼女の柔らかな笑みを見て、『これでいい』と密かに呟いた。

イリヤは知らない。

一方通行の本質を知るにはこれより『前』の事件を知らなくてはならないことを。

どす黒い血と臓物にまみれた、ひと時を。

人形だと嘲り、言われるがままに、壊して回ったあの日々を。

一方通行はその脳髓に『全て』を記憶している。

そのとき何があり、どうしたのか。そのすべてを鮮明に思い出すことができる。

完全記憶能力ではない、純粹な『戒め』として。

だから一方通行が他人に自分の過去を話すのは珍しいことだった。

基本的に、一方通行は己の過去を語らない。

それは、単に語る必要がないという理由だけではなく、その事件のことを語るたびに、自分のしてきたことを誰かに『許して』もらうのを恐れたためだった。

自分の罪が色あせていくのが何よりも恐ろしい。

こんなことで許されるほど自分の罪は軽くはない。

話せてしまえるのであれば、どれだけ楽だろう。しかし、背負ったものを投げ出したとき、その重荷は一体どこへ行くのだろう。

だから『対等』であれど『あの実験』のことを話す気にはなれなかった。

特に目の前の少女の前では。

人知れず穏やかに笑う少女の前で、一方通行の瞳にはサツと暗い影が差す。

(これでいい。『アレ』はこのガキが知る必要のないことだ)

容易に踏み込ませないとは決めていた。

しかし、目の前の少女の信頼も勝ち取らなければならぬとも感じていた。

だから話した。

まるで自分に言い聞かせるように、胸の内で納得させるが、それでも一方通行の心情は穏やかではいらなかった。

(あとでどれだけ軽蔑されてもかまわねエ。いまはこのガキとうまくやるのが最善の選

扱だろオしな)

少女の心情などそつちのけで、一方通行は勝手に結論づける。

これが最善であると、そう断言することこそが自分の弱さを認めていると証明していることを自覚しながら、それでも道化を演じる。

イリヤと自分は対等だ。

対等な立場であるからこそ、些細な信頼関係の喪失は戦況の崩壊にも大きく響いている。

なんだかんだ言ったとしても、暗部にいた頃は人間性はともかく各々の実力を互いが評価しあったからこそ、『グループ』という組織は成り立っていた。

ここで、信頼を失ってしまつては、今までの積み重ねてきた時間を無駄にするということにもつながる。しかも、時間にも情報にも余裕のない一方通行にとってそれだけは許容できない問題だ。

幸いなことに、目の前の少女は幼くはあるが、愚かではない。

実際に、一方通行の『対等』という言葉の意味を真に理解し、それを踏まえたうえでこうして寄り添ってきているのだ。

そうでなければ、いまこうして一方通行が他人に能力を明かすということは絶対にありえなかつただろう。

「バーサーカー!!」

「——っ!!」

イリヤの声で現実には引き戻される。

正面を見上げれば、椅子に座りながらもこちらの表情を下から窺おうとするイリヤと目が合った。

「もう、ぼおつとしないでよね。それでバーサーカーからわたしに聞きたい事はないの?」

子供らしく頬を膨らませるその少女の表情を観察し、一方通行は自嘲気味に頬をゆがめた。

「……なら、俺というサーヴァントのステータスつてのを教えろ。少しは戦闘の参考になるかもしれないね」

「それはいいけど、……あんまり落ち込まないでね」

「さっさと話せ」

若干、声のトーンが落ちるイリヤの言葉に、一抹の不安を覚えたが一方通行は早々に急かすように口調を強めた。

いまさらどんな状態であろうと、これ『以下』はもう許されないのだ。

ならば自分は罪人らしく、醜くそれでいて無謀だと分かっているにもかかわらず

ない。

この先、どんなことがあるかと、『背負ったもの』はもう下ろさないと決意を込め、一方通行は静かにイリヤの言葉に耳を傾けた。

相互と勘違い

「……筋力値が最低レベルだと」

震える紙面を見つめ、現実から目をそらすように顔を上げるバーサーカーを尻目に、わたしは大きなため息を一つついた。

あれから穴が開くんじやないかと思えるほどの時間を要してつぶやいた一言がこれだ。

いくら書かれている文字を眺めても現実は変わらない。

と理解したのか、バーサーカーも重い溜息を吐き出して、深く刻まれた眉間に片手をやった。

「クソが、んだこの笑えねエ結果は」

「だから言ったでしょ、落ち込まないでねって」

「だとしてもこれはねエよ」

そう言つて、再び紙面に視線を落とすと、バーサーカーは苦々しく目元を歪ませ、もう一度大きく息をついた。

短い時間、一緒に行動を共にしてきたが、ここまで動揺？ しているバーサーカーを

見るのは新鮮だ。

いつも澄ました態度で物を言う彼がここまでわかりやすく悪態をつくとは。きつと本人にとつても衝撃的な結果だったのだろう。

バーサーカーには悪いが、正直、すごく新鮮で貴重なバーサーカーの姿を見れてこれはこれで満足しているわたしがいる。

しかしそうはいっても、いつまでも黄昏でもらつていては話が進まない。

床に散らばった髪やインク壺、羽ペンなんかを手早く片付けると、バーサーカーを見上げるようにして絨毯の上に正座する。

ここまであれこれとぜんぶ説明するのも苦勞はしたが、やっぱり真実を受け入れてもらうのには時間がいるらしい。

一度説明すればすんなり理解してくれる分、生徒としては優秀だが、優秀すぎるのも考えものだ。

なにせ質問の仕方まで超一流なのだ。これではわたしの魔術師としての威信も立つ瀬がない。

しかし、ステータスというものの概要を理解してしまつたからこそ、いまバーサーカーは苦しんでいるのだ。

まああんな結果であれば、放心もしたくもなる。

(まあ初めて『見た』ときから疑問だったんだけどさあ)

バーサーカーに聞こえないよう口の中で言葉を転がす。

だがそうはいっても他人事でもないのだからため息交じりにバーサーカーを呼ぶと、フリーズしていたはずのバーサーカーがゆっくりと動き出した。

「このステータス表、本当にあってるんだろオナ」

「見くびらないでよね。さすがにチョップの恨みとかでちよつといい気味とは思ってもなくもないけど、この状況でそんなことできないし、私が説明してもらいたいくらいなんだから」

まるで信じられないといった様子で確認を取ってくるバーサーカーだが、いくら確認したところで結果は変わりはないのだ。

いやむしろ嘘であってほしかった。

なんとってバーサーカーのステータスが『一般人』と変わりないなんて事実。

「ちつ、いくらあの性悪にモヤシだなんだの言われたって、こんな無様な結果とは笑えねエな」

そう言つてバーサーカーの手に握られている紙面に目を向け、小さくため息を吐き出した。

握った紙面はすでに皺になっており、せつかくわかりやすくステータス表を作つてあ

げたというのに、あれでは台無しだ。

「見間違いなんで下らねエミスはねエよな」

「だからそんな凡ミスしないっていつてるでしょ!! それにわたしだつて『基本』がこんなだからバーサーカーの宝具がすごいのかなつて思ったのに」

いい加減信用してほしい。のに何度も聞かれるから自信がなくなってくる。

でもそうなる原因ははつきりしている。

ランサーとの戦闘光景。

あのバーサーカーとの邂逅が何度も頭を過ぎるからだ。

そう、イリヤ自身、目の前のサーヴァントのステータスが合っていないことなど十分理解している。

だから、この結果に一抹の不安を覚えているのだ。

魔術師の瞳を介してサーヴァントの能力値を凶れると言っても、その評価基準は意外と曖昧だったりする。

なにせ戦闘中に能力値の上限が上がったり、下がったりするなどといった例も報告されているのだ。

それほどまでにサーヴァントという規格外な存在がどれだけ世界にとって特別なものであるのかわかるだろう。

まして、そんな彼らの戦闘能力を完全に把握するというのは、さらに難易度が上がってくるのだ。

そして決められるランクもあくまで『魔術師主観』の目安でしかない。

まずないことだが、バーサーカーが指摘した通り、力量を見間違える者もたまにいる。しかし、これでもイリヤは魔術師、それも名家と名高い大きな魔術家系なのだ。

そんな凡ミスを許されて聖杯戦争に立たせるなどありえないし、少なくともこれまでかけた時間がそんなミスを許さない。

それでもバーサーカーのステータス値は異常だった。

数値的な意味でなく、規格外という意味で。

普通、Eランクの筋力で触れただけでテーブルを壊すことなどできないし、Eランクの敏捷性でランサーと互角に渡り合うほどの速度で動けるはずがない。

ましてや、人を抱えて何十メートルもの上空を跳躍するにはBランクほどの筋力を用いなければ不可能だ。

表示されているはずのステータスを明らかに超えているのだ。

ステータスが変わ動しているのかと思えば、バーサーカーの様子を『見ていた』限り、ステータスの状態に変化は見られなかった

だから、イリヤにはわからない。説明しようがないのだ。

だからこそこうして改めて問い詰めているのだが、当の本人は黙りこくって、ジツと暖炉を眺めているだけだった。

一方通行 side

一方通行は足を組むと、眉を顰め再び紙面を見つめだした。

先ほどから睨むようなイリヤの視線をあえて無視し、頭を回し仮説を立てていく。

(このクソガキが言ってる事が真実だと仮定するなら、あの全身タイツとの戦闘は割りにあわねエ)

それが一方通行の素直な感想だった。

戦闘中、能力が発動したのは不幸中の幸いだったが、それでも実際にこのステータスを見る限りランサーに殺されてもおかしくない数値だ。

一方通行自身、イリヤの感慨しい説明のおかげでステータスのランクの強度および、段階は理解できた。

それを鑑み、計算した結果、どうしても目の前の現状にエラーが出てくる。

(このステータスなら反射云々は置いておいても、俺は奴に殺されてもおかしくねエ。なのに、俺はアイツの槍を『掴めた』)

そう、掴めたのだ。

ランクDの俊敏性でランサーと互角に渡り合い、あまつさえE程度の筋力値でランサーを振り回した。

ここで問題が発生する。

そもそも、最低レベルの筋力値でランサーにかなうはずがない。一方的に振り回すどころか踏ん張りも利かず、逆に振り回されるのは一方通行の方だった。

ランサーが一方通行と同じ筋力値Eだと仮定しても、一方通行の能力を通してイリヤが説明したステータス値に換算すると少なくともランクBはあった。

これは純粹に一方通行の能力を使い測定した暫定的な数値だが、ほぼ間違いないと踏んでいる。

そもそも、一方通行の能力は破壊にだけ用いられるものではない。

たぐいまれなるその頭脳は、現状としてミサカネットワークによって支えられているが、

本来の万全な状態であるなら一万ほど演算領域を貸し出されてもまだ足りないほどの演算能力を持っていたのだ。

こういったように、敵の力量や力の大きさを測ったりなど細かい応用など一方通行の能力は様々な場面でその真価を発揮する。

でなければあの街の作った枠組みとは言え、能力者の頂点に立つことなどできない。だからこそ解せない。

情報は正しくなければただのゴミだ。

この不確定な聖杯戦争を勝ち取っていくにはこういった一つ一つの情報を精査し、確定していかなければならない。

暖炉の火の粉を眺め、一方通行はさらに深く思考に沈む。

(そもそも、この能力値ってのは何を基準に決まってるんだ)

イリヤが示したステータス通りに一方通行がはじき出した能力値を割り振れば、少なくともランサーは片手一本でビルを一棟倒壊できる筋力を持つことになる。

手加減という可能性を考慮するにしても、ランサーの振るう槍からはそこまでの力は感知できなかった。

「基本ステータス。．．．．．あん？　なんだこの違和感」

聞こえないように口の中で転がした言葉に眉を顰める一方通行。

そもそも、もしかしたら自分ほとんどでもない勘違いをしていたのかもしれない。

もう一度口の中で、同じような言葉を繰り返し、

(クソガキが言ったのは英霊の『基本』のステータス——!?)

そこで一方通行は顔を上げて、イリヤを見た。

キョトンとした間抜け面が、こちらを見上げているが構いはしない。捲し立てるように質問を口にする。

「おいクソガキ。このステータスは俺自身の、『通常』のステータスってことだよな」

「だから、そうだって言ってるでしょ!! それが、どう、したの?」

業を煮やしたように声を荒げるイリヤだったが、一方通行の様子がおかしいと解ると小さく小首をかしげた。

そんな間抜けな様子に、一方通行は小さく鼻で笑うと脱力したようにイスに身体を預け、喉の奥で声を漏らしていた。

「はっ! 俺としたことがとんでもねエ勘違いをしてたみたいだな。——なら話は簡単だ」

「えっ、何かわかったの——!!」

腰を浮かせて迫ってくるイリヤに手刀を見舞い、大人しく座らせる。

小さなうめきと共に額を抑える少女は訴えかけるような視線で一方通行を睨み上げてくるが、一方通行は落ち着いた声でイリヤの動きを制した。

「黙って座ってる」

唇を尖らせるイリヤだったが、一方通行の言う通りに大人しく座り直すと、小さく首をかしげて一方通行を見上げた。

「……で、ステータス異常の原因はわかったの?」

「ああ『ステータス情報に異常はない』つつう真実がな」

吐き出される言葉にいまちピンと来ていないのか、イリヤは眉根をひそめてもう一度首を傾げた。

「え? どういうこと?」

「まあ、この問題は俺とお前の認識の違いって奴だろオナ」

「へ?」

イリヤは間拔けな声を上げると、改めて一方通行を凝視する。

そんな間拔けな視線を受け、一方通行は気だるげに椅子から上体を起こすと、視線を合わせてイリヤにもわかるように一つの真実を語りだした。

「そもそも俺はこのステータスが『能力を含めて』表示されていると考えていた」

「それって何かおかしいことなの?」

「ああ、その能力を含めてつてところが問題だったんだ。そもそも能力抜きつつウ話ならこのステータスでも納得できるんだよ」

「それってバーサーカーがもやしつつてこと?」

「ぶつとばすぞクソガキ」

思わず零れた言葉なのであろう。

慌てて口を押えて一方通行の様子を窺うあたり、本心のようだ。

身体的特徴について一般的な男の身体つきに比べて一方通行の身体が細いのは一方通行自身も自覚している。

だからそんな程度の煽りで切れるほど大人げないつもりはない。

ただ一瞬だけ、あの性悪の姿がちらつき本気でどついてやろうかと思つたが、額に手刀一発で済ませてやるくらいにとどめておく。

額を抑え唇を尖らせるイリヤを尻目に、小さく鼻を鳴らすと気を取り直したように説明を再開させた。

「……まあその認識でかまわねエ。俺の『反射』のまえじゃあ筋力や耐久力は必要としねエ」

「じゃ、じゃあ、戦いには問題ないってこと?」

「そういうことだ。身体能力のステータスが低い割には他のステータスはやけに高いだろう?」

「そう言つて紙面に視線を落とすとやや瞳を潤ませるイリヤも一方通行を見上げて小さく頷いた。

「まあ確かに身体レベルに関係ないものだけ異様に高いけど——」

「なら問題ねエな。能力を開放さえすれば俺は英霊どもと渡り合えるってことだ」

そう結論付けるが、一方通行はイリヤに悟られないよう自分の首筋を擦った。

結局のところ、一方通行は能力なしではあの英霊たちと渡り合えない。

いくら知恵を絞ろうが純粋な身体能力では明らかに劣っているのだ。これはフェラーリに人間がその両足で追いつこうとするようなもの。

つまり、バッテリー切れⅡゲームオーバーが確定したも同然だ。

これまで以上に、バッテリーの残りを気にして戦わなくてはならない。

その枷が今まで以上に、一方通行の頭を悩ませる原因になっていた。

「(わかつてはいたが、時間に縛られるつてのはこのバトルロワイヤルじゃあ、時間制限は足枷にしかならねエか)」

声に出さぬよう、口の中で言葉を転がし一方通行は深く椅子にもたれ掛かった。

イリヤ side

ギシリと、椅子が軋みを上げる音を耳にし、わたしは見上げるようにしてバーサーカーを眺める。

先ほどまで深く刻まれていた皴が今は鳴りを潜めている。

これもここ最近分かったことなのだが、バーサーカーは苛立つたりするとよく眉間にしわが寄る。

本人はわかっているのかはわからないけれど、こういった時に余計な口を挟むとさつきみたくないなチョップを食らう羽目になる。

何度も食らえばいい加減学習するし、痛い思いはしたくない。

(まあ、実際はそんなに痛くないんだけどね)

心の内で舌を出して額を擦り痛がった様子を見せるが、取り合ってくれないらしい。

そうは言ってもこのまま一人で納得されるのもそれはそれで困るのだ。

余計なことを言ったらまたチョップが飛んでくるんだろな、とげんなりとしながらも小さくため息を吐き出して、気持ちを切り替える。

いつもより明るまな少女の声が、暖炉の光を小さく入れる一室に木霊する。

「あくでもよかった。バーサーカーが簡単にやられちゃうのかと思ったよ」

「あん?」

相変わらずたいした反応はみられないが視線だけはこっちに向けてくれた。

暖炉の炎に照らされる赤く紅い瞳。その相貌を見つめ、直感的にわたしは失敗したのだと悟った。

それでもその視線の意味を知るのが怖くて、わたしは一瞬だけ視線を逸らしてから誤魔化すように、はにかんだ笑みを浮かべた。

「だって、そうでしょ? まさか普通の魔術師以下の身体能力でどう勝ち抜いていこう

か心配だったんだもん」

わたしの言葉を測りかねるように真つ赤な瞳は、厳しい色を秘めてわたしを覗く。まるでわたしの動揺を見透かしているようなそんな視線。

思わず視線を床に伏せ、言葉が詰まる。

取り繕うように頬を掻いてみるが、そんな取り繕った姿などお見通しなのだろう。おそるおそるバーサーカーを見上げるわたしに諦観のまなざしが注がれた。

「…………でもさ。これなら、安心しても大丈夫だよね？」

「んなわけねエだろ。本来ならこんなことで貴重な時間を使う暇なンぎねエンだぞ」
遠慮のない言葉の重みがイリヤを打つ。

重い鉛が体の奥底の柔らかいものを押しつぶしていくような感覚に襲われ、小さく喉が鳴る。

知らなかったでは済まされない。

心の中で波紋のように反芻される事実が、一層イリヤの指先から体温を奪っていく。そもそも、サーヴァントのことを知らないということ自体、マスターたるイリヤにはあつてはならない事だった。

サーヴァントは従えるもの。

それすなわち自分の手足のように使わなければならない。まして反逆されるなど

もつてのほか。

未熟なマスターだと、自分でも常々自覚していた。が、まさかそれ以下のそれも足手まといになるなんて思いもしていなかった。

思考の渦に沈むにつれおじい様の『教え』が頭によぎり、芯の通っていた信念を濁していく。

まるで絨毯越しの床から体温を奪われるように、徐々に手足の感覚が冷たくなつていくのを感じる。

わたしはわたし、おじい様とは違うと言い切れればよかったが、今のイリヤの精神状態にそんなことを考えられる余地はない。

見えない、知らない自分が目の前に立っているような気がして、顔を上げることができな

きない。今もなお、わたしの様子を見下ろしているバーサーカーの横で、小さくいやらしい笑みを浮かべて馬鹿にしてくる『わたし』。

そんなうり二つの少女が、わたしの耳元でこう囁いてくるのだ。
いままで貴女は何をしていたの？

本当にこれでいいの？　なんでこんなお気楽でいられたの？

おじいさまの言うことを聞かなきゃいけないのに、なんでこんなことになっているの

?

ありもしない錯覚の声に怯え、そしてそれと同時に『あの頃』の記憶が顔を出す。

悪い子だね。

悪い子は、お仕置きされちゃうね。

メスで肌を切り付けられ。

耐久テストと称して狼や悪霊の住まう森に一人取り残されたあの頃。

イリヤの内側で糾弾するような声が響き、その声はやがて震えという形でイリヤに襲ってきた。

「——おい、聞いてンのか?」

不思議そうに眉を顰めるバーサーカーだが、頭が何を言っているのか理解できない。

それよりも自分の身を抱くので精いっぱいだった。

「おい、クソガ——」

「やめて!!」

まるでバーサーカーまでもがわたしを非難しているように聞こえ、宙を彷徨うその右手がイリヤを傷つけた頃のおじい様の手と重なり、髪を振り乱して短く叫び声をあげる。

嫌われたくない。バーサーカーはそんな意味を込めてわたしを責めているんじゃない

いとわかつてはいても、身体が言葉に過剰に反応してしまふ。

そして、顔を上げればあつけにとられたように瞳を大きくするバーサーカーが見え、ハツと我に返る。

「……ごめんなさい。でも、そんなの、私にわかるわけないよ」

弱々しくつぶやく声にもはや覇気などない。

払った指先を胸の奥に抱え、小さく震えが走る姿はいつそ滑稽で恥ずかしい。

ただただ嫌われたくない、呆れられたくない。

その思いだけがイリヤの心中を支え、蝕んでいく。

項垂れるようにして俯くイリヤの瞳にうつすらと涙の筋が浮かんで、慌てて目元を両手で拭った。

「本当に、本当に心配したんだから」

一方通行 side

ポツリとつぶやかれた声は、どこか消え入りそうに柔らかかった。

正直、ガキが泣く姿は見慣れていないだけで、何度か経験はしている。

ガキは総じてよく泣く。

それはあの愉快にアホ毛を揺らす少女で経験済みだ。

だから、こういった時どうすればいいのか理解はしている。が、それでも一方通行にとつて慣れない行動であるのもまた真実だった。

小さく肩を震わせる少女を見下ろし、一方通行は大きく息を吐き出すともう一度右手を伸ばした。

今度はゆつくりと、怯えさせないように。

俯く少女は一方通行の行動に気付いていないのか何度か鼻を鳴らすばかりでこちらを見ようともしない。

(……柄でもねエな)

番外個体に見つかればそれこそ失笑ものの姿に、自嘲気味に笑みを浮かべつつも、白く光沢のある銀髪に触れる。

初めは髪先を。徐々に手のひら全体を頬に這わせ、耳を。頭を撫でるように持ち上げる。

驚いたように大きく肩を震わせるイリヤだが、その表情はどんなに気丈に振る舞ってもやはり幼子のそれだ。

何度も見たことのある面影に、一方通行は小さく息をつくくと、ジツとイリヤと視線を交わらせる。

ゆつくりと持ち上げられるその赤い相貌は僅かに濡れており、いまにもあふれそう

だ。

小さく震える唇は浅く呼吸を乱し、上下する肩は抑えきれない感情を必死に押し留めようとしている。

そんな瞳から今にも落ちそうな雫を眺め、一方通行は大きく息をつく——。

その大きな右手で乱暴にその銀髪を撫で上げた。

「わわ、な、何するの!？」

目尻に涙の痕を浮かべさせながらも、ハツとなつて必死に抵抗しようとするイリヤ。突然のことで慌てているのか、辛気臭い雰囲気は一気に消し飛んでいく。

頬を僅かに染めて必死に抵抗してくるが、頭部をすでに押さえている一方通行にかなうはずもなく、ただただ乱暴に撫でられるしかなかった。

そうしてしばらく髪を乱していると、一呼吸置いて一方通行は静かに口を開いた。

「ガキが一丁前に俺の心配なンざしてねエで、自分の身を守ることも考えてろ」

「バ、バーサーカーのことなんて心配してないから!! わたしはただ、聖杯戦争に負けちゃつたらつて言う心配を——」

そう言つて腕を振り払つては来るが、目元の赤みまでは隠せない。

それでも『なにかしらの原因』は取り除けたのか白かった顔色に赤みがさしている。

それでもこれ以上クソガキを刺激するのは面倒でもあり、なにより時間の無駄だ。

適当に取り合つてイリヤの抗議を聞き流していると、一方通行は両手を掲げて降参の意志を示した。

「ハイハイ、そうですねエ。お子様は自分の欲望に正直でいいですねエ」

「もう!! なんて棒読みなの。それと子供扱いしないでつてば!!」

そう言つて大きく頬を膨らませるイリヤ。

イリヤ自身もまさかこんなことになるとは思つていなかったのだろう。

実際、慣れないことをした一方通行自身が己のした行動に驚いているほどだ。

それでもいつもの調子を取り戻したらしいイリヤは小さく唇を尖らせて、明後日の方向を向いた。

途中、その小さな唇が「ありがとう」と言葉を囁いたのは聞かなかつたことにする。

「それで、他に聞きたい事はない?」

腕を組み勇ましく頬を膨らませるイリヤ。

いつもこれくらいなら楽なんだがな、と心中で吐露するが、鬱陶しいだけかと思ひ直して小さくかぶりを振るつた。

「呆れてないでいいから質問!!」

むしろ開き直つたように訊ねてくる言葉に一方通行は身体を椅子に預けると、一瞬だけイリヤから視線を外し、とりあえず疑問に思つた単語だけを口にした。

「……そおだな。さつきお前が言つてた宝具つてのはなんだ？」

「ああ、そういえばその説明はまだだったね」

そう言つて小さく手のひらを打つイリヤだが、一方通行と目が合った瞬間、赤くなつて視線を逸らされた。

何事かと眉を顰めるが、いまは詮索している暇などない。

おおかた、一人で泣き出したことに羞恥心でも感じているのだろう。

それでも聖杯から知識を受け継いでいない以上。情報はイリヤの口から仕入れるしかない。

他にも紙や電子媒体で保管されている資料などがありそうだが探している暇などない。

概要を知っている人物がいるのならそれを利用するに越したことはない。

それが例え、自分の髪先を執拗以上に丁寧に撫でて、小さく柔らかい笑みを浮かべた少女だったとしても。

「で、宝具つてのはなんだ」

一方通行の問いに、気を取り直すように堰を切るイリヤは自慢げにその白く小さな人差し指を立てて、教鞭を振るうように指を躍らせる。

「じゃあ掻い摘んで説明するけど、準備はいいパーサーカー？」

「ああ、無駄な時間は取りたくねエんだ。……さっさと頼む」
「うん」

大きく頷き、上機嫌に開かれる口元がやけに嬉しそうに動く。

その様子を眺め、一方通行の脳は静かに彼女の言葉を受け入れる準備を始めた。

一言一句、その小さな唇から紡がれる情報を全て記憶するために。

この先も、多くのものを守っていくために。

似合わない思考だと理解してるが、それでも一方通行は黙ってイリヤの言葉に耳を傾ける。

例え、それが身の丈に合わない不相応な願いだとしても、手を伸ばさない理由にはならないとあの戦いで誓ったのだから。